清水ヶ丘から

諏訪清陵高等学校７３回生「なみの会」卒後５０年記念誌

清水ヶ丘から

諏訪清陵高等学校73回生「なみの会」卒後50年記念誌

校是「自反而縮雖千萬人吾往矣」

1967年（昭和42年）入学　第73回生

清陵会館所蔵

はじめに

1967 年（昭和 42 年）4 月に諏訪清陵高等学校へ入学し、70 年（昭和 45 年）3 月に卒業した、われわれ 273 人の 73 回生は、今年度、清水ヶ丘を巣立ってから 50 年目という大きな区切りの年を迎えました。この節目に、みんなで集まって会食・懇談するだけでなく、何か形を残そう、という声が 2 年前に起こり、記念誌づくりの計画を立てました。常設の幹事会が中心となって製作委員会を設け、出版経験が豊富な河西朝雄君（3 部）を中心に編集作業を重ねてきました。

「40～50 人に書いてもらえたら御の字か」「何を言ってる。70～80 人にしないと格好がつかないぞ」「大丈夫かなあ」……。準備段階では、そんなやりとりが幹事連の間で交わされていました。物故者などを除き、連絡の取れる 230 人に寄稿を呼び掛けた今年 3 月の原稿受付スタート時は、不安が先立ちましたが、同期の仲間内で次第に記念誌づくりの機運が盛り上がったらしく、徐々に提出ペースが上向いた結果、最終の締め切り時には全く予期していなかった 100 人超えが実現し、結局は「2 人に 1 人」に近づく 103 人の参加をみたのでした。感謝に堪えません。

大人への脱皮を図るべく自己形成を進めた多感な清陵 3 年間と各自との関係性を綴った第Ⅰ部、若い世代へ届けるメッセージを意識して「50 年後の談論会」と銘打った第Ⅱ部、そして、残しておきたい記録類を集めた第Ⅲ部の 3 部構成。ハイティーンの頃ならではの生真面目さ、高揚感、強がり、哀しみ、悩み、失敗などが、それぞれ自然体のタッチで味わい深く描かれています。笑いあり、涙あり。60 代後半の今だからこそ可能になったと思われる「魂の告白」も少なくない。令和の時代に昭和が浮かび上がりました。

中には、“青春の勇み足”、あるいは、“やんちゃな武勇伝” を振り返った記述も散見され、顰蹙（ひんしゅく）を買う恐れ無きにしもあらずか、と思われますが、あれから半世紀を経て高齢者グループ入りしている面々の回顧話として、ご容赦いただければ幸いです。

同期の仲間たちのみならず、この冊子を手にしていただいた方々の胸に、筆者たちの思いが何かしら響くとすれば、こんな幸せはないと思っています。

2019 年（令和元年）7 月 6 日

諏訪清陵高等学校 73 回生「なみの会」会長
卒後 50 年記念誌製作委員会委員長
松木　敏博（1 部）

大目次

第Ⅰ部　清陵と私　5

清陵入学から現在までを振り返り、清陵の思い出や、自身が歩んできた道、次世代へのメッセージ、などの記憶や思いを綴ってもらいました。１０３名からの寄稿がありました。クラス別に並べてあります。

・１部（寄稿者１６名）
・２部（寄稿者１６名）
・３部（寄稿者１７名）
・４部（寄稿者１６名）
・５部（寄稿者１４名）
・６部（寄稿者１１名）
・７部（寄稿者１３名）

第Ⅱ部　５０年後の談論会　113

自由テーマで寄稿していただいた５０の作品を以下の６つのカテゴリに分類しました。

・清陵の思い出と仲間たち
・理系と文系
・これからを生きる
・人文科学
・科学技術
・反戦平和という願い

第Ⅲ部　資料編　145

卒業写真、その頃の学校行事の写真、そして青春時代の出来事など掲載しました。

・１部～７部の卒業写真
・清陵 73 回生・同期会のあゆみ
・清陵の風景
・歌集や文集
・青春時代の出来事

諏訪清陵高等学校７３回生「なみの会」名簿　電子版は非掲載

第Ⅰ部
清陵と私

清陵入学から現在までを振り返り

清陵の思い出や

自身が歩んできた道

次世代へのメッセージ

などの記憶や思いを綴ってもらいました

第Ⅰ部　目次

・１部（寄稿者１６名）　10

原村での近況　１部　阿部　光康
清陵生活、私的点描　１部　池上　昭彦
1970 年卒という意味　１部　岩波　一吏
一緒に歩んだ清陵　１部　牛山　秀彦
卒業からの５０年を想って　１部　飯岡　一文
（旧姓　春日）
私と清陵　１部　小松　賢三
「人生の分岐点」と「清陵の精神」　１部　杉田　隆俊
清陵そしてその後の歩み　１部　武居　良明
卒業 50 年後の私達　１部　林　春幸
林　俊子
（旧姓　笠原）
「私の清陵時代」　１部　松木　敏博
無線部の思い出　１部　丸山　芳高
「清陵」卒後５０年に想う　１部　宮坂　和生
「卒後５０周年に寄せて」　１部　宮坂美千博
清陵の３年間から現在まで　１部　森　千章
卒業して 50 年、解脱した第二の人生を送っています　１部　柳澤　洋介

・２部（寄稿者１６名）　25

校是に支えられて歩んだ 50 年間　２部　岩本　光正
地方会の思い出　２部　北原　光比
清陵時代の思い出　２部　久保　正法
「清陵を卒業して 50 年」　２部　小池　忠男
私と清陵　２部　小平　正彦
清陵の思い出とその後　２部　小林　清水
清陵の思い出（卓球・落研・・）　２部　清水　敏夫
陸上競技に関わって　２部　髙橋　和成
天地創造のみ業に連なる、わたしの人生のさらなる１日　２部　長瀬　潔
私　と　清　陵　２部　長田　茂
私の「清陵４年間」　２部　原　大

「トリ」という名前で出ています。　２部　藤森　英幸
「自反而不縮・・・」「自反而縮・・・」葛藤　２部　増澤　利定
自分に夢中だった時　２部　三浦　一洋
研究、開発の思い出　２部　柳田　恒男
人生の応援歌「千萬人」　２部　山田　雄一

・３部（寄稿者１７名）　41

思いっきり昔の話。なにしろ遡ること 18000 日余り。　３部　二ツ木淳子（旧姓伊東）
「清陵時代の思い出と教訓」　３部　伊藤　俊巻
「太陽がいっぱい」　３部　今井　柳平
ボーッと生きてきて　３部　マディーン啓子（旧姓　今泉）
山路来て今だ山麓　３部　遠藤　茂
成り行きに任せて 50 年　３部　帯川　利之
ライフワークとしてのプログラミング教育　３部　河西　朝雄
私の清陵時代　３部　北川　和彦
船乗り人生　３部　小林　正和
清陵と私　３部　古村　功
勉強しない自由　３部　巣山　彰平
懐かしい人たちに会いたい　３部　津金　敏三
バスケットのクラスマッチ　３部　中島　毅
茅野市役所　梶の葉会　３部　中村　安志
半世紀を振り返りこれからの私　３部　松田　光明
「教えてもらうのではない！・学ぶのだ！！」　３部　三澤　伸二
半世紀の時空を超えて　３部　矢ヶ﨑　崇

・４部（寄稿者１６名）　58

卒業 50 年を振り返って　４部　赤羽　博巳
「清陵」そして「諏訪」　４部　小口　信治
「私と食べ物にまつわる清陵の思い出」　４部　小澤龍太郎
マインドフルネスのすすめ　４部　小松　大蔵
浜多津先生のこと　４部　和泉　桂子（旧姓　櫻井）

「清陵」転校騒動からの顛末　４部　清水　光昭
私と清陵　４部　瀧澤　伸介
坂　　道　４部　鳥羽　研二
人生　４部　西村　厚志
葬送の作法　４部　原　聰
同窓生は新たな価値の再創造　４部　原　秀男
4 部担任だった白澤先生への思い　４部　平林　重夫
「　私と　清陵　」　４部　本田　稔
入学式と伊沢校長　４部　矢島　健二
清陵への追想　４部　山田　文雄
清陵エピソード・アラカルト　４部　渡邉　博保

・５部（寄稿者１４名）　74

清陵が教えてくれた……　５部　朝倉　一善
授業の断面　５部　伊藤　正陽
英語と音楽と放送部　５部　伊藤　養一
清陵から 50 年　５部　小口　浩史
清陵から頂いたもの　５部　河西　晴征
バイクに俳句に　５部　窪田　敏
バイクごとふわっと―鮮明な記憶　５部　小島　一彦
私のモザイク画　５部　小池　隆昭
牛正のこと　５部　小松　宏昭
志　高く　５部　根橋　文武
あのころそして今　５部　野沢　敬一
飽きもせず５０年　５部　平林　義男
私と清陵　５部　細田　俊彰
人間性を基盤とする生き方への憧れ　５部　山田　富康

・６部（寄稿者１２名）　88

清陵と昼飯　６部　飯田　夏来
「私と清陵」　６部　井澤　昭夫
Sound of Silence　６部　板花　哲夫
私と清陵　「原点は清陵」　６部　大家　信彦
諏訪清陵高校時代の思い出と今　６部　熊谷　靖樹

50 年、周回遅れでもいい　６部　五味 喜代幸
運も実力の内　６部　長田　博文
福沢武一先生と万葉集　６部　名取　康彦
諏訪清陵高校に想う　６部　浜　　正也
清陵点描十三景　６部　平林　清準
清　陵　バ　レ　ー　部　６部　山崎　和彦
私とボート　６部　山田　芳文

・７部（寄稿者１３名）　100

５０年間を振り返って　７部　小口　泰介
清陵とその後の 50 年　７部　笠原　正英
「忘れえぬこと・友」　７部　川島　　弘
このままでいいのか？日本の食料政策　７部　北原　　勝
私を取り巻く「時」　７部　山田　思鶴
（旧姓　小松）
清陵の「熱」　７部　坂井　明英
私と清陵　７部　田中　俊廣
理想の花の咲かむまで　７部　林　　元夫
ピッカピカの３年間　７部　林　　亮一
清陵卒業後５０年　７部　原　　恵二
清陵から 50 年　７部　宮坂　　平
大学進学は理系に転進　７部　両角　　誠
５０年間の歩み　７部　横内　孝文

原村での近況

１部　阿部　光康

山梨大学機械工学科を卒業後、チノンに就職しました。技術畑を２０年程勤めましたが早期退職し、父の家業を継いで花栽培というまったく新しい事に挑戦することになりました。スターチスという花を主に作っています。ドライになっても色褪せないのでドライフラワーとして人気の花です。八ヶ岳の麓の原村は自然にめぐまれて花栽培には適していますが、冬の寒さは北海道以上です。ここから清陵に通っていた時代が懐かしいです。

原村の春は遅いのでふきのとうは３月下旬にならないと出ません。河西朝雄君（3 部）、杉田隆俊君（1 部）がこの頃になると、ふきのとうを採りに来ます。河西君が、ふきのとうを取っていると後ろに狐がついてきており、びっくりしていました。

河西君とは山梨大学、杉田君とは同じ１部でチノンということでの腐れ縁です。ここに故山口和夫君（２部）を入れて４人でよく会いました。

これから夏を迎え花の収穫時期を迎え猫の手も借りたい忙しさですが、猫は眠くなって寝てしまいます。

清陵生活、私的点描

１部　池上　昭彦

・対面式で：　やたら大きい、ヒゲ面のオッサン達に囲まれて怖かった。

・清陵祭のアーチに使う杉の葉採り（枝ごと！）：　全員（？大勢）で山へ。ホコリを盛大に巻き上げながら、みんなで枝を引きずって歩く姿が、なぜか可笑しく目に浮かぶ。

・深志との交歓会へ：　午後から深志の体育館目指して夜中まで歩く。暗闇の山道を「怖～い話」などしながら... いちばん怖かったのは、小さめの声でそれらしい情景を描写しておいて、突然「わっ！」と大きな声を出すというトリック。本当に心底ふるえ上がった。

・テニスを：　社会科（地理か？）の時間、ふと中庭を見下ろすと、他クラスが体育でテニスを。テニスなど近くで見たこともなかったから、「へ～え、高校生活って優雅だなぁ」と。友人を誘って昼休み（放課後？）に備品の用具を借りてやってみた。当然まともには飛ばず、優雅も大変なんだと納得。

・１年春のクラスマッチ：　バレーボール初戦で３年のチームに勝利。（対面式でビビったあの人たちに勝てるなんて！）バレーコートから降りようと石段まで行くと、木陰から「勝った♪」と声を掛ける人が。応援が居たなんて思いもせず、その声をしっかり認識したのは通過後。「えっ？」と思ったが遅かった。

・放送部員に：　友が誘ってくれて放送委員会の自由部員に。授業が中学と違って移動教室になったこともあり、「いつでも行ける居場所」が近くに出来たのは、とてもありがたかった。

・南陵会（地方会、岡谷南中）の新歓コンパに呼ばれた：　南中に隣接する公会所だった。先輩から何か「タメになる」ことを教えてもらった気もするが、校歌の歌唱指導のほかはアンコの代わりにカラシを詰め込んだモナカを食わされたことぐらいしか覚えていない。あっ、小さな春歌集もらった。ガリ版刷りの。地方会の一番の存在意義だと思った。

・クラスコンパなるものが行なわれた：　上町公民館と記憶しているが、ある友から古い歌をいくつか教わったことだけ覚えている。その歌は今でもカラオケの持ち歌になっているが。高校生のコンパって、何をやっていたんだろうか？

・学友会総会をサボってみた：　「裏の斜面を登ってしまえば見張りはいない」という話を聞いた。総会の時に２か所の出入り口に見張りが立つ、という状況を「何だかなぁ」と感じていたので、出来心で悪友と裏山へかけ登ってみた。途中、本屋で恒例の少年マンガ週刊誌の立ち読みもでき、何事もなくすんなりと帰宅できた。「だからどう」と言うこともなかったが。

・体育の授業で秋口にあったロード走：　１年の時は白狐コースで排気ガスがクサいし車が怖かったが、山の神コースに変わってからは気持ちよかった。特に３年の時は授業グループに陸上部とかが居なかったので、１４回の授業を全勝。清陵に通った３年間で唯一の「自称１等賞」。ささやかな自己満足。　　≪順不同、記憶違いご容赦≫

1970 年卒という意味

1 部　岩波　一吏

清陵卒業 50 年、諏訪を離れて 50 年。この時期に、文集寄稿という形で人生を振り返る機会を与えてくれたことに感謝している。

私の生きる原点は諏訪人の気質と、大学学生寮で出会った躍動する仲間との生活だったと思っている。高校卒業の 1970 年は、いわゆる「70 年安保」の年。高校時代は政治に対しての関心はあまりなかったが、入学後の学生寮ではいきなり大きなノックを食らった。5 階建てで 200 名ほどの学生寮では、入学後間もない時期からフロアー毎に安保の学習会がもたれ、私のフロアーでは新入生（新入寮生）歓迎会で安保反対の寸劇を新人だけで行った。6 月には寮生が大挙して安保反対行動で上京した。ただし寮の先輩とともに地下鉄を乗り間違え、国会議事堂前駅方面ではなく反対方向に乗ってしまうという「落ち」もあったが、この 1970 年という時代に私は身をゆだねた。大学では憧れていたボート部に入部、ハードな練習の合間ではあったが、このような学生寮生活は私の生き方を規定するものだったと思われる。

さらに学生寮改善を求めて大学当局との交渉への参加、もちろん 1 年生は後方に陣取ってはいるが、この体験も貴重なものだった。その翌年の 3 月、私の入った学生寮は「3.1 ビキニデー」（1954 年 3 月 1 日ビキニ環礁でのアメリカの水爆実験で第五福龍丸が被爆、半年後に無線長の久保山愛吉さんが亡くなった。広島、長崎の被爆に続く三度目の悲劇となった。この翌年には初の原水爆禁止世界大会が開かれるなど、3.1 ビキニデー運動は反核平和運動の発端となった）でもかなり積極的な関わりをしていた。私も要員として参加したが、その全体会会場で 2 部の担任の伊藤先生に遭遇した。私は驚嘆した。恩師にこのようなところで会えたことも、自分の生き方の確信につながったと思っている。

大学卒後は医学系専門出版社に 1974 年入社。時は前年からの第一次オイルショック渦中、出版業界も例外ではなかった。経済影響は長引き、私の会社は私の入社後 10 年間新人採用をストップした。10 年間「新入社員」と言われたが一方で、労働組合活動への誘いに対し私自身も関心が強まり、この活動に積極的に関わった。2018 年 3 月、44 年間の勤務を終えたが、労働者の人権擁護や生活維持向上のためにかなりの時間を費やし動きまわっていた。また反核平和活動も同様だ。

50 年を振り返ってみると、私の生き方の底流にあるものは憲法の主権在民、基本的人権擁護、平和主義からの精神であり、清陵で授かったものと合致するように思う。四方八方を山に囲まれ厳寒のなかで育ってきた 18 歳の青年が、温暖なしかも大海を望める環境で多くの仲間と大学生活を送り、その後大都市東京で長い勤労生活。1970 年卒業からの人生を顧みて、清陵の校是「自反而縮雖千萬人吾往矣」はずっと私の中に生き続けているのかもしれない。

一緒に歩んだ清陵

1部　牛山　秀彦

これまで、いろいろな場面で清陵に助けられ今日を迎えられたという実感をそのままタイトルにしました。

東北大修了後旭化成に就職しました。初任地宮崎県延岡市では医薬品の製剤研究に就き、4年後東京の医薬事業部に異動、約30年間医療関係の開発業務を行いました。

その後、縁あって日本科学技術振興機構(JST)に6年9ヶ月お世話になり、2018年4月から日本医療研究開発機構（AMED）に職を得て1年2ヶ月が経過しました。

これまで、大きな決断が必要な場面では必ず清陵の校是「自反而縮雖千萬人吾往矣」で自らを鼓舞して、正しいと思う道を選択してきました。また、清陵の先輩や後輩と共に仕事をする機会に恵まれたことも楽しく嬉しかった思い出です。先輩・後輩との思い出を2つ記します。

① 医療機器の開発に当たり、日本の輸血領域の専門家で重鎮的存在である清水勝医師を訪ねました。国内のみならず、途上国の輸血技術の向上にも尽力する真摯なお医者さんでしたが、2度目の訪問時に清陵の先輩（57回生）であることが分かりお互いに大変驚きました。厳しくも優しくご指導いただく中で承認に漕ぎ着けた血液成分分離システム「クリオシール」は、手術現場で患者さんの役に立ってくれています。

② JSTのACCELプログラムの一つで、世界の農産物の増産に役立つ土壌生物の研究開発課題を担当した時のことです。毎回、50 人超を集めての検討会で司会を務める唐澤研究者と検討会後の忘年会で隣り合わせ、清陵の後輩の唐澤敏彦さん（農研機構）であることが分かりました。そのまま意気投合し、衆目の中「金色の民」をやりました。たった二人の「民」は酔いがすぐに回るという困った効能もありましたが、年代を越えて清陵卒業生という一体感を得られた喜びは格別でした。

最後に、昨年知った「なみの会」同期生の活躍情報を一つ追加します。

2018年4月に、AMED難病研究課に着任（なお、今年の5月に医療機器研究課に異動しました）後、主業務を推進する傍ら、6月から難病研究課と医薬品研究課が協力して日本の遺伝子治療の推進についてAMED全体で議論する「プロジェクト連携シンポジウム」のまとめ役を担当しました。他課との情報交換の中、脳と心の研究課が担当する別のプロジェクト連携シンポジウムで、国立長寿医療研究センター理事長（2018年 11月当時）の鳥羽研二医師をプレゼンターに呼んでいることを知りました。調べてみますと、やはり同期の鳥羽君でした。同期生の活躍に胸躍りました。

以上、改めて清陵卒業生でよかったと実感しながら、今後も「民」ができる機会を是非探し求めていきたいと考えているところです。

卒業からの５０年を想って

１部　飯岡　一文（旧姓春日）

卒業して半世紀も経つんですね。半世紀前の１月頃だったと記憶していますが、父に辞令が下りて転勤先が長野県諏訪に。高校受験を控えていた私は、新潟県と長野県の高校を受験することになり、教育委員会の勧めで清陵高校へと向かいました。ひとりぽっちで心細く並んだのを覚えています。無事に合格し、３年間を諏訪で過ごしました。思春期の真っ盛り――。好きになった男の子に夢中になって成績は下がり、両親に「成績表はないから」と嘘をついた事もありました。毎日のように綴っていた日記には当時の純粋な私が読み取れ、何とも言えない恥ずかしい気持ちになります。子供たちにはその日記を絶対読ませたくないと思うほどの妄想少女でした。そんな青春時代を過ごした友人と今でも食事や旅行できているのですから本当に幸せ者です。

今、私は東京、両親は伊那にいます。母は 91、父は 93。ずっと元気で過ごしてきていた父が、昨年１２月に脳梗塞で倒れ、今年の２月３月は介護休業を取り、父の介護をする母のサポートに伊那に帰省していました。帰省中も同級生が陣中見舞いに来てくださいました！　ありがとう！！！　気遣ってくださるたくさんの方の愛を受けて、父は順調に回復しています。我が家のホームドクターは、なんと同級生だったのです。最近まで知りませんでした。すべての事象に感謝する毎日です！

父が倒れたため暫くは控えようと考えていますが、私は東京で役者をしています。役者修行が存分にできるように、今も現役で仕事をしています。子供の頃、NHK の児童放送劇団で芝居を覚えたのがきっかけです。高校時代はアングラの「紅テント」に憧れ、勝手に願書を出し、一次試験は受かったものの親の反対で没になっちゃいました。で、６０になってまた「火」が点いたのです。楽しく舞台に立っています。その舞台にも、同級生がいつも観に来てくださいます。舞台の後の一杯はとっても楽しみです。先日は、清陵の先輩が観劇に来てくださり５０年振りの再会ができました。一瞬にして気持ちは５０年前に戻りました。フォークダンスのお相手をいつもお願いしたクラブの先輩でした。お逢いできてうれしかったです！

これから５年、１０年、１５年、いやもっともっと時を刻んでいく中で、旧友とも多くの時間を共有していきたいです。そのためにも健康でいたい！！

私と清陵

１部　小松　賢三

「賢三君、あなたは口だけ動かして声は出さないでちょうだい。みんなの迷惑だから。」この言葉は小学校５年の１１月の寒い日、音楽会の練習中に音楽教師によって発せられた。教室は笑いに包まれひときわ大きいクラス担任の笑い声が聞こえてきた。そこには目を見開き口を開け足を震わせている私がいた。そして幾月ものあいだ声を失い小学校卒業まで担任にただただ反抗していた。（今に思えばよく死ななかった）

中学生になり環境が変わり徐々に声が出るようにはなったが、声を出して歌うことはできずに音楽の時間も口をうごかしているだけだった。声の出ない理由を知った音楽の先生（あだ名はカジカ）は「そのうち声も出るようになる」そう言って私に清陵に行くことを勧めた。そんな負い目を持ったまま清陵に入り最初に待っていたのが試胆会だった。ギロチンにかけられ暗闇から飛んでくる言葉に恐怖で声を失った。さらに追い打ちをかけるように「校歌を歌え！」歌えるわけもなくただただ涙が流れた・・・

清陵ではことあるごとに日本一長い校歌を大声で歌うことが多く私も最初は口パクでしたが一緒に歌っているうちに徐々に声が出るようになっていった（当然音程は外れているのだが)。ああ、カジカに感謝!!

清陵といえば真っ先に校歌、続いて生物部（この原稿も当時の部長伊藤正陽君に乞われて書いている）そしてやっぱり勉強はしていなかったことかな。

劣等生として卒業した私にとって同級会や同窓会はなかなか敷居が高かったが平成１１年の卒後３０年の集いに参加してその思いは払拭された。顔を合わせた瞬間３０年前の仲間と私がいた。それ以降は地元にいるわけだからできるだけ参加するようにしている。

なみの会で校歌を歌うことを楽しみにしています。

「写真」5年ほど前から松本山雅ＦＣのスポンサーをしています。

「人生の分岐点」と「清陵の精神」

１部　杉田　隆俊

・私の場合、３回の「人生の分岐点」を選択せざるを得ない人生を送ってきた。
＜分岐点とは＞
　A)　従来路線を継続する人生
　B）リスク覚悟で新しい人生に切り替える
どちらを選ぶべきか？　頭で考えたって分かりっこない、覚悟と直感で決断するしかない。もしかしたら「自反而縮雖・・・・」の精神が私の体の中にも宿っており　それが決断に役立ったのかもしれない。

●１回目の分岐点：「チノン」から「ソニー」に転職
　学卒後、チノンに入社。そのわずか４年後　首切りがあった。そんな会社にはいたくなかった。諏訪を離れる覚悟を決めた。運よくソニーに入社した。田舎の三流会社からいきなり世界のソニーに入社しちまった。技術レベルは高い、それに場所は東京の品川、私はビビった。これから地獄にでも出かけて行くようなとんでもない恐怖心をもって転職した。しかし、ソニーでの経験はその後の私の人生にたいへんなプラスとなった。
●２回目の分岐点：「ソニー」から「エプソン」に転職
　ソニーには何の不満もなかった、仕事も給料もボーナスも申し分なかった。東京暮らしもやればできそうだった。しかし諏訪の地に対する未練が年々大きくなっていく。ある日新聞に諏訪精工舎の中途採用募集を見つけ応募した。「ソニー」と言ったら「合格」という返事がきた。そして諏訪に戻った、やはり自分には諏訪が合っているとしみじみ感じた。
●３回目の分岐点：サラリーマンから起業
　サラリーマンにはうんざり、所詮「宮仕え」である、楽しいはずがない、自由がないのだから！　金も欲しいが自由も欲しい、だけど両方は手に入らない、私は金を犠牲にし自由を選んだ。一度しかない人生、エプソンを早期退職し「スギタテック」を起業した。

・何が人生の分岐点を発生させ、何が決断材料となっているんだろう？
おそらく若いころの経験が影響している。　思い出すのは清陵の新入生歓迎会が体育館であった時のこと、中に入ってみると電気が消され真っ暗な中　壇上で上級生がスカートをはき濡れ場シーンを演じている、流れていたのは小川知子の「ゆうべの秘密」、今でもはっきり覚えている。私は度肝を抜かれた！　それもそのはず　ちょっと前まで中学生をやっていた私である。そしてコンパでは「自反而縮雖・・・・」の精神の話を聞かされる、何のこっちゃ？と思って聞いていた。
こんな若いころの経験が血となり肉となり私の人格と価値観を作り上げたのだろう。

清陵そしてその後の歩み

１部　武居　良明

清陵では放送委員会と写真部に入った。戦後の色が残る中でVOA(Voice of America)を真似てVOSなどと呼んで自主活動をしていた。もう一つの写真部では被写体は特に定めず白黒フィルムを現像し、印画紙に焼き付けて個人的な写真を楽しんでいた。

幼いころからエンジニアという言葉に憧れていたので大学は迷わず工学部に入った。戦後の花形産業は石油化学、エレクトロニクス、IT、ライフサイエンスなどと変化してきたが、専攻分野はその後の進路に影響を及ぼした。

当時の就職環境は売り手市場で広範囲な企業から求人があったが、長男の宿命で郷里の諏訪から遠くなく、かつ転勤の可能性が小さいところに候補を絞った。たまたま写真が趣味だったことから東京の写真会社に就職し４０年間お世話になった。

面接時に主力の銀塩写真分野への配属を示唆されたが、拒否したため採用が危うくなった。若輩ながら将来はエレクトロニクスの時代になると直感し、この分野に執着したことが理由だった。人事課長から「諏訪人らしいな」と言われたが、清陵の校是に影響を受けていたように思う。彼を含め戦時中の工場疎開で諏訪に縁故のある人も多かった。

社内調整を経て新設の電子写真研究所に配属され、以降定年まで複写機事業に携わった。振り返ればこの時の判断が私のキャリアパスに大きな影響を与えた。（３０年後にデジタル化の波が押し寄せ銀塩写真とカメラ事業から撤退している）

２０代で複写機の心臓部である感光体の研究(日野）からスタートし、３０代が開発(八王子)、４０代が生産(甲府)、５０代が事業と経営(丸の内)、６０代で販売会社(日本橋)と一貫して事務機分野を渡り歩きリタイアした。

苦節２０年の研究・開発では清陵の校是を反芻しながら歯を食いしばった。開発した感光体は有機光半導体と呼ばれ、現在注目の有機ELに繋がった。生産部門では甲府に感光体工場を、辰野町にトナー工場を建設したが故郷に近いので社内で若干の噂となった。

丸の内ではリーマンショックの中で決算数字と悪戦苦闘、東日本大震災にも遭遇しBCPに奔走した。日本橋では全国の営業所に行く機会を得てよく飲んだ。海外では、中国工場の設立、米国工場の売却、フランス工場の再生に関わりよく飲んだ。

リタイア後の現在は、孫の成長を楽しみにしながら投資生活を送っている。大した資産はないが、会社経験の後半部分が投資分野の選択とリスク管理に役立っているように思う。今年はマンション管理組合の役職が回ってきてボランティア活動を行っている。諏訪の実家へは毎月帰っており、地域の仕事や行事にもできるだけ参加している。就職時の地理的選択が良かったのか近くの高尾山ICから諏訪まで１時間半ほどで行けるのが有り難い。これから高齢になるので自動運転の実用化に期待しているが免許返納もありか。

東京一極集中を是正し、地域を活性化させることが課題となっているが、諏訪地方は如何に。私も最終的な税金の納付場所を何処にするのかが課題である。

卒業 50 年後の私達

１部　林　春幸　林　俊子（旧姓笠原）

清陵高校一部のクラスメートとして 3 年間過ごした私達、その後も 50 年間ずっと一緒です。二人の娘達は世界中を駆け回るキャリアウーマンとなって親元を離れ、ここ 10 年以上静かな日々を送ってきました。信濃境の山荘に同級生をお招きしてパーティーをしたり、御柱で再会したり、湖畔の友人のマンションにおじゃまして最高の立地で花火見物したり、いろいろ楽しんできました。「こうやってのんびり暮らしながら年を取り、死んでいくんだね～」などと年よりじみたことを言っておりました。ところが想像もしなかった忙しい日々が待っていたのです。

３年前に長女が上海出身の中国人と結婚。昨年は次女がパリで働く建築設計家（日本人です）と結婚。そして昨年は長女が出産。待望の初孫ができました。夫が米国赴任中のこともあり、私達があかちゃん育てに長くかかわることになりました。次女も結婚後すぐに妊娠、今年 5 月の連休中に里帰りし、6 月に出産予定です。これから 3 か月間私達が育児を助け、９月からはパリの父親にバトンタッチ。入れ替わって 10 月に長女が第２子出産のため初孫とともに里帰り、さらにジジ・ババの奮闘は続いてゆくのです。自分達だけのために時間を使ってきた二人が、引っ張りまわされっぱなしの大忙しな毎日です。でもかわいい孫と一緒に過ごせるのですから、コウノトリがもたらした何よりの幸せです。春幸は、卓球室に改造した職場の病院の会議室で毎日元気一杯な仲間達と卓球を続け、3 年間で 15kg 減量しました。

俊子は合唱団に所属、熱心な指導者にめぐまれ、ちょうど「なみの会」の日に合唱コンクール関東大会に出場です。欠席ごめんなさい。まだまだいろんなことが一杯おこりそうな人生です。年取ったなんて言っていられません。

「私の清陵時代」

１部　松木　敏博

清陵時代の私のイメージは、「松木＝長距離ランナー」だったと思います。でも陸上競技を取ったら、何も残らないという学生生活ではありませんでした。多感な青春時代に様々な経験をし「自己形成」が出来「一生付き合える友との出会い」がありました。

清陵に入った時の大人びた 2･3 年生との出会い、カルチャーショックでした。特に学友会執行部はしっかりとした考えを持った、良く言えば生意気な人でした。あまり、学友会活動にはかかわらなかったのですが、「学友会役員選挙の阻止」の行動をとったことがありました。今となっては「何が原因で、どんな理由で、どうして選挙をしてはいけないのか？」が全く思い出せません。自分なりに何か理不尽さを感じ行動しなければと思ったのでしょう。早朝から学校に行き、投票所に行く生徒に投票しないよう呼びかけたように思います。思い出の一つですが、自己の考えを持って、それが自分で良いと思ったら、突き進む「自反而縮雖千萬人吾往矣」の精神は、意識せずとも校風からしっかり感じ取っていたのだと思います。社会人になっての会社生活、地域の役員・活動に携わっても、状況を踏まえて、自己の考えを持ち意見を出し、改革して行くことはしてきたつもりです。最近感じることは、地区の会議で、しっかりと質問意見を出してくる人は、清陵ＯＢの人が多いですね、後輩にもその校風は受け継がれていると思います。

50 年経ても、今日まで続いている何でも話すことが出来、気持ち良い付き合いのできる、多くの友に出会うことが出来ました。いくつかのコンパ、清陵祭の時、クラブ活動などで、徹夜で様々なことを語り合ったこと、それにより互いの絆を結ぶことが出来たと思います。確かにコンパでは、酒を飲んだり、いたずらをしたり結構「ゴタ」もしましたが、恋愛・政治・社会のことも真剣に語り合ったと思います。今にすると「青臭かった」かもしれません。ある友人の家に数人で泊まった時は、そこのお父さんと「安保」について意見を戦わせたこともありました。友人の恋愛の悩みを聞き、どうすれば良いか一緒に考えたこともありました。多くの友人と様々なことを話すことで、互いに高めあえたと思います。

64 歳で職業生活はリタイアし、地区の幾つかの役員、同窓会、ＪＡ等の役員を受け、地域社会貢献で、意外と忙しい日々を送っています。忙中閑有で、趣味と言えるようになった「写真」を楽しんでいます。幼いころから鉄道が好きで、学生時代は「鉄道研究会」に入り、消え行く蒸気機関車の撮影をしました。今でも、現存の蒸気機関車、都電をモチーフに、撮影に出かけています。

無線部の思い出

１部　丸山　芳高

中学生の頃から体があまり丈夫でなかったため、清陵に入学した当初は体を鍛えたいと柔道部に入部しましたが、結局半年ほどしか続かず、その後は好きなアマチュア無線の免許を取って無線部で清陵時代の大半を過ごしました。校舎の一角に写真部と隣り合わせの部室があり、何かというと部室にたむろして無線部のコールサイン JA0YCR を使って全国の無線局との交信に夢中になっていました。

当時、無線の好きな高校生には市販の無線機を買うお金がなく、壊れた真空管式のラジオやテレビの部品を利用して、無線仲間どうしで情報交換しながら受信機や送信機を組み立てるのも楽しみのひとつでした。部の仲間と放課後や休日に携帯型の無線機を持って見晴らしの良い高地に行ったり学校から借りたボートに乗って諏訪湖の上から交信したこと、清陵祭で公開の交信をしたことなど様々な思い出があります。一方で文学にも熱中し、特に萩原朔太郎や中原中也などの時代の詩に傾倒していました。

大学は経済学にすすんだこともあり、大学生協の活動に参加し 4 年間学生理事として大学の授業とは別に組織運営や事業経営をはじめ多くのことを学びました。結婚したのもその時に知り合った教育学部の学生です。「ひとりは万人のために、万人はひとりのために」、「より良い生活と平和のために」といったスローガンに共感して、卒業後も生活協同組合の仕事を選びました。1970 年代後半から 1980 年代にかけては、地域購買生協（いわゆる「コープ」）が全国的に大きく事業を伸ばした時期ですが、こうした時期から 66 歳で退職するまで生協に在職しました。

無線部での活動だけでなく、地方会（下諏訪黎明会）、談論会、清陵祭の前夜祭やファイアーストーム、諏訪湖一周マラソン、ボート大会や冬のスケート大会、何よりも苦しんだ難解な授業や試験など懐かしい数々の思い出も半世紀の年月とともにかすれてきていますが、清陵時代の多彩で濃密な体験によって育まれた不思議な力は、多少大袈裟ですが、その後の人生を生きる上での心の支えになっていたような気がします。

アマチュア無線は、大学卒業・就職・結婚・子育てと続く中で長らくご無沙汰していましたが、卒業後 30 年の集いで同じ無線部だった小林正和氏に会ったことをきっかけに、一級の資格を取って JJ1HFG のコールサインで再開しました。退職した今は清陵時代を思い出しながら生涯の趣味として楽しもうと思っています。

「清陵」卒後５０年に想う

１部　宮坂　和生

当年取って６７歳、この年になると記憶がとんと薄れ、物忘れも尋常ではない。それもそのはず「清陵」を卒業して何と５０年になるという。

さて、私の清陵の三年間は勉強したというイメージは少なく、どちらかといえば人生勉強を広く、深く学んだという印象でした。その為大勢の仲間と出会い人生の大きな財産をいただいた三年間であったと思っています。その後、東京での大学生活（後楽園大学と言う人もいる？）を５年間大いに満喫し、長男であることの使命に燃え帰郷、地元の光学機器メーカーに入社、そして実に３８年間務めることになりました。

その中で１９９０年後半から退社するまでの１５年間は人生の中で本当に貴重な経験・体験をさせていただきました。その時期フィルムカメラの OEM 生産に携わっていた私でしたが、時は正にフィルムからデジタルへの変換期に加えコスト対策の為の海外移管も加速し、結果自社でもデジタルカメラのレンズモジュールユニットを台湾企業の中国工場へ製造委託することになりました。移管当初は問題もありましたがその後は順調に推移し、ピーク時には一眼レフカメラを含めた全デジタルカメラの世界の年間生産量一億台に対し、約１０％の一千万台のレンズモジュールユニット生産を行いました。当然、現地においては生産拡大に伴い労働力確保を含めた生産等の経営判断を求められる場面も度々でしたが、ここぞ「自反而縮雖千萬人吾往矣」の清陵精神が支えとなって工場経営に対処できたと思っています。

又、この１５年間は波乱万丈の歴史でありまた機会があればお話しさせてもらいますが、ともあれ２０１２年に退職し日々「サンデー毎日」状態ではいけないと地域の役員やボランティアガイド等、少なからず地域でお世話になったお礼をしながら過ごしている毎日です。そして何といっても家庭では素晴らしき伴侶に恵まれ、結婚４０年を迎えました。そして子供達３人も３０歳後半になり、今や孫５人にも恵まれ年末の大晦日には私の弟の家族を含めた２０数名の大宴会で新年を迎えています。

最後に、マルと言えば木遣りと言ってくれる仲間たちですが、祖父から厳しく教えてもらった御柱木遣りが、２０１６年の御柱祭の木遣り日本一コンクールで念願叶い最優秀賞の栄誉を受けました。長年の夢であったので周りからも最大限に祝福してもらいました。奇しくもこの年は下社「お舟祭り」も重なる３０年に一度の年であり、更に行政区の区長をお受けすることになり本当に密度の濃い充実した１年になりました。諏訪の人々は昔から人生の区切りを御柱祭で数えるとよく言います。皆さんも少なからず後３回の御柱祭が見られるよう頑張りましょう。

「卒後５０周年に寄せて」

１部　宮坂 美千博

平成から令和への改元のニュースが、連日、テレビや新聞の大見出しを飾っている。その出典についてのやりとりを見ながら、清陵時代の古文、漢文の授業を思い出した。
著名な学者や、専門家諸氏の「孟子」や「万葉集」の解説に、彼の福澤武一先生の小柄で飄々と授業を進める立ち姿が重なった。

当時の漢文の教科書の最初の一頁は確か「春眠不暁覚（孟浩然)」であったと記憶している。なるほど、昔も今も何故か春は眠い。「レ点」や「一・二点」といった漢文独特の読み方に戸惑ったものだ。震災後の東北の地を目にして、杜甫の「国破れて山河在り」の詩歌が授業の風景とともに思い浮かぶ。「孔子」や「孟子」の説く「曰く」には、高校生当時はほとんど関心を持たなかったが、齢を重ねた今、その一節、一節に妙に共感を覚える。

よく、「あなたの座右の銘は？」と聞かれ、はて？と戸惑うことがある。生来の大雑把の性分の為か、そうしたきっちりとした信条は持ち合わせないが、ただ、気持ちの持ちようとして気に入っている言葉が「人間万事塞翁が馬」という故事である。漢文だったか、古文だったか、これも福澤先生の授業で教わった。元都知事の直木賞受賞作のタイトルにもなった。「人生において、禍福は裏腹であって、その事象のみで、有頂天になったり、逆に過度に嘆いたりすべきでない」という教えである。良いことがあった時は身を引き締め、悪いことがあった時は、この災いはきっと良い事に繋がっていると思えば、嘆きも少しは軽くなる。以来、私にとって困難に出会った時に前を向かせてくれる言葉になった。

さて、こうした故事や漢詩に触れる時、決まって、いつも清陵時代を思い出す。

それは、そうした古（いにしえ）の偉人たちの信念や気概、感慨、もっといえば、魂のようなものが、清陵高校の気風の中にあって、「千萬人と雖も我往かん」の校訓や校歌のもとで、「清陵魂」として育まれ、生徒それぞれの心の中に、生き続けているからなのだと思う。そして、その魂と魂の絆こそが清陵生の「誇り」であると思っている。

卒業 50 年の同窓会が間近い。「朋有り遠方より来る、亦楽しからずや」

清陵の３年間から現在まで

１部　森　千章

清陵の３年間は、合格発表の朝から始まった。ラジオで合格者の発表があると、すぐに永明学友団の新入生歓迎会の通知などを持ってお祝いに来てくれたのを思い出します。

新入生歓迎会では、豚の頭の生首に頬ずりしての質問攻め、何が入っているか判らない闇カレー、最後は胃腸薬の代わりに炭をかじらせられました。

次に覚えさせられたのは長い校歌。試胆会では、暗く深い穴の中で歌わされました。

清陵生になって驚いたことは、髪型です。その当時流行っていたビートルズのマッシュルームカットをしている先輩がいたことで、イエスタデイの曲が、新鮮な驚きでした。

高校時代の思い出は、勉強よりもクラスマッチ、コンパ、キャンプ等の方が強く、特に毎日の様にやっていた物理実験室での卓球、麻雀は印象に残っています。クラスマッチでは、駅伝、ソフトボールと端艇大会が、特に楽しく思い出されます。

清陵祭では、３年間物理実験室を使った喫茶部、特に３年の時には自家用の軽自動車を使ってジュースなどの搬入をしたことが印象に残っています。後は、その当時の校長先生テンパーを柔道部の部員で馬を作って騎馬に乗せたこと、とても重かったですし、正面から泥水をかけられたのが印象に残っています。

遊びすぎたのか大学受験に全て落ち、親の勧めで最後は印刷工学科のある大学の短期大学部を受験しました。我々の卒業研究は、印刷物における機械から紙へのインキの転移についてでしたが、その年は丁度オイルショックと重なり、トイレットペーパーから印刷用紙までありとあらゆる紙製品が不足し、紙を探すことに苦労したことを思い出します。

卒業後は、修行のために大阪の印刷会社に勤務し、最初は女子高生のアルバイトの管理に着きました。そこで感じたことは、大阪の女子高生の喋り方のきついことでした。特にその子達が河内に近いところの生れでしょうか、河内弁がこんなにきついものとは思いませんでした。その後この会社が東京に支店を出すことになり、その当時大阪で工務の仕事をしていた私が、標準語を話す営業がいないので東京へ行って来いと転勤をしました。

就職をして５年が経った頃、翌年長野県で国体があり、親父がその審判員をしたいので会社を留守にするので帰って来いとのことで退職し郷里に帰って来ました。

故郷に帰って来てからは、消防団をはじめ地区、そしてＪＣやＰＴＡ役員等と数多くの経験をさせていただき、多くの人と知り合うことができたことが財産と思っております。

故郷に帰って来てすぐに清陵高校の同窓会の学年幹事になり、多くの皆さんの御協力により同窓会の幹事学年を無事することができました。心より感謝申し上げます。

数年前に軽い脳梗塞を患い、現在はリハビリを続け普通の生活を送る様になりました。

卒業して 50 年、解脱した第二の人生を送っています

1部　柳澤　洋介

大学（早大商学部）を卒業後、修業のために藤田観光の箱根小涌園へ入りました。一年間でしたが、ここでの経験と親しくなった先輩との人脈が大学以上に、その後の人生に大きなプラスになりました。一年後、親の携わっていた旅館業を継ぐべく蓼科へ戻りました。1～2 年で基本の業務を取得し、誘客をすべく、セールス活動を始めました。特に、団体客が多かった関西地区を重点的に回り、成果をあげました。

営業活動に励んでいる中、ホテルの施設の改善（設備投資）を迫られる状況になりました。そこで、設計士を伴い国内の話題の旅館の視察に各地を訪ね、リノベーションに活かしました。特に、一番に目玉商品の温泉施設（風呂、露天風呂）の追求には最も力を入れました。昭和 63 年、平成 9 年に 2 段階で完成させた滝の湯川沿いの北欧風の露天風呂は大評価を得てお客様に大変喜ばれました！

生まれ育った環境のせいか、ロマンチックな海外の高級ホテルへの憧れが強く、欧米・東南アジアのリゾート地など訪れ著名なホテルを視察し、リノベーションに活かしました。しかしながら、日本経済の失われた 10 年の影響は深刻で、我々の産業は構造的に立ち行かなくなり、平成 10 年以降～徐々に売り上げが減少してゆきました。特に、インターネットの波及がデフレスパイラルに輪をかけ、平成 20 年頃からは満州での勝ち目の無い戦いを強いられる関東軍の心境でした。

平成 22 年 11 月をもって祖父の代からの事業経営から退く事になりました。暫くは、正に肝を冷やす状況でした。そんな時、世間の冷たい人間が多い中、清陵時代の友達があたたかく心配してくれたことは大変うれしく有り難く感謝しております。

人生、山あり谷あり、その後何とか運良く修羅場を掻い潜る事が出来ました。今は、お陰様で、現役時代のしがらみから解放され、愚妻と二人、ひとり娘の初孫（もうすぐ 5 歳の女の子）に会うのが楽しみな生活を送っています。

校是に支えられて歩んだ50年間

２部　岩本　光正

高校卒業後、大半の時間を東工大で過ごした。現在も東工大と中国清華大学とを繋ぐ合同大学院プロジェクトで東工大と関係している。その間、大学の『伝承と創造』の精神のもと、校是『自反而縮雖千萬人吾往矣』の教えが私を支えた。過ごした約50年間は科学技術の歩みを実感した日々の連続であり、その中で幼少からの夢であった研究者としての時間を多く持て幸運であった。電気材料物性の研究者としてスタートしたが、米国からの夢のような分子エレクトロニクス構想の話題に衝撃を受け、有機分子をエレクトロニクスへと結ぶ研究分野の創成に挑戦した。先導者はいなかったが、校是の教えに支えられ、独自のアイデアで研究を進めることができた。勿論、テーマに相応しい研究環境は直ぐには手に入らなかったが、東工大建物の地下の一角で、墨流しよろしく水の上に有機分子を広げ、目に見えない薄さの膜物性を評価・解析する方法など、世界初の研究に挑戦した日々は懐かしい。電気材料の専門家がボウフラの研究をなぜはじめるのかと不思議がられたが、独創性とその発展性を信じ、オンリーワンの観測装置を試作し、世界初の発見や世界トップの科学雑誌にも成果を発表できたことは研究者としての誇りとなった。

新しい研究への挑戦は若い学生を引き付ける力があるのか、優秀な学部卒研生、修士・博士学生の多くが集まり、研究室も大変に賑わった。結果的に、私のもとで約30 名の博士が誕生し、国内外の大学・研究機関に羽ばたいていった。いま、彼らは世界各所で最先端の研究を担って活躍中であり、大変にうれしい。また、同時に、アジア、欧米、ロシア、豪州など、世界中の大学や研究機関から、毎年多くの海外研究者が滞在し、研究室の国際化や海外共同研究も進んだことも思い出される。こうした流れの中、大学院ダブルディグリープログラム（東工大―清華大学大学院合同プログラム）の企画より参画し、その後の運営に中心的に関わることになった。いまでは、日本初の大学院ダブルデグリープログラムとして定着している。20 年前には、日中の間には経済力や科学技術力に大きな開きがあり、国内や学内でこの構想に興味を持つ人は極めて少数であった。しかし、私には既に 10 年以上にもわたり中国科学院の研究者らとの共同研究の実績があったので、このプログラムの重要性を信じ、推進に努めた。母校の校是の教えが支えとなっていたと思う。いま、このプログラムの推進により、英語・中国語・日本語の 3 か国語を堪能に話す新しいタイプの高度理工系人材が東工大と清華大学の双方で次々と誕生している。そして、彼らは新しい世界感を持って日中間をベースに活動を開始している。

以上、私は、母校の校是から学びの影響を受けて、この５０年を歩んできた。また、こうした経緯から、私は、現在も清華大学に滞在して講義などする機会も多い。清華大学の校是は「自強不息、厚徳載物」である。これを清華大学キャンパス内で見かけるとき、中国トップ大学の清華大卒業生の人生に、どんな影響を与えるのかと思うことしばしばである。

地方会の思い出

２部　北原　光比

５０年も前の清陵時代に思いを巡らせると、つい昨日のように様々な事が浮かんでくる。学校そのものの思い出は他の人に譲り、私は地方会について書いてみたい。いろいろな意味で、その後の人生に影響を与えてくれた場であったと思うからだ。

我が高陵会は２ケ月に１回ぐらい、地域の公会所などを借りて、泊まり込みで先輩後輩の別なく集った。定番のカレーライスを皆で作り、夜を徹して語り合ったり歌に興じ合ったりしたものである。時には、皆でキャンプに行った事もあった。

入学早々、面食らったのは、先輩達による、あの文語体の難解で長たらしい校歌の指導、そして試胆会でローソク明かりの暗い部屋で皆の前で一人座らされて矢継ぎ早に訳のわからぬ質問攻めにあったこと。しかし、これらを通じて自分がいよいよ清陵という未知なる館の堅固な門をくぐり、その一員となれたという自覚が強くなっていった。

それに、もう一つ。清陵自体、先輩後輩という上下の序列意識はほとんどなかったと思うが、１年生の私には、先輩達が人間的に実に大きな存在に思えた。文字通りの秀才タイプ、無口だが話し出すと高尚な哲学家タイプ、気さくで面倒見の良いタイプなど様々だったが、皆大きく見え、自分もいずれは後輩からこんなに大きく見えるようになるのだろうかと思った。夜を徹しての話のテーマは特に決まっていたわけではなく、自然と何人かが固まって話していた。内容はもう記憶にないが、そこは多感な少年らしく恋愛論や人生論的な話が多かったと思う。世は学生運動の高揚期であり、６０年安保の時に清陵生が駅までデモ行進したというような政治的な話を聞いたことも覚えている。

伴奏も何もなかったが、皆でよく歌を歌った。多分学友会で作られた分厚い歌集をもらった。曲目は寮歌、ロシア民謡、戦前戦後の歌謡曲など古い歌が多かったが、私には合っていた。おかげで今でも、一人でよく口ずさむ。とりわけ、島崎藤村の「初恋」は愛唱歌の一つである。

歌といえば、忘れられないものに春歌がある。もちろん歌集には載っていない。皆、地方会の先輩達から口伝えに教えてもらったものである。世間で知られているものもあれば、間違いなく先輩達が作ったと思われるものもあった。歌詞が英語のものもあり、嫌らしさというより表現の巧みさ、発想の知的ささえ感じさせた。そんな先輩達を輩出してきた清陵の一員であることに私は妙な満足感を覚えたりもした。

今おもえば、地方会は江戸期における若者組に近い存在であったのかもしれない。私はそこで先輩達から薫陶を受け、成長した。聞くところによれば、地方会はだいぶ前に廃止されたとのこと。学校やＰＴＡからの圧力があったのか、それとも後輩達が不要と判断したのか定かではないが、女子が増え、中高一貫校となった今、時代に逆行する遺物でしかないのだろうか。一抹の寂寥感が拭えない。

清陵時代の思い出

２部　久保　正法

高校時代の思い出を順不同に列記させていただきます。

〇通学：

僕の生まれは、富士見町落合机で落合小学校の近くでした。通学するには朝 6 時少しのバスで富士見駅に出ます。帰りは上諏訪駅発 16 時半頃の汽車(電車)に乗ります。電車の中で、英語の短文を記憶するのに苦労しました。（法事で数年前に帰郷しましたが、富士見南中学校は廃校になり、机部落は消滅集落になりそうな位さびれており、寂しく思いました。三男坊ですから、青山いたるところにありを実感しています。）

〇諏訪湖一周マラソン：

学校近くの最後の歩道橋を越える時の足のもつれと息が上がったことがいまでも覚えています。もっと記憶に残っているのは、体育の時間に二葉高校の横を走っている時に、窓を通して女子高校生を鼻の下を長くして覗いていたことです。

〇ボート：

諏訪湖でのクラス対抗ボートレースです。運動部員でもない僕を使ってくれた小池氏？に感謝しています。お尻の皮が剥け、痛いのを我慢して漕いだことが思い出です。順位等は忘れてしまいましたが、二度とできない経験でした。

〇赤いサルビア：

図書委員をしていた時、図書館の横を耕してサルビアを植えたことを覚えています。土が非常に硬くなっており、鶴嘴で掘り起こしました。殺風景の庭が明るくなり、うれしかったです。（今も、小さな畑で野菜を作っています。）

〇新入生歓迎会：

出身中学校別のコンパ;よく飲みました。24 時間営業のコンビニのない時代でしたから、閉まっている酒屋さんの戸を叩いて一升瓶を購入し、飲み、歌い、語らいました。何を語ったかは、全く覚えていません（一緒に過ごした方ごめんなさい)。

〇友達：

理系と文系で授業が分かれていたせいか分かりませんが、同級生の多くの方を忘れています。30 年超務めた研究所でも友達を作れませんでした。ひとりで畑仕事をするのが好きで、寂しいとは思いませんが、親切にしてくれた同級生や職場の人たちには悪かったなあと今頃になってはんせいしています。

〇牛正先生：

地学の講義内容はよく覚えていませんが、話し方はよく思い出します。牛正先生がモデルとなった本を紹介させていただきます。新田次郎著「霧の子孫たち」です。本を読みながら、諏訪湖や周囲の山々を懐かしみました。

「清陵を卒業して 50 年」

２部　小池　忠男

清陵を卒業して 50 年の年月が過ぎ去ったという実感はピントきませんが、あっという間に時が流れた気がします。

順天堂大学を卒業し、すぐに大町高校の体育教員としてスタートしまし、ご縁があり、昭和 52 年の 4 月に清陵の教員で赴任することになりました。赴任初日に職員室へ挨拶の会議に行きましたら、恩師が 15 人以上座っており、すごく緊張したことを鮮烈に覚えています。「うしまさ」にはいきなり「忠男ちゃんは何しに来たの？」と言われ、どう答えて良いか戸惑ってしまいました。保健室に伺うと鈴木のおばさんが「忠男くんは今なにしているの？」これまた答えに詰まる思いでした。さらに旧体育館の端に体育研究室があったのを皆さんは覚えていると思いますが、「子朗先生」と「壽雄先生」の間の席が用意され、「ここが忠男の席だ」と示されたときは拷問席に座るような気分になったことを覚えています。いかに高校生時代に悪さをしていたか、悪がきの印象が先生方にあったのか、「教員＝小池」という式は成立していないようでした。1 回目は昭和 52 年～平成 1 年の 3 月まで奉職しましたが「まさに必死の日々」であったように思います。

我々が過した「ぼろぼろ校舎」で替え歌にある「母校のへぼ教員」をすることになり、あらためて清陵の「化け物高校ぶり」や、先生方の個性豊かな「名物ぶり」をたっぷりと味わうことができました。更には旧校舎から新校舎の移行期にも関ることができ、クラスも 2 回（もう一度再赴任したときに更に 2 回合計 4 回）も担任しました、その生徒がいまや 56 歳と 52 歳で諏訪や全国の中心世代となって活躍しているのが嬉しいことです。

皆さん覚えていますか？体育の授業の「競馬場への４Km マラソン」！！それが赴任したときには立石展望台への４Km・６Km マラソンと角間新田一周コース１１Km マラソンと 3 コースに変貌しており、過酷な日は 1 日に 11Km+6Km+11Km＝28Km など全て一緒に走るという授業になっており、腎臓が走りすぎで狂ってしまい、「血尿」が出てしまうことが 2 度もあり、更には角間新田の急坂で下腹部に強烈な痛みを感じ、何とか学校にたどり着き、医者へ直行しましたら「カントンヘルニア」で緊急手術になったこともありました。当時の生徒も本当によく走り、体育科の先生方だけでなく、数学や英語の先生も一緒に走る学校で本当にこんないやな事をよく頑張るなーと感心したのを覚えています。母校の体育の教師は内心楽だなーと思っていたことが覆され、2 ケ月で５００Kmも走る「地獄のマラソン高校」だと思いました。平成に入り、近くの諏訪実業高校で 11 年奉職後、なんとまたご縁があり、平成 12 年 4 月から平成 22 年 3 月まで 10 年間お世話になり、女生徒が圧倒的に多く女子の強い清陵の姿の変遷も経験できました。今現在、高校教員を退職して 7 年目ですが、県内私立大学の職員をやりながら、清陵の「女子バレー部」の外部コーチをさせてもらい、清陵中学と清陵高校を見させていただいています。こんなにも「縁」があると思いもよりませんでした。結局　清陵奉職＝通算 22 年でした。

私と清陵

２部　小平　正彦

本当は岡谷南に進学する予定だったのに、母親が自分で勝手に俺に何も相談しないで志望変更して清陵受験となった。合格したけどあまりうれしくなかったな。人生ってのは自分で進路きめなきゃだめなのよ。

一年終わって母親に相談したのさ。つまらねーよって、面白くねーよって、そしたら大変だった。志望変更するのはすげえ大変だっただ事の、苦労しただ事の、お前を保険にまで入れてやってるだ事の、いろいろ言われて最後に恩返ししろなんて言われて急に人生暗く重くなってしまった。俺って本当は呑気で明るい性格なのに。

2 年生の 6 月頃かな？受験勉強やめると決めた。このままでは自由がないから、ほんとに自分の人生が無くなってしまうから。そこで俺は親の言いなりにはならないと決めた。だからここが俺の人生の出発点というわけです。そして親との格闘の始まりというわけです。

清陵生活どうかって？もちろん楽しかった、振られたことをのぞいては。

この齢になり、両親も鬼籍に入ったし、もう言えるようになった。親の過大な夢と希望と期待はこの手で全て根こそぎにし、へし折り、木っ端微塵にしてしまった。出来栄え評価 100％完璧である。こう言うのを親不孝者と言うのであるが俺は絶対妥協しなかったが、振り返って思う、これで良かったのだと。

俺が闘ったのは彼らの思想型式そしてその時代背景だった。35 才で９９％達成、66 才で 100％達成、やり残したことはない。大量の時間とエネルギーを消費したがしかし無血で終えてよかったと思う。結果には満足している。南大塩は今でもいつでも行ける故郷であるからである。

本当の敵は自分自身だったことを言わねばならない。

清陵というところで、そしてその時代に自分自身に向かい合う事で精神の基盤が養われたと思います。一人でも負けなかったのはそのおかげです。その後の人生を今も支えてくれています。

もし、あのまま親の言いなりなっていたら、今頃原村の種付け婿の爺さんで（養子）田んぼかき回しているってところかな？自分の人生なんてなかったと思う。

最後に想い出、コンパ楽しかったな。カレーうまかったな。サントリーレッド辛かったね。あんな輝く時代は二度とない。そして記憶に深く刻まれ失われることがない。

2019 年（令和元年）5 月 28 日

清陵の思い出とその後

２部　小林　清水

清陵では、成績が目も当てられない程ひどい成績だったので、勉学の思い出は無く、いたずらばかり思い出します。

当時テープレコーダーを小口君が学校に持ってきていて、これに授業開始、終了の合図であるサイレンを吹き込んでおいて、英語の時間が始まって 20 分後にサイレンを鳴らしました。先生が「今日は無駄話が多かったなあ。あまり進まなかった」と言って、授業が終わったいたずらを思い出します。

これを音楽の時間にやろうということになりましたが、20 分過ぎても小口君が鳴らしません。頭にきて、小口君からテープレコーダーを奪い取り、スイッチを入れたら、ピンク映画の喘ぎ声が鳴りだし。往生しました。先生にはこっぴどく怒られました。

修学旅行で、大阪毎日放送の深夜放送「桂三枝のヤングタウン」にみんなと離れてゆきました。当日グループサウンズのジャガーズがゲスト出演していて、女の子たちの失神するような絶叫に囲まれ、田舎者の私は恐怖を感じました。

高校を卒業、大学を卒業して、楽器のヤマハに就職しました。

ヤマハでは、その殆どを貿易関係の仕事に従事していました。しばしば仕事で訪れたスコットランド、中国蘇州が印象に残っています。初めて海外に出張したときは、社長から「出張を命ず」という辞令を直接もらいました。

今は、名古屋にある会社のアドバイザーをしています。週に 1－2 回出社をしています。この会社、やることが派手で、商品開発をレアル　マドリードのクリスチャン　ロナウドや浅田真央と共同で行っています。ロナウドや浅田真央とみんなで本社の駐車場で写真をとりました。

仕事が無い日は、ひたすら読書をしています。週 9 冊を読みます。30 歳くらいから読んだ本のリストを作っていますが 18000 冊までになりました。

“はなとゆめ＋猫の本棚”で検索してもらいますと、私の感想文に届きます。お暇がありましたら、試してみてください。

http://hanayume5.blog50.fc2.com/

清陵の思い出（卓球・落研・・）

２部　清水　敏夫

５年ほど前でした、高校時代に、家が近所で毎朝岡谷駅まで一緒に走って通った幼馴染の石原君(1 部)から、私がなみの会の行方不明リストに入っているとの報に接しました。とりあえずは京都府にて健在であることを連絡し、皆さんとの交流が復活しました。前回のなみの会に初参加したら、卓球部の板花君や向山君には「そんな太っちょ誰かわからんぞ」とのことでした。昔の面影は残っていないようで、風雪の残酷さを実感しております。

清陵時代は、運動音痴のくせに、前述の卓球部に身を置き、３年の春にはお情けの４番手で飯田市で開催の国体南信予選に出場しました。個人戦のみで１回戦はさすがに楽勝。なぜか２回戦では辰野高校のエースに勝ち、３回戦で岡南のエースにこっぴどくやられました。彼は小学校の同級生でした。運動神経抜群の男で、ハナっから圧倒してきましたっけ。そうそう、辰野高校に行った中学の同級生が辰野卓球部の「補欠」で、夏休みにリベンジマッチを挑まれ、辰野高校で戦いました。何度やっても負けました。彼は「なんでうちのエースに勝っつらか？」と不思議そうでした。「俺って本番には強いのかも」と思った事でした。

思い出と言えば、清陵祭向けにいわゆる「落研(おちけん)」を急遽結成して、ぼろぼろ校舎の２階にあった２部の教室を貸し切りで落語の発表会。同好会の全員、持ち前の記憶力で結構笑いを取ってましたが、私だけはボロボロだったのが、苦い記憶です。暇？で行き場所の無い清陵生は勿論のこと、二葉や東の娘まで聴きに来ていて、教室は超満員だったのに・・・。畑野君、小平君、小林君，石原君、皆上手で拍手喝采だったなあ。

清陵時代の良き思い出を胸に故郷を離れてもう５０年以上になるのですね。大学が文系で英文学を専攻したので信州に戻り高校教師にとの思いも有りましたが、初夏からの就職活動の中でいち早く決まった大阪の鉄鋼メーカーに入社しました。配属希望は海外事業部でしたが、第２希望で書いた人事部に配属され、そのまま定年まで人事労務で終わりました。高卒求人で九州やら四国やらを廻ったり、賃金制度を年功給から能力給に替えたりしていました。関西で暮らすようになってからも、父母が存命中は当然のことと、岡谷に帰省していました。幸い弟が地元の役所に勤務でしたので、盆暮れは岡谷で、春秋は京都奈良で一族集合というのが我が家の年中行事でした。信州の色んな名所も大人になってから一杯訪ねました。スキーなども霧ケ峰、富士見パノラマ、和田峠、栂池・・・マイスキーを岡谷に置いて通ったもので、子供たちも結構スキー上手になりました。近年は両親も亡くなり、帰郷というと、伯父叔母の仏事だったりします。ですので、なみの会の集まりは大威張りで帰郷できる機会だったりするのです。

岡谷で暮らしている弟の子供たち(私の甥姪)は、３人とも清陵の同窓生です。その一人は清陵時代バスケのセンターで鳴らし、今は松本の高校で体育の教師をしています。いずれ清陵で「シロサ」の後を継いで欲しいと思うこの頃です。

陸上競技に関わって

２部　髙橋　和成

私は、下諏訪町の秋宮スケートリンクの近くで生まれ、小学校卒業まで過ごしましたが、中学時代は父の仕事の関係で和田峠を越えた隣村に移り住みました。

高校進学を控えた時、通学区内の上田へ出ようか、越境して諏訪へ戻ろうかと相当悩みましたが、岡谷出身の母から、進学するなら「清陵」が良いのではと後押しされ、幸にも、父が再び諏訪に転勤になったことから、「清陵」に進学することを決意しました。

入学当初は、諏訪市の親戚宅で父と二人で間借り生活となりましたが、直ぐに岡谷市長地東堀に家族で転居し高校生活を送りました。

学校でも、あまり周囲に馴染めず、地方会にも縁がなく、勉強の方も芳しくありませんでした。取り敢えず何らかの体育系クラブに入りたいとは思いましたが、当時の「清陵」には野球部はなく、どこへ入部したら良いのか迷っていた矢先、たまたま居合わせた３年生の陸上部の先輩から入部を勧められ、素質も体力もありませんでしたが、小さい頃から走ることは比較的好きな方でしたので、一抹の不安もありましたが、入部させていただくことにしました。

陸上部の練習では、主に校庭の一周２００ｍのトラックを使ったインターバル走を中心に、時には国道２０号線沿いの茅野市上原「頼岳寺」入口までのロード走や、冬期間は「手長神社」に通じる石段の登り等で鍛えられましたが、私は常に先輩や同僚部員の後塵を拝していました。ただ、足の腱鞘炎などを患って練習できない日もありましたが、コツコツと坦々とサボることなく日々の練習に励みました。

しかし、高校総体や国体の南信予選は毎回予選落ち、出場したロードレース大会もいつも後ろから数えた方が早い指定席で決して強くはなれませんでしたが、「清陵」の校名の入ったユニホームを着て出場した諏訪湖一周駅伝大会や、その当時は開催されていた岡谷・甲府間駅伝大会では、沿道の皆さんから大きな声援をいただき奮起したものでした。

また、清陵時代は表立った行動はなかったのですが、「清陵祭」でのファイアストームの点火や、校内クラスマッチの諏訪湖一周駅伝で上位入賞できたことは、昨日のように思い出されます。

特に印象深いのは、部活動を通じて出会った先輩や同僚部員の皆さんと、日々の練習の合間や学友会館の部室、大会遠征時の旅館、夏合宿を張った校内の教室の片隅などで、大いに青春を語り合えたことで、この時以来、陸上部員の皆さんの存在が、今の私の心の支えになっていると言っても過言ではありません。

私自身は、「清陵陸上部」で活躍することは出来ませんでしたが、幸いにも２男２女の４人の子どもに恵まれ、それぞれが何らかの形で陸上競技と関わることが出来たことに、親として誇りと喜びを感じている今日この頃です。

天地創造のみ業に連なる、わたしの人生のさらなる１日

２部　長瀬　潔

同窓会幹事学年をきっかけに、清陵の同年・同窓の方たちと会う機会が与えられるようになった。　しかし初めての会合に出かけても、見覚えのある顔はそれほど多くはなく名前もわかる友に至ってはかなり限られていた。　だがその後可能な範囲で集まりに出るうち、清陵の現役時代以上に顔見知りや話す友が増えて来ているように思う。

その都度の出会いの中で、清陵祭その他共通の思い出が俄かには出てこない残念さは痛感する。　かけがえのない時をなぜもっと大切にせず、周りに対する関心や自分の考え・行動になぜそれ程見切りをつけてしまっていたのか、斬鬼の念といぶかしみさえ覚える。

しかし同窓、同世代、同年の絆はありがたいもの。　かつてはそのことに気づかなかったり、手放してしまったりしたものも、時を経て目を開かれてみればセカンドチャンスが失われずに存在している。　同年とは、これはいわば僥倖であり、巧んで得るというよりは与えられ・感謝して受けとらせてもらうものだと感ずる。　かつて清陵時代殆ど言葉を交わせなかった友とも、その恵みのゆえに新たな交友、それも新たにしてなお時の醸成を経たかのような味のある交わりを与えられる可能性。　今後もチャンスの続く限りビンテージの質を持った新たな出会い・改めての出会いに期待し、待ち望んでいきたいと願う。

ところで、ふと気づいてみると様々な節目の折、これはあと何回体験できるだろう、これが最後かもしれない、自分にはあと何年残されているのか、といった言葉を周囲の口から聞くことなども結構増えてきている。　仕事をリタイアし今更新たなビジョンを持って挑戦する年でもないと考えたり、健康上の問題を感じたり、子や孫の時代になってきたなと感じたり、等々。　かつての清陵時代、そのように感じ考える人はまれだったろう。　人生に終わりのあることに悩むよりは、今からどこまで太く長く伸びていくのかとの期待ばかりを感じていたのではないか。　だが今に至っては、伸び続けていくのではなく、既に終わりは定まり長さは決定づけられていると感じている人の方が多いのかもしれない。

人生行路のどの段階にいるのであれ、自分の人生の限りを自ら保障することなど100%人の手のうちにはない。　この年になってあと何年残っているのかと考えることは人間の限界をわきまえているようでいて、実は傲慢ではないか。　本当のところは、これまで自分には固有の人生が与えられた、その67年である。　そして明日の朝、生かされるか、世を去るか（ないし病を見出すか）のどちらかでそれは既に定められている。　であるから、目覚めた新たな１日は、自分の人生に足し加えられるもの、新たな創造として与えられるもの。　自ら定めうる終わりからの引き算ではない（しかし人は自らを神とし勝ち)。

そうしてみると、精一杯に生きるべき新たな１日とは、自分ではなく創造主なる神様の創造のみ業。　天地創造に連なる新たな創造に参画させていただくものだと信ずる。

「なすべきことは唯１つ、後ろのものを忘れ前のものに全身を向けつつ、神がキリストイエスによって上に召してお与えになる賞を得る為、目標を目指しひたすら走ることです。」

私　と　清　陵

２部　長田　茂

昭和 42 年 4 月、私は清陵高校に何となく入学しました。今から思えばおよそ半世紀前、母方の祖父以来といわれる中での入学でした。でも、私はわかっていました。多分、自分は勉強しないことを…。高校入試で力を出し尽くしてしまったことを。

案の定、周りの同年生に圧倒され開き直って勉強はしなかったし、ふらふらと部活も 2 つ入っては 2 つともやめ、無為な生活を送っていました。周囲からは心配され、たまたま実兄の教員仲間が清陵の教員として在校されていて、兄が相談したり、母親からは「少しづつ勉強すれば良いんだよ」なんて言われ、そうだな～とか思うだけで、結局何もしない、いや何もできなかった自分でした。清陵へ入れば、その先はみんな大学を意識していたんだろうけど、自分にはそんな資格は無いなとも思っていました。でも、何を思ったかたまに勉強すると、それなりの点数は取れたので、ま～いいか、とも思ったり、そんな訳のわからない生活を送っていました。担任の伊藤先生夫妻には大変、ご心配・ご迷惑をかけ怒られたりもしましたが、今思い出しても恥ずかしい思いでいっぱいです。

それでもなぜか 3 年間、端艇クラスマッチには選手として選ばれ出場しました。今から思えば、一番暇そうな顔していたんですね。（そんなこと言えば、他の選手に怒られてしまいますが）でも一度朝寝坊して、出漕に間に合わなかったこともありました。

こんな自分ですが、通学途上で毎朝顔を合わせる他校（二葉高ではありません）の可愛い女子生徒から、中学の同級生を通じ交際の申し込みが有りましたが、自分が上記のような状態ですから、とても恥ずかしく丁重にお断りしました。もし、付き合っていたら何か変わっていたでしょうかね？

そんなこんなで 1 ～2 年生は過ごしましたが、3 年になってからは進学するにしろ就職するにしろ、少し生活を変えなければと思い、少し勉強もして真面目？になりました。結局のところ、自分は就職を選びましたが、家族からは大学進学を言われ、特に兄からは「自分が大学に出してもらい、高校教員をやっているのに、お前が大学に行かないのは俺のせいみたいで恥ずかしい。浪人しても俺が面倒みるから（兄は 10 歳年長でした）、大学に行ってくれ」とも言われ、それはそれで嬉しかったです。

45 年 3 月、卒業し（させてもらい？）県内に店舗を持つ金融機関に就職しました。結局のところ、「清陵卒業生」のレッテルがついて回りましたが、密かにその名を穢してはいけないと思い、金融大学に入学したつもりで頑張り、大学卒業組に負けないサラリーマン生活を送ることができました。20 代のころ、慶応大学通信教育部に入学し、法学部で 69 単位まで取ったのも良い思い出です。（卒業必要単位は卒論含め 124 単位）

今、長野市に居住していますが、同年生が 5 ～6 人市内に居住し、1 年に 1 回程度、懇親会をしています。そのたび、自分も清陵に学べて？良かったと思いますし、みんなリタイアした中でも友達でいられるので、清陵卒業生でよかったと思っています。

私の「清陵４年間」

２部　原　　大

そろそろ会社勤めの終わりが近づいてきた数年前から、来し方を振り返ることが多くなってきたが、同時に恩返しの意識が昂じてきて、大学時代に打ち込んだボート関係では日本ボート協会の理事や大学のボート部のOB会の会長、そして清陵関係では東京清陵会の会長などの役を求められるまま引き受けている。

振り返ってみて、自分の生き方の根源はやはり清陵時代に発していたのだと思う。入学前から旧制高校的なものを期待していた私は、大学受験態勢にすんなりと乗れず、いつの頃からか、高校時代は人間性を鍛錬すべき秋であり、受験勉強は１年浪人してするもの。清陵を４年と考えればいい。と今思うと疎外感を克服するための精一杯の屁理屈を抱くようになっていた。一浪がひとなみと呼ばれた時代であり、一浪くらいしたほうが寧ろ人間の幅が広がる、とも言われた時代ではあった。

では何をしていたかと言って、剣道の精進と乱読である。初心者として始めた剣道は、１年で初段、２年で二段を得た。また気が付くと明け方近くまで殆ど毎日のように様々な出版物を夢中で読んでいた。あの強い飢餓感は一体何を求めてのものなのか、今は思い出せない。いつも寝不足気味で、とうとう３年生の初夏のある朝、バイクで通学途中に車に衝突し大怪我を負ってしまった。幸い頭が伸ばした腕の上に落ちて命は助かったが、バイクごと空中に飛び地面に叩きつけられる間に、「死」の淵を見た日である。

一番の楽しみは、学校の図書館が溜まった月刊誌を半年ごとに５円か１０円で払い下げてくれることだった。硬軟構わず抱えきれないほど買って帰る日の興奮は忘れられない。しかし高校生である。自分の屁理屈を通すことに前途への不安が無いわけがない。この不安を吹っ切るためか、「自己責任」という思いを強く持つようになった。自分で選んだ道であれば自分で責任をとれ。自分で責任をとるのだから自分の進みたい道を行け。という思いはしかし以後の人生においても変わらなかった。人生の大きな岐路に立った時、人に相談したことは無い。高校生の時に発したこの思いの背景に、校是「自反而縮雖千萬人吾往矣」があることは間違いなく、そして生徒を信頼する懐の深い清陵の風土を感じる。

東京で１年間の浪人生活を送った。初めて予備校に通う朝、満員電車への乗り方が分からず数本遣り過ごし、池袋駅に到着した時にはすっかり酔ってしまい、ホームの端でしばらく佇んでいた。次々到着する電車から夥しい人が一斉に吐き出され、改札に向かう無数の人を見ていると、初めて自身の存在の虚しさを意識し、震えるような恐怖心に襲われた。「生」の恐怖を感じた日である。この恐怖は随分後まで時々夢に出た。お陰で清陵の４年生の１年間は屁理屈通り受験勉強に没頭したが、この年、今でも決して忘れることがないのが三島由紀夫氏の事件である。あまりにも衝撃的で、翌春、大学に入学し、ある日、体育会の漕艇部に衝動的に入部する遠因となった事件でもある。来年で５０年だ。

私の「清陵４年間」は人に勧められるようなものではないが、私の人生の宝である。

「トリ」という名前で出ています。

２部　藤森　英幸

現役時代、ＪＡ（農協）内において保険屋（ＪＡ共済）、示談屋（交通事故の示談交渉）、金貸し（金融）、不動産屋（土地・建物の売買・仲介）と呼ばれる仕事に就いてきた。〇〇屋という職は世間一般的には荒っぽい、いかがわしい商売と思われているかも知れないが。この職業はとりわけ交渉力が求められまた営業力が問われていた。今でいうパワハラの職場環境のなかで生活を送ってきた。振り返ってみれば大変さは多いにあったが事業実績確保に向けての目標達成、交通事故等の解決が出来た時の満足感は人一倍であった。その満足感を得るために仕事を継続してきたといえる。

「たかがＪＡ、されどＪＡ」と常に意識していた。自ら地域で仕事・業務をすることを選ぶ中、色々の方々との出会いを通じて「清陵」を語ることに抵抗があった。職場の上司・部下に清陵出身者が少なく、お客様も千差万別、自尊心からか自らが清陵出身者であることを意識し、他人より行動・行為がさすが清陵生だなと思われることのみを考えていた。ストレス・プレッシャーという言葉の連続のなか仕事を遂行するのに常に意識していたことは「自反而縮雖千萬人吾往矣」であり、この言葉は私にとって現役時代の推進力であった。今は退職し、地区・地域活動に専念するなかその意識も薄くなってきた気がしている。

ところが、最近周りの集まりの中で何回生という言葉を聞く機会が多くなってきた。現在「なみの会」の幹事を通じ、清陵時代に戻った気持で仲間意識を共有している。幹事会では「トリ」と呼ばれ、また他の幹事より、ところで「トリ」は何ていう苗字だったっけと聞かれる始末である。現役時代は周りから「トリ」と言われることも少なく、また「清陵」を語ることも少ない時を過ごしてきた。家庭内において妻からは他地区より嫁にきた立場からみると清陵生って「徒党を組んでいる」「仲間意識が強い」「おれ達は清陵出身者だと自負している」「世間が狭い」と言われている。この言葉が妻から出ても否定することもなくかえって心地よく感じる現在である。

さてここで「トリ」＝７３回生の誕生について触れてみたい。入学してすぐに「トリ」と呼ばれるに至った。清陵の３年間、学費の集金係（会計）を行った。当時テレビでは「ひょっこりひょうたん島」という番組をやっておりその番組の登場人物に博士の役があり、また「借金とり」の役もやっていた。登場人物の博士は黒ぶちのメガネをかけ、まじめでまとめ役であった。当時はみんなテレビでひょっこりひょうたん島を見るのが楽しみの時間であった。黒ぶちメガネのまじめな私が周りからその登場人物に似ているとして「借金とりのとり」というその名前をいただき、「トリ」となったわけである。がそれは一例であってもう一つの理由もあった。私の出身校が諏訪西中学校であり地方会「鳳会(おおとりかい)」という名称であった。その鳳のとりの名前も併せていただいた。身に余るあだ名であった。この歳を迎え、仲間からは「トリ」と呼ばれ、現在に至っている。

「自反而不縮・・・」「自反而縮・・・」葛藤

２部　増澤　利定

卒業後５０年、半世紀が経過してしまった。振り返ってみると年齢を積み重ねるたびに本当にいろいろなことがあって、やっぱり長かったなとも思う。できたら健康で、もう半世紀生きて、進歩する時代の変化を、また、この目で見てみたい気がする。

周りの多くの皆さんに支えられ、今がある。振り返ってみると、自分で選んできたと思っていた今までの人生であったが、自分ではどうしようもなかった人生だったかもしれない。人生の曲がり角、転換期、仕事の分岐点などでは、我儘を受け止めてくれた人々がいて、それなりの自分の道を歩んでくることができた。その結果、多くの皆さんに迷惑もいっぱいかけてきている。それを思うと、家族や多くのお世話になった皆様には、感謝の気持ちでいっぱいである。

これまでの半世紀、「自反而縮雖千萬人吾往矣」高校卒業以来、いつも頭の片隅にあり、自分の言動を振り返る基準のようになっていたことは確かである。しかし、正しいと思うことを「正しい」と言うことの大変さ、難しさをずっと感じてきた。自分の意を通すことが、周りに迷惑をかけてきたことが多々あったのだろうと、改めて反省している。職場を転勤する時に何回か「おめえが、いなくなると会議が、３０分早く終わるわ」と言われた。

その時、その時、「自反而縮雖千萬人吾往矣」の思いで自分の考えを出していたのだが、主義主張が違えば、当然、衝突も起こってくる。考えをごり押しした覚えはないが、自分勝手な所もあったかなと今となっては反省している。しかし、自分の「正しいと思う考え」を持って取り組んでいく「気概」が大事、ということは、ずっと思ってきた。

まず「自反而不縮雖褐寛博吾不惴焉」の思いがあって、そこから物事、言動がスタートするというが大事と思い、実践しようとしてきた。しかし、自らを省みながら、正しい方向を見据えようと努力してきたつもりだが、これもなかなか大変で、自らの非を認め、謝る、方向を修正するということが、なかなか素直にできなかったことが多かった（時期もある）。

そして、「自反而縮・・・・」の思いに沿って、行動を起こすことになるが、特に歳を重ねてきてからは、「正しくないこと」に心底怒り、その怒りを表に出すことが少なくなってきたように思う。歳を重ね、怒りを消化する術を身につけたのか、感じても自分で「まあ、まあ」と抑え込んでしまっているのか、さてまた、自分の生き方や考え方について「逆鱗」に触れることが無くなったのか。どれもあたっているかもしれない。なかなか自分を出せない自分にイライラすることもある。自分をどこで、どのように出していくか、今後も葛藤が続く。特に地域にあっては、「まあ、まあ」と抑えていると楽ができるから。

頭がよく、頭脳明晰に生まれてこなかったことは、私の生き方をある意味でひた向きに努力することを大事にしたり、臆病に生きたりすることになった。それでもプライドや自我が心の底では強いから面倒。そんな自分と今後もうまく付き合っていくということか。

自分に夢中だった時

２部　三浦　一洋

八ヶ岳の麓の村から通学した。始発のバス（高齢化と人口減少、自家用車の普及で現在バスは定期運行していない）で茅野駅まで出て、電車で上諏訪駅に向かった。上諏訪駅からは徒歩で、手長神社の下の道を通り、角間川を越えて坂を上って正門（現在はグランドの北入口になっている）に着いた。下校時は、コースをほぼ逆にたどった。大抵は茅野、富士見方面から通学した友人たちと歩き、話し、電車に乗った。

通学に時間がかかったので、入学当初は部活には入らなかった。しかし、１年の清陵祭の時、部活に入らないとファイアーストームで一緒に騒ぐ仲間がいなかった。そのせいかどうか、学友会館に出入りするようになり、心理学研究部に入った。明確に「入部」したという記憶はないが、手元に心理学研究部の「部員手帳」が残されている。

真剣に心理学の勉強をした記憶はない。もちろん真面目に勉強した人もいただろう。部室には、学友会館に部室を置く様ざまな部の人が出入りした。所属部を超えて集まった先輩や同級生、後輩と様ざまな話をした。部室に「何でも書けるノート」を置き、表紙に「ただし一抹の真理がなければならない」と書き添えた。何を書いても一抹の真理はあるだろう。畏敬していた先輩が最初に書いてくれたのが嬉しかった。

清陵新聞の編集にも携わった。学友会の一機関として新聞委員会があったが、人手が足りないらしく、編集に携わる「自由部員」を募集していた。編集を行うとともに、コラムのほか詩や詩論を書いた。記事の内容について学校当局や教員からクレームや指示はなかった。広告取りも行ったが、大学予備校の広告を掲載して、縁起でもないと顰蹙を買った。

文学が好きだった。詩への関心から「現代詩手帳」や創刊されたばかりの第２次「ユリイカ」を購読した。先輩たちが同人誌「神聖家族」を作成し、詩や評論、小説を掲載していた。先輩たちをまねて、詩を中心とした同人誌「聖河」を仲間と作り、いくつかの詩を掲載した。ガリ版印刷の薄い冊子だった。通学コースの途中で待ち、好意を持っていた同年の女子高生に贈呈した。結末は秘密にしておこう。大学は世俗の学問である経済学を専攻したが、文学への未練は今も断ちがたく残っている。

地方会は同じ中学校出身者だけでなく、複数の中学校の出身者で構成されていた。高校入学前に合格者を集めた歓迎会があり、初めて先輩と顔を合わせた。定期的に会合をもった。食事の定番はカレーであった。時には闇鍋もあった。卒業生も時々参加し、大学の様子や７０年安保前夜の学生運動の状況や将来についても話した。

私にとっての清陵は、このように様ざまな場面での先輩や同級生、後輩（個別に名前をあげることもできる）とのつき合いや交流の総体である。１６歳から１８歳までの３年間、何よりも自分に夢中だった時に、濃密なつき合いの中で、支配されることのない自由や自治への志向、理不尽なことへの反発心など、自分の核になるものが養われたのだった。

研究、開発の思い出

２部　柳田　恒男

大学を卒業後入社した会社で小型録音機の電気系の開発を担当した。録音機では音質を低下させずに長時間記録を行う要求があったが、同じ頃に、東北大学で磁気記録の記録密度を画期的に向上させる技術の研究が行われており、入社３年目に１年間、企業派遣の研究生として派遣されることになった。派遣された研究室は磁気記録の基本技術とも言える交流バイアス記録を発明した永井健三先生の伝統を引き継いだ岩崎俊一先生が垂直磁気記録の研究を開始されていた。磁気記録の基礎知識も無くいきなり研究室に送り込まれ、右も左も分からない状況で技術習得を始めたが、他社からも研究生が来ておりお互いに励ましあいながら、何とか技術の基礎を学ぶことができた。１年後、会社に戻り研究成果を実際の製品に展開することになったが、記録媒体（磁気テープ）、記録ヘッドなど従来の方式とは全く互換性が無く、直ぐに製品化はできない状況であった。

同じ頃、会社では光ディスク用の光ピックアップの研究、開発が行われており TAOHS と言う製品名で製品化されつつあった。また記録媒体の分野ではアモルファス磁性体の研究が進んでおり、光源として半導体レーザーも実用化されつつあった。派遣された研究室では過去、光磁気記録（熱で記録し、磁気 kerr 効果で再生する）の研究が行われており、この知見を利用することを思いついた。希土類鉄アモルファス金属は垂直磁気異方性があり、キュリー温度も低く、半導体レーザーのパワーで記録可能であると予想し、研究室で学んだ高密度記録を実現できると考え光磁気記録の研究を開始した。当時の国際電信電話研究所（現 KDDI の研究所）で記録媒体の研究をしていることがわかり、協力して研究を行うことにした。会社では一人で始めた研究であったが、記録、再生を実証でき世の中の注目も大きくなり会社の開発テーマとして取り上げられ製品化まで繋げることができた。

その後は DVD、Blue-ray ディスク、装置、半導体メモリーの大容量化と低価格化で光磁気記録装置は世の中から退場することになったが、研究成果を製品化まで繋げることが出来たのは研究、開発者としては良い思い出となった。

今思えば、実用化できるかどうかわからないテーマを一人で始めることができたのは、清陵の精神風土が後押ししてくれたことも多少はあったのかと思われる。

左から研究初期（35 年前）に作成した光磁気ディスク。製品化した 230 MB、640MB 記録装置

人生の応援歌「千萬人」

２部　山田　雄一

24 歳の 1975 年に思いがけず全国紙の新聞記者になれて、地方勤務に明け暮れた。いずれ上がる本社で政治部に、と願っていたが、運動部からの予期せぬ声がかりに迷った末、決断。もともとスポーツ好きなのだ。2011 年の 60 歳定年時、社のシニア記者制度に手を挙げ、希望通り長野県内に赴任。昨 2018 年８月、「甲子園 100 回大会」を見届けたのを機に 12 月で退職した。ほぼ 44 年間の記者人生の大半はスポーツ報道に携わってきた。

大阪本社運動部員となった 1981 年は、夏の甲子園に岡谷工業が出場し、県勢８年ぶりの初戦突破を遂げる。監督は岡谷南部中学の野球部で３年後輩にあたる 27 歳の両角亮介君。印象深い取材だった。決勝戦では、金村義明投手の報徳学園に惜敗した京都商業の井口和人投手を記事にした。物おじしない性格の子で、閉会式が終わると独りマウンドへ走った。記念の土拾い。通常のベンチ前ではなく、「定位置」で平然とやってのけた。

当時の運動部（現・スポーツ部）は、前近代的な体質を色濃く残していた。ルーキー記者は「丁稚」であり、からかい口調で「雄どん」と言われたりした。山田姓がもう１人いたことから、やがて「山雄（やまゆう）」の呼び名が通り相場になっていく。

先輩記者の言うことには逆らいにくい日々。ところが、最若手の１人でありながら「言うべきこと」は遠慮なく発言し、「生意気」のレッテルを貼られる。それでも、そんな半人前の仕事ぶりを評価し、重要な任務を与えてくれるデスクがいたのは幸運だった。

主力のベテラン記者と酒席で大激論を交わしたことがある。彼が甲子園大会でコラム記事に用いた核心データの是非をめぐり、双方、一歩も譲らない。「あなたは記者を辞めるべきだ」と吠えたことを覚えている。10 数人がハラハラ見守るなか、デスクが間に入り、記事の一部修正で落ち着く。「読者を裏切る記事」との疑念は消えなかった。

この記念誌で、校是「自反而縮雖千萬人吾往矣」に触れたかった。清陵時代に魅了され、白ズックの通学カバンの肩掛けに 11 文字を黒マジックで書いた。卒業後の具体例を何か示せないかと思い、浮かんだのが甲子園大会取材チーム合宿中の出来事だった。

喧嘩っ早い記者イメージだけ独り歩きしそうで心配だが、例の先輩とはその後に打ち解け、一緒に仕事した（ハイライトは 1985 年の阪神タイガース・フィーバー！）。やんちゃな若造記者が、のちにスポーツ部や日本スポーツ記者協会のリーダーになる日が来ようとは、だれも想像できなかったと思う。多少は協調性も身に付いていったのだろうか。

「千萬人」と出会って半世紀。孟子が強調したかったとされる前段の「しっかりと内省し、それでも正しいと確信するのであれば」に見合う自分史だったか怪しさは拭えないが、いつでも伴走者でいてくれたのは確かだ。いわば「人生の応援歌」。

60 歳代も後半となれば、エネルギーの衰えを自覚する機会は増え、「千萬人」の強靭さにたじろぐ場面もしばしばあるが、その圧倒的な迫力と爽快感は揺らぎそうにない。これからの日々も、静かな後ろ盾であり続けてくれるに違いないと思っている。

思いっきり昔の話。なにしろ遡ること 18000 日余り。

３部　二ツ木　淳子（旧姓伊東）

すごい。多くの人がそうだろうけれど、高校時代は 50 年たっても鮮やかに思い出せるシーンがいくつもある。ただ、私は中学時代と所々混ざってしまい、老化進行中。高校時代で思い出す多くは、暗かったなぁという記憶。

今考えれば、きっと人生も暗かったんだろうけれど、校舎の中、黒い学生服の集団、通学路の手長神社の石段、傍にあった図書館の中、帰り道の湖畔通りは寒くて暗かった。暗くなるまで何をしていたのかは思い出せないが不思議なことに登校の記憶は全然なくて下校の記憶しか残っていない。どんな学生時代だったんだろう？清陵祭の準備で遅くなった帰り道、田んぼで蛍が群舞していた光景はきれいだった。授業中はよく窓の外の明るさを眺めていたように思う。必然的に成績も暗くなった。で、進学先は美術大学に絞られ、その後も先行きは徐々に狭められて、幸か不幸か今だにデザインの仕事から足を洗えていない。暗いといっても闇というより陰。陰の中に遠くから光が入る窓を設けるのが割りに好きなのは、そのころの感覚が根っこになっているのかもしれない。と、この頃思う。歳をとるにつれて失っていくもの、変わっていくことが沢山あるが、身につくもの、歳をとったから実感できる感覚もあって、それはそれでありがたい。限界を知る。諦めることを覚える。悲観しない。これらは高齢者の仲間入りをして身についた。ただ、いわゆる高齢者という実感はまだあまりない。５５年前、上諏訪駅前の本屋さんで立ち読みをしながら聞いた東京オリンピックの開会式の高揚感はピカッと輝いていた数少ない明るい記憶。東京でもう一度開催される来年、今度は実際に観てみたいという願望は諦めきれない。高齢者として、まだまだ未熟者なのかもしれないですね。

お任せするから好きなように設計してと、一生に一度出逢えるかどうかという奇特なお施主様に依頼されて建てた家。気に入ってもらえたのはよかったが、やっぱり暗い。

「清陵時代の思い出と教訓」

３部　伊藤　俊巻

６０歳台後半となった今でも、５０年以上も前のわずか３年間にすぎなかった清陵在学中の様々な出来事が、時折鮮明に懐かしさを伴って浮かんできます。

清陵入学時を振り返ると、校則らしきものが全くなく校則ずくめの中学校時代との天地の違いに衝撃を受けたものでした。入学直前の出身中学校別の手荒い歓迎会（この時の厳しい指導のおかげで「日本一長い校歌」を短期間で暗唱できました)、入学直後の荒々しい（華々しい？）上級生との対面式、ユニークな新入生歓迎（演芸）会等。また上級生の個性豊かな風貌（服装、髪型、履物など）や土足のままの油臭い校内の闊歩等、正に自由を存分に堪能している様を目の当たりにし、これが清陵かと実感しました。

しかし私が「これが清陵！」を最も強く実感したものは、放課後に頻繁に行われた談論会でした。毎回決まったテーマなどなく、上級生の方々が日頃から思っていることなどを大勢の前に次々と出て堂々と主張し、反論されたりヤジを飛ばされても落ち着いて対応する様には只々感心するばかりでした。自分も談論会であのように主張ができればと思ったものの勇気が出ず実現できませんでしたが、普段考えていること、感じていることを大勢の人にしっかり主張することのすばらしさを教えらました。

入学時に大きな衝撃を受けた清陵の校風にも日が経つにつれ違和感がなくなり、それを自然に受け入れるようになった頃、出身中学校が同じ１年上の先輩から「清陵には何故校則がないか分かるか」と聞かれました。突然のことではっきり答えられずにいると、先輩はニヤッとして「自分の言動は自分で責任を持て、事の善悪は自分で判断しろということだよ」。この一言は当たり前のことかも知れませんが、日常行動などに無頓着なその頃の私には非常に新鮮で、その後も頭から離れることのない言葉となりました。

清陵には清陵祭、クラス対抗球技・端艇大会など様々な行事があり、いずれも思い出深いものばかりですが、私が最も忘れられない行事は秋の全校一斉の諏訪湖一周マラソンです。夏休み明けの体育の授業は毎回マラソンに充てられました。私は中学生の頃からマラソンなど長距離走が全く不得意で、１年生の時は全コースを走り続けられずに途中何回も歩き、着順はいつも最下位を争っていました。諏訪湖マラソンを迎え、「できる限り走り続け必ず完走すること」を目標にスタートすると、不思議なことに息苦しさが途中で吹っ切れて足が軽快になり、並走した同級生達と声を掛け合い２０ｋｍを１回も歩かずに完走できました。中々うまくいかない事も目標を立てて簡単に諦めずにチャレンジすれば良い結果に繋がることを諏訪湖マラソンで経験することができました。

以上、清陵時代の記憶を辿る中、清陵に在学していなければ多分得ることができなかった貴重な体験（私にとっては「教訓」）をいくつか書き綴りましたが、これらはその後の人生での、また長く身を置くことになった企業という組織体制の中での様々な局面において拠り所や糧になったと確信しています。

「太陽がいっぱい」

３部　今井　柳平

長～い日々を振り返ると「高校２年」の旋律が蘇る。1年はまだ緊張だろうか記憶が薄い、３年は受験で引きこもり。昭和４３年高校２年の記憶が鮮明。
兎に角この映画が見たかった、特別な理由なく。何となく集まった津金君、北澤君、河西出目、鮎沢君らをメンバーに映画同好会らしき集団が発足。当時洋画といえば「シネマレイク」。あの黒メガネの怪しいオヤジに交渉した“「太陽がいっぱい」どうしても見たい”どうすればいいかと→“５０万円で日曜日特別上映してやる”と言われ、その場で依頼をかけた（金の裏付けなしの先走り←因みに、私のその後の人生も常にこのパターンであった）二葉高校の軍団にも声かけて映画券を売りまくった。結果は、５万円残った。思いついたら振り返らず走り回るAB型であり、この性格はその後の人生でも不変であった。

平成２４年８月パリにいた。ネットで「太陽がいっぱい」のロケ地が紹介されていた、その夜「That's it！それだ」と思い、１０日間かけて「太陽がいっぱい・ロケ地」を探索した、猛暑のイタリアの夏だった。ローマからナポリに入り撮影の中心となったイスキア島をアラン・ドロンになった気分で歩き回った。良き時代のフランス映画　Ce La Vie
卒業後の人生の原点になった昭和４３年高校２年であった。

「太陽がいっぱい」

ＦＩＮ

アラン・ドロンがカフェの女将に呼ばれ警察に捕まるラストシーン

@イスキア島・イタリア
in 2012

from　Plein Soleil

ボーッと生きてきて

３部　マディーン　啓子（旧姓　今泉）

記念誌編集委員会の方々には迷惑かなと心配しつつの投稿です。というのも書く事が苦手。誤字脱字に加え文章が長ーく句読点でいつまでも続き、性格どおりにくどーくて、数回の校正は必須。「**ボーっと生きてんじゃねーよ！**」とチコちゃんに叱られています。

それは高校時代には小説も読まず、詩歌にも関心はなく、映画も見ずと何とも面白みのない毎日を送ったせいでもあります。ところが、この１０年は通勤が元町・中華街駅から浅草駅と遠く、その間に文庫本を片っ端から乱読しております。そして、読み終えた本はパートナー窪田敏（５部）が古本屋に持って行き、当人の小遣い銭に。

イヤーァ小説って楽しいですね、山ほどありますね。いくら読んでも次々と違う世界に会えます。イヤーァ世の中にはこんなに文章のうまい素敵な人が大勢いたなんて。それにスッキリした文章ばかりです。でもイマドキのデジタル小説はやっぱりついていけない。加えて手書きで文章を書こうものなら、パソコン世界の為か、漢字が思い出せない、書いても漢字があやふや、草かんむりが竹かんむりになるぐらいはまだまし。どうも前世紀の遺物であると実感する毎日です。

勤務先の浅草寺病院では“なんでもないか”の医者をしています。なんでも診るが特に専門はない内科医です。いわゆるヤブかもしれませんが、誤診は滅多にしない。なぜなら元々しつこいから徹底的に検査をして、けっして「様子をみましょう」では済まさない。手におえない、わからない患者は即刻大病院にお願いする。そこはアッサリしています。

さて卒業後の半世紀は色々とありました。でも５０年して今はいい時代になった気はします。結構男女平等です。高校時代は同期女子わずか１８名でまだ“男子厨房に入らず”の時代、“女子は家事ができてこそ一人前”でなかなか男子社会に入り込めず大変。でもおかげさまで男性免疫はつきました。高校時代の無口と異なり男性の会話や会議でさえ堂々と割って入れますし、ちょっと肩肘張りつつもお酒も遠慮しません。イマドキの女性以上にがんばっています。しかし準高齢者（日本老年学会などは、６５～７４才をもはや“高齢者”と呼ばない）になり活躍の場が少なくなってしまいました。

今後ですが、団塊の世代の尻尾である私たちは、長寿世界をどう生きるか、考えないといけなくなりました。仕事を辞めたなら何をしようか？とりあえず、家の周りの道路清掃と必死のウォーキングだけは始めました。(笑)

山路来て今だ山麓

３部　遠藤　茂

人生の最終カーブを曲がった今考えることを書いてみる。

（１）人生計画の中にお金のことも入れよう

今も東京都の教職員として働いているのは、偏に、自分のやりたいライフワークに必要なお金を稼ぐためである。ライフワークは人それぞれであるが、私の場合はタマムシである。そうあの有名な玉虫厨子に使われたタマムシである。この仲間は、日本には２００種、世帯中に約二万種程いて、数ミリから１０センチメートルくらいまでの大きさのキラキラ輝く昆虫たちである。昆虫と聞いて寒気を覚えるご婦人や紳士が多く居ることは承知なので、その向きは読み飛ばしてくれるといいな。あまりの綺麗さにブローチの材料にも採用されているタマムシだが、つい最近までこの華麗な昆虫の研究は進んでいなかった。

大型美麗なタマムシの研究に飛び込んだのは２０代の終わりだった。在野の研究者は自分で稼がなければならず、仕事もいくつか変わった。空き時間をつぎ込み、現在までに３０種類以上のタマムシ(当然新種発見である)に名前を付け、大英博物館やスミソニアン博物館の発行物に引用されて、１００年に一度の世界のタマムシのまとめにも名前を残せた。ひたすら走り続けようとする自分は、今思うと、研究にかかる費用や生活費などを計画的に稼ぐという頭があれば、さらに良かったかなと思う。

（２）好きなことにはとことん注ぎ込もう

たまたま自分が打ち込めることに出会ってしまった自分は幸せだなと思う。主な対象地域は東南アシアで、ベトナム戦争の傷跡が生々しいラオスでは地雷原を渡り、１トン爆弾をはじめとする不発弾の中を進んで資料を集めた。現地のおばあさんが遺骨収集に来たオーストラリア人に「息子の敵と」鎌で切りかかった事もあった。海岸付近の調査は植民地時代の欧米各国が資料を持っているので１００以上の世界の研究者と資料や情報の交換をした。時間もお金も掛ける中で、常に危険と隣り合わせで、国境は地図上では存在するが、実際にはそんなものは現地の人には何の意味がないという事実を知った。そろそろ自分が若い人に恩返しをする番だなと感じる。

（３）健康第一だね、やはり

今振り返るといろいろと遣りたい事を遣りたい様にやってしまった人生だが、両親からもらった頑丈な体に感謝したい。この年になれば当然あちこちにガタが来ているけれどまだ走ろうという気持ちも健康だからだな。「有難う」と一言言いたい。

成り行きに任せて 50 年

３部　帯川　利之

不思議なもので，大学に入学した時は，卒業後，諏訪に戻ってくると当然の如く考えていた．それが，大学院に進学して博士課程を修了した後，助手として大学に残ることになった．大きな転機は，入学後 37 年間が経過した 55 歳のときに訪れた．東京大学生産技術研究所から来ないかと声がかかったのだ．任期は 5 年，その間の評価が悪くなければ，5 年の任期延長である．東京工業大学の定年は 65 歳であったが，深く考えることなく退職し，新しい勤務先に赴任した．その年の 4 月には，東京工業大学から名誉教授の称号を授与されたが，年齢不相応の称号を使うのは恥ずかしかったので，実質的に使ったことがない．

さて，私の専門は，金属切削である．オールドファッションな学問といってよい．卒業研究のテーマを決める時，当初，別のテーマを希望したが，結局，成り行きで，金属切削の研究に係わることになった．助手になった 1980 頃は，航空機の機体やジェットエンジンの切削加工技術は欧米に大幅に後れをとっていた．先ずは，追いつき追い越すことを目標に，研究に打ち込んだ．しかし，簡単そうに思えることが非常に難しいのである．日本の切削加工技術は，1 グラムあたり 2 円程度のハイブリッド乗用車などの生産では世界を凌駕しても，1 グラムあたり 200 円程度の最新鋭ジェット旅客機の部品では，いまだに追いつくことができないのだ．高級スポーツカー，豪華客船，ジェット旅客機，高級時計，先端医療機器など豊かな生活の象徴のようなものにおいて，日本の技術がうまくかみ合わない．大量生産を前提とした高度経済成長のための技術は，そのままでは，成熟した社会での高付加価値なものの生産に直結しなかった．技術の重要な転換点を見逃していたのだろう．

幸いなことに，東京大学では，国プロと企業とのコンソーシアムを運営するための連携研究センターを研究所内に設置してもらい，航空機の製造技術に関する研究を推進した．コンソーシアムには，ボーイング社と重工 3 社の他，国内外の大企業，中小企業を合わせて，20 社（退職時）に参加して頂いた．2017 年，上記プロジェクトの全てを後任の教授に託し，定年を迎えた．また幸運にも，新設された東京電機大学ものづくりセンターの教員として迎えられ，安全教育等に勤しんでいる．

国立大学を定年で退職すると，暇になっただろうと，地元の足立区の他，国や省庁や財団などから，委員の依頼がある．これまで通り成り行きに任せで引き受けているが，手に余るようになってきた．とはいえ，これまでに意を決し断ったことがないわけではない．ある学会の会長就任依頼があったが，最低限必要な時間の確保が困難な状況であり，お断りした．さて，これまでを振り返ると，50 歳くらいからあまり寝っていないように思う．その分だけ早く，(願わくは，健康といわれる内に) 人生の眠りにつけるかなと思っている．

ライフワークとしてのプログラミング教育

３部　河西　朝雄

勉強をするくらいしか取り柄のない私は、ひたすら勉強をした。試験の成績ベスト 50 が張り出されるが、3 年間通して必ずそこに載ったのがささやかな自慢。ただ、頭のいい連中はいるもので、成績は若干右肩下がり。そこでランクを下げて臨んだ国立一期校の結果は「さくら散る」。気を取り直して二期校の山梨大学に進学。そこで出会ったのがコンピュータ。我々が入学した年に全国で３校にコンピュータ系学科が新設され、山梨大学もその１校であった。紙テープで FORTRAN のプログラミングをした。人間万事塞翁が馬である。

三協精機（現日本電産サンキョー、平昌オリンピックのスピードスケート高木菜那選手が所属）で５年間過ごし、岡谷工業高校の教諭に転職。その頃、工業高校でもプログラミング教育に注目が集まりだしていたので、SHARP の MZ-80 というパソコンを購入して BASIC プログラミングを独学でマスター。その特技を生かして LCV（地元のケーブルテレビ）で BASIC 講座なる番組を持った。その時作成したテキストが出版社の目にとまり、プログラミング関連の書籍を書くきっかけになった。現在までに技術評論社、ナツメ出版社から１１４冊の本を出版した。

定年まで４年を残し早期退職し、KASAI．SOFTWARELAB を自営しながら諏訪東京理科大学の非常勤講師として大学生にプログラミング教育を教えている。２０２０年に小学校でプログラミング教育が必修化されるので、それを先取りする形で、茅野市、下諏訪町の小中学校で Scratch というプログラミング教育を行っている。その様子を山田雄一君に朝日新聞長野県版に記事にしてもらった。

清陵時代は数学や物理が得意で、帯川利之君（東京大学教授）と図形問題の証明にどう補助線を入れるかでお互いの意見を戦わせたことが懐かしい記憶である。そのころ養われた理系能がライフワークとしてのプログラミング教育に生かされているのかもしれない。

「写真左」
初版１９９２年、改訂第４版２０１７年で２５年売れているロングセラー本

「写真右」
茅野市、下諏訪町で使用している小中学生用プログラミング教育テキスト

私の清陵時代

３部　北川　和彦

思い出はいくつもあるが、特別に印象に残るエピソードがある訳でなく、トータルで私の清陵時代と言える華やかなものはない。

入試に失敗し、入学順位は下から数えた方が早かった。一夜漬けで試験をやり過ごしてきたつけで中学３年の後半はほとんど勉強らしい勉強ができず、惨憺たる有様で入試を迎えそのとおりの結果になった。

担任の阿部隆先生からは中学での成績は悪くないから頑張れやと言われたが、頑張りようにもアクティブボキャブラリーの暗記にうんざりし、数Ｉはちんぷんかんぷん、生物や地学は面白かったものの、主要科目には身の入れようがなかった。今から思えばファイトがなかったの一言につきる。

井上靖の西域小説、三島由紀夫、北杜夫その他小説や歴史書のたぐいを読みあさった３年間だった。福沢武一先生が木曾歴史散歩という本を出したので、これを持って宮坂博之君（６部）と木曾谷の史跡を１泊して巡り歩いたりした。

部活は柔道部に入った。上半身は鍛えやすかったため寝技は得意であったもののなんとしても下半身が強くならず（二葉高校の脇を柔道着に運動靴で走るのは恥ずかしかった)、十分な成績があげられなかった。同年の中では小池隆昭君（５部）が強く１年の体育祭で伊那北の３年生を背負い投げで投げ飛ばしたことが思い出される。

丸山芳高君（１部）が１年中途でやめると言い出し、自分もと思い二人で掘田実部長に言ったところ丸山は認めるが北川は認めないと言われ、そのまま続けることになった。

しかし２年になると同年で練習に出てくる者が殆どおらず、結局部長を引き受けるはめになった。自分一人では後輩に教えられず、中学の同級生が岡工で部長をしていたので、出稽古に連れて行って何とか清陵祭まで持たせた。

松本深志との交歓会、岡谷北部中の地方会「親友会」、友達の家を泊まり歩いて夜を徹して話し合ったなど懐かしいが、清陵生活のありがたさを感じたのは社会に出てからである。恥多き人生を忸怩たる思いで過ごしてきたが、清陵の同年や柔道部の先輩方と会うとなぜか元気になるから不思議だ。馬鹿話をして活力を得ている。

やはり高校の３年間は自分のような者にも確実に影響を与えている。

平成２０年度に長野県弁護士会の会長をしたが、裁判員裁判が導入される前年で準備が必要な年だった。しかし陪審制と似て非なる為に会内から突如として大反対運動がおきた。既に関東地区では埼玉、新潟、栃木が反対決議をし、日弁連も危機感をもって当会の動向を見ていた。そこで１０年ぶりに臨時総会を開いて延々１０時間老若男女入り乱れての大討論会を実施し、なんとか導入にこぎ着けた。総会の最後に清陵での談論会の話しをして自由闊達な討論の重要性を話した。清陵生活のありがたみを感じた瞬間であった。

船乗り人生

３部　小林　正和

清陵 3 年生の時、商船大に行って船乗りになることに決めた。理由はただ船乗りにあこがれただけ、広い海原を航海する人生、そんなイメージにあこがれただけであった。船のことや船乗りのことなど全く知らなかった。大学では毎年 1 か月間、運輸省の練習船（全長 100m 前後）で訓練をする。まずは船酔いの洗礼。強い人もいるが、ほとんどこの洗礼にあう。士官から吐いてはいけないと言われ、こみ上げるものを飲み込む、しかしこみ上げる勢いが次第に増してきてビニール袋にとうとう噴き出す。最後は胃液まで。それでも休むことは許されず 4 時間の当直時間中は立ったまま。卒業前に帆船日本丸（今は横浜に展示）でハワイに行った。船乗りの基本を身につけ昔の船乗りを感じた半年であった。

卒業後、ジャパンラインという会社に就職し、初めて神戸でコンテナ船に乗船した。名古屋、清水、東京でそれぞれ 1 泊 2 日程度の停泊で荷役を行い米国のロスアンゼルス、そしてサンフランシスコに向かった。そこから私の船乗り人生は始まった。離家庭性という大変さはあったけれど、経験を通じて船乗りとしての技術を磨くということは奥が深く楽しかった。いろいろな地方や国の船員と知り合えるのも楽しかった。しかし日本人船員は 70 年代後半から 80 年代の大合理化に見舞われた。原因は円高と投機的な船舶建造であった。70 年当初外国航路に乗る日本人船員は 5 万人余りもいたがこの大合理化を通じ今や数百人になってしまった。今日本に入出港をする船は多くは日本の船会社や商社が運航しているが船員はフィリピン人、インド人など外国人で運航されている。

船の上では陸上では見ることができないような光景もたくさん見た。筆舌には尽くしがたい素晴らしい満天の星、海は凪、船乗りでよかったと思うひととき。夜光虫も神秘的で船の造る波で白く明るく光りその光は船首から両舷、そして航跡に沿って長く伸びる。水平線に沈む夕日も忘れられない。雲の配置が良ければ雲も金色に光る。一方、海が荒れたら厳しい航海になる。300m を超す巨大船がうねりにぶつかり大きく揺れ船全体が激しく振動する。甲板に打ち上げる海水は幅 50m の船を激しく洗い流す。

そんな船乗りの現役は終わった。今は日本に入港する外国のタンカーを監督する仕事をしている。ふと思う。ノルウェーやギリシャは海運国と言われるがこれらの国には船が入港しなくても経済的なダメージは小さいだろう。しかし日本は船が止まったならば数日間で立ちいかなくなる。誰もそんなことには気が付かない。船乗りや海運に対する関心や認識は低い。「船乗りでした」というと「魚を取っていたんですね」と返される。「原油（石油）はどこからくるのですか？」と聞いても若い人はほとんど知らない。「南シナ海で中国海軍が日本に向かうタンカーを拿捕してしまうのではないか、だから自衛隊を・・」なども聞くが日本に入ってくる船には日本人はほとんど乗っていない。中国船が日本に原油を運んでくることも多々ある。中国海軍がその中国船を拿捕し自衛隊が助けに行く？「清陵祭の歌」4 番の一節「世は混とんの暗闇に人皆枕高うして虚栄の夢やむさぼれる」。

清陵と私

３部　古村　　功

青年時代に得た感情・感覚・考え方は無駄に年を取った現在までも大きくは変わることがない。その感覚の土台は清陵の時代に作られたと思われる。少し変わった変な学校であり自由を標榜する学校だった。その風にあたりどこか心地よいと感じてしまったのだろう。

最初まったく度肝を抜かれた。まだ高校に行く前の３月に先輩に呼ばれた歓迎会。野球やランニングをした後に最悪の鶏の生首のカレーを食べさせられ、豚の生首をなめさせられながらギロチンの上に多くの質問を浴びさせられた。この後の歓迎会や談論会。自分自身で考えさせられ、自己責任を取るように促された。

何か事あったとき又は重要な分岐点において、考える基本は、「自分が正しいと思うのは」であった。青臭く大分損することも多かった。事務処理を簡略化、情報化を進めようと思ったがためにボスと意見が合わずに辞めることとなった。「雖千萬人吾往矣」のつもりであったが砕けちった。不安で思い悩んだが後悔はない。でも、２０年たった今でもここでは、そのころに適当に作ったプログラムが使われているという。

そういえば、清陵の卒業後にも教育実習でお世話になった。最後の研究授業の時用の学習指導案は作成したが、その他の授業は何も作成しないどころか都合よくつかわれた。「俺ちょっと法事だからここを教えておいてくれない」というような風だ。苦痛と言われる教育実習も大変に楽しく行えたことも清陵ならではと感謝している。教員にだけはなるまいと考えていた自分には大変ありがたい実習であった。その人が間違って、残った大学でアルバイトとして始めた予備校の教員がそのまま生業となったのだから。

現在も高校で非常勤講師として理科を教えている。授業をしながらあの当時の情景が浮かぶ、赤鬼が意気揚々と早口でまくし立てる。顔を赤らめ火を吐かんばかりに、いかにも汚い白衣を着て唯一白い襟の裏側を起こし卓上実験で得た試験管の溶液の色を示している。牛正に最初の授業で「辰野にはまだカブトムシがいるか？」と聞かれた。地学の授業で覚えているのはジオイドとモレーンの話位だ。そういえば、地学の試験で採点が間違っているのを指摘したら、次の試験でこの点を上乗せするとのこと。ほんとに上乗せされていた。

生徒を見る目にも、服装が少し乱れていようが、行いや言葉使いが怪しかろうがあまり目がいかない（規則として良くない事だろう）。何か少しやろう・頑張ろうとの態度があるならば許す。寝ていたり・無為に過ごしていると思われるとき（こちらの主観であり、本人たちにとっては有意なのかもしれないが）には、いまだに大変に気にかかる。

体が動くうちは、少し束縛されて何かやるべきことがある方が楽しいだろうと！仕事をしている。でも年ともにそろそろ限界か。動けるうちは動こうと週に１回ほど山に登る。夏場は主に八ヶ岳「東に高き八ヶ岳～」、冬場は近くの里山。その際に諏訪を通り過ぎると、街並みも道筋も大きく変わっているが、それでも諏訪の地に居ることに何か特別な愛着を感じる。あの３年間を過ごしただけなのに！

勉強しない自由

３部　巣山　彰平

私は三月生れで、おくてでした。１年のとき誰かが、「清陵が自由を重んじるなら、勉強しない自由もあるわな」と言いました。私はその説に飛びつきました。以来５０年、その残務整理に追われました。まあ、それはそれで意味のあることでした。

３年の１月、新潟大高田を受け、高田美人が単なる噂でないことを実感し、大いに期待したが落ちて、だめかなと思った奈良教育大に拾われました。私は学部卒ですが８年も奈良に住んで、田舎へ帰ったらどういう訳か大学院へ行っていることになっていました。

４回生のとき、教育実習で清陵にお世話になりました。教頭先生から「よく来れたもんだな」と言われました。私もそう思いました。セーターを着て授業しました。職員会議で挨拶するとき牛正が、着ている服を私に貸してくれました。トッサのところに顔を出すのは、いろいろ迷惑をかけた手前、だいぶ遅れました。

そんな私は２６歳で大阪府教委に拾われ、いろんな所でウソを教え、口を糊しました。幸にして力およばず、昔の陸軍の様にはなりませんでした。

余談ですが、戦後の混乱期が収まったのは問題意識をもった若い官吏が生き延びたことによります。私は仕事ができないくせに生き延びました。再会できない人達のことをおもっていると、某女史の唄が聞こえてきました♪も一度始めから、やりなおせるなら～♪
私はこのような感傷に与しません。しかし、も一度清陵生をやってみるか？と問われたら、O.K.です。も一度校長室で団交してみたい。これは感傷でなく夢です。

バカなことを書いていると、子供に怒られるので、これで止めます。

懐かしい人たちに会いたい

３部　津金　敏三

清陵高校時代の同期会の開催が近づいて来ると、懐かしい人に会いたいとの思いが募るようになる。そんな思いを実行に移そうとする人がいる。同期会幹事から会いたい人の連絡先を教えてもらい、電話をしたり手紙を書いたりして連絡を取る。同期会に誘ってもなかなか参加するとは言ってくれない。いろいろな事情があって参加できそうにない人が多いのだ。どんなに会いたくても会えない人が増えている中で、この機会にあって旧交を温めたいとの思いは、同感の至りだ。

過ぎた時を戻すことはできないが、思ったことを行動に移す高校時代の彼が今もここにいることに感激している。高校時代、彼と何人かの仲間で映画研究会を立ち上げた。軟弱な映研と揶揄されたが、彼があるフランス映画を見たいので、どうしても上映したいと言い出した。皆賛成して上映することになったのだが、大変なことだった。今と違い映画館で上映するしかないのだが、その条件が日曜日の午前中に満館にして二回上映すること。皆怖気付いたが、彼の決して諦めない姿勢に圧倒されて、友人・知人その他大勢に手当たり次第前売り券を売りまくり上映にこぎ付けた。

会いたくてもこの世では会えない人が私にもいる。彼は大学生の時亡くなった。読書が好きで理路整然と考え話すタイプの人なのだが、感性豊かで、情にもろく友達と共感する思いを大切にする人だった。クラスマッチ。バスケットボール決勝戦。何度か追いつきそうになったのだが、実力不足で負けた。口惜しさと疲労を感じながら帰ろうとしたとき、応援をしていた彼が慰労会をしたいと言い出した。場所は彼の家でやってくれることになった。選手だった我々数名がお邪魔した。彼は、試合の場面の良かったところを一生懸命褒めてくれた。彼は、負けたが互角に戦った我々のことを誇りに思っているような様子だった。

もうひとり、今回の同期会では会うことができない人がいる。高校時代、私は命拾いしたことがあった。彼の自転車を借りたがブレーキが効かず、学生会館の坂を国道へ直下降で突入した。運悪く丁度車が来たが急ブレーキで止まり、自転車は向かいの商店にぶつかり、ガラスを割ってしまった。彼は今、海外で日本語を教えるボランティアを行っている。そのために事前の実践研修を受けたり、海外で肺炎になり一週間意識不明になったりしても、諦めず遂に念願を叶えた。

他にもいる仲間たちに恵まれ、多感で悩み多き高校時代を、有意義に過ごすことができた。私は、卒業後農業協同組合に就職した。「空想から科学へ」と揶揄された「空想社会主義」を起源とする協同組合だ。「一人は万人のために、万人は一人のために」「自助、相互扶助」を理念とする組織だ。そこで金融事業に携わった。理念に基づく事業を展開したのかと問われれば、自信がない。ただ、今の私の考えの原点は、高校時代の仲間たちとの繋がりから生まれたような気がしている。

バスケットのクラスマッチ

３部　中島　毅

清陵での思い出というと、清陵祭・湖周マラソン・地方会・部活動と色々あるが、一つ懐かしく思い出すのが、バスケットボールのクラスマッチである。

行なわれたのは３年生の１０月、寒くなりかけてきた頃であったと思うが、その時期は皆、自分の進路を決め、その中に入り込んでいた為かホームルームでもあまり会話がなかった様に思う。

そんな中、クラスマッチが開催されるという事で、我々３部も愛好者達で参加しようと一致した。チーム全体は専門家集団ではなかったので、皆で「どう戦うか」の協議を行ない、採用した戦術は、人一倍の長身であった伊藤俊巻君がフリースローサークル辺に入り、他の４人が周りに散らばるというバスケットの戦術でいう「ポストプレイ」であった。

ポストである伊藤君があいたら彼に球を集めて攻撃、ディフェンスが下がり周りがあいたらとにかく放る（シュートする）。このプレイとシュート後のフォローアップ、速攻（ロングパス）が功を奏して勝ち上がっていった。その結果、「個性派・野武士集団（失礼）」の４部と「穏健派・ファミリー集団」の３部との決勝戦となった。案の定、苦戦したが、熱を帯びた緊迫した好ゲームであった様に思う。

実は、この原稿を作成している最中、私の頭の中では４部に勝利し優勝した良い思い出となっていた。しかし、共に戦った津金君に聞いてみると「善戦ながら惜敗」であり、自分の記憶がいかにいい加減であったかが、わかった。多分、久しぶりにクラスが団結したという満足感が、そういう思いにさせていた様だ。

いずれにせよ、準優勝となり、皆が結束して戦い終えたという思いからか、その夜は、諏訪の北沢博之君宅（当時応援団長、残念ながら故人）に集まり、遅くまで宴会を行なった。そして大いに盛り上がった。

振り返ってみて、これは単なる学生生活の１ページに過ぎなかったが、当時クラス単位で行動することはあまりなかった。加えて、３年次１０月という押し迫った時期でもあったが、皆がまとまって行なった懐かしい出来事であった様な気がする。

さて、私も大学卒業後、物流の会社に入り４２年を過ごした。仕事柄、成田・関西・福岡といった国際空港で業務を行なってきたが、場所により風土、慣習も違い、人も変わる。同じ仕事でも何かが変わった様に感ずる。そんな違った環境下で仕事を行なった事は、貴重な経験であったと思う。

今、人生１００年の時代といわれる。我々もそろそろ最終域に入ってきた。しかしながら、信州人である事、諏訪人としての心、また清陵で育まれた自由な物の考え方、進取の気風は、今でもどこかに残っている。これからも、そういった中でやっていく様に思う。

茅野市役所　梶の葉会

３部　中村　安志

私が３８年間勤めた茅野市役所には、清陵のＯＢ・ＯＧで構成する「梶の葉会」という親睦団体があり、正規職員の一般会員に加え、時の理事者や市議会議員も特別会員として参加している。

行事は、年に１回の「総会」と称して５月に退職会員の送別と新入会員の歓迎を兼ねた親睦会を常宿となっている市内の寿司店（店主も清陵ＯＢ）で開催し、昔話やジェネレーションギャップに花を咲かせて青春を謳歌し、最後は日本一長い校歌をこれまた謳歌して、「金色の民」と「あなうれし」で締めるお決まりのパターンとなる。通常は５０人前後が集まるので、２階の襖を取り払った大広間で「民」をやるときは階下や店に大いにご迷惑をかけることとなるが、店主は承知の上で黙認してくれている。

「梶の葉会」の発足にはちょっとした経過があった。

昭和４９年に就職した当時は、諏中・清陵のＯＢも何人かはいたが人数的には小グループだった。先輩の話では、他校卒業生の親睦会があったことから、一時「清陵のＯＢ会」をつくろうという話が出たことがあったが、他の職員から「清陵の連中が徒党を・・・」というような目を向けられて断念したといういきさつも聞いたことがある。

【閑話休題】以前、親戚の法事に出席した際、供養後の酒席で菩提寺のご住職から「若者に年齢を聞くと普通は『高校生です』と答えるが、清陵生だけは『諏訪清陵高校です』と答える。かわいげのない連中だ。」という趣旨の話を聞かされたことがある。その席にいたもう一人の清陵ＯＢと顔を見合せて苦笑した。清陵生は、時には目の敵か？

就職から数年後、オイルショック以降の民間企業での採用手控えを受けてか行政の場でも大卒者の採用が進み、必然的に清陵ＯＢ・ＯＧも増えてきたため改めて「ＯＢ会」設立の話が持ち上がり、私も発起人の一員として名を連ねさせていただいた。

このときにはすでに相当数のＯＢ・ＯＧがいたため、さしたる問題もなく無事設立の運びとなり、以来、毎年１回「校歌」と「民」を満喫する場が継続されてきたが、管理職になるような年齢になるとジェネレーションギャップを痛切に感じずにはいられなくなった。

泥まみれの清陵祭、松本深志校との交換会、桐の高下駄を履いた登下校、ウシマサ先生の逸話、会話はすべて断片的になる。ましてや新校舎育ちの卒業生には「我が青春の中庭のテニスコート」の話は全く通じない。ただし、老若男女入り乱れて肩を組む校歌となると、歌詞カードをほとんど見ずに謳歌する古参会員は、「アインス・ツヴァイ・ドライ」も知らない若者からある種の敬意（驚異？）の眼でみられることとなる。

そんな校歌を歌う機会を失って７年が経過した。「卒後 50 年の集い」は、久々に校歌を謳歌する機会の到来だが、「歌詞カード」は間違いなく必需品となるだろう。

半世紀を振り返りこれからの私

３部　松田　光明

今から半世紀前、期待に胸を膨らませて清陵へ入学しました。3 月下旬、雪の残る中説明会があり登校しました。4 月からの高校生活の準備、始めてのクラス仲間との顔合わせなど記憶が曖昧になってしまいましたが、新たな生活に高揚していたように思います。

それから半世紀を経て、今回自分を振り返る良い機会を頂きました。清陵での 3 年間、その後の 50 年があっという間でした。自分自身の原点を見つめるとき、清陵での高校生活は私を一気に大人の世界へ導きこんだ時期でした。学友会、自治、自由、これらはすべて高校生というより、大学生、社会人の世界観にその域を達していました。未熟な私にとってはあまりに急激な環境変化と、価値観の相違に戸惑いを感じえませんでした。

そして、何よりの驚きは上級生、下級生の区別なく対等な立場で接してくれたことです。談論会で、自分の考えを大勢に向かって主張できること。思想・信条が異なっていても自由に意見を言い合えることは、清陵しか出来ないと思っていました。私にはとてもそこまでの勇気、主義、主張がありませんで、ただただ聴いているだけでした。高校生の多感な時期にこのような貴重な経験ができたことに清陵の素晴らしさがありました。

そんな自由、自治にも責任が伴い、身勝手な振る舞いは許されないことを学んだのは,大学生になってからでした。学生運動が盛んであった当時と比べ、今の時代は意識する機会が減り、自由であることを当たり前のように思っていますが、これからもしっかりと守っていきたい、また守ってもらいたい。守るものと、変えていくものを正確に判断できる「ものさし」があればと思いますが、無理でしょうか。

今、これまでの自分を振り返ると、私たちは戦後の復興期に生まれ、高度経済成長の時代を過ごしてきました。しかしここ最近は失われた十年とか二十年とか言われ、明らかに以前とは違います。これからの行く末が心配です。少子高齢化と人口減の社会、社会保障費の増加と財政の逼迫等、この国の将来はどうなるのか、これからの若い人はどのように対処していくのか気になります。今まで築き上げてきたものが一気に崩れていってしまいそうです。

そんな中、60 歳を過ぎこれからの残された年月をいかに向き合って生きていくかと考えたとき、自分たちの住む地域の活性化のためどうするか、昔馴染みの仲間で議論した結果 4 年前から地域の発展、魅力ある街づくり、防災・減災対策として、里山の整備を始めました。山はどこも荒れ放題です。山の材に期待するのではなく、景観を守り、山の持つ多面的機能を発揮して、山から魅力ある街を発信し、福祉、育児、医療の充実につながれば、賑わいを取り戻せるのではないかと期待しています。単なる自己満足にならないよう努力したい。今年度から、あの大きく新聞に載りました森林税を利用しての、活動を企画しました。協議会を立ち上げ、この度、町・県から承認され、いよいよスタートです。

「教えてもらうのではない！・学ぶのだ！！」

３部　三澤　伸二

昭和 27 年に生を受け、15 歳～17 歳の清陵高校時代そして 18 歳～67 歳・・・（確かに清陵を卒業して 50 年だ！）卒業５０年記念誌に寄せて、改めて我が人生を振り返ってみる。

私は、教職の道に進み、管理職も経験して、同窓諸氏と同じくすでに定年退職を迎えた。

清陵時代の校是「千萬人・・・」は、私の人生にどんな影響を与えたのだろうか？
正直あまり考えたことがなかった。

教育評論家ではなく、教育実践者として現役３７年間とその後の教育への関わり四十数年間の「仕事」への取り組み方は、「自分が役に立つ存在でありたい」「貢献できる仕事をする。」との思いが占めていたように思う。その結果、関わった者（教え子・保護者・同僚・教育界の方々・・・）から、良いも悪いも一定の評価が与えられていたのだろうと思う。

どのような課題にもそれをやりとげるには自ら方策を見つけ、考えて実行していく必要がある。教えてもらうのを待つのではなく、自ら学んでいくことが大切であり、真心込めて、理にかなった実践をしていくことではないかと思う。
実は現在の児童・生徒への教育課題も同じである。

その意味では、私が校是「自反而縮雖千萬人吾往矣」から学んだことは前半の「自反而・・・」と併せて、「自ら道を切り開く・・・」「困難なことにもしっかりと立ち向かう・・・」ということであったように思う。そして曲がりなりにも実践してこられたことに清陵卒業生として誇りを感じている。

私は、現在も非常勤教諭として教育委員会に関わり、学校現場にも出向いてお手伝いやアドバイザーとして仕事を続けている。教員が、「教えてもらっていないから・・・」や、「対応の仕方が分からない」との状況に陥っている事例も多い。

研修制度も「充実！？」しているが、これからの教育界に不安を感じる。何人もの教員が休職してしまったり、教員を断念してしまったりする事例が結構あるのだ。

前者の事例は、それなりの経験者が多い。現場での様々な困難な事例に対して立ち向かえず、逃げてきてしまった結果でもあり、後者の事例につながった方がいい。後者は、若い人に多い。自らの資質の限界を早めに悟り、転職していくことはいいと思う。どんな仕事でも困難なことはある。しっかり学び、立ち向かっていくよう期待したい。

学校現場での悩みは、常に社会の関心の中で、果たすべき役割に対する期待とともに多くの批判も寄せられ続けている。学校としての課題も多い。
気がつけば、６０歳代後半、エネルギーの衰えは隠しようがないが、現場にいた若い頃と今も変わらない仕事に対する思いがある。　もう少し、頑張ってみるか・・・。

半世紀の時空を超えて

３部　矢ヶ﨑　崇

五十年前に戻ることは、身体は無理でも気持ちは可能です。

今年は昭和四十二年と思ってください。四月四日が入学式。この月は雨が多く、この日も雨でした。六日から授業開始。早く始まらんかなと思っていたが、始まると嫌なもんだ（と日記に書いてある）。毎日、校歌の練習と教室の場所を探し回っていました。

音楽の通知表は 3 でしたが、オケが私の伯父と同級生で家にも遊びに来たことがあると話したら次回は８になりました。手で拍子を打つのが上達したのかもしれませんが。

三年時の深志高校との交歓会。深志の徒歩隊を途中まで迎えに行き、陰に隠れて二 B 弾や木の葉に墨汁とメリケン粉を混ぜたものを彼らに投げつけようと計画。しかし、うまくいかずスルーされました。自分でかぶってしまった者もいた。岡谷から今井までバスで三十円。こちらは三十人いるから団体割引にならんかと見習の車掌に言ったところ「まだ教わってません」と。

寒いある日、焚付を忘れ入口の戸を壊して燃やした奴もいた。ストーブは点いたがその後の寒いこと。ストーブの煙を教室中に充満させて先生が入って来られないようにした者もおった。真面目な私は注意することもなく傍観。

先日、女優京マチ子さんが亡くなりました。漢文の先生が授業で、昔見た彼女主演の映画「楊貴妃」の話になり「きれいだったなぁ」としみじみ仰しゃっていたのを思い出しました。また、中国人は「仁丹」が好きでこれを飲ませるとどんな病気も治った。「仁」の字がいいんだなぁと。肝心なことは忘れましたが雑談だけ覚えています。

三年生はどうしても大学入試が気になります。「入試が済めばゆっくり遊べるが、今は急いで遊んでいる」毎日。昼寝て夜勉強しようと実践。昼寝るのは成功。夜起きて勉強するのが難しい。三日でやめた。

下敷きが割れてしまった。購買部で二十七円。因みにハイライトが八十円（購買では売っていませんが）。「俺たちは高校生なんだから酒は良いが煙草はいかんと思う」と言った正義漢がいた。

「十年一昔」といいますが、五十年も瞬く間に過ぎました。現代と違い古代は時がゆっくり流れていた、と考えがちですが光陰如箭、露往霜来、日月逾邁、烏兎匆匆、兎走烏飛など時が過ぎ去るのが速いことを示した語が幾つもあります。昔の人も時間の流れを速く感じていたと思われます。

突然ですが、二十五年前には羽田内閣成立、松本サリン事件、貴乃花が横綱に、イチローの 200 本安打などがありました。あれからあっという間でした。二十五年後もすぐにやってきます。ヨーシ次は七十五周年だ。みんな生きていろよォ。

卒業50年を振り返って

４部　赤羽　博巳

先日、この地方の高校入試の朝、一人の生徒が道に迷った様子であったためどうしたのか聞いたところ、「〇〇高校の入試に来たが道に迷ってしまった」とのこと、目的の高校へ行く時間は充分にあったが、見たところあまりにもパニック状況にあったため、車で送ってやったことがあった。自分達のころは同じ高校受験者が集められ、引率者がついて試験会場へ行ったように記憶している。このことは一例として、朝の掃除から放課後の掃除まで様々な規律と、多くの指導の中で過ごした中学時代の環境から誰からも世話を焼かれない、とりわけ「自主独立の気風をもった学校」へという大きな環境変化の中で、自分自身が順応できていたのかどうか、自分としての確固たる考え・目標を持ち、実現に向けて努力をしてきたのかどうか、いまさらながらに「諏訪清陵高校が教える」一番大切なことが分かっていなかったのではと自らを省みている次第です。また「自反而縮雖千萬人吾往矣」毎日目にしてきたこの言葉に沿った行動が少しでもできたのかどうか自問自答している自分があります。

さて、高校時代はバレー部に所属し、３年間バレーボールに熱中する毎日を過ごしましたが、自分自身の人生においてこの経験は大変有益であったと思っています。残念ながら公式試合の思い出はあまりありませんが、岡工、岡南、諏訪実との練習試合、クラスマッチは思い出に残るものとなっています。また、社会に出てからも、企業内の種々のバレーボール大会、居住地におけるママさんとチームを組んだ地区対抗バレーボール大会等々、多くの楽しい時間を過ごすことが出来、また多くの人との交流ができたことは、自分の人生にとって掛け替えのない思い出となっています。残念なことに今はもう体が動かない、体力もない状況、バレーボールはできないが、残りの人生、終活だけでなくまだまだ「できたらいいな」がいっぱいあると思っています。

・ギターで弾き語りができたらいいな
　大学時代フォークソングに夢中になっていた頃を思い出し、好きな曲２～３曲でいいから思うように動かなくなった指を動くようにしたい
・美しい筆字が書けたらいいな　等々

今の生活状況から、どこまでできるかわからないが、いつまでも自分の思いにチャレンジする自分であり続けたい。

「清陵」そして「諏訪」

４部　小口　信治

清陵時代、私は、理系を志望していた。部活も物理部に所属して、アインシュタインや湯川秀樹に惹かれ相対性理論や素粒子論を学んで、否、かじっていた。学友会館の部室によく寄って先輩や同輩後輩諸氏と駄弁っていた記憶がある。ところが、その後、文学、特に詩歌に興味が湧き、３年生の秋頃だっただろうか、当時出ていた詩誌の投稿欄に拙作が掲載されるということがあり、文学への熱は弥増すばかり、矛盾を抱えたまま、受験シーズンを迎えることとなってしまった。そして、大学受験は、国立大学は理工系学部を、私立大学は文学部を受験するという、ある意味で親との妥協の末の選択だった。結局、一浪し、翌年、私立の文学部に入学した 。

大学では文芸サークルに入ったが、雀荘通いや合ハイばかりの日々に嫌気が差し、半年ばかりで退部。大学の国文学研究班に所属して、大学院の先輩の指導を受けながら源氏物語を読む日々となった。当時、知り合った先輩、同期の友人の殆どは大学の研究者になったが、それは今でも私の貴重な財産になっている。ただ、私自身は、研究より創作を優先させ、短歌（筆名：茅野信二）から詩・俳句（筆名：大西時夫）へと創作領域を拡げ、昨年から小説を書き始めた。また研究の対象は早くから近現代の詩歌に変わった。どれも中途半端に終わりそうだが、自分の半世紀を振り返るとき、源氏物語などの研究一筋の人生もすばらしかろうが、自分は自分と思い、むしろこの自由さを享受している。その背景には、「千萬人といへども」の気概があったかも知れないと思う。

そこで、清陵に戻ると、その創作に、大きな影響を与えている一人が諏訪中学（清陵）出身の考古学者、藤森栄一氏で、拙集（第四歌集）を『井戸尻』と名づけたのも、そこが氏が縄文農耕論を提唱するきっかけとなった地だからで、折口信夫とともに大きな影響を受けた。そういえば 諏訪には、在野の研究者が少なくないという気がする。古典を教わった福沢武一先生（先生は伊那の出身だが）も優れた方言の著書を遺された。また、「考古地域史」を提唱したのは藤森の弟子でやはり清陵出身の戸沢充則氏（明治大学元学長）だが、諏訪には優れた歴史研究の伝統もある。

近年は、古来よりの神で諏訪の土着の神でもあるミシャグジに興味を持ち、大祝（おおほうり）に仕えた後、人身御供となった神使（おこう）に関わる場所等を散策している。 昨年から書き始めた小説のモチーフも主にそれに纏わるものである。

清陵―今に思えば、私にとっては、まさに矛盾の年月だった。それ故に現在があるという点では、「千萬人」とともに、私の原点だったといえようか。ただ、「清陵」に熱を上げるということは正直、余りない。むしろ、私にとっては現在、「清陵」より「諏訪」という場所が極めて大事になっていると言えよう。

「私と食べ物にまつわる清陵の思い出」

４部　小澤　龍太郎

諏訪清陵高校に入学したのは今から半世紀前です。早いものですね。今回、幹事皆様のご尽力により同窓会が開かれ懐かしい皆さんにお会いできること嬉しく思っています。

まず、私の出身は両小野中学校、親父に蒸かし(フカシ)(松本深志高校)も蒸籠(セイロ)(諏訪清陵高校)も同じ蒸し器だからと言われつつ清陵高校に入学致しました。中央線小野駅から上諏訪駅まで電車で約一時間かかり、高校生としては往復二時間かなりの遠距離通学だったと思います。いろいろな思い出がありますが、食品会社(日清製粉)で人生四十年お世話なった関係から食べ物の思い出を羅列整理致します。

高校生といえばお弁当、当時一時間目とホームルームが終わった後は、必ず学友会館で今は亡き母親が作ってくれた弁当を早めにたべました。遠距離通学でお腹がすくのか、クラブ(地歴部)仲間が悪いのか汚い部室に皆集まり仲良く食べました。そのあと、授業をさぼって、地歴調査ということで諏訪大社や近くの古城に出掛けたこともありました。弁当品質について、弁当箱に沢庵が入っていると最悪です。朝の電車の中、一時間目の授業中に何とも言えないにおいがぷんぷんとし、前後・左右の友達に恥ずかしく母親に沢庵は止めてくれと訴えたことも多々ありました。また、新聞紙で包んだ弁当からおかず類の汁が鞄に沁みだし更に、教科書まで染みてしまったことも有りました。メニューは、味噌漬け鯨肉・卵焼き・焼き魚・ノリ弁・佃煮・前夜の煮物の残り等が当時の定番だったと思います。弁当のない日は、学校の玄関のパン屋さんで売っていたカレーパンがとても美味しかったことを思い出します。

最近の子供の弁当は、弁当箱の多様化・中身のおかずは仕出し弁当なみ・ごはん(米)は少量(低糖質化)とかなり変わりました。我々のころの母親と比べ、今の母親の弁当作りの悩みは尽きないと思います。直近のスーパーお弁当用冷凍食品コーナーもうなずけます。

また、当時の高校生は弁当に水筒は持っていかなかった気がします。食べた後、喉が渇けば水道で済ませていたとおもいますが、この半世紀で、コーラ・ファンタ・お茶・スポーツドリンク・天然水等の飲料産業が進化しました。最近の子供は何時でも必ずお茶の水筒を持参し、弁当とお茶はセットの時代になりました。水分過剰ではないでしょうか。

清陵祭の食堂、冷やし中華をよく食べたと思いますが、当時の食品衛生面から、よくも腹痛・下痢の食中毒が発生せず、我々はかなり胃腸も丈夫であったと思います。腹痛といえば上諏訪駅の本屋の近くにあった〇〇喫茶店で、〇〇円食べ放題のアイスクリームを食べ帰りの電車一時間トイレで苦労したことを思い出します。

お酒といえば、地方会・クラブの定番でした。カレーライスを食べてコーラで割ったウイスキー(レッド)乾きものつまみでトランプをひたすらやる。一夜を明かすと朝が清々しく、太陽がより眩しく感じる清陵時代でした。

こうしたいろいろな高校時代の経験が、今の血肉になっているものと感謝しています。

マインドフルネスのすすめ

４部　小松　大蔵

●私の現状

母９２歳、要介護度１。息子３５歳、金沢で就労中にして今年５月、やっと結婚。ただし、金沢の嫁にて、諏訪へは帰ってこない可能性大。娘３４歳、新宿にてカフェ・アンド・バー、おやきカンパニーをそれぞれ共同経営していて、男の話は聞こえてこない。

私自身はと言えば、２０１７年２月１６日に妻を病気で亡くして、三回忌が終わり、母との２人生活に慣れてきたところ。へらぶな釣り、詩吟、合唱クラブ以外の暇なときは、テレビに興じるか、諏訪、岡谷、下諏訪、茅野の図書館へ行き、興味のある本を借りてきて読む、といった生活をしている。

●最近思うこと

“マインドフルな人生を送ること”

英和辞典によると――

「マインド」（精神知力、記憶力、意見、意志、好み、など）

類語として

「ハート」（心情、日本語の「心」はこれに当たる）

「ソウル」（ボディーに対する語、霊魂、魂）

「スピリット」（フレッシュに対する語、精神、霊）

さらに

「マインドフル」（注意深い、心にかけて忘れない）

「マインドフルネス」（注意深いこと、どうでもいいとは思わないこと）

ＮＨＫの人気番組「チコちゃんに叱られる！」で、番組ロゴの下に英語で「ドント・スリープ・スルー・ライフ」と出てくる。「ボーっと生きてんじゃねーよ！」を意図してのことだろう。これを、単純に、「一生、寝てはダメ」と訳しては間違いだ。寝る時間は必要です。

多くのこと、すなわち、人、自然、歴史、科学などに対して、I don’t mind に陥らないように、注意深く、こだわった生活を送りたいと思います。

マインドフルネス、みなさんにもおすすめです！！

浜多津先生のこと

４部　和泉　桂子（旧姓　櫻井）

清陵の記憶は、入試当日女子トイレが見つからず何故か男子トイレに入ってしまい、外で騒がれて出られなくなってしまったことから始まる。汚い床、汗臭い教室、床を踏み鳴らす大きな音、教室移動で男子の列の間を小さくなって歩いたことなど、初めは気の休まらない毎日だった。それがいつのまにかそんなことは全く気にならなくなっていた。周りが男子ばかりの環境に慣れていたためか、男社会の病院でも男性医師と対等に仕事をしてきたつもりだ。常に新しいことをやっていないと楽しくなく、新しいシステムを作ったり、新しいやり方を診療に取り入れたりしてきた。他の人がうまくいかないことがあると、俄然やる気になってしまうなど自分ではあまり良い性格ではないなと思っていたが、ある時この性格は「自反而縮雖千萬人吾往矣 」の精神からきているのかなと思うようになった。どんな状況でも生きていける「柔軟性」と「気の強さ」は清陵での経験、学習のおかげだと思っている。１０年位前から、合唱を続けている。数年前他の合唱団との合同コンサートで、隣り合わせた老婦人が練習に遅れてきて「お盆で諏訪に帰ってきた」と話された。彼女の母親は昭和２７年清陵初の女性教師、浜多津先生だとわかった。私は小学校以来クラス担任の女性教師を見たことがなかったので、私が生まれた時期に清陵に女性の国語教師がいたことに驚き、興味を持った。清陵に問い合わせると、当時の石城校長先生の叔父様で、浜先生の教え子である北大名誉教授の石城謙吉先生を紹介してくれた。更に石城先生は同級生で最後まで浜先生の世話をしていた武居幸重氏を紹介してくれた。

お二人は５７回生で、私が清陵の後輩というだけで、まるで昨日のことのように浜先生の話をしてくれた。昭和２５年（５６回生）清陵初の女子生徒１４人が入学し、お二人が２年生のとき浜先生は唯一女子８人のいるクラス担任になった。クラス分けの試験が行われ、「人畜無害な」男子生徒がクラスメートに選ばれた（武居氏談）。小柄なおばちゃん先生にみんながっかりし、怒った生徒もいた。先生の知識を試しに行った生徒もいた。先生は校長推薦で二葉から赴任したので、教師仲間からのいじめもあったらしい（武居氏談）。しかし学問的に素晴らしく、徐々に皆から一目置かれるようになっていった。更に先生は男女平等などと声高に唱えるのでなく、当たり前のこととして、教師としての実力と人間性によって男女差別の感覚を打ち砕いてくれた（石城先生）と話してくれた。あの時代に、教師も生徒もほとんど男性ばかりの清陵で初の女性教師として学問的にも、人間的にも立派に働き、子育てもしていくことは本当に大変であったろうと想像し、浜先生の胆力を感じ取ることができた。更に話を伺った石城先生の著書「森林と人間」を読み、苫小牧演習林を作る過程で新しいことに果敢に取り組まれる姿勢、組織力に感服した。お話を伺った当時お二人は８０歳で先生は本を執筆中、武居氏は茅野の遺跡から出土した火炎土器の研究を続けており、年齢を重ねても清陵精神が息づいていると感じた。お二人にはガツンとやられた気がした。私のような“若造”はまだまだ先輩達の足元にも及ばない。

「清陵」転校騒動からの顛末

4部　清水　光昭

東京都下、調布市に住んでいる。南は多摩川、北は古刹「深大寺」に近い。蕎麦が旨い。西には味の素スタジアムや調布飛行場があり、その北の先には都立三鷹高校がある。この辺りまでは徒歩圏だ。さらに車で西に15分も走れば都立国立（くにたち）高校がある。

諏訪清陵高校では、「1年間に加えて2年間」を学んで過ごしたという感覚でいる。

入学して1年が過ぎた後、転居のために上記2つの都立高校への編入試験を受け、不合格となってまた清陵に戻り、その後の2年間一人暮らしをしたからだ。この時間帯が鮮明な一つの区切りとなっていて、「清陵」と聞くとその他の多くの共有体験よりも、まずこの「転校騒動とそれから」が現れて来る。

2校とも募集（編入）人数は1名。受験者数はそれぞれ48名と49名だった。国立高校の担当事務職員は偶然にも清陵の先輩だった。30歳くらいの人で、「ここは清陵と似た校風だから、安心だよ」と声を掛けてくれた。試験問題は両校とも易しい内容だった。間違えたとしても数学で1問だ。合格だ。と思った･･･のだが、2校ともかすりもせずにスカッと落ちた。補欠合格にも入っていなかった。

清陵に戻った。転居に際して、餞別としてギターを貰ったり、魯迅の「阿Q正伝」を手渡されたり、また篭球部の仲間には昼飯を奢ってもらったりしたのだが、少しの騒ぎを過ぎて、恥ずかしくもおめおめと戻って来てしまった。温かく接してもらったと思う。

岡谷に下宿して一人での暮らしが始まった。岡谷駅から歩いて3〜4分、本通りを少し入った古い作りの日本家屋で、その2階、7畳半の和室での生活だった。布団一組と衣類、教科書類、机ひとつ、あとはラジオ1台、これで全部。簡素な下宿生活だった。冬は寒かったが、こたつに入って過ごした。ラジオを聴き雑誌を読み、散歩して銭湯に行った。下宿先の家猫に布団の上で小便をされてその臭いに往生したりした。夏には照光寺の森からの蜩の鳴き声が止まなかった。当初心細いこともあったが、快適な下宿生活だったと言っていい。下宿には多くの友人が来た。夜遅くに壁を登って来る奴もいた。長い時間話し込んだり、少し飲んだりした。泊まっていく奴も多くいた。今から思うと、この時あたりからそれまでとは違う色々なことが始まったという気がしている。いい事も良くない事も、ここで覚え、考え始めた。

小学生の孫が近くにあるテニススクールに通っている。仲間の兄姉やレッスン生に三鷹中高生、国立高校生もいる。孫の話にも良く出て来る。「昔、爺はその学校を受験して落ちたんだよ･･･」とは決して言わない。国立高校は言わずと知れた名門校だ。三鷹高校は清陵と同じように数年前に中高一貫校となった進学校だ。編入試験の控え室では、出身校として名古屋の旭丘高校や大阪の北野高校といった名前が聞こえた。約50倍の倍率だった。合格などするはずはなかったのだ。間違って合格などしなくて本当に良かったと思う。

私と清陵

４部　瀧澤　伸介

卒業50年と言われ人それぞれと思うが、私の中では依然として昨日の事の様な感覚が強い。これは清陵時代、と言うよりは１０代の多感な時期を過ごしたからであり、良いにつけ悪きにつけその影響は大きかったと思う。

大学の友人が「１７～１８歳で決まったものは基本的には大きく変わるはずがない」と語っていたが正にその通りだと思う。その意味で人生最後のこの時期にもう一度清陵を振り返って考えてみる事は重要である。

そもそも我々にとって何故清陵に入ったかと言えば、殆どの人が第一に受験と言う事を抜きにしては考えられないだろう。

で私の中では在学中は此処は大学への通過点であると言う意識を常に持っていて、大きく他者と係わる事は無く又成績優秀者でも無かったので、余り覚えられてはいないと思う。だが受験一辺倒だったと言う訳でも無く、クラブ（余り熱心ではなかった剣道部、それでも一応最後までいた）や山歩き、旅行、寺への参禅等して普通の高校生はしていた。

これは笑い話だが長野で試合があると言うのに久しぶりに旅行出来ると言う喜びからか肝心の防具を学校に置き忘れて一旦自宅（上伊那）へ帰って来てしまい、辰野駅で一緒に行くクラブの面々に又学校に戻るから遅くなる事を伝えた事があった。

これは私がいかにいい加減にクラブに取り組んでいたかの証左であり（無気力が他人に与えた影響に済みません)、後々まで家人には笑い話の種にされたものである。
もっともこの時の一人の小旅行は楽しかった記憶しかないが。

で肝心の受験であるが現役では見事に国立２校を落ちてしまい、確信を持って宅浪を選び（とは言え自転車等の小旅行、山歩き、家の田んぼ作業の手伝い等もやっていた）翌年は何とか合格する事が出来た。

これはそれまでの清陵での学習方法から一旦解放され自分なりの納得する学習が出来たからであり、これは私の持論であるが事受験と言う事に関しては一番良くないのは中途半端な受験校であり、ベストは一流高かいっそ進学に無関係の三流高か工業商業等の職業訓練高校（覚えている人は少ないと思うが、我々一浪入学の年に諏訪実から東工大に受かったのがいた。）のどちらかだと思う様になった。

実は我が家では２人子供がいるが、計らずしもそれぞれがその両極端の高校に進んだが、結局入学したのは幸いな事に同程度のそれなりの大学と言う事になった。

そして今であるが元々仕事に大きく生き甲斐を感じるタイプでも無く、５７歳でグリコ万歳で早期退職に応じて無職１１年目の現在に至っている。

日常は年の３分の１以上は家におらず自転車日本一周や海外を足で歩き回っていて、家（静岡県藤枝市）にいる時はテニス（週５日以上）や本読みやブログに凝っている毎日である。

坂　　道

４部　鳥羽　研二

久しぶりに映画を見た。「白い坂道が空まで続いていた、ゆらゆら陽炎があの子を包む」という松任谷由実の「飛行機雲」がラストに流れても、誰も席を立たない。ふと見ると、近くの高校生が目頭をおさえている。頬は熱い涙の洪水だった。

空まで続く坂道は、長野県で育った私には日常見慣れた光景であった。

幼稚園のころは毎日、松本市の城山公園に近い通称「らくだ」という４５度もある崖で遊んだ。多い日は数十人が集まり、ツタや縄でルートを造り、簡単な休憩所も作った。崖を降り、奈良井川の清流でも遊んだ。危険と紙一重のわくわくした心の躍動は、もう無い。

崖から落ちての打撲や擦り傷は日常茶飯事であったが、皆この「秘密の場所」を守るため、危険を告げ口することはなかった。２０年後に訪れると、鉄柵とフェンスで囲まれ、「この先危険　立ち入るべからず」とあった。坂から大人が落ちて死んだらしい。

小学校２年で、岡谷市に転校した。悪ガキ集団でアケビやヤマブドウ取りの計画を立て、何も恐れずに坂を登って行った。農家の柿をそっと頂戴して怒られもしたが、子供が二三個もぐのは大目に見てもらえた。丘の頂上で、八ヶ岳を見ながらかじる柿はうまかった。

高校生になると、秋には体育の授業で毎週２回、５km のマラソンがあった。２０km の諏訪湖マラソンで全員落後しない為のトレーニングである。高低差２００m 以上の坂道を登ると、心臓は最大限の仕事をした。マラソンで余った授業時間はバスケットに興じた。

大学生の時、初冬の北穂高岳に登ると、雪が降り始め、夜の８時に何とか山小屋へ着いた。途中でひどく眠くなり「このままほっておいてくれ」と言ったらしい。サラミとみかんを食べ、急坂を親友の励ましで下ったらしい。今までで一番、死に近づいた時である。

長じて娘が出来、枕詞にちなむ名前をつけた。病気もせず、元気が取りえだった。２歳過ぎの夏、自宅近くの崖を「らくだ」を思い出して一緒に登った。セブン-イレブンへの近道で、ご褒美のアイスクリームを口の周りにいっぱいつけたまま帰り、「ママ、わたしアイスなんか食べてないよ」と言い張った。わかりやすいおバカの DNA は確実に遺伝していた。

坂道は人生に似ている。苦労も、楽しみも似ている。

人は、老いるまで死を実感しない。エンドオブライフケアには、「人は長く実感しないが、ある日突然視界に見える、ちょうど坂道を上りきって峠からみえる下り坂の先に、いままで全く見えなかったものが、はっきり見えるようになる」とある。

国立長寿医療研究センターは坂道を登った丘の上の築５０年近い古い病院である。スタッフは、まだ死を実感する年でもないのに患者にひどく優しく、そのせいか患者も穏やかである。認知症病棟では、気性や行動が荒れ、さらに肺炎があるような患者で満床であるが、ホールでは薬も使わず皆のんびりしている。まるで有料老人ホームの昼食風景である。

坂には人それぞれ心の疼く記憶がある。柿泥棒の子供時代だけでなく年配の方とも坂を共有できないか。地域で坂道のイマジネーションを膨らませる超高齢化社会でありたい。

人生

４部　西村　厚志

人生には必ず分かれ道がある。一般的にその最初が高校進学ではないだろうか。もし自分が諏訪清陵高等学校を選んでいなかったらどうなっているのか、想像も出来ないし、全く違った人生を歩んでいたのではないかと思う。将来の夢を持ち、それに向かう道は数々あれど、最終的に夢を現実にするのだと言われる皆さんもいると思う。しかしながら、自分は目標もなく漠然とした中での進学であったのだ。ただ、清陵に入学する。それが最大の目標であり、この時ほど勉学に励んだ事はなかったと思い返される。「合格」の二文字で目標達成。そこからタガが外れた樽の如き軟派生活へまっしぐら。楽しい楽しい高校生活を満喫しながら三年。多くの先輩や友人の出逢いや沢山の経験、思い出を残し卒業。さあ大変。そこから先の事など考えもせずいたものだから、案の定、行き場のない自分に愕然としつつ、何となく瘋癲を決め込み東京で暮らすこと三年。恐らくそのままだったらどなっていたのだろうか。

そんな中、第二の分かれ道に立たされる。自由気ままな今の生活を続けるのか、きちんと就職しまっとうな？生活を始めるか。我が家には先天性小児麻痺の弟がいることもあり故郷での生活が定めとも感じつつ、両親の、特に父の強い叱咤に流されるまま帰郷し就職することとなった。就職先はどうしよう？何となく建築関係の仕事が良いかなと思いながら、父の導きで建設会社に決めた。これが第三の分岐点。当時は一度就職したら兎に角そこで頑張る。勤め先をコロコロ変えることは、人間的にも駄目という風潮であった。建築のいろはを学び、様々な技術や人との係わりを見に付けていった。バンドを結成し歌を歌ったりもした時期でもあった。この頃が自分の青春時代だったと回想される。さて、建築の分野も幅広いものがあることがわかり、暫くして自分は建築の設計をしたいと思うようになった。どうやら現場の環境に馴染めなかったり、営業も無理だった感じがする。そんな折、設計事務所から誘いがあり身を置く事となった。第四の分かれ道だったのです。

専門的な学びも知識もない中で、楽しい仕事だと思いつつ無我夢中で毎日を過ごしてきた。これこそが天職だったのかと思うようになったのだ。独学ではあるが、この仕事に必須の建築士の免許も取得し、平成元年に独立。今もその仕事を続けている。

結婚、二人の子どもにも恵まれた家庭を築き、青年会議所活動へも参加させて頂き、社会への関わりや自身の成長も学び、ＰＴＡ会長等多くの役を経験させても頂きました。地域で生きるとは、人と関わり、地域に如何に奉仕できるか。私の座右の銘は「一期一会」。娘の高校の時にお世話になった今は亡き先生から揮毫頂いた色紙が私の仕事部屋に飾られている。

古希を間近に、今が最も充実した人生かとも思う今日この頃ではあるが、まだまだこれからと、人生の終焉に向かって走り切って行こうと思っている。多くの人たちに感謝しつつ・・・

葬送の作法

4部　原　　聰

50 年前の体験をそのまま脚色なく書き綴ればいいのだと思いつつ、どうしてかなかなか筆が進まない。パソコンの前に座ってキーボードをたたけばいいのだけれど、わだかまり、苦しささえ立ち上ってくる。これは何なのか？

思えば、大学時代、その後の仕事人生を通じて清陵を言葉に載せようと思うたびに感じていた息苦しさをまたしても想起しているようだ。この心持は、清陵だからなのか、ただ単に青春時代ということからもたらされているのだろうか。いずれかなのかは判然としないのだけれど、ともかくも白紙の紙面を埋めなくてはならない。

清稜が私の人生にとって、決定的であることは間違いない。現在、大学で心理学を教える仕事をしているが、心理学の道を選択させたのは、清陵の 3 年間を心理研に所属し、会館に通っていたからである。心理学にとりわけ興味や関心があったとも思われないが、私を 3 年間心理研に通わせ続けたのは、魅力的な先輩方に依るところが大きかった。先輩方の話のほとんどは、当時の時代潮流を反映して、政治的・社会的問題であったが、当然にして哲学、思想、文学などの話題も多かった。先輩たちの読書量、思索の深さ、議論の巧みさ、説得力、包容力にすっかり魅了されていた。この人たちと時間と場所を共有することの楽しさこそが、3 年間会館に私の足を向けさせ続けた。今思えば、主観的な読みや勝手な解釈だと思われる節もないではないが、当時の私には、それに気づくだけの教養はなかった。一人一人がまさに個性的で、傾聴し尊敬にたる人たちであると信じていた。その体験が、大学で心理学を専攻させ、さらに研究の道に進ませ、仕事にまでつながる選択につながっているのだと思う。

抽象的な表現になってしまうが、何よりも、無条件に信頼し理解しあえる友人を得られたことが清陵を私にとって特別な時間とさせている。生きる意味を喪失し、浮遊し、自己選択も自己決定もできないでいた自分を受け入れ、時に厳しく叱責し、受容し続けてくれた。この友人がいたからこそ、ここまでやってこられたと本当に思う。ありがとう。

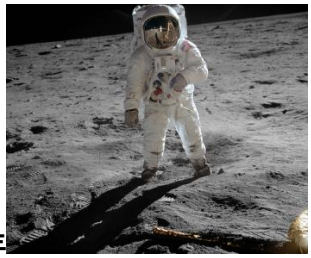
ここまで書き連ねてきて、少しわかったことがある。清陵時代を回顧し懐かしみ、ことばに置き換える作業は「葬送の作法」なのではないかと。両親も、師も、同僚たちも、後輩たちすらも逝ってしまい、見送った今、やはり先に見える具体は「死」なのだろう。「死」に対する畏れが、今の生活を成り立たせているのだということに気づかされる。そうしてみると、50 年前の清陵を回顧する作業は、まさに「葬送の作法」だということに思い至った。良い時を得られたものだと嘆息する。

ああ、あの時の君に無性に会いたくなってきた。

同窓生は新たな価値の再創造

４部　原　秀男

清陵を卒業して 50 年になろうとしていますが、清陵時代の事は時の隔たりを超えて、鮮明な記憶が時々よみがえってきます。多感な時期だったんですね。　数学と物理が好きで、清陵時代は場の量子論（ゲージ理論）が完成に近づいていた時です。　1969 年にはアポロ 11 号、授業でも話題になりました。今年はブラックホールの「影」が撮影され、アインシュタインの予言（？）を直接的に確認することが出来ました。清陵では、どんな授業があったのでしょうか？

1969 年 

2019 年

清陵を卒業して、信州大学－広島大学と固体物理を専攻しました。広島でブリヂストンの採用募集があり、1977 年に入社、今に至っています。

私にとって、昭和－平成―令和という時代を見てみると、「昭和」は、誕生から成長、学業、就職、結婚と、「社会」への山登りの時でした。

「平成」の約半分は海外赴任でした。都合 3 回、全部で 16 年の間、米国の子会社でタイヤの開発を担当。2001 年 9 月 11 日は、ワシントンの地下鉄の駅で、ペンタゴンの煙を目撃しました。事件やイベント、家族との海外生活など、振幅の大きい時期でした。しかし一方で、清陵の同窓生との交流はほとんどありません。　そこで、2015 年に日本で新たな職務を担当するようになって、東京清陵勉強会など、積極的に清陵同窓生との交流を図り、いくつかのイベントや取材、将来プログラムなどの機会を頂きました。清陵同窓生の多様な活躍と、社会的な立ち位置の在り方には、とても勇気づけられます。

さて、「令和」ですが、まだしばらく今の会社で働き、その後「次の時代の主役」を育てる、活動や事業に携わり、そこに「社会との絆」を見つけ、「新たな価値の再創造」をしたいと思っています。その中では、何人かの先輩・後輩も入っています。従って「令和」は、「世代交代のプロモーター」として、「健康寿命」が続く限り、活動しようと思っています。

４部担任だった白澤先生への思い

４部　平林　重夫

白澤先生は平成２８年１１月に７６歳で永眠されました。

その１年前に、先生からは「胃癌で入退院を繰り返しているよ。」というような手紙を受け取っていました。

先生とは高校時代の担任であったことはもとより、進学した大学も同じだったので、県内開催の大学同窓会でよく会いました。

この同窓会は毎年開催されますが、高校などの教員が多くを占め、一般会社員はほとんど参加しておらず、毎回肩身が狭い思いをしていたので、私は積極的には参加するつもりがありませんでした。

しかし、先生からいつも参加するからお前も来いとのことで、仕方なく参加していました。

そのお返しという訳ではないと思いますが、前々回のなみの会には、声を掛けたらそのつもりがなかった白澤先生も参加してくれました。

先生が亡くなる半年前に丁度長野に行く機会がありました。長野駅から先生宅に電話をした時に「もう来なくていいから」と言われたのが先生と話した最後の言葉でした。

長い間ご苦労様でした。

白澤先生のご冥福をお祈りいたします。

以上

「　私と　清陵　」

４部　本田　稔

私は　諏訪市清水町で生まれ育ち　18 年間過ごしました。高島小学校～諏訪中学校～諏訪清陵高校時代の楽しい思い出が一杯ありました。その後　大学・就職・結婚と東京で過ごすようになり、現在の杉並区で４５年以上生活しています。２０代の時　両親が諏訪の家を処分し、千葉県の浦安市に移り住んだため、諏訪に帰ることはなくなりました。

東京を拠点として活躍していた金子博美さんや山田文雄さんが何度か声をかけてくれ、清陵時代の仲間が集まり　旧交を温める事が出来ました。清陵の７３回生が幹事を務めるOB 会が開催された時２５年振りに諏訪を訪れました。懐かしい同期の仲間と会い、飲み歌い、諏訪湖畔で「金色の民」をやり、翌日は一日　市内散策、小学校・中学校・清陵・二葉を見てきました。以来、清陵の新校舎を見、清陵祭を見物して、なんとなく寂しい思いをしたこともありますが、OB 会にはできるだけ出席するように心がけ、延べ５回参加しました。皆　それなりに年を重ね、年輪を感じさせる風格の身に付いた仲間と、相変わらずいつもの昔話に花を咲かせる事はイイものです。

４０才過ぎたころから、物思いにふける時、無意識に清陵の第二校歌を口ずさんでいる事があります。仕事に行きずまった時、無意識に「自反而縮雖千萬人吾往矣」が心に浮かび、自分を奮い立たせている事があります。高校時代を思い出すと恥ずかしい事ばかりで、昔の仲間と酒を飲んでいる時しか話せないような内容ばかりです。しかし無意識に第二校歌を口ずさみ、「自反而縮雖千萬人吾往矣」を思い出す。・・それが私の清陵高校時代の思い出であり、心に残る宝物だったと感じています。

久保　正典さんが紹介してくれた新田次郎の「霧の子孫たち」を読みました。事実に基づいた環境保護運動の話で、清陵の大先輩の藤森栄一（考古学者）・青木正博（医師）・牛山正雄（清陵の理科の教師）が中心となって「霧ヶ峰の自然と文化」を守る為に、諏訪市長・下諏訪町長を巻き込み、長野県知事・企業局長や官僚を相手に反対運動をする内容である。実は、私は「地学」の授業が難しくてよく理解できず、また牛山正雄先生の授業は、半分は面白可笑しい無駄話のように思い込んでいたので、いい加減な気持ちで授業に臨んでいましたが、「霧の子孫たち」を読んで牛山先生が「諏訪の自然と文化」の保護運動に真剣に取り組んでおられた事を知り、恥ずかしく、申し訳ない思いです。

現代に生きる我々の最大の課題である「持続可能な社会」の実現に向けて、清陵の大先輩達（「霧の子孫たち」の主人公）は「環境破壊」に対する抵抗運動の中核として市民を牽引し活躍しておられた。明治３６年中島喜久平が作詞した清陵第Ⅱ校歌の「高い志」を牛山正雄先生たちが引継ぎ、その高い志を卒後５０年の我々はどこまで引き継げたのだろうか。

入学式と伊沢校長

４部　矢島　健二

清陵の思い出は数多くある。個人的には、高校生活で最も精力を注ぎ込んだ美術部の日々、今はなき地方会での学年を超えた交流、松本深志との交歓会での出来事、授業中の先生や生徒の忘れられない言動等々思い起こすと今も胸が熱くなる。

そんな思い出の中で、７３回生全員が共に体験した出来事は何であろうと考えた。浮かんだのが入学式のことである。卒業式については、あの特異な事件から覚えている人も多いのではないか。しかし、入学式については、よく覚えていない人が多いのではなかろうか。そこで、当時の日記を参照しながら入学式のことを書いてみようと思う。

我々の入学式が行われたのは、昭和４２年４月４日であった。その日は自転車で行くつもりだったが、朝から激しい雨で止む無くバスで上諏訪に向かった。ちなみに、私がバスを使ったのは３年間でこの１回だけで、あとは全て雪の日も自転車で通学した。当日は諏訪地方の多くの高校が入学式で、二葉高校に合格した同級生等も同乗していた。

学校に着いてみると私は４部で、担任は白沢寛人先生であった。日記には、「数学のまじめそうな先生」と印象が書いてある。４部で同じ中学から来た者は吉山重明君だけである。彼とは小学校も同じであり、体育館で行われた入学式には一緒に参列した。

屋根を打つ激しい雨音の中、校長の祝辞となった。伊沢集治校長が舞台の脇から出てくると会場の新入生の中からクスクスという笑い声が起こった。私は兄から伊沢校長の印象的な容貌について前以て聞いていたから、「ああ、なるほど」と思ったくらいだが、横にいた吉山などはゲラゲラと大きな声を出して笑いだす始末で、思わず袖を引っ張ったくらいである。さすがに校長はムッとして、「何が可笑しい」と新入生達を睨んだ。今考えると校長先生に対して、実に失礼なことをしたものである。７３回生は、すべからく反省すべきである。

伊沢校長は祝辞の中で次のことをおっしゃった。①勉強しろ。②高い理想をもて。③よい校風を作れ。④謙虚な気持ちを失うな。⑤自分の力を信じろ。高校生になったら真面目な生徒になろうと考えていた私は、殊勝にも忘れないうちに日記に書き留めたのである。もっとも、このありがたいお言葉もすぐに忘れてしまい今日に至っているが。

何はともあれ入学式は無事終わり、この日から我々の清陵生活が始まったのであった。

入学後、伊沢校長には下校時に時々お会いした。クラブ活動を終え、全校生徒の中で最も遅く校舎を後にすると、校長がやはり帰路につくところで、学友会館に向かう坂道を一緒に下った。西山に沈む夕日を眺めて何か高尚なことを語りかけてくれたと思うが、残念ながら何も覚えていない。

私のアルバムには、同じクラスで写真部だった山田文雄君が撮影した一枚の写真が貼ってある。そこには、伊沢校長が大石の横に佇み、入学式で見せたあの風貌で微笑んでおられる姿が写っている。

清陵への追想

４部　山田　文雄

清陵とは、幼い頃は茫洋とした憧れの存在だった。生徒だった３年間は瞬時に過ぎ去ってしまったが、自分の将来に対して漠然とした目標すら持ち得ず只不安感のみ感じる日常において大きな拠りどころだった。

黎明会の先輩のいる天文部に入ると決めていたので即座に入部し、部の指令で同時に写真部にも入った。天体写真用に暗室を確保するための天文部伝来の策略で、芸術写真等を目指す方々には失礼な事で初めは当然軋轢もあったが、写真部の一員になるのに時間はかからなかった。二年の清陵祭では恒例のミス清陵（三年のＭさん）の全紙版作品を出品した。（伝統のとおり祭りが終わったら行方不明になり戻ってくることはなかった。）

天文部は太陽黒点の観測において国内でも有数の歴史をもち地道に活動していたが、彗星等々の夜の観測の方が好きで、屈折赤道義を購入し星野写真を撮ったり、主鏡ミラーを研磨して反射望遠鏡を自製して彗星捜索の真似事に没頭したりで、自分勝手な行いには今でも反省している。資金確保のために三沢文庫の司書モドキのアルバイトを１年近くさせていただいたが、天文関連の書物の宝庫に最も近い所に居られた幸運を殆ど生かせずに終わってしまったのは無知の極みで、今更ながら大変悔やまれる。

天文ドームや暗室は用途がら閉空間で、特に暗室は現像中は開扉できないという宿命的な恩恵があり、部員以外の上級生の社交場も兼ねていた。新入の一年生は錚々たる三年生諸氏の直接ご指導をいきなり賜り大いに驚いたものであった。そのまま３年間、本来の部活動以外の事どもも些か鍛えすぎてしまった感があるが、今では良い思い出となっている。

校歌に関して。伝統行事である入念な校歌指導を受け、ことある毎に合唱したので、大変長いことも全歌詞を諳んじるのも当たり前のことと思っていた。日本一長いらしいと知ったのは後のことであった。

第一も第二も歌詞の深み重みを実感しているが、特に第二校歌からは人間としてどう生きるべきか諭されているようにずっと思っている。社会に出て１０数年位の老獪たりえない年代には苦しい時も多く、校歌を暗唱して己を鼓舞したのも度々だった。

校歌の歌詞は今後も一生忘れることはないと思う。

これも忘れてはいけない。「さわやか」という、お隣の女学校の校歌全５番を第三校歌で加えれば世界一長いのかも・・

清陵エピソード・アラカルト

４部　渡邉博保

７０歳手前まで生きてきた人生を振り返ると、清陵時代の記憶がかなり多く思い出される理由は、非常に濃い３年間であったということか。その幾つかをこの場で拾ってみた。

①出身中先輩からの洗礼

清陵に入学して間もなく、同じ出身中（茅野市永明中）の先輩からの歓迎（実は洗礼）行事が２回有った。１回目は公民館風の場所で、１人ずつ強烈な質問責めに合った。先輩からのイジメ攻撃であったが、きつかったのは自分の順番が来るまで頭を上げずに這っての移動を科せられ足がパンパンになったことだった。２回目は夜中に永明寺山でロープを頼りに１人ずつ歩かせられ、ロープが無くなると先輩を呼び肝試しの恐怖体験を受けるのである。それが終わると清陵生の自覚が持てるのかと変な気分になったが、自分が上級生になって新入生に行う洗礼行事は余り良い気分ではなかった。

②学習について

自分も数学は好きだったが、テストは授業で経験の無い問題ばかりで高得点は取れなかった。150 点満点で 100 以上は１回も無かったが、原秀男君が１度見せてくれた答案は 6 問中 5 問正解で 125 点だった。流石だと感心し今も忘れない。

その数学の授業中、白澤先生が板書を書き間違えると、途端に皆が机を叩いてあの「シー」が始まった。先生の間違いを探そうと皆集中しており、先生と真剣勝負の授業だったあれは面白かった。

そして担任だった白澤先生への感謝も忘れてはならない。現役受験は失敗し自宅浪人したが、秋頃からか夜八時頃に白澤先生のお宅に行って数学を教えて貰った。確か平林重夫君と一緒に行ったと記憶しているが、卒業させた生徒の指導を自宅で夜に無償で指導する熱意には感謝以上の言葉を捧げたい。お亡くなる一年前に先生のご自宅を訪ね、思い出話ができたことはほんとに良かったと思う。

③行事について

昼食後の昼休みには、体育館に直行してバスケットをして遊んだ。宮坂君は身長が高くシュートが上手かった。鳥羽君や増沢君の印象も強く、晝間君の素早い動きも忘れない。私の身長は今でこそ１７３㎝であるが当時は１６０㎝位しかなくバスケは好きでもシュートは入らなかった。ただ体育の授業でバスケの試合をし、ゴール下で宮坂君のガードを徹底して行い彼のチームに勝ったのを覚えている。

また諏訪湖一周駅伝ではアンカーを最終順位で受け、ヘルメットをかぶりゲバ棒をタスキ代わりに持って走った自分を、宮坂君はずっと自転車で伴走してくれた。ありがとう。

修学旅行の帰路、名古屋駅構内で全員で跳ねた「金色の民」は鮮明に覚えている。だがなぜか他の場面の記憶はあまりない。　もっと書きたいが紙面制限のためこれで終わる。

清陵が教えてくれた……

５部　朝倉　一善

清陵同窓生が愛して止まない文言に「自反而縮 雖千萬人 吾往矣」(『孟子』公孫丑章句 上)がある。「自ら反（かえり）みて縮（なお）くんば千万人と雖（いえど）も吾（われ）往（ゆ）かん」。ご承知のとおり（自分で反省してみて正しい場合には、たとえ相手が千万人の大勢であっても、自分はおそれずにすすんでいくであろう）といった意味である。

私がこの文言について原典に当たってみたのは、清陵卒業後だいぶ経ってからのことだ。1976 年初めて商業誌に記名記事を書いて以来ノンフィクションのライターとして生きてきたが、本代に年間七、八十万円を費やしていた壮年期に、『孟子』（小林勝人訳注　岩波文庫）と『孟子』（内野熊一郎　明治書院）によって知ることができた。

該当部分は、孟子が弟子の公孫丑（こうそんちゅう）を相手に、有名な性善説に基づき仁義・礼・智の徳を発揮して生きていく道を熱く語る中、不動心・勇気とりわけ孔子の説く“大勇”についてのやり取りで示される。が、それは件の文言が単独ではなく、「自反而不縮 雖褐寛博 吾不惴焉 自反而縮 雖千萬人 吾往矣」という対の形になっている。「自ら反みて縮からずんば褐寛博（かっかんばく）と雖も吾惴（おそ）れざらんや」（自分で反省してみて正しくない場合には、たとえ相手が褐寛博のような賤しい身分の者でもそれに対しておそれずにはいられようか、おそれずにはいられない）とは、明治書院版の通釈である。孟子の論説の力点が対の両方にこそあることは明白であろう。

私はこれまで延べ３万人近い人々に直接会いまた電話し話を聴いて記事にした。おびただしい資料に当たり幾多の引用もしてきた。聴いた話を脚色を抑えて正しく伝えるために、自説ではない“他人（ひと）さま”の引用で出典を明らかにするとき、私は前掲の“対の文言”を自らに課してお為ごかしの“騙し”を回避してきた気がする。

人間とは、いいことも悪いことも他人に話したい誰かに聴いてもらいたいと願う生き物だとつくづく思う。電話取材で８時間余り話し続けた相手は「親や兄弟にも自分のことをこんなに聴いてもらえたことはなかった」としみじみ語った。その人とは 10 年以上も年賀状のやり取りが続いている。

資料読みが高じて、宮本武蔵については、私費を投じて日本水路協会に依頼し“巌流島の決闘”当日の潮流を計算してもらったりした。すでに活字になっていた武蔵に関する『沼田家記』の記述を新発見の如く報じた大手新聞の間違いにも逸早く気づくことができた。雑学ついでにいうと、江戸時代の白隠禅師の生没年は新版なった広辞苑でも１年ずつずれたまま（正しくは 1686－1769）ですゼ。

差別社会の今、捏造極まりない“情報戦”を仕掛けてくる賊国や、日本を弱体化させる国内勢力、囁かれるコミンテルンの暗躍、フェイクニュースやＩＴ活用の闇にも、件の“対の文言”を肝に銘じて臨んでいきたいと念じている。『夢十夜』（夏目漱石）の主人公ではないが、豚に舐められないようにしたいものである。

授業の断面

５部　伊藤　正陽

高校は何部？と聞かれると「生物部」と答えるくらい生物部部室に入り浸っていた。部で何をしたかと問われると答えに窮するが、蛾班に入り、居るのが楽しい毎日だった。

今思うと授業は好き嫌いが極端で英語は落ちこぼれ状態。担任の千葉先生には「努力が足りない」と思われていたようだがなかなか頭に入らない。覚えようという気はあるのだが Active Vocabulary は全く覚えられなかった。英語の授業の最初の５分間がなければ良いのにと真剣に悩んだことを思い出す。数学は嫌いではなかったので理系コースを選択したが数Ⅱ以降殆ど分からず、分かる人の頭の中の構造を知りたいくらいだった。

救いは理科と社会科の授業で、面白かった。５０年前のことだから記憶が跳んでいる部分もあるが、教員として過ごした自分の人生に少なからぬ影響があったことに間違いはない。先生に直接伝えたことはないが感謝である。いくつかを拾った。

１年の時、生物と地学の教科担任が牛山正男先生、牛正先生だ。先生は自分のメモを基に授業を進めた。生物の授業で細胞の構成・造りの話しで確か DNA と RNA の話しだったと思うが、科学雑誌の研究論文から、発表されたばかりの最先端の研究成果を紹介してくれた。その話が新鮮で「これが高校の授業だ」とも思った。先生のイメージは一新された。この教室で学ぶことに感激した事を覚えている。

地理の青島先生の授業も私にとっては新鮮だった。とにかく中身が濃かった。１９世紀末からの東アジアの動向、日本の中国大陸進出以降の関東軍の戦術が動画を見るように伝わってきて興味が持続した。侵略を進める日本に対し国際連盟が「経済封鎖」を実施する。その様子がよく解った。年表の暗記でない歴史のひもとき方を学んだ気がする。

アジア太平洋戦争初期までやったところで３月を迎えてしまった。その後の、終戦と連合国軍の日本占領、日本国憲法の成立、そしてサンフランシスコ講和条約の締結と引き替えに日米安保条約の締結など、近現代史をどう紐解くのかも知りたかった。

化学の授業はいきなり「周期表を覚えよ」で始まった。中学校の課題解決学習が身についていた自分とすれば興味は減退したが好きな教科であることに変わりはなかった。鮮明に覚えている教師実験がある。それは金属ナトリウムを水に浮かべる実験だ。

先生は金属ナトリウムを、漬して保存してある灯油ビンから取り出し、カッターナイフで切って見せた。切断面は金属光沢で輝いていた。金属がカッターで切れることに衝撃を覚えた。金属は堅いものという概念が壊された一瞬だった。この切れ端をフェノールフタレイン入りの水槽に入れるとミズスマシのように「泳ぎ回り」小さくなった。跡に赤紫色の線ができた。同時に橙色の炎に包まれて固まりは消滅したことを思い出す。何が起こったかを考える面白い授業だった。授業は「感動を与えること」のお手本だった気がする。

英語と音楽と放送部

５部　伊藤　養一

小学校５年の時、近所（自転車で　５分位）に　青学を出たばかりの女の先生がいて、同級生　５－６人で　英語を　習うという事になりました。　今のように塾とか習い事が一般的でない頃、これに　はまり、小学校　卒業まで　続いたのです。　中学に入ると当然のように英語が課目となるが、　２年近く　先行している身では、　簡単すぎて　テストは　いつも　満点でした。　諏訪清陵に入って　担任が英語の千葉喜禄先生。　お陰で英語に対するアレルギーもなく、大学は　上智の経済学部に滑り込み（英語科は周りのレベルが高すぎて入れなかった)、就職は　英語ができるだろうという事で、製薬メーカーに入社し、　貿易部に配属。５年半の　ベルギー駐在から帰国後、しばらくして　48 歳で　独立し、化学品の貿易商社経営を　２０年続けて　いまだ現役です。

音楽は　これも　小学　５年から　放送係を　担当。朝、昼、夕と　校内放送で　それらしい音楽を流す。状況に合った音楽というものがあるのだと子供心に思った。掃除の時の音楽は今でもリフレインします。中学の３年で　放送部の部長となり、昼の番組を　担当、　お昼ご飯は　毎日　放送室に運んで貰い、音楽担当の清水範子先生と一緒に　楽しい時間を過ごせました。

高校に入って　当然のように　放送部に向かい、毎日　そこが　居場所の様になりました。清陵祭に発表の放送劇が一番の思い出。同期部員に　池上昭彦君、根橋（現姓・林）秀幸君、武居良明君　安いウィスキーで急性腎炎になりました。畑野敏文君とはフォークダンス委員会を、他校（諏訪二葉）を意識して立ち上げたが、何の淡い思いもなく、卒業。畑野君とはその後一緒に上京し、池袋の 6 畳一間で　下宿生活、半年一緒でしたが、毎週のように清陵の知り合いが訪ねて来るので、予備校生には良くないと私は三鷹のアパートに。その後彼は　上智の新聞学科に合格し、今でもマスコミ、広告関係で活躍をしています。

大学ではＩＡＣ　（Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ａｍｉｔｙ　Ｃｌｕｂ）のサークルに入りました。軟派を想像していたが、大学紛争の真っただ中、部長は白いヘルメット、いきなり　デモに駆り出されたのには驚きました。先輩にギターのプロがいて　既に　レコードも　出していた。その人に付いていったのが縁で　ＮＨＫ交響楽団の楽器運びメンバーとなり、結局　４年近く　全国を回るアルバイトに明け暮れたのです。カラヤン来日の際も、唯一専門会場でない、上智の講堂にて演奏会がありました。一番の思い出は　1972 年 5 月のユージン・オーマンディ指揮のフィラデルフィア交響楽団のツアーです。通訳の様な事を頼まれ、オーマンディとほぼ一週間を過ごしました。ドビュッシー　交響詩　「海」、ブラームス　交響曲第一番　身近で真剣に聴き入ることができたのは懐かしい思い出として残っています。

清陵から 50 年

５部　小口　浩史

今回の原稿依頼に、はたと困りました。清陵には強い思い出がないのです。「帰宅部」に所属し、勉強などに打ち込むこともなく、何となく 3 年間が過ぎてしまったからかもしれません。とにかく、清陵時代の思い出を絞り出してみることにしました。

ムシロの対面式……校歌の長いこと、ドスン、ドスンと旗竿を落として音を鳴らし、ムシロをかざして。「なんだこりゃ」、厳粛な品のある式だと思っていたので度肝を抜かれました。印象が強烈だったのか、それ以来、校歌ばっかし歌っていました。

談論会……自分の意見を堂々と述べる人の多いことに驚かされました。特に異なる意見も多かったこと、学友会の役員の弁舌爽やかのこと、論破する突破力にあこがれました。

深志との交歓会……深夜に深志の徒歩部隊を地方会単位で塩嶺峠から下った所で待ち構え、水鉄砲で水をかけたり、石を当たらないように投げたり。深志引率の先生が怒りました。「清陵生、いい加減にしなさい」と。これには、びっくり。清陵で「熱烈歓迎」とは、石を投げたり、水をかけたり、カレーにゴムを入れたりすることだと思っていました。地方会の歓迎会以来、洗脳されていました。

担任の千葉先生……牛正先生や千葉先生は昼間であっても中庭コートでテニスをしていました。ある日、千葉先生が授業を忘れ、呼びに行ったことがありました。先生はテニスを止め授業開始です。おおらかな時代でした。今では大問題になるかも？

金色の民……金色の民のやり方が変わっていました。長男の最後の清陵祭を見に行き、ついでにファイヤーストーム見てきました。なんと金色の民のリズムが、我々の時より倍くらい早くなっており、そのためすり足で移動するようになっていました。そのため、見ていても落ち着きがなく輪がすぐ、ばらけてしまいました。いつ変わったのかはわかりませんが昔のほうが良かったと思います。

大学卒業後、地元の諏訪精工舎に入社、腕時計の構造開発、外装要素開発を行い 35 歳で退職し、父の経営する精密部品組立会社に入り以来 33 年会社経営に没頭しました。よって私は、大学時代を除き諏訪地方を離れたことがありません。

世界を股にかけての活躍はできませんでしたが、その分地域とのつながりは深く持つことが出来、多くの役職に就く中で地域の多くの人との関わり合いを持つことが出来ました。つれあいも茅野市湖東の隣の女子高出身者です。いわゆる地産地消でしょうか。リタイアー後の現在は、趣味の盆栽、写真撮影、ゴルフ、まだ地域のいくつかの役職と、結構忙しい生活を送っています。夢はエイジシュートであるが、果してどうなることやら？

清陵から頂いたもの

５部　河西　晴征

私は、住友重機械工業（株）で、イラク・バグダッド近郊のチグリス・ユーフラテス川に架かるアダミヤ橋（湾岸戦争をくぐり抜けて現存）の設計に参画したのを最後に横須賀を去り、N市にて事業経営を経て現在、３０余年になる。ここ数年間の私に於ける出来事が、表題との関係で如何なる因果関係にあるかを考えてみた。

（其の１）N 市に在住してから、こんなことがあった。パスポート更新時、N 市指定の地下駐車場からの出口で、愛車の底部が斜路と接触し、大きく破損した。当然私は N 市長に損害賠償請求をしたが受け入れられず、個人訴訟に踏み切った。

一審の地方裁判所では、私の主張は受け入れられなかった。判決（判事の職務上の不誠実さ、若しくは職能には失望した）を不服として東京高等裁判所に控訴した。その結果、N市の瑕疵が認められた。連絡を受けたのはクリスマス・イブであったのだ。なんと粋な計らいであろうか。　勝訴万歳！　痛快な思いは、きっと「自反而縮雖…」による、粘り強さが、もたらした、賜物に違いない。

（其の２）私には絵情趣（えごころ）がある、と妄想し続けて６０年近くになる。しかし、私の絵画に対する世評は、まんざら私的な妄想でないことを証明している様に思う。その一つが清陵時代、美術の先生（ゼッチャン）から通知表評価で「９」を頂いたことである。学年で１人、２人しかない高評価であり、先生は私の持つ才能を知らせしめようとしたのではないかと勝手に思い上がっていた。

最近では、東京・上野にある美術館主催の公募展への初応募で冠賞を頂き、全国的に巡回展示された。更に他の公募展でわずか２年間に多数入賞したことは、私的な妄想でないと思うに至る加速材料となった。今、ゼッチャンに逢いたい！

（其の３）私は、言語というものにコンプレックス、若しくは不信感を持っていた。従って、現国・古典の授業は必ず遅刻し、教室へ入るたびに M 先生から侮蔑の眼で見られた記憶がある。

私は同級生の頬にビンタを加えた M 先生が若し私に同じようなことをしたら、必ず決闘しようと心に決めていた。何故なら、当時の私としては、M先生の同級生に対する仕打ち以来、この先生に限っては許容される報復行為であるが故に、正義感から、やられたら倍返ししてやると考えていたのであった。狂犬に手を出さなかった M 先生は偉い。もし手を出していたら大変な事態になっていただろう。何事も無かったが故に（M 先生が念仏のように唱える授業ではあったが)、「徒然草」「枕草子」「方丈記」「論語」「荘子」などは、今の私にとって致命的嫌悪感を持たずに済む古典群であり、コンプレックスをなくすよう日々努力できている。子日「過而不改、是謂過矣」。(『論語』衛霊公第十五)

以上のように、清陵から頂いたものは、無意識下で脈々と息づいていることを、今回の考察で知ることができた。

バイクに俳句に

5部　窪田　敏

商業写真撮影を生業としてきたが、個人的ライフワークとして知的障がい児者に関わる映像を撮らせて貰っている。その縁で、諏訪の【この街学園】を支援する活動に参加したのが端緒となり、3部・今泉啓子が伴侶となる幸運を得る。同時期より句作りが趣味に。

自 選 十 七 句

戦わず戦(そよ)げ戦(おのの)け達磨の忌	（２０１６）
うつくしまふくしま戻せ紫雲英(げんげ)蒔く	（２０１１）
冬近し廃炉に巣くう幻肢痛	（２０１３）
余寒あり創氏改名パンダ来る	（２０１１）
為政者の戎衣の透けし蟻地獄	（２０１５）
関ヶ原名も無き兵に彼岸花	（２０１４）
刀差す子規の肖像春の闇	（２０１３）
正義とは強者の論理香水瓶	（２０１３）
空蝉の形そのままヒロシマ忌	（２００６）
語り部の皺の数だけ沖縄忌	（２０１３）
左手はガザより遠き平和像	（２０１４）
この新樹見つめ横浜空襲忌	（２０１５）
息白し神の教えは異なれど	（２０１５）
厭戦の揮毫兜に滝行者	（２０１５）
戦車より銃より本を社会鍋	（２０１４）
銃弾をルージュに替えよ白泉忌	（２０１９）
我が臓器いつか寄居虫(ごうな)となるも好し	（２０１０）
	(詠んだ年)

寄居虫はヤドカリの古語。僕は死後の臓器提供を申し出ているが、それが実行されたか自ら確認不可能。誰かの役に立てたと目の当たりに出来るとしたらヘアドネイションね。

■5部ミニクラス会。右から、小池隆昭君、千葉氏、朝倉一善君、びん（2012年@東京）

■二輪歴40数年。右は5部・小島一彦君と彼の1300cc。僕のは９００（２００５年）

バイクごとふわっと―鮮明な記憶

５部　小島　一彦

平成最後の四月中旬、塩尻駅近くの和食店で初老の男五人が料理を前に酒杯を傾けた。半世紀前の思い出を肴に飲むほどに舌が滑らかに、ヤバイ話も飛び出す。五人は清陵の同窓だが、筆者以外は 72 回生。化学部だった O さん以外は全員地歴部で、筆者はなぜかひとつ上の地歴部の先輩たちと馬が合い、卒業後も付き合いが続いている。地歴部は考古班と人文班に分かれ、筆者は考古班に所属。ふだんは別々に活動するが、時々茅野市金沢の公民館に全員が集まって「コンパ」を開く。お決まりのカレーで一夜を語り合うのが慣例だった。時には部員以外も飛び入り参加し、自由度の高い「コンパ」だった。

確か二年生の初夏、飛び入り参加の先輩 K さんが通学用バイクを駆って来た。当時、免許もないのにバイク（小型）を運転できた筆者は人文班の先輩Mさんを後部席に、K さんのバイクで試運転。（どう、うまいもんでしょ）と林の小道を抜け、自慢げに走らせているうちに道に迷ってしまった。陽は傾き辺りは薄暮に包まれた。早く帰ろうと焦り出すと、Mさんも「早く帰ろう」としきりに呼び掛ける。その瞬間、二人を乗せたバイクがふわっと宙に浮いた。いや、浮いたのではなく道が突然消え、バイクごとダイビングしたのだ。

「アッ、アアァー！」。二人の絶叫がこだまするなか、数秒後、バイクはふわっと着地した。幸運か、悪運か、着地した所は青々と稲が茂る水田だった。水を含み豆腐のように軟らかい泥土と稲のクッションで人もバイクも無事。道と水田の落差は二メートルもあったろうか。二人で稲を踏み倒しながらやっとの思いでバイクを畦道まで引き上げ、「助かったね」と泥だらけの顔を互いに見合った。さて、そこからが大変。水をかぶったエンジンは始動せず、二人でバイクを押しながら心細さを押し殺して来た道を戻ると、遠くに明かりが灯る大きな茅葺屋根の農家を見つけた。

「地獄に仏」とばかり、農家を訪ねると、たまたま応対してくれた青年は清陵の卒業生でMさんとも面識があった。事情を聴くと「分かった。公民館まで送ってあげよう」と心強い言葉が返ってきた。先輩は排気量 500 cc ぐらいの大型バイクにMさんを乗せ、筆者が乗るバイクをけん引して真っ暗な農道を走り、皆が待つ公民館に連れ帰ってくれた。

こんな迷惑をかけた後輩を叱ることもなく、飄然とバイクで立ち去る先輩の背中に何度も感謝の言葉を繰り返した。翌朝、件のバイクは何事もなくエンジンがかかった。迷惑をかけたのはこの先輩ばかりではない。稲を踏み荒らした田んぼの持ち主にも謝らなければならないが、真っ暗な中でその位置さえ分からない。胸の内で謝罪と反省を繰り返した。

あれから半世紀―。「そんなことがあったなぁ」。Mさんらと思い出を肴に酒杯を重ねた。記憶は不思議だ。最近は昨日の記憶もおぼつかないのに多感な少年期の記憶は実に鮮明だ。今でも、宙に舞った、あのふわっという瞬間は体が覚えている。着地した所が田んぼだから助かったが、もし崖だったら…筆者もMさんもこの世にいなかった。

私のモザイク画

5 部　小池　隆昭

足跡で描いたモザイク画。数え切れない失敗や後悔と、素晴らしい思い出がちりばめられている。歩き続けてこの 6 月で 68 年。完成することはない。

八ヶ岳山麓、立沢の 8 人家族、4 人兄弟の末子。勉強しなくても良くできたので、その癖が抜けずに苦労した。周りから清陵に行けと言われ、入学試験の途中で具合が悪くなって保健室の世話になった。清陵の最初の思い出である。

「高陵会」の先輩から浴びた洗礼が懐かしい。「自反而縮 雖千萬人 吾往矣」の筵旗も新鮮だった。古文の最初の授業で、大学には行かないと言ったら、近寄って来た福沢先生にまじまじと見詰められ、「大学に行った方が良いよ」と言われた。

富士見出身の級友と某研究室で焼いた銀杏は旨かった。柔道部に入ったが、直向きさがなくて続かず、先輩と仲間に迷惑を掛けた。訳も分からぬままに入部した哲学部も程なく幽霊部員。第二校庭の片隅、一人で弁当を広げた姿を写真部の同級生に撮られて大伸ばしされ、清陵祭で展示されたらしい。

ファイアーストームの炎火。びしょ濡れで肩を組み合った級友の目が輝いていた！
片思いをして、図書館の裏で溜息をついていた姿を牛正に見られ、「君、泣いてんの？」と言われた。2 年の定期テスト前日に、成績低迷を見かねた担任の千葉先生に「300 点取れ」と言われて頑張った。覚えている最初の頑張りである。次は 3 年の夏休みの一週間。数学の教科書を一通り全部解いてやっと解った。これなら最初にやっておけば良かった。唐木先生の物理の授業が好きだった。卒業も間近の頃、千葉先生から「その頑張りがあれば大丈夫だ」と声を掛けられた。随分後になって分かったのだが、確かにそうだった。

清陵を卒業して故郷を離れるとき、「4 月の春風の中にふと思い出す遠い日の懐かしい日々。清陵の思い出。いろいろな出来事と喜怒哀楽の中で僕なりに成長してきた今、全てが懐かしい思い出。そして少年の僕にさようなら」と書き留めた。

時は流れ、大学を出て外資系企業に就職した。その斬新な風土に揉まれ、先輩と同期に恵まれて多くを学び、よく働いた。還暦の前年に、「これからの旅路も充実させたいと思います。いつしか再会したときには笑顔で四方山話を交わすことが出来たら嬉しいです」と思った通りに書いて退職した。仕事は今でも多少続けている。

清陵時代には話すことも稀だった級友との会話や一献は実に楽しい。師に恵まれて習い始めた太極拳は 5 年目。深遠であり、仲間との稽古も楽しい。ずっと続けたいと思う。

願わくは、これからも新たな出会いを楽しみ、別れの時には穏やかに受け容れたいものである。日々を最愛の伴侶と共に楽しみ、少年の頃の心の一片を携えて歩み続けている姿が描かれていたならば、私のモザイク画は上出来である。

末筆ながら、卒業 50 年記念誌製作委員会の皆様、ありがとう！　皆様からの呼び掛けがなければ、拙筆を執る楽しみもなかった。

牛正のこと

５部　小松　宏昭

清陵に入学した 1 年の時に牛正の地学の授業があった。他の授業はどちらかといえば中学の時と同じように教科書をもとにした授業だったが、牛正の授業はまったく違っていた。まず、「昨日卒業生の〇〇君が来て、こういう話をしていった。」と始まり、その先輩の専門の話が延々と続く。気が付くと残りが５分しかないのに「で今日は・・・」と本題に入るのである。こんな調子で１年が終わったが、時々難しい数式が黒板に書かれ、訳が分からず必死でノートに写した記憶がある。自分も地学の教師になったが、それは重力に関する式や転向力に関する式であったことが地学を教えるようになってから分かった。牛正は常々「点数を取るためだけの勉強は本当の勉強ではない。」と言っていた。「ではどうすればそんな勉強ができるのか・・・」そのことについてまったく答えが出なかったが、そのことで大学での勉強に憧れたことは紛れもない。地質学科を選んだのも、教師になっても研究を続けることができる教科は何かと考えたときに、物理や化学は学問が進んでいるから自分だけで研究するには無理だろうと思ったからだった。だから石や化石が本当に好きで地質に進んだのではないのである。したがって物事をとことん追求していくということができず、今になっていろいろなことに中途半端な自分を感じることが多い。「もう少し自分がしっかりしていたら」と反省することも多い昨今である。しかし、牛正の研究室で過ごしたことは、自分が教師になって大いに役立った。教師になったとき、生徒とは牛正がやっていたようにやろうと思っていた。勤務した先々の学校で自分の研究室には生徒が出入りできるようにし、彼らの勉強を見てやったり、悩みを聞いてやったりして交流することができた。おかげで卒業してからも行き来がある生徒が何人かいる。牛正のように深い学識があるわけではなく、研究者や大学院生が自分を訪ねてくることはなかったが、若い高校生と接していけるという点では牛正と同じ気分を味わえたのではないかと思っている。

志　高く

５部　根橋　文武

「青嵐や教師生活最後の日」…平成三十年五月三十一日、この日をもって私は四十四年余の教職生活にピリオドをうった。私の教師人生のスタートは昭和四十九年四月、埼玉県北部に位置する花園村立花園中学校の社会科教師としてであった。当時は、全国に校内暴力の嵐が吹き荒れ、まさに教育困難、教師受難の時であった。しかし、苦しく、厳しい日々の連続の中にあって、教師としての無力感に苛まれ、時として怯みそうになる私を支え、前を向かせてくれていたのは、まごうことなく「千万人といえども我ゆかん」の清陵魂であった。そのころの私の日々を当時の同僚教員が後にこんな風に語ってくれている。

　そのとき静かな校舎に大音声が響き渡った。何を言っているのかよく分からない。教室から廊下に出てみると、そのときまた、大音声。

「この授業に、命をかけているんだ」。一人の生徒を激しく叱っているのだ。

授業に命をかける。大げさなこの言葉に、多少の違和感を持ったものの、彼ならありうる話であると思った。日ごろからそのように思っていなければ、そうした言葉は、このような場で出るはずがない。彼は、社会科の教員で、当時北辰テストでは常に付属中と点数を競っていた。また、彼は毎日、学級通信を出していた。詩的で情緒あふれ、生徒の活躍する姿や思いが、慈愛に満ちた文章になっていた。部活動（サッカー）でも、何回も県大会に出場させている。

　しかし、彼は時々とんでもない言動をしたりした。若手で授業研究をしていたが、毎週やるなどと無茶なことを言ったりした。夜、反省会をするときもあって、校長先生も誘った。私たちが「校長先生はよそうよ」と言うと、「誘えば、お包みだけ来るよ」などと、ちゃっかりしていた。

　彼は、いつもウイットに富んだ言動で、周囲を明るくしていた。同僚・生徒・保護者から好かれていた。一見ちゃらんぽらんであるが、教育に対しては常に熱血であった。江南中学校の校舎に「志高く」と掲げたのは彼である。それは、生徒への願いであり、教員への思いである。そして何より、自分自身を叱咤激励、鼓舞していたに違いない。彼は、最近異動が多いが、異動のたびにバージョンアップしている。教育に対する情熱と気概は、全く変わらない。常に「志高く」を実践しているだろう。

時代は、「平成」から「令和」へと移った。日本の内外を取り巻く諸情勢は一層厳しさを増している。とりわけ子供達の未来が案ぜられる。しかし、かつて清陵の地に学んだ私たちがそうだったように、気概を持って「志高く」生きようとする人間を育てる人間教育がそんな困難な時代を必ず切り拓いてくれるものと確信する。我が愛する母校、諏訪清陵高校には殊更にその期待が大きい。

あのころそして今

５部　野沢　敬一

幹事の伊藤正陽さんから「卒後 50 年の記念誌」を発行するとの連絡をいただきました。

諏訪清陵高校時代、浪人時代、大学生時代、社会人時代、ただただ目の前のことに忙殺され、あまり過去をふりかえることもなく今日に至っています。53 年前、清陵高校入学後、辰野町のさらに南の田舎から、朝 6 時半頃家を出て、飯田線に乗り、中央線に乗り換え、上諏訪駅まで 3 年間通学しました。当時、諏訪清陵高校の自由で、バンカラの校風の中で、個性的な教師、各地から集まった個性的で優秀な同年生に多くの刺激を受けました。

清陵祭でのファイアーストーム、金色の民、諏訪湖一周マラソン、端艇部の船に乗せてもらい、帰路天候が悪化し、船が大揺れにゆれた事等が今断片的な記憶となっています。

東京で浪人後金沢大学医学部での 6 年間では、多くの知識の習得、経験をさせていだきました。卒業後信州大学医学部の内科に入局しました。私の属した医局は、清陵高校のように、出身大学を問わず平等で、自由、闊達、意欲的な環境の中で、且つ厳しく、広範囲にわたる臨床研修、専門医研修を積ませていただきました。

平成 6 年から伊那市内で開業し、町医者をしています。現在、子供達はそれぞれ独立し、今は妻と時々、懐かしい諏訪方面に出かけ、片倉会館の千人風呂に入ったり、山田養蜂場のローヤルゼリーを買いに行ったりして過ごしています。

清陵高校通学時、上諏訪駅前に輝いていた丸光デパートは今はなく、頻繁に立ち寄った笠原書店もその場所には発見できず、50 年の時の流れを感じたものです。私の基礎を作ってくれた清陵高校の自主、自立、自由、平等の精神がいつまでも続いてくれることを願っています。

飽きもせず５０年

５部　平林　義男

良く続いたものだ。描くという事を高校卒業以来５０年（間は空いたが）続けて来れたことに自分でも驚いている。美術大学、高校の美術教師を経て、６２歳でプロ宣言をし、画家・イラストレーターとして現在に至っている。人間は本当に面白い生物だ。動物も、自然も描く対象として飽きることがない醜さと生命力と魅力に溢れている。

さて、「我思う、ゆえに我あり」と言った哲学者が居たように思うが、この人間中心主義の世界観が作ったであろう文明の進歩（？）は本当に人間を幸福に導いてきたのだろうかと思う。そして、ＡＩの時代は確実に来るだろうが、物質中心の幸福感や社会は遅かれ早かれ破綻を迎えると考えている。

そこで私は、人間と人間の接点を大事にしながら、もう少し頑張ることに決めた。爺さんでもできる事はあるさ。

私と清陵

５部　細田　俊彰

先ずは、今は鬼籍に入ってしまった学友に対して追悼の意を表したい。人生半ばで亡くなられ、さぞ無念なことだったと思う。ご家族の悲しみもいかばかりだったかと、この年になれば我がことのように思い致される。改めて皆様のご冥福をお祈り申し上げる。

今、つらつらと思いだす高校時代のこと。５部の担任は、千葉喜禄先生（英語）。ちょっと猫背で風貌も変わっていたが、言動も独特だった。ある日英語の授業で、いたずら小僧が先生のデスクの下にチョークの粉を塗り付けておいた。先生が椅子に座り、固唾をのんで見守る生徒・・・。先生のズボンはチョークの粉で真っ白に・・・。先生は、デスクをちゃぶ台返しよろしくひっくり返して教室を出て行ってしまった。残された我々生徒は、どうしたか覚えていない。

3 年の時だったと思うが、ジョージ・オーウェルの「shooting an elephant」を英語の授業で使っていた。生徒が順番に読んで訳すのだが、主人公が安宿に泊まっているとき南京虫がぞろぞろ出てきた場面を K 君が、「南京虫の隊列が一列になって壁を横断し・・・」と直訳中の直訳をしたのでみんなが大笑いをしたら、千葉先生が、「情景が良く分かるいい訳だ」と言ったので、一同妙に感心したことがあった。

古文の福沢先生の平家物語の朗読は、古文よりも先生の人間そのものへの興味を呼び起こしてくれるほど素敵な朗読だった。音楽の樋口先生の授業で初めてベートーベンの「田園」を聴き、世の中にこんな音楽があるのかと感動を覚えた。化学の岡村先生の語録。「水銀というのは、ほれ、きょろきょろしてますな」「富士見は天才の産地だ」。面白い授業で、げらげら笑って楽しかった。肝心の化学の授業の内容は全く覚えていない。

今までの人生の中で、数えきれない師を得てきた。師は、学校だけではない。会社にも、家族の中にも、電車の行きずりの乗客にも人の生き様を見せてくれる師はいた。師は、自分の知識を豊かにしてくれ、自分の人間性を鍛えてくれる。清陵の先生たちは、その当時は全くそうとは気づかなかったが、授業や指導を通じて私たちに人間はどうやって生きていくのか、という生き様を示してくれていたのだろう。

自分は他の人に対して師となり得ただろうか？あと何年生きていくかはわからないが、何人かには「あの人は、私の師だった」と言われたいものだ。

人間性を基盤とする生き方への憧れ

５部　山田　富康

教職員を定年退職後、塩尻市の教育委員会教育長を務めて７年近くの歳月が過ぎた。ここで令和時代の新たな教育の展開のために襷を託すべく、６月下旬には教育長を退任する。私が高校に入学した時には、既に長野県の義務教育の教員をめざそうとの思いがあったが、その願いが叶った後、３８年間の長きに渡る教職生活に加え、さらに７年間の教育長という重い職を務めることになるとは、全く思いもよらぬことだった。

一体自分の中のどんな力が、この重く深い年月を支えてきたのだろう。そのことを今回いただいた「私と清陵」のテーマに沿って、考えてみた。

塩尻市校長会の講話資料の一節に、以下の文章を載せたことがある。

（前略）父からは常々、「家の経済状態では、私立大学には行かせられないし、浪人もさせられない。国公立の大学ならよいが、もしだめなら就職だな」と言い渡されていました。

ところが私の高校での成績は、相応の努力にもかかわらずはかばかしくなく、大学入試を控えた模擬テストの数学で「０点」を取るという始末でした。担任の千葉先生からは、「君は、確か国立の教育学部が志望だったね。でもうちの高校では、未だかつて今の君の成績で国立大学に合格した者は一人もいないよ。おおらかさは君の良さだと思うが、おおらかさの度が過ぎるというのは本当に困ったもんだ」と、机に広げた「０」と書かれた答案を、指の節でコンコンと叩きながら言われるような状態でした。（後略）

こうした状態でも不思議なことに深刻さは無く、「力を尽くしていれば、きっとなんとかなるさ」という楽天的な思い込みがあった。そして、大方の予想を裏切り大学に合格した。

今、清陵時代のことを思い起こしてみると、楽天的な思い込みに至る背景には、自分の中にあった生来の特性の他に、以下のような原体験にも似た出来事があったように思う。

談論会で初めて物を言おうと意を決した時の心臓の激しい鼓動と、言い終えた後のがらりと変わって見えた周りの景色。音楽部では、指揮者として紆余曲折を経ながらも仲間と共に合唱を創り上げ、清陵祭のステージで表現しきったこと。狭霧立つ諏訪湖上で端艇の練習を重ね、お尻の皮を何度も剥きながらも２年連続で優勝し、歓喜したこと。音楽の授業では、初めてテノールリコーダーを手にし、アンサンブルを楽しんだこと。体育の授業では、強烈なアタックではなく何とフェイントを褒められ、それがたまらなくうれしかったこと。諏訪湖一周マラソンでは、３年間１歩も歩くことなく走り切ったことなどだ。

そして、驚くべきことに、それらは多少形を変えながらも、現在の生活の仕方や、生き方として確かに息づいている。もっと言えば、長期記憶として擦り込まれ、わたしという人間を人間たらしめる基になっているのではないかと思う。近年知識基盤社会という言葉をよく聞くが、馴染めない。私を持続的に支えてきた力は、それではなく、清陵という学校を源流とする人間性を基盤とする生き方への憧れだったのだと思う。

清陵と昼飯

６部　飯田　夏来

学校(清陵？)でなにやらスポーツ大会をしている。クラス対抗のバレー大会か？フェンス越しにそれを応援している。そうこうしているうちに昼が来た。学校をでて坂を下り、近くの商店街へ。あちこちうろつくものの目当てのものがない。捜しまわっているうちに、１２：４５となった（なんと具体的！）。学校へ戻らなくては授業に遅れる(スポーツ大会がいつのまに！)。野越え山越え、フェンスをよじ登って・・というところで・・目が覚めた。

清陵の昼は御存知の通り給食ではなかった。弁当持ちか、校内に開かれるパン屋の出店か、坂を下ったところにあったなにやら売っていた雑貨店？かで昼メシは調達された。近くに商店街などなく、探し廻るまでもない。パン屋での狂騒はよくある学園アニメの昼時の描写に似ていて、定番なんだなあと、今から思うとなんとなく微笑ましい。中学校からの授業で大きく変わったことは、教室を移動して授業を受けることだった。一応のクラス分けとそのクラス用教室(集合場)。その教室は授業では、いれかわりたちかわり他クラス生徒がくる。‘弁当を置いておいたら食べられてしまった’なんていう学校伝説もあったっけ。いたずらでしかも早弁。

大学へ進学してからも昼はきた。学校近くにある食堂での昼飯、生協での昼飯。アルバイト収入がはいったときの少し奮発した昼飯。授業をさぼって早めに食べた昼食。就職してからも・・当然昼はきた。社内食堂での仕出し弁当。近くの小売店でのパンや弁当。出張先での食堂の定食。忙しいときの遅～い昼飯や、昼飯抜き。そして現在、家で食べることが多くなった昼飯。当たり前すぎてなにを食べたかなんかはあまり覚えていない昼飯。６０年以上食べてきた昼飯。

最近どういうわけか、ＮＨＫの「サラメシ」を見ることが多い。あの「サラリーマンにも昼がきた」である。冒頭のあの夢もこの番組と、某編集委員からの原稿のお誘いから引き起こされた清陵での思い出からか？

さて「サラメシ」では色々な趣向があるが、一番印象に残るのは・・あの「あの人も昼を食べた」。故人のお気に入りだった昼飯を紹介しているのだが、わかるかなあ？　でてくる故人はさてわれわれの世代に身近な人が多いのだ（ひとまわりくらい上かも？）。我々の世代がそうした世代になっているのだと思わせられる。まったくしんみりとさせられる。

とはいえ、一方では人生１００年！時代でもある。残る人生は、清陵を卒業してから今までの年数には及ばないものの相当なものである(順調に行けば！)。一花も二花も咲かせられよう（かもしれない）。というわけで、まだまだ頑張って外での昼飯を（時折）食べている今日この頃である。

あのなつかしい高校時代は、確かに遠い彼方となったが、当時の様々な体験(試胆会、ファイヤーストーム、ボート大会、諏訪湖マラソン、名物教師の授業、バンカラ、エトセトラ)は、今もなおこの身体のなかに生きている。

「私と清陵」

６部　井澤　昭夫

今から思えば私は清陵に入学してから卒業までの 3 年間、何の目的意識、未来像を描くことなく只々漫然と過ごしてきました。

当然、将来「こうありたい」「このような人生設計」と明確な意思もなく、「どうにかなるだろう」と安易な怠惰な毎日を送っていたなと思っています。

当然、そのような気持ちで過ごしているわけで成績も上がらず、劣等生でありました。

何とか大学に入りましたが、その頃は学生運動が盛んな時期で度々、大学はロックアウト状況が何回かあり通学も儘ならぬ状況でした。そんな状況下で「今後自分は何をしたいか」大袈裟にいえば「どんな人生を歩みたいか」を考えるようになりました。清陵風土である「自立心」「自ら考え自ら答えを出し実践する」気持ちが惹起し始めました。「千万人と雖も吾往かん」の気持ちは知らず知らずに清陵時に教えられ精神的支柱になっていた感がします。

人との出会いを大切にし、社会に出ても社会人としての人間力、対応力、実践力を高めようと努めて来ました。現在もその途中ではありますが・・・・

卒業し損害保険会社に入社し営業、損害調査、本社等勤務を約４０年勤務し、現在は親の介護の傍ら、縁あって裁判所調停委員をやっております。少しでも社会に貢献し微々たる恩返しができればと思い、やりがいのある仕事と日々まだ勉学できることを嬉しく思っています。

清陵時代にもっと早く自分自身を確立できていたら、また違う人生を歩んでいたかも知れませんが後の祭りです。しかしながら多くの同期、先輩・後輩諸兄と接した３年間は「ものの見方」「洞察力」を無意識に教えてもらったかもしれません。

人生生涯「山あり谷あり」です。どうにかここまで大過なく来たことに感謝し、これからの人生後半は悔いの無いよう歩み続けて行きたいものです。

以上

Sound of Silence

６部　板花　哲夫

５０年前の清陵というと、質実剛健とハイカラ志向とが同居したような時代でした。けっこう上位で入学したのに、英語のサイドブックの難しさや、アクティブボキャブラリーの丸暗記とか、殊に性能のいい頭脳でもないし、奥手の私には苦戦の連続でした。数学も教科書レベルが５０点、大学入試の難レベルが５０点、教科書レベルで満点とっても２枚目で何点とったか記憶にありません。中学時代に稼ぎ科目だった生物も牛正先生、１年かけて教科書の１０ページしか進まず、旧大学で教える学問の為の学問の勉強なんて、どの位の点数をとったかの記憶もなく、ただゾル、ゲルだけは覚えています。地学もしかりです。地理の青島先生も中東の石油地帯の勉強が軸で、中学時代に稼ぎ頭だった科目も何点とれたかの記憶もありません。国語力は精神年齢を表しますが、今の子のように人前で自己中心的に自分の言葉で自己主張できたかも定かでありません。

スポーツで汗を流すと生理的に良いので、中学同様、卓球部に所属し、１年の時は結構青春をかけて卓球に励みました。高３になって長野県大会の上位に食い込める岡工、岡南と異なり、清陵は強ければ高１から大会に出場できます。高２になって子供の出たがり屋で部長になりましたが、後輩を育てる意志もなく勝手にやらせておきました。土埃の卓球場に行って、運動してリラックスする場に転じて行きました。

高２になって物理が教科になってゆくんですが、東大出の藤森カンゾウ先生も、本来、旧大学の教養で教えるべき行列からスタートして、高校生にとっては物理学だけでも難しい所、教科書が間違ってるのなんのの話ばかり、テストは毎度難問２問のみ、こちらとしては大学入試の傾向と対策を（やさしい）（やや難）（難）の順でテスト問題中心の授業とテストで稼ぎ頭の科目にしてもらいたかった。２年になって開き直ってきた点もありますが、国立大学どころか入れる大学にも入れないという危機意識も生じてきました。

一方、清陵の校風と碩学に酔いしれたわけでもありませんが、だれでも少なからず持つ一種の淡い誇りのような物を同時に持った事は確かなんじゃないですか。校歌に抱くような物を。清陵とは単に諏訪地域で一番の進学校ですが、身の丈以上の学問と胃袋以上の勉強量を強いられた学校でもあります。難問で篩（ふるい）にかけられ、上手に修得すれば東北大学以上の大学に現役で合格し、一浪で相応しい予備校に行けば早慶に合格し、自分なりにまとめると、国立二期に、下限が MARCH という県内屈指の名門校でした。

高３の１２月半ば、クリスマス前の夕暮れ時の駅前の列車待ち、諏訪丸光に飾られたクリスマスツリーの電球がキラキラ輝き、サイモン＆ガーファンクルのサウンドオブサイレンスの曲が流れていた光景は今でも忘れません。清陵を出て勝ち取った事は、孤独に耐えられる事。諏訪に帰って感じた事は、自分が思っている以上に、清陵出はエリート意識がある。坊ちゃんぽい、先生っぽい、学者っぽい、というマイナス面です。世の中の事を俯瞰する能力を持ち、絶滅危惧種にならぬよう努力する事が大切かと思います。

私と清陵　「原点は清陵」

6部　大家　信彦

木曽の山奥から一人だけで諏訪に来た。当時、私の村からは地元の高校に進学するのでさえみんな下宿である。15 になれば村を離れるのはごく当たり前のことだったので、当時は何も思わなかったのだが、今考えればやはり大変なことだったと思う。当時の自分を褒めてやりたい。とは言え、やはりさみしい。休みの日は「諏訪丸光」でうろうろして店員から変な目で見られ、そそくさと逃げ出したり、何の目的も無く下諏訪まで歩いたり(^_^;)・・・。よくグレたり引きこもり(当時はこんな言葉は無かったと思うが。)になったりしなかったなと思うのだが、結果的には大変貴重な 3 年間だったと思う。

何が貴重だったか。①良き師、良き友に恵まれたこと。②自反・・・自己のアイデンティティの確立の基礎を築けたこと。(要は、俺は清陵の出身だという誇りを持てたこと。)③広い知識を身につけられたこと。(高校生なんだから勉強して知識を身につけるのは当たり前だろうと言うなかれ。社会人になってからでは学び得ないものである。)④自分のこれから行く道をあやふやながらも定められたこと。←まあ、③と④は清陵で無くてもいいが。

その後大学を経て通信関係の会社に就職したのだが、そこでは高層気象観測の地上設備開発を担当した。ユーザーは、気象庁、宇宙研(現 JAXA)、防衛省。その後いろいろあって 53 歳の時に独立。会社員当時付き合っていた JAXA の教授に拾われて会社員時代に担当して設置した大気球観測装置の維持管理、その後の設備更新を任せてもらえた。

子供の頃から天文宇宙関係の道に進みたいと思っていた。しかし宇宙と言うには高度はちょっと低く、また、観測設備を使う側ではなく作る側になってしまった。それでも当たらずとも遠からず。先生方の研究のお手伝いが出来て、当時の夢はある程度実現できたかなと思っている。

興味のある方は、こちらを見てください。(http://www.isas.jaxa.jp/missions/balloons/)

気球高度新記録達成時の記念写真(2013.9.20)

大気球放球の 1 シーン

諏訪清陵高校時代の思い出と今

６部　熊谷　靖樹

私は、中学時代から始めたバスケットボールに心酔していて、高校入学と同時に籠球部に入部したと記憶しています。当時、籠球部は、前年の県大会で優勝（その試合はテレビ放映もされ）してインターハイに出場したベストメンバーの２年生が多数残っていて、その人達が最上級生となり更にスケールアップして活躍していました。私からみれば憧れの人達で、たまに練習に加えさせてもらった時などそのパワー・スピード・機敏な動きは別次元で、今でも忘れられません。でも、残念ながら２年連続優勝してインターハイ出場かとおもわれたチームは、準決勝で長野商に６３-４７で敗れ、インターハイ連続出場は逃しました。次の年３月、私が１年から２年に上がる前の３月春休み、練習に部員がたった４人しかいなくて、とても不安な寂しい時もありました。が、４月１年生が 10 名程入部して期待膨らむうれしい時代もありました。

しかし、私の２～３年次のチームは今一つで、２年生の時は県大会には進めましたが、1回戦で敗退の状況でした。ただ、この試合は今でも覚えていて、対戦相手は当時県ＮＯ１の優勝候補・松本県ヶ丘で、試合開始前に４番エースを抑えてこいと言われ、４番とマッチアップして前半は４ファールを犯しながらも何とか抑えこみロースコアのゲームに持ち込み拮抗したスコアでしたが、私は後半早々５ファールで力尽き、地力が格段の差でしたので、６３－３２で終わりました。更に私が３年次は弱く、県大会にも進めませんでした。部長としても残念な時代でした。

でも今から思えば、この時期・この瞬間は人生で一番輝いていた時代かもしれません（勉強は全くしていませんでしたが）。

そんな私が、43 歳で思うところありまして転職、同時期小学校でミニバスケットボールクラブ設立の動きがあり、当時小学３年生の息子を入部させたこともあり、私も設立から参加することになりました。当初名ばかりのコーチと、審判の人出不足から審判の勉強をする破目になりました。一時は審判の日本公認を目指そうかとも思いましたが、年齢を考えて辞めました。それから二十数年、コーチ業と審判をこの歳まで続けている次第です。コーチや審判の後継者を育ててはいますが、仕事や家庭の事情等で、なかなか続けていただける方が少なく、自分のお子さんの小学校在籍中のみで卒業と同時にクラブを離れてしまいます。難しいですが、後継者を作らないと、なかなかミニバスケットボールクラブから離れられない状況です。が、対外的な遠征練習試合もあり、肉体的にもそろそろコーチも潮時・リタイアかなと本気で想うこの頃です。

（高校時代のバスケットボールの対戦スコア詳細は、山田雄一氏が当時の信濃毎日新聞からデータを拾い出していただき、ご協力いただきました。感謝です、）

50年、周回遅れでもいい

6部　五味　喜代幸

高校入試の朝、富士見駅に向かうバスにタッチの差で乗り遅れ、通学路を約 1.5km ひた走って途中のバス停で追い付いた。砂利道を走るバスはノンビリとしていた。15 歳の誕生日に雑音だらけの深夜ラジオで合格を知り、何とか清陵に入学を許された。

高校生活は入学前の地方会の試胆会で始まり、ここで自分の意見をちゃんと持つことの大切さを教えられたように思う。勉強はからきしダメだった。得意な科目もなく、テストはいつも空回りばかりだったが、卒業時点でもまだ成績が下がる余地は若干残っていた(?!)。ホームルームは真ん中の最前列で、福沢先生から万葉集の話や方言の話に聞き入ったものだ。一番の思い出はやはり我が6部がバレーのクラスマッチで、1年の秋から3年の秋の大会まで5連覇したことだろう。9人制で私は後衛だったが、どの試合も山崎君と浜君を中心とした攻撃陣と、井沢君の弾丸サーブで得点を重ね、私のところにボールがほとんど来ないうちにいつも試合は終わっていた。晴れた昼休みはたまにバレーコート上の小高い丘から市内を眺めながら弁当を広げるのが楽しみだった。

周回遅れ（浪人）で何とか東京の私大へ入ったものの、時あたかも学生運動の真っただ中。バイトに明け暮れ、時々登校したら運悪く学校はロックアウトといったこともたびたびであった。2年の学年末と4年の卒業試験はレポートでの試験となり、卒業証書だけは何とか手にした。バイト代で日本中を旅してまわった。カニ族などと呼ばれ、4年間で200日以上は彷徨していた。当時の一人旅の仲間達とは今でも旧交を温めている。

県内の農協系金融機関（ＪＡバンク）に就職し、周回遅れで管理職についたころには 21 世紀も間近に迫っていた。そんな折、清陵卒後30年の集いがあり、同年の仲間にさまざまな人生模様を聞き大いに刺激を受けた。自分も何か新しいことに挑戦してみよう！

偶然目にした「沙漠に木を植えよう」という新聞記事に触発され、2001 年 9 月中国内モンゴルの沙漠で一週間植林活動を行った。世はＮＹ同時テロの真っただ中で世界が大混乱していた。その2年前に訪れたあのツインタワーは跡形も無くなっていた。

中国語をかじり始めた頃、中国残留孤児が帰国後も日本語がわからず生活できないことを知り、また信大の中国人留学生の卒論添削を手伝ったことで日本語教育に関心を持つようになった。

2012 年、定年と同時に後先考えず知人を頼って上海にわたり、専門学校の日本語課に籍を置きながら、周辺のいくつかの大学でも授業を持ち日本びいきの学生たちと交わった。尖閣問題のただ中ではあったが、「自反而・・・」の話題に日本人に親近感を持ったようだ。河南省出身の学生には『ああ博浪の』の博浪沙への案内を依頼してある。実現はこれからだが、こんな所にも清陵が生きていたのだ。

令和になり、懇意にしている大学教授から「福沢先生ならどんな感想をお持ちでしょうね」との発言をうけた。卒業50年を目前にし、回り道もまた楽し、である。

運も実力の内

6部　長田　博文

運も実力の内。私の尊敬する元茅野市長矢崎和広さんに言われたことである。矢崎市長は、平成31年4月5日に逝去された。72歳で本当に残念である。

大学卒業後は、茅野市役所に入職した。私は浪人したので、中村安志君、両角清隆君はすでに入職していた。残念なことに、両角君は早世された。中村君とは中学の同級生で、今でも懇意にしていただいている。腐れ縁である。

矢崎市長は、市長在籍12年間、中央集権から地域分権、地域主権が言われる中で、まちづくりに理想と情熱を持って取り組まれた。

矢崎市長の業績は、「パートナシップのまちづくり」である。市民・民間主導、行政支援の考え方で、多くの市民が参加し、福祉、環境、教育、情報化、国際化、市民館の建設などさまざまな分野に取り組まれた。政策立案は市民が、予算は市長が、そして市民と職員が共に汗を流して実行する。市民も職員もやる気を持ってまちづくりの実現に取り組んだことが忘れられない。「パートナシップのまちづくり」については、中村君が詳しいので、多くは彼に譲りたい。

個人的な思い出は、「てめえみてえな者は、辞めちまえ。」と怒られたことである。それも、助役、収入役、部長、課長がいる前である。しかし、このことは矢崎市長も覚えていて、後日「一回怒ったことがあったな。」と言われた。私は、「一回じゃありません。3回は怒られました。」と言い返したことも懐かしい。その後は、言いたいことは、少しは言ってきたつもりである。

人事異動の前日に市長室に呼ばれて、「〇〇課に異動してもらう。前もって言っておかないと、むくれて、役所に出てこなくなりゃいけねえからな。」と言われたことがあった。私はその前年に異動したばかりで、在籍1年だから今年の異動はないと思っていたので、晴天の霹靂であった。自席に戻った後は、仕事が手に付かなかったことを思い出す。この時の異動により、矢崎市長の近くで仕事をするようになった。

矢崎市長が退任した後、世間話の中で人事について話す機会があり、「4年任期で交代する場合もあるが、茅野市はそうならない。運も実力の内だ。」と言われた。矢崎市長がどういう意味で言ったか聞くことはできないが、努力をして実績を積まなければ実力は評価されない。まだまだ努力が足りない、と言いたかったと思っている。

中村君に「まだ市長に使われているのか。」と言われたことがあったが、矢崎市長とお付き合いさせていただいたことが私の宝である。現在、ボランティアで7つの団体の役員を務めている。「地域のことはやらなきゃだめだ。しっかりやれ。」言われたことが最後の言葉で、声が耳に残っている。「勝手なことを書くな。」と怒られると思うが、お許しください。矢崎市長からの電話が鳴らないのが妙な気分で、平静な気持ちになるには、しばらく時間がかかりそうである。

福沢武一先生と万葉集

６部　名取　康彦

新元号令和が万葉集巻５梅花３２首から採られたことが機縁となってプチ万葉集ブームになっているようです

この前の万葉集ブームは先の大戦の学徒動員の中にあったそうです

私にとっての万葉集ブームは高校一年から始まっていました

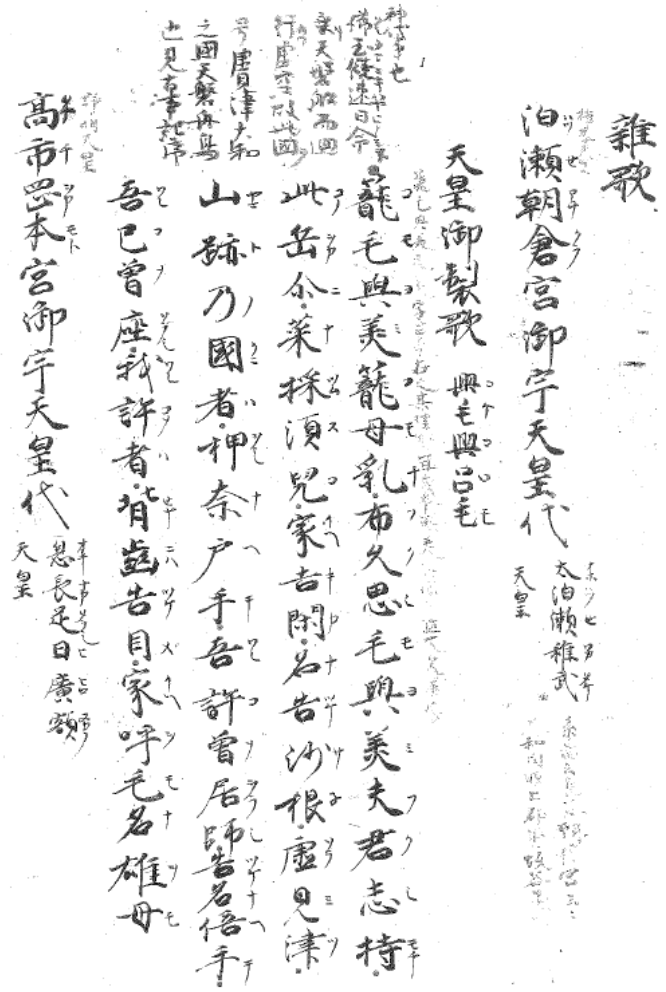
高校入学時オリエンテーションのようなものがあったと記憶しています

どこの教室であったか何人いたのかはまったく忘却のかなたです

黒板を横に白墨で万葉集巻頭歌である雄略天皇（がうたったといわれている）歌を万葉仮名で板書した先生は末尾近くの一字を差しながら盛んに弁舌をうっていました　これは目ではなく自だということだったかと記憶しています　意味が正反対です　天皇というか青年が主語か乙女が主語か　非常に大切な一字でした

衝撃を受けたのは全部漢字であったこと　その中の一字にここまで情熱をささげている人間がいるということでした　一生こだわる「一字」があるか否か　生き方を学んだ思いです

卒業後に先生が額田王研究を進めておられていることを知り御著書も入手しました　私自身は万葉研究の道に進んだわけではありません　しかし知的好奇心を喚起していただいた学恩に感謝する次第です



「注」右の典拠

おうふう出版西本願寺本万葉集

諏訪清陵高校に想う

6部　浜　正也

この度　諏訪清陵なみの会　記念催事に向けて、何か・・・との問いかけがあり、改めて想いを起こしてみた。まだ人生を振り返ることなどあまりなく、普段ほとんど意識したことがない諏訪清陵をしみじみ考えてみると、半世紀の時間を認識し、終活に入る気は更更ないが、中締めのつもりで綴ってみた。

現在、まだ仕事を続けているが、今は輝く仕事ぶりでもなく貢献度を自慢できるような生き方ではないようで、余計に終活、総括を意識させられる世界に立っていることを実感し、よい機会をもらったものと振り返ってみる。

小学校、中学校では、自覚はなかったが「お山の大将」で飛び回っていた。

それが諏訪清陵高校へ入るとお山の大将だらけの“おか”（丘陵）を、目の当たりにして、まさしく「井の中の蛙」を自覚した。

しかし、そんなことは引きずることなく“清陵の青春”を駆け巡っていた。入学早々に歓迎会、談論会なるものを見て興奮を覚えた。団塊世代の諸先輩の威力を感じ、圧倒されたこと、度重なる談論会は異様な高揚感に満ち、反体制の意識が芽生えたことを思い出す。

時節は前後するが、地方会の試胆会、湖周マラソン大会、清陵祭（アーチを飾る杉の葉を集めに岡谷までリヤカー引いて）、ファイヤーストーム、端艇大会（練習時天候の急変で西の湖面の水しぶきがわれらボートに迫りくるのを必死で漕いだが負けてずぶぬれになったこと）、深志高校との交歓会（夜の待ち伏せは興奮した）、校内球技大会バレーボールで優勝。そして３年間バレーボール部で県大会出場を目指し切磋琢磨したこと。残念ながら力及ばず南信大会で沈んだがメンバーで考えて試行錯誤しながら試合に向かったこと。通学も日々新鮮で毎日バンカラ気取って通学したことも・・・。

とにかく楽しかった高校生活、「自反而縮雖千萬人吾往矣」を“自ら省みてなおくんば、千万人と雖も吾ゆかん”と空で覚えて卒業。

新たな世界へと浪人して大学へ。ここでも２度目の井の中の蛙を自覚しつつ、なぜか「反体制」をどこか片隅に置いて、バイトに明け暮れていた。学んだものは数少なく、［イチゴ白書をもう一度］を地で行く大学時代は、清陵時代の輝く時代の反動の時期であった。

こんなことではと猛省し社会に出たらがむしゃらに取り組もうと建材メーカーに入社。以後、営業畑で会社の浮き沈みがありながら、転勤、単身赴任をこなし必死で働いた。しかし、会社の意向に合わず50歳で転職、サッシガラスの問屋に入社し、関東地区１都３県を駆けずり回り現在に至っている。

そんな人生で思うこと、清陵時代の高揚感は今でも、思い出して熱くなる。
まだまだある人生、この機会に清陵時代を想い、肉体的にも精神的にも元気で生きて行きたいと改めて意識したよい機会であった。

清陵点描十三景

６部　平林　清準

合格　　暗い時間にラジオで合格者の名前が発表された。読まれないと思っていた自分の名前があった。朝、新聞の文字で確認した。それが苦しみの３年間のスタートだった。入試問題を自己採点した時、数学は 50 点。「落ちた。」と思った。それが合格してしまった。校長裁量の 3 人のうちの１人だと今でも思っている。入学して間もなく、数学の補修があった。「自分は劣等性なのだ。」中学までは好きだった数学が苦手科目になった。板書に当たらないように、いつも冷や冷やしていた。よく覚えているのは牛正の生物。黒板には、ほかほか御飯の上に山盛りのウニ。脱線したことが記憶に結びついて行った気がする。

校歌　歌唱指導　　先輩が縦割りのホームルームで歌唱指導をしてくれた。新鮮に感じた。

試胆会　山の斜面に設けられたコースで行われた。途中でコンニャクを着けられたりした。関門ごとに先輩が数人おり、様々なことを要求された。好きな子について聞かれた時、憧れていたがまだ一度も話したこともない他のクラスの女子の名前を言ったことだけは鮮明に覚えている。あの時間と空間は中学生から清陵生に脱皮する場だったのかも知れない。

コンパ　カレーライスを作って食べ、旧制高校の校歌・寮歌等を歌うのが楽しかった。

高歯の下駄　バイクで通うまで、叔父が清陵の時履いていた高歯で自転車に乗り通学した。

駅伝　FBI(担任の福沢武一先生の頭文字)３チームの Ｉ（余興チーム）のアンカー　広瀬橋からゴールの清陵まで高歯で完走した。こんなことに何故か質実剛健を感じた。

松本深志との交歓会　　１年の時は深志に行った。社会部の先輩と一緒に、夜歩き続けた。

清陵祭　　諏訪西鳳会はアーチ委員会で、頼岳寺上にある校有林に杉の枝を取りに行った。研究発表は殆ど覚えていない。ファイアストームでは泥だらけになり、ただ走り回った。

学友会館　2 階南側奥から 2 番目が社会部の部室。奥は心理研、向かいは演劇部だった。毎日お昼は部室で食べた。放課後数人でガリ版を切りコンパ歌集を作った。後輩に売った？

社会部　在学中はベトナム戦争が泥沼化して行く時期だった。学生運動のまねごとをした。1968 年 3 月 10 日、成田空港建設反対運動のため、三里塚へ行った。集会中、機動隊突入。角材等何も持たない我々はただ逃げるだけ。背中を何箇所も殴られた。帰宅後親に知られた。「大学へ行ったら息子は学生運動に走る」と思った父の言葉は、「東大以外の大学へは行かせない」だった。進学を諦めざるを得なかった。就職が決まってからは、卒業まで静かに過ごした。「東大を受験しておけば良かった。」と思ったのは何年も経ってからだ。

フォークソング　新宿駅西口で毎週反戦ソングが歌われていた。行かず仕舞いだったが、「友よ」は今でも歌うことが出来る。「受験生ブルース」、「風」等もよく歌った。

卒業式　　卒業式では２人の同年生がヘルメット姿で壇上に。何かあるのではと待ち構えていた新聞記者のカメラが捕えた。自分は学生運動のまねごとは、前年「卒業」していた。

同窓会　　ここ 20 年ほど、同窓会に出席している。講演も興味深いことが多い。何よりも楽しみなのは、幅広い世代の同窓生と一つとなって校歌を歌い上げることだ。

清　陵　バ　レ　ー　部

6部　山崎　和彦

入学早々バレーボール部の門を叩いた。別に中学時代にやっていたわけでもなく体育の授業でボールを触った程度だった。勧誘されたわけでもなく理由は今でもよく分らない。

それでも入部してからは自分なりに練習に励み、身長も高かった事もあり次第にエースアタッカーに成長していった（？）。しかし所詮清陵バレー部。中学時代からの経験者もいたが、私のように入学してから始める者もいる寄せ集め集団では多くは期待できない。

当時、隣の二葉のバレー部は国体やインターハイ出場の常連で「清陵のバレーが二葉と試合すれば清陵が負けるぜ」と陰で揶揄されていた。

その時代高校文化祭では周辺の高校同士での招待試合が行われており、そんな折、岡工祭に招待されたことがあった。岡工バレー部といえば二葉同様男子バレーでは松商と双璧をなし全国大会の常連で普段ではとても練習相手などしてくれるチームではなかった。

その頃、金メダルを獲得したミュンヘンオリンピックに向け男子バレーもスター選手が出てきた影響もあり、従来からの女子バレーの人気を凌ぐ人気が出始めていた。東京五輪女子の回転レシーブには驚いたが、ミュンヘンでは更に進歩し男子バレーは A,B,C クイック攻撃のほかフライングレシーブ（ダイビングレシーブ）なるものが開発されていた。

そんな男子バレーの人気の高まりもあってかアップが始まる頃にはコートの周囲にはいつの間にか各校の生徒や一般見学者らがパラパラと集まってきていた。そんな中で試合が始まったが第１セットは実力の違いで予定通り完敗。ところが第2セットに入ると我がチームが点を取ると周囲から拍手が起こり始め「清陵がんばれ！」の声援が飛び始めるではないか。弱者への同情応援であろうが、単純な我がチームはこれに気を良くし普段ではありえないファインプレーは出るは「最後まであきらめない」レシーブが出るやで、なんと中盤で追いついたのだ。そうなると今度は天下の岡工に「清陵ごときに負けるはずがない」と焦りが生まれ、考えられないような凡ミスが出て、ついにそのセットを奪ってしまったのだ。　最終的には敗れはしたが、あの当時の岡工から１セットを取ったことは、二葉にも負けるといわれた清陵バレー部の面目躍如の出来事であった。

この自信（？）がきっかけではないが、この後、高根の花であった二葉のバレー部と一度だけ両高校の中間にあった南沢の公民館を借りて懇親会を開いた。勿論ジュースとお菓子の可愛い茶話会であったが、今思うとお互いが緊張していて何を話したか覚えてもいないが我が青春の１ページである。

そんな「清陵バレー部」を契機にその後社会人になっても、市役所バレー部や、地区の小学生のミニバレーそしてママさんバレーの監督をやらせてもらい、それが今でも地域活動の原動力になっていることは間違いない。

私とボート

６部　山田　芳文

清陵在学当時、何事にもパッとしなかった６部の山田は、化学部で２年上の荒井八郎先輩から、クロマトグラフィーの基本中の基本について厳しくも親切な指導を受け、生命化学への進学を本気で考えていた。しかし、６部担任の福沢のおじいちゃんに「君の成績では、とても無理」と断言され、卒業後の１年間、東京にて大学入試のためだけの勉強に熱心に取り組んだ。

大学に入学した４月、生物化学の助教授のもとで実務の試験を終了し、大学１年生でありながら、予定通り酵素化学の世界で学会への報文を連名で提出し、受理された。自分でも、この分野にそのまま進むと考えていた（研究の内容は、主題の前処理の仕事を300 日かけて行った)。

ところが、同じ時期に、学内で全く別の誘いを受ける。千葉大の運動部として、他大学に対して誇れるものなど無い中、何と何と何と・・・．まさか、このスポーツに無縁だった私が、ボート部（エイト）に力ずくで入れられることになるとは！　（清陵では、ボートについては、牛正から話にだけは聞いていた)。

身長だけは合格していたが、運動神経の無さゆえに、本当に大変であった。当時の主将からは「君には向かないから、やめろ」と罵倒され、そう言われると、こちらも「やめません！」と発言することに。その結果、実に今日まで続けることになるとは！

対抗エイトのメンバーとして大学の名を背負い、東大、一橋、早稲田、慶応といったインカレ級と肩を並べるのであるから、毎日毎日、それはそれはつらかった。陸上トレーニングと水上トレーニングでほぼ３年半、１０００日間の合宿などの学生生活になったのだ。今でも、私たちが大学ボート部の黄金期を造り上げた、と思っている。

そして、卒業後も、ボートに対する熱は冷めることなく、何と母校の監督を足掛け 13 年務め、この年齢になるまで、ほぼ毎月 1 度は岡谷から江戸川の大学艇庫に出向き、後輩たちの話を聞くようにしている。

いまだに「ボート一筋」で過ごしているのである。

５０年間を振り返って

７部　小口　泰介

【清陵】岡谷南中時代からバスケットをやっていたので、清陵に入ったら続けようと体育館で見学までしたが、走りっぱなしの練習でこれは無理と思い、入部はしなかった。それでも時間を見つけては、体育館で有志とミニゲームに興じていた。よほどバスケットが好きだったのだろう。結局、天文部に入ってドームで黒点観測をやったり、山合宿に参加した記憶があるが、基本は受験勉強主体の家と学校を往復する日常であった。

【大学～会社】一浪して入った私立大学では物理を専攻した。量子力学の難しさに挫折し、より工学寄りの計測コースに進み、当時公営企業であったＮＴＴ研究所に就職した。その頃はちょうどメタル電話の普及が完了し終え、将来の高度情報通信に向け研究開発を進めようとする時期であった。私は、２０年位の間、光ファイバ通信の研究開発に携わった。専門は波長多重用光デバイスで華々しい成果はなかったが、ＦＴＴＨ用インフラ部品として事業導入されたものもあった。この部品は、何千万という加入者向けファイバへの敷設を意識したもので、極めて安く実現できるとして評価され、発明の対価で潤った時期もあった（写真：左下光フィルタ）。また、研究所での若いころはバスケット同好会に所属し、再びバスケットができる幸運にも恵まれた。夕方や昼休みの練習、各種大会や合宿を通じて研究所内の横のつながりもできた。皆で青梅マラソンに参加したこともあった。発明のセンスを買われたのかどうか、その後は知財部に転向し研究開発を側面から支援することになり、関連グループ会社を渡り歩いて６５才でリタイヤし現在に至っている。

【水戸での生活】３０年前、東海村にある研究所に転勤してからはずっと水戸市に住んでいる。一面平らで山もなく北関東の地方都市であり、諏訪との関係や交流はほとんどない。強いて見つけると幕末の天狗党が中山道を下り和田峠近辺で諏訪藩と一戦交えたことくらいか。この間東海村ＪＣＯ臨界事故や東日本大震災があったが幸い大きな被害はなかった。また、家族でアントラーズの応援に鹿島スタジアムまでよく足を運んだものだ。現在は、研究所向け技術調査の仕事をもらってＳＯＨＯ形態で働いているが、最新技術にも触れられ、ボケ防止にもなるのでできるだけ続けたいと思っている。近所に住む孫の面倒見もあり、結構忙しい毎日である。合間をぬって年に２～３回の旅行を楽しみにしている。これまでに、伊勢・志摩、京都祇園祭、白川郷、宮島、弘前に行ってきた。祇園祭は山鉾を引き回すさまが御柱と似たところがあり興味深かった。

振り返って、『自反而縮雖千萬人吾往矣』というよりも、安易な妥協をしたところも多々あったが、まあそれはそれで良いのでは。

清陵とその後の50年

7部　笠原　正英

清陵を卒業して50年。自分のやってきたことが良かったのか後悔の材料になるのか、まだはっきりとした認識を持てないでいる。数年のうちに今の会社を去ることになるが、結論はその時に出そうと思う。今回この企画を戴きその前段とすべく50年を振り返ってみた。

私は清陵卒業と同時に東京へ上京し、大学、就職も家庭も東京だったから、50年間東京で生活したことになる。今では諏訪にいた両親も亡くなり、育った実家も道路拡幅で収用されて何も残っていない。では諏訪は遠いところかというと、諏訪のこと、清陵のことを思うと胸の奥が疼く。清陵の3年間の記憶は霞がかかったようだが断片的には明瞭だ。入学時の試胆会でのカレー鍋や真っ暗な山道での試胆、諏訪湖1周マラソン、清陵祭のファイアーストーム、長い校歌や金色の民などその瞬間は写真のように蘇る。

大学を目指す頃将来の目標もなく、東京に出れば新しい世界が開けるのではないかなどという田舎者の思いが先行し東京に出たが、そんな風になるはずもなく大学生活はバイトに明け暮れた。大学卒業時、両親の諏訪で実家の商売を継いでほしいという願いに、まだ何も得ていない空虚感から、5年間は東京で勉強させてくれと頼んで東京の会社に就職し、結果的に現在まで45年間同じ会社にお世話になることになった。

その会社で魅了された事業は「都市開発」である。中学の頃から潜在的にあったキャンベラやブラジリアのような都市づくりへの興味から大学時代には関連する本をよく読んでいた。この会社が当時施行されたばかりの都市再開発法を使った先駆的な都市再開発を進めていると聞き、名も知らない中小会社ではあったが入社した。再開発は現在では法整備も進み多くの事例も蓄えられ、現在では当時と比べれば相当スムーズに進めることができるようになったが、当時は会社も役所も初体験の場であった。再開発は出来上がると華々しいが、そこに至るまでは実に細かい調査や企画設計、官庁折衝と住民の説得や同意の取付けなど、幅広く地味で根気のいる仕事が多種多様にある。私は、入社して5年目の頃から交通計画のための調査、補助金の申請図書作り、地元権利者の集まる再開発組合の運営などに携わった。会社全体に、誰もよくわからない仕事なら自分達の手で仕上げようという熱気が溢れ、残業・徹夜など当り前に自分の担当分野を遂行することに皆が集中していた時代であった。そこに生まれた達成感が私をこの会社に引き留めた大きな要因であり、それ故結局5年の約束を反故にしてしまった。

自分の希望というより周りから押され入学した清陵だが、その名が東京でも通じることはとても励みになった。会社に清陵の10年先輩がいたことにも救われたし、たまたま娘の通った都立高校の初代校長が清陵出身で第一校歌の作詞者伊藤長七氏と聞いて縁を感じたり、諏訪の出身なら清陵ですかと聞かれたりした。そんな清陵の名に見合う有意義で充実した清陵3年間を送れていたら、と今になって思ってしまう。しかしまずは健康で残りの仕事人生を全うすることにしようと思う。

「忘れえぬこと・友」

７部　川島　弘

同窓会報なんかには毎号、功成り名を遂げた卒業生諸氏が堂々と登場しているようだが、この「なみの会」の記念誌なら俺のような劣等生でも気楽に参加できそうなので戯れ文を書かせていただくことにしよう。

清陵に入って最初に親しくなったのは下諏訪中から来た小口賢治郎だ。人の出会いのきっかけというものは様々だが、賢治郎との出会いはまさに衝撃的だった。それは入学後間もない頃行われた身体測定の時のことだ。たまたま俺たち二人はすぐ近くで服を脱ぎ始めていた。その時何を思ったか、衝動的に俺はこちらに背を向けて猿股一丁になっていた奴の急所を後ろからぐいと握ってやったのだ。その刹那、相手は振り向きざま、俺の急所を眼にもとまらぬ速さで握り返してきたのである。その相手が賢治郎だった。

読者諸君の中には思い出す向きもあろう、その頃の中学生男子の間ではそんなくだらぬ悪戯が流行していたのだ。辰野中学でよくやっていたそんなくだらない悪戯の癖がつい出てしまったのだったが、たまたまそれは下諏訪中でも同様であったらしい。ほとんど見ず知らずの相手に思わずそんなとんでもないことを仕掛けてしまった俺だったが、「しまった！」と思う間もなく相手の逆襲に見舞われてしまったのである。

実に、実にくだらぬ、そして下品な思い出話だが、図らずもその珍事（まさにチン事だった）がきっかけで俺と賢治郎はその後無二の親友同士となった。まもなく賢治郎は生物部、俺は写真部に入部した。親父が写真好きだったこともあって写真部に入ったのだったが、その実態は「現像中」という札一枚で校舎内で唯一、だれにも邪魔されずタバコが吸える「喫煙室」を持つ無法地帯にたむろする不良集団だった。（真面目だったと自認する旧写真部員諸氏よ、放言を許したまえ）俺は特に真面目な生徒ではなかった（もし真面目な生徒だったら今頃こんなことは書いていない）が、どうにもそんな写真部の雰囲気になじめなかった。名前も忘れてしまったが、ドラえもんのスネ夫をさらに陰険にしたような（顔つきも性格も）一つ上の先輩なんかも嫌で、俺は清陵祭を境に退部してしまった。

同じ７部の天木正春君と席が近かったからか、何かの折に誘われて俺は二学期が始まると山岳部に入部した。その頃にはすっかり仲良くなっていた賢治郎も一緒だったのは言うまでもない。彼は生物部との掛け持ちで、夜な夜な夜の蝶、すなわち蛾の採集に野山を駆け巡っていたから山慣れしていたし、体力もあった。ところが俺ときたら生まれつき蒲柳の性質（たち）で、本来山など無縁の輩だったはずなのだが、その分、十分すぎるほど自然を愛するロマンチストであった。賢治郎との山の思い出は尽きないが、紙面の方が尽きてしまいそうだ。確か、卒業の年の「清陵」に彼との壮絶なる山行記を投稿した。ここまで俺に付き合ってくれた奇特なる士はぜひ探し出して読んでいただけたらと思う。

最後に、賢治郎は先年白血病で故人となってしまったことを記しおく。合掌

このままでいいのか？日本の食料政策

７部　北原　勝

私たちの清陵卒業の頃、日本の食糧自給率は６２％、現在は３８％にまで落ち込んでいます。現役時代から現在まで、千葉県で農家や農村集落への支援を仕事としてきた私は、「日本の農業・農村そして食料はどうなってしまうのか？」という危機感をいだいています。昨年末にＴＰＰ１１、今年２月には日欧ＥＰＡが発効しました。そして今、アメリカとの貿易交渉が、アメリカ主導（いいなり）で推し進められています。私が住んで仕事をしている千葉県は大消費地東京に近く、平坦な下総台地の畑、温暖な気候、と農業にとって恵まれた地帯です。ところが、最近では耕作放棄された荒れた畑が目立ちます。水田は谷津田といって、台地地帯の川沿いにある比較的狭く、水はけの悪いところがあります。このような水田は、借地料タダでも借り手は無く、荒廃が進んでいます。

すでに、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア、ＥＵから、牛肉、ワイン、乳製品などの輸入が急増しています。農水相自身が２０１０年に、「全世界を対象に農産物市場を開放した場合、食料自給率は３９％から１４％に下落する。」と試算しています。「農は国の本なり」の言葉に逆行する、アメリカの「食糧戦略」に従った現在の政策では、国民の命を守ることはできません。

みなさんの中にも、自家の農地の維持のために、田畑を耕作する人もいるかと思います。高い農機具などのコストと低米価で、農業生産で暮らしを成り立たせるのは容易ではありません。まして、兼業農家では外で働いて得たお金を、農機具を買うなどに充てているのが現実です。そこで、「集落営農」で、地域の農地を維持しようという取り組みが行われています。農機具のコスト低減や、農地の効率的利用により、経営は確実に改善できます。千葉県は温暖なため、同じ農地に１年間で、小麦と大豆の２作を栽培することができるのです。水田面積の３分の１を、小麦－大豆栽培にすることで、米栽培よりも多い収入を得ることができています。その結果、１０ａあたりの借地料（年貢）が米２俵‥‥約３万円、作業に参加した人への日当は１万円が払うことができています。「集落営農」では、後継者は次々と生まれてきます。ただし、後継者といっても６０才以上の定年退職者ですが。あるとき代表者に、「面積も多いから、大きなトラクターを導入したらどうか？」と話したところ、「うちは、まだまだトラクターに乗れる人が多くいる。トラクターを大きくしたら、その人たちの働く場を少なくすることになる。」と。その答えにハッとしました。「集落営農」では、効率よりも集落住民・人間が優先されていることに。

現在、１５０名はどの農家で組織された「房総食料センター」で、週３日ほど働いて（？)います。主に、生協などへ野菜を販売していますので、生協のカタログで「産地」を見てください。また、「集落営農」には、週１回携わっています。

私を取り巻く「時」

7部　山田　思鶴（旧姓小松）

卒後50年と考えるとよく此処まで来れたと思うのと同時に、自分の最終が見えてきており、一日一日カウントダウンと感じる。やり残したことは何なのか、あとどのくらい時間があるのか、何を選択し、いつまでにどのように実現するのか、誰の為に、何の為にと自問自答しながら過ごしている。

地方に暮らしていると、少子高齢化による地域の劣化を特に感じ、「100年後に江戸時代と同じ人口」の日本を思う時、「なぜ日本がこのようなことになってしまったのか」「なぜどうして、誰の責任と選択が悪かったのか？」と考えるのだが、その責任の一端は、高度成長を担い、一心に働いてきた我々世代にもあるんだろうと思っている。4，5年前、そろそろ仕事から引退しようと準備を始めたが、その頃から社会の劣化が目立ってきて、とても若い人だけでは大変だろうと引退をやめ、最後までがんばることにした。

そう決めた途端に、８６，７まで社長で生き生きと仕事をしている人や、やはり８６，７で毎朝、ホテルオークラのプールで泳ぎ、後進国のこどもの育て親となり、私に、「世界女性連盟」の仲間になりなさいと勧めるシニアに出会ったりと、「世の中にはいろいろな人がいるものだ。」と思い、仕事の余生を楽しむことにした。

大変な思いで医師になって25年。一生懸命やってはきたが、2035年にむけての地域包括ケアのなかの医療は限界にきている。その先の新しい医療が必要になってくる。正直、医師の仕事はルーチンワークになってしまっている。「そうだ、社長をやってみよう。」そう思った瞬間に、それを手伝ってくれる若者が集まってくれ、自分もなんとかその仕事をやりとげ、若い世代に引き継ごうと思っている。さすがに海外ビジネスは自分には難しい、次世代の課題と思っていたが、この時代の劣化の速さを考えた時、次世代に課題を押し付けるわけにはいかない。そう決心したとたん、仕事の話が舞い込んできて、いま、アジアに出かけている。妹の子供は、20代よりカンボジアの子供に学校をと、いくつかの小中学校をつくってきたが、今、２つ目の高校をつくっているとか。

彼らが卒業した後の、働ける環境作りの社会システムの一部をつくれないかと、プノンペンに行ってきた。そこで仕事の手伝いをしてくれたコムサンが私に言った。「僕は、カンボジアの10万人の子供たちに教育を受けさせたいんです。」と。彼は2人目の男の子が生まれたばかり。仕事に父親業にがんばっている。私は言った。「日本に公文という学習方法と全国展開をしている塾があります。同じようなビジネスをカンボジアに持ち込んだらどうでしょうか。そうしたら、あなたの夢は達成できるかもしれない。」と。コムサンはすかさず言った。「それでは、手伝ってください。」　さて、今後はどうなるのだろうか。

最後に、自分は高校時代が人生で一番きつかった。しかし、この精神力をもらったのは「清陵の校風と清陵の男子仲間」のおかげだと思っている。みんなに感謝したい。

清陵の「熱」

７部　坂井　明英

１９６９（昭和４４）年１０月半ばの夜１１時頃，３年７部担任の本山綱規先生はじめ学年担任の３人の先生方が，突如，岡谷駅近くにあった私の自宅に来られた。自宅２階で先生方は，「坂井，お前さんが，通学時に何回かに分け宿泊用具等を学友会館に持ち込んでいることは知っている。上京して『佐藤（栄作，当時の首相）訪米阻止闘争』に参加するためだろう。絶対に止めろ！」等「熱く」語られた。先生方がこのように思われる素地や経緯は確かにあったが，宿泊用具等を日々運び込んでいた目的は「小池忠男，原聡両君と八ヶ岳登山に行くための準備」と話すと，先生方も私の親も「それならばいい」ということになった。この何日か後，定期試験直前だったが，自主休講にして３人で初冬の八ヶ岳に向かった。冬装備満載で重いキスリングを背負って澄み切った空気の中新雪の上を歩き，夜はテントの中ラジウスの炎で凍った靴を溶かし乾かそうとしたことを覚えている。

この出来事は，私の清陵における３年間を凝縮したようなものだったと思っている。清陵では，入学直前の西竜会（地方会）の歓迎会に始まり，試胆会，剣道部，篭球部，コンパ，学友会，深志との交歓会，談論会等々，その時々，思うがままにかつ真剣に議論し動いていた。２年生から３年生にかけては学友会長として小池，原両君らと学友会本部を構成したが，会員の無関心さに危機感を覚え，「学友会解散」と「本部総辞職」という前代未聞の行動に出，総会で「否決」されるという結果になった。このような一種過激な行動は，当時の「全共闘運動」という社会的現象の影響もあったことは否めないが，これを含め，清陵では，先生方，先輩，同級生等多彩な人たちとの「熱く」それでいて清々しい交わりがあり，私にとって貴重な「宝物」となっている。また，その後の人生で出会った人達にも同じような交わりを求めてきたと感じている。

大学進学後は，７０年安保，三里塚闘争，全国全共闘大会等々に大学新聞社の活動も兼ねて参加し，片道キップのみ持参で出かけては，日比谷公園，青山通り，成田等を何回も駆けずり回った。当時は，「野望」ともいえるような夢（構想）も抱いていたが，大学３年進級時の試験ボイコット運動までの活動は，全て「敗北」という結果で終わった。この間出会った人達の中にも「熱」い人は数多くいたが，清陵の時とは大きく異なる「熱」さだった。

その後は，自身の考えでも経歴でも民間会社就職は不可能な中，ひょんなことから裁判所に就職し，因縁深い成田の地で始めた二葉出の妻との家族生活を営みつつ，４４年余を経て現在に至っている。裁判所では，裁判を支える人と組織に係わる業務を長く担当した後，簡易裁判所の裁判官として，沼津，伊那，岡谷での勤務を経て，ここ５年余は東京簡易裁判所で民事訴訟事件を担当している。そこでは文字通り多様な多くの人達と日々接しているが，一息ついてふと窓外の日比谷公園の緑を見る時，諏訪の地の清々しい空気と清冽な水，そして清陵とそこで出会った「熱」い方々や「宝物」のことを思い起こしている。

私と清陵

7部　田中　俊廣

清陵を卒業して50年。この機会に記念誌を作ろうとの呼びかけに、はるか昔の記憶をたどってみた。部活動もせず、学友会の活動もせず、ごく地味な高校生であったと思う。それでも思い出すのは、あの頃だったからできた“馬鹿げた”こと。入学して間もなく、地方会の歓迎会があった。闇鍋ではないけれども、いろいろなものが入ったカレーを食わされ、あの長い校歌を覚えさせられた。真夜中に一人ずつ呼び出されて、試胆会もあったなあ。夜中と言えば、深志との交歓会に徒歩隊に加わって行ったっけ。100人以上はいただろうか、高校生が一団となって夜を徹して歩くなんてことは、今ではもう見られない光景だ。塩尻峠から見た諏訪の夜景がきれいだった。翌日の交歓会は疲れと眠気で、ほとんど覚えていない。

端艇部員ではなかったが、よくボートに乗った。当時は重いフィックス艇で、艇庫から湖に出すのも大変だったが、安定感があって、舟遊びには結構よかった。諏訪湖横断だと言って釜口水門まで行ったり、上川を遡上したこともあった。清陵祭を抜け出して、部員のG君と二人で漕ぎ出したこともあったなあ。

入学後のクラブ勧誘を見て山岳部に入りたいと思った。しかし、山＝遭難という感覚しかない親に猛反対されて断念した。ただ1度だけ、山岳部員のM君をリーダーに、F君と私の 3 人で八ヶ岳に登った。今となっては細かいことは忘れてしまったが、立場川の沢詰めをして赤岳に登るという登山道のないルートで、かなり危険な（無謀な）計画であった。立場川上流の河原にテントを張って一泊。翌日は岩がごろごろする谷をさかのぼり、最後は岩稜をよじ登ることとなった。ロッククライミングの経験のない私たちに、M 君は三点確保の登り方を教えてくれた。たどり着いたのは阿弥陀岳の山頂であった。私たちが遡上したのは支流の広河原沢であった。もし計画通りに立場川本谷に入っていたら、谷の途中で日が暮れたか、最後のところで登れずに進退窮まったことだろう。後になって考えるに、「高校生3人八ヶ岳で遭難」なんて新聞沙汰になりかねないところであった。

高校時代、まだ漠然としたものだったが、地学に興味を持っていた。同好会を作りたいと友達と話したこともあったが、進展はしなかった。地学研究室は当時の私には敷居が高く、なかなか入ることができなかったが、もし足繁く通っていたら、もう少しいろいろと違っていたかなあと思うときがある。ただ 1 度、地学教室に貼ってあった「諏訪」図幅 5 万分の 1 地質図を借りたことがある。それを地形図に手書きで写したのだが、今考えてもよくそんなことをやったものだと思う。

卒業後、大学で地質学を専攻し、長野県の高校教員となった。母校の教壇に立つことはなかったが、平成22年より始まった「三澤勝衛先生記念文庫連続講座」で何回か講師を務めることとなり、諏訪地方の糸静線に沿う変動地形などを案内して歩いた。時には清陵の生徒も参加してくれて、少しは母校に貢献することができたのではないかと思っている。

理想の花の咲かむまで

７部　林　元夫

私の人生の分岐点はやはり清陵にあるのかもしれない。地学の牛山先生に「工学部は今流行だが、理学の道は…」の一言で物理学科を目指すことに。元々不得手であった物理では流石に荷が重く、国立大はすべて失敗。一浪した後、私立大学の入試が物理学科でも化学の問題と選択であったので、化学で何とか上智大学の物理学科に滑り込んだのであった。何で物理に固執したのか、今でもわからない。入学して勉強する気になれず、大学新聞づくりをすることになる。理工系の部員は初めてで、物珍しく見られたものだ。でも可愛がられた。(笑) 倫理の菊池先生の“そうである～ん”講義で哲学に目覚めて（？）いたので、全学連、革丸派などと議論を交わすのに困らなかった。議論に飽きたころ卒業。人生何が起こるかわからない。大学３年生の時、父が倒れて３か月しか通学できなかったけれど、卒業できたのも奇跡だ。そんなことで下諏訪に帰り、チノンに入社した。１０か月しないうちに父が病に倒れ、家業の土建屋になり、３０年間社長。そしてまさかの土建不況になり、廃業。サラリーマンとなり、このまま人生を終わりたくないと考え、「世のため人のために最後は生きたい」と思う。５９歳の時、サラリーマンのまま町会議員に立候補した。

さて議員になったわけであるが、清陵で培われた議論力が生きた。校歌の「理想の花の咲かむまで」を心に刻み今を生きている。今年３期目に再選されたところだ。改革の心は、清陵の学生時代に染み込んだと考えている。今に満足しない力、考え方がその時にあった。これからの人生も前向きに生きたいと思う。少しでも人のために生きられたら、わが人生に悔いはないと思うこの頃である。

ピッカピカの３年間

７部　林　亮一

古希をあと数年で迎えるわたしたち夫婦は、近頃とみに人生の総括めいた話をすることが多くなった。先だっても何かのテレビ番組がきっかけだったか、そのような成り行きになった。「ねえ、これまでで一番たのしかった時期はいつ？」とかみさんが聞くので、わたしは迷うことなく「そりゃ高校の３年間さ」と答えた。かみさんは信じられないという顔をし、自分の高校生活は何とも味気ないものだったわとボソリとつぶやいた。彼女は某都立高校の卒業生だが、あの『受験生ブルース』を地でいくような学園生活を過ごしたらしい。「自慢じゃないけど校歌も覚えてない」などというので、今度はこちらが信じられない顔をした。校歌を忘れるなど清陵生ではありえないことだ。「自慢じゃないけど、オレはいまでも歌えるぞ。フルコーラスだと１５分はかかるけど」。「・・・遠慮しとく」。かみさんが少しでも関心を示してくれたら美声を披露するつもりだったのだが、軽くスルーされてしまった。残念だ。アンコールをもとめられたときのために“民”も用意していたのだが。

彼女が言うには、校歌なんてめったに歌う機会がなかったから覚えようとも思わなかったということらしい。そしてそれは、むしろ東京の高校ではふつうのことなのだとか。わたしは少し考え込んだ。清陵祭のフィナーレ、泥まみれのファイヤーストームには大いにカタルシスを感じたし、湖周マラソンで配給されたリンゴの味は忘れられない。学友たちと徹マンに興じたことや、コンパで声を張り上げて熱唱した、品はないが胸ときめく替え歌の数々。オンボロで薄汚れ、油の臭いがしていた校舎。みな土足のまま歩き回るものだから、床はいつも砂でザラザラしていたっけな。こうした記憶がひとつになって、わたしのピッカピカの３年間が出来上がっているわけだが、かみさんの明るくない青春話を聞いているうちに、もしかしたら自分はかなり特別な高校生活を送ったのかもしれないと思えてきた。

高校生というものは、進路への不安やプレッシャーに加え、思春期ならではの悩みをいくつもかかえているものだ。こんなわたしだって、きっと語るも涙のエピソードが１ダースくらいはあったはず。しかしそれらは、清陵という不思議な場の力で美しくゆがめられ、あるいは書きかえられて、半世紀を経た今となってはもうハッピーな記憶用の棚に分類・収納されているのだと思う。

生物としてのヒトの絶頂期は１８歳頃と聞いたことがある。言われてみれば、自分でも思い当たるフシがある。そんな貴重な時期を、あの先生方や友人たちに囲まれて、あの清陵という場で過ごすことができた幸運に、わたしは心から感謝している。

（右は友人が描いたわたしの似顔絵。ボーッと生きて６７年）

清陵卒業後５０年

７部　原　恵二

私は、松本市で生まれ、父親が国鉄（現在のＪＲ）に勤務のため、その転勤に合わせて長野県を１周して、最後は松本に戻り現在に至る。

長野９年、飯山２年、佐久２年、辰野１年の後松本へ。中学３年時は佐久中込であったが辰野へ転勤となり、高校も野沢北受験の予定を変更して、諏訪清陵を受験、入学となる。辰野から通学１年の後、松本へ転勤のため上諏訪での２年間の下宿生活を余儀なくされる。その当時、自分としては、将来転勤のない仕事を選ぼうと思ったものである。

清陵高校卒業後、予備校と大学生活を東京で過ごし、就職は塩尻市の税理士事務所に入所。８年間の勤務で、行政書士試験は合格したが税理士への夢は断念。一般企業の経理部門を志望して転職し、６５歳まで会社勤めとなる。現在は、平成２２年に登録をした行政書士の仕事をしながら、合間に図書館とスポーツジム通いの生活である。行政書士の最近の主要業務としては、建設業決算変更届・相続手続・農地転用・NPO 法人設立等である。

高校を卒業して５０年、今年で６８歳になるが、本当に年月の経つのは早いものである。３年前、「６５歳以上の高齢者」という表現に大いなる違和感を覚えたものであるが、年金受給者として甘んじて受け入れざるをえないものなのか？人生５０年といわれていたものが、今や人生１００年時代となり、年金受給開始年齢も徐々に引き上げられている。
高齢者の定義も実状に合わせて変更されるべきであり、健康であれば７０歳、７５歳まで仕事を続けることができる仕組み・制度づくりが望まれる。

個人的なことになるが、４７歳～５２歳の間、諏訪湖マラソン６回（ハーフMベストは１時間５７分１８秒）とホノルルマラソン１回（タイムは５時間１４分２５秒）を完走。その後、１３年間は仕事の関係で単身赴任生活などもあり、マラソンは休止状態であったが、６５歳で会社勤めが終了となり、ちょうどその頃、松本マラソンが新設されるという情報もあり、再度マラソンに挑戦することにした。１３年のブランクは大きく、また「６５歳以上の高齢者」として不安もあったが、タイムよりランニングを楽しむことができれば良いという思いでスタート。３年間で諏訪湖マラソン３回と安曇野ハーフマラソンを２回完走。また第１回松本マラソン（フルM）にも出場したが、３９キロ地点で３分のタイムオーバーとなり、完走できず残念な結果となる。

今年は、１０月の松本マラソンの制限時間が、５時間３０分から６時間に変更となり、今度こそしっかり準備して完走したい。６月の安曇野マラソンと１０月の諏訪湖マラソンにも出場予定、もちろん楽しく走りたい。

健康に留意して、仕事・趣味・スポーツ等、積極的に取り組んでいきたい。

清陵から 50 年

7部　宮坂　平

6 月が誕生日の私は、この 6 月を以って退職となりました。歯科材料の研究と学生教育一筋に、ほぼ 40 年。育てた歯科医師は 5,000 人余となりましたが、特に最後の 10 数年は教務関係の仕事をしていたので、通常の教員よりは学生と接する機会が多く、教育の大変さを思い知る毎日でした。

そんな時に折に触れて思い出すのは、友達と過ごした高校時代のことでした。

入学が決まって、黎明会の新入会員として夜に湖畔（高浜）に呼び出され、初めて聞く校歌の練習をさせられ酷く面食らったものです。さらには、城　卓矢の「骨まで愛して」をテーマソングに、皮を剥いだ豚の頭へのキスを強制されて始まった黎明会の新入生歓迎会では、タカトウ草をふんだんに入れたとても食べられたものではない味のカレーをふるまわれ、水月園の奥で行われたホーチミンルートと称する藪の中を巡る試胆会など、新入生の私にとって今まで考えたこともないような衝撃的な経験の連続でした。しかも、2 年上の先輩はとても大人びて見え、得体のしれない恐ろしさを感じたものです。そんな初心な人間でも、1 年の清陵祭の頃には、友人も増え、クラブ活動と高校生活にすっかり馴染んでいたことや、恋愛の甘酸っぱい思い出など、その頃のことを今でも鮮明に思い出すことができます。諏訪湖一周マラソンでは、釜口水門までトップにひたすらついていったのですが、そのトップの人がそこで「や～めた」と離脱してしまい、ペースメーカーを失った結果、間もなく松木君達に抜かれてしまったことなども、それ以外の出来事とともに素晴らしい思い出として鮮やかに甦ってきます。2 年からは、諸般の事情により写真部・天文部の自称名誉部員として毎日のように暗室で開かれていた非公式活動に参加するようになり、黎明会のコンパには皆勤賞ということで、20 歳を過ぎてしまえば何でもない事ですが、高校生としては禁じられていたことはやり尽くした感があります。まさに、青春を謳歌したと言える高校生活でした。やり残したことがあるとすれば、勉学くらいだったでしょうか。そして、そんな清陵での生活を共に過ごした友人達との心の繋がりは、50 年経った今でも変わらないということをとてもありがたく感じています。

そんな落ちこぼれの人間は、逆に教える立場になると落ちこぼれの気持ちが良く理解できるということでしょうか。教務は、通常は成績で学生を無情に判別するというのが本来の仕事ですが、我が身と置き換えて落ちこぼれた学生の痛みが判るためか、そういった問題のある学生の相談にのることのほうが多かったという感じがします。落ちこぼれた学生を救うために東奔西走したことから、少しは学生の信頼を得ることができたのも、結局は、自由に様々な経験を積ませてくれた清陵高校（友人）があったからだと感謝しております。50 年ぶりに会う友達もいるであろう同窓会が本当に楽しみです。

大学進学は理系に転進

７部　両角　誠

私は高校二年生の頃は、国語、英語、日本史等の文科系科目の成績が比較的良い結果となっていた。大学進学の希望校は、最初の頃は文科系の学部を選択して、将来はいわゆる事務系の職種に就職することになるのかなと漠然に考えていた。しかしながら、事務系の日常的な仕事として思い付くのは、お客様の顔色を窺いながらその場を凌ぐ営業活動とか売上・支払や給与支払いの地味な事務計算等しか想い当らず、洋々たる希望に満ちた前途が拡がっているとは全く思えなかった。

高校在籍時の昭和４０年代前期は高度成長期が継続しており、工業化社会には様々な新しい技術や仕事が出現していた。私が特に興味を持ったのは今で言うところの IT 技術であった。この IT 技術は今後の技術発展のキーテクノロジーの一つであり、これを利活用した工業化技術の進展や社会生活への応用等に何らかの形で自分が関与したいという気持ちが次第に募ってきたことから、大学の進路は理系、特に IT 技術関連の学部学科を選択する決意に至ったのであった。

当時は IT 技術の特徴を大々的に訴求した大学の学部学科は殆ど無かったが、私の場合は、結果的に電気通信大学電気通信学部応用電子工学科に入学して電子工学、電子計算機関連の基礎的事項を学習し、その後はＮＴＴ（旧電電公社）に入社し、IT 技術系の実用開発担当部署を強く希望して当時のデータ通信本部（現在の NTT データ社）に所属し、以降ＩＴ技術を利用した大規模な電気通信系、公共系及び企業系のシステム開発業務に従事して来ている。特に意識したのは、家族や孫に対してこのシステム・サービスは私が関係したのだと言えるような公共・社会的なシステム開発に従事したいという想いが強くあり、全国銀行協会為替交換システム、労働省年金システム、運輸省車検登録システム等のシステム開発に従事したことは深く思い出に残っている。

ところで、仮にもう一度高校生に戻って将来の大学進路を選択することが出来るのなら、今度は如何なることを考えるのであろうか。多分、特段の経済上の制約・制限が無ければ、私は以下の様な選択をするのではなかろうかと思う次第である。則ち、先ずはリベラルアーツ系の大学を選んで、哲学、歴史、文学、心理学等の学科で基礎的、教養的な深い学びのベースを作る過程を経験したいと考える。その期間中には数か月間の海外旅行に出かけて、世の中の暮らし向きや理不尽な社会の様相等を身近に経験することで、将来の進路選択の参考にしたい。その後、将来の社会生活を送る為に必要な専門的な知識・技術を得るための大学院に進みたいと考える。その場合、理系、文系どちらの進路を取るかははっきりしておらず、状況次第であろう。このような新たな想いは、約５０年前には大学進学が出来るだけでも恵まれた境遇であり、その機会を得るには社会生活を送る為の専門分野を高校生の時に決めざるを得なかったという当時の状況があり、それに対して一抹の残念・無念さがあったことが影響しているものと思われるのである。

５０年間の歩み

７部　横内　孝文

私にとって清陵の３年間はクラブ活動に明け暮れた３年間だった。中学の時からあこがれていた庭球部に入り、運動疲れと睡眠不足で授業中はしょっちゅう居眠りをしていた。１年の最初の頃はテストの点がそこそこ良かったが、クラブ活動に明け暮れ成績は直滑降、３年の後半から挽回に励んだが、浪人覚悟で国立しか受験せず案の定浪人した。

１年自宅浪人したが、国立は無理なので私立に切り替え、５校受験し４校合格した。当時、東の東京理科大学と西の立命館大学が、私立理系で授業料が最も安かった。「東京の経済圏は全国で、関西の経済圏は関西のみ」との牛山正雄先生のアドバイスと、親戚が東京には複数あるが関西にはないことから東京にした。

学生時代は、旧諏訪藩藩校を起源とする学生寮「長善館」（京王線仙川駅）に４年間住んだ。ほとんどが諏訪地方出身者で、清陵の先輩や同期、現役合格の後輩も多くいて、ホームシックを感ずることなく楽しく暮らした。今でも当時の仲間の集まりが年１回開かれている。寮生活で学んだ先輩との付き合い方や酒や麻雀は、社会人になってから大いに役立った。恩返しで現在、長善館の経営母体「公益財団法人諏訪郷友会」の理事をしている。学業では、当時田無市に在った電子技術総合研究所で卒業研究の指導を受けるという貴重な体験もした。

ゼミの先生が紹介してくれた半官半民の就職先もあったが、東京は年を取ってから住むところではないと思い地元に就職した。卒業年の昭和 50 年はオイルショック後の就職難の始まりの頃であった。地元大手の三協精機（現日本電産サンキョー）と諏訪精工舎（現セイコーエプソン）の入社試験日が同じで、片方しか受けられない。諏訪精工舎を選んだが万が一落ちたら後がないと思い、関連会社の一つ「浜沢工業」を受験した。本社と関連の処遇格差もあったが、時代の流れで 10 年後に全ての関連会社がセイコーエプソンに合併された。そして一部上場の１兆円企業になるとは、当時想像だにしなかった。

会社生活では、配属先の事業が数年で中止になることが、入社直後から３回も続いた。ツキのなさと実力不足で出世はしなかったが、まあ人並み程度ということで良しとしよう。60 歳定年後、再雇用で年収大幅ダウンながら、65 歳まで現役並みにしっかり働いた。

再雇用終了後は、山登りと畑仕事、時々ボランティアの生活を送っている。春から秋は 3000m 峰（7/21 座済み）と日本百名山（42 座済み）踏破を目指し、冬場はスキーを楽しんでいる。また四国八十八カ所歩き遍路にも挑戦中（1～51 番札所まで終了、結願は来年の予定）である。清陵時代にクラブ活動で体を鍛えたことが、大いに役立っている。

清陵時代には色々な思い出があるが、身体面、精神面、思考面における人間としての基礎が形成された３年間だった。私を育んでくれた清陵高校に感謝。

現在の生徒昇降口

第Ⅱ部

５０年後の談論会

自由テーマで寄稿していただいた５０の作品を以下の６つのカテゴリに分類しました。

・清陵の思い出と仲間たち

・理系と文系

・これからを生きる

・人文科学

・科学技術

・反戦平和という願い

第Ⅱ部　目次

清陵の思い出と仲間たち　118

永明学友団　宮坂　和生（１部）
試胆会　小池　隆昭（５部）
地方会「西竜会」の思い出　山崎　和彦（６部）
「湖周マラソン」　松木　敏博（１部）
庭球部インターハイ南信地区大会団体戦優勝　横内　孝文（７部）
みんな、「18 歳」　山田　雄一（２部）
亡き友たちの顔・顔・顔　山田　雄一（２部）
校　訓　渡邉　博保（４部）
清陵と私　小松　大蔵（4 部）

理系と文系　124

教科・科目についての雑感　武居　良明（１部）
風変わりな授業風景　帯川　利之（３部）
「徹すること」の必要性　藤森　英幸（２部）
「自分を枠にはめず、あらゆる可能性を追求しよう」　伊藤　俊巻（３部）
理系と文系　河西　朝雄（３部）

これからを生きる　127

健康のためにしていること　清水　敏夫（２部）
68 歳の「キョウヨウ」　山田　雄一（２部）
野菜づくりと旧優生保護法　山田　雄一（２部）
高齢社会雑感　増澤　利定（２部）
長男のパラリンピック 4 大会出場　小池　忠男（２部）
人との出会い　山田　文雄（４部）
諏訪の充実時間とウェルネス・リトリート　長瀬　　潔（２部）
人生「芸は身を助く」　久保　正法（２部）
後悔の堆積ありて水温む　窪田　　敏（５部）
黄泉の同級会　窪田　　敏（５部）
自分を変える勇気　根橋　文武（５部）
小学校の先生はオールマイティーさが求められるが・・・　伊藤　正陽（５部）

少年法適用年齢引き下げ問題について　北川　和彦（３部）
これからを生きる　小松　大蔵（４部）
最近はやりの「多様性の認証」と「勿体」について　小松　大蔵（４部）

人文科学　135

季語の美しさ　小口　信治（４部）
諏訪地方の湖沼　小口　信治（４部）
第三の男　池上　昭彦（１部）
「諏訪」という土地　小口　信治（４部）
「自反而～」の語句で中国人に中国語を教えた自慢話　瀧澤　伸介（４部）
運・不運　原　秀男（４部）
その独りを慎む　細田　俊彰（５部）
「今、ここに」を生きる　朝倉　一善（５部）
無駄話：カタカナ英語を漢字に　岩本　光正（２部）
自著評(抄)　遠藤　茂（３部）
百人一首考(抄)　遠藤　茂（３部）
虐待等の暴力から子どもを守る　北川　和彦（３部）
Beatles と Bob Dylan の名曲について　小松　大蔵（４部）

科学技術　142

優良企業はほとんど bottm－up はない　板花　哲夫（６部）
異　常　気　象　山崎　和彦（６部）
原発は必要悪か　河西　朝雄（３部）
君子の道は先端テクノロジーばかりではない　板花　哲夫（６部）
中国人工知能のつぶやき　河西　朝雄（３部）
AI に出来ぬ夢を見る　朝倉　一善（５部）
AI の行方　小池　隆昭（５部）
情報の共有ということ　朝倉　一善（５部）
君子たる者、未来を考えるゆとりを持とう　板花　哲夫（６部）
高校生科学コンテスト　岩本　光正（２部）

反戦平和という願い　148

一色に染めあげるな　三浦　一洋（２部）
戦後日本の原点　丸山　芳高（１部）
平和運動は生涯の課題　岩波　一吏（１部）
飽食も飢餓も日常箱眼鏡　窪田　　敏（５部）
北東アジアの平和と安定を日本の外交で　伊藤　正陽（５部）
８月 15 日の過ごし方　山田　雄一（２部）
反戦平和という願い　河西　朝雄（３部）

清陵の思い出と仲間たち

新入生歓迎会や試胆会から始まる地方会の思い出が多くの人の強烈な印象として残っている。第Ｉ部も含めて名前の挙がった地方会は南陵会、黎明会、親友会、高陵会、西竜会、永明学友団などである。地方会を通して得られた先輩、後輩という縦系列の人間関係を学ぶことがその後の人生に大きな影響を与えた。その地方会が２０１３年３月に廃止されたことに惜別の思いを寄せる。

部活動も青春の１ページである。名前が挙がったのは運動系が、陸上競技、端艇、柔道、剣道、籠球、排球、庭球、卓球、バドミントン、山岳の各部。文化系が、生物、写真、無線、心理学研究、物理、地歴、美術、天文、社会、放送の各部。それと軟弱映画同好会。

永明学友団

宮坂　和生（１部）

清陵入試合格発表の早朝（当時は早朝５時頃のラジオの発表であった？）「おめでとうございます」の掛け声と共に先輩の皆さんの歓迎会及び試胆会への案内通知の配達。驚いている間もなく歓迎会での豚の頭との対面や闇カレーでの歓迎・・・時を待たずの試胆会での手荒な肝試し歓迎など中学校を卒業したばかりのまだ幼さが残る人間にとって未曽有の出来事であって困惑の極みであった。これが永明中学卒業生の地方会「永明学友団」との出会いであり、その後とっぷり浸かっていく事になるのである。

永明学友団は６０人前後の地方会だったように記憶している。勿論全員が参加しているわけではないが殆どの永中卒業生は参加していた。活動も幅広く月例コンパや他地方会との交流懇親会、又年一回「永明学友団誌」なる機関紙の発行等密度の濃い活動をしていたように思える。

そしてこの地方会活動こそが私に先輩、後輩の縦系列の人間関係を教えてくれたと考える。その地方会組織も２０１３年３月に廃止されたと聞き残念でならない。時代と共に変化していく事ではあるが、益々仲良しグループの横系列の人間関係ばかりになるのではないかと危惧する。

試胆会

小池　隆昭（５部）

もう半世紀余りも前のこと。場所は富士見町乙事。「高陵会」の試胆会。夜も更けた頃に1人ずつ呼ばれた。「この道順で行け。途中で先輩が待っているからな」の次の一言、「そう言えばこの辺り、江戸時代は罪人の首切り場だったらしい」が効いた。何か出そうな気がして暗い夜道を小走り。やにわに先輩から呼び止められた。言われた通りに歩いたら落とし穴だった。松の大木に抱き付かされ、お前はセミだ、鳴け、飛べ、などと無茶を言われた。次の先輩は静かに座っていた。なぜか近くには一升瓶。目の前に置かれた丸い石を抱かされた。「重いか？」。「少し重いです」。「それはお前が今までに犯した罪の重さだ。さあ、どんな罪を犯したか言ってみろ」。在ること無いこと言わされて閉口した。

「腕立て伏せは何回できる？ 30回？ ではその倍やってみろ！」と言われ、さも”ごしたそう”に60回やった。「やればできる。な！」と励ましてくれた先輩は優しかった。控えめに答えたことが後ろめたかった。

今思えば、大きな落とし穴を掘って迄、後輩の歓迎準備をしてくれた先輩が無性に懐かしい。無茶と思えた洗礼も大して罪のないことばかりである。先輩との距離が一遍に近づいたと思う。試胆会の様な伝習は廃れたとしても、自立心の芽を育む新入生と、その芽を膨らませた先輩が心を通わせ、清陵生活を自由闊達に楽しんでいるのならそれで良い。

地方会「西竜会」の思い出

山崎　和彦（６部）

清陵から地方会が消滅したとの話を聞いた。残念な話である。

地方会といえばそれぞれの特徴があり、新入生歓迎会での楽しみの一つであったが、我が岡谷西部中出身者の「西竜会」も一見やくざの集団のような名称であるが皆気持は優しくて、何かにつけ公民館や集会所に集まっては夜遅くまで（朝まで？）しゃべり耽った。そこで覚えたものは酒と煙草と歌であった。部屋の電気を消して自分とは関係のない一高や三高の校歌や寮歌。その他琵琶湖周航の歌、アザミの歌、再会、北上夜曲なども覚えたが何といってもそれ以上に替え歌（春の歌）は強烈であった。女の子と手も握ったことのない純真無垢の少年には歌いながらも胸が高まり、清陵生がこんな歌うたって良いのかと思いつつも何故か素直にインプットされていった。数え歌各種、アレシチョル、へその下シリーズ、大好き様・・・。数え上げたらキリがないが今でもある程度は歌える。

大学に進み部活や寮生活での飲み会で、新人の頃は先輩から酒の飲み干しと一芸を強要されるのが常であったが、その時これらの歌を披露すると大いに喜ばれ何かと他の面でも可愛がられた。全国には色んな替え歌がありレパートリーも増えていった。社会人になっても同様で、カラオケが世に出るまでの手拍子で歌う飲み会では宴会盛り上げ係に指名された。まさに芸に身を助けられた一面であった。

「湖周マラソン」

松木　敏博（１部）

校内ではトップの長距離ランナーでした。インターハイなどの対外試合では、南信大会でポシャッテいるような状態でしたので「井の中の蛙」ランナーと言えます。

そのため、「湖周マラソン」では、その前の２学期の体育の授業のマラソン期間も含め、苦しかったという思い出ではありません。一生懸命走った多くの人は苦しかった思い出かもしれませんが・・・・・・。我々が体育で走った二葉高校上の立石町までのコースは今でも使われています。

体育の毎回のタイムトライアルで、どうしても自己記録が更新できない友人がいました。その人の伴走をして、ペース配分を気遣い励まして走り、結果自己新を出させて喜ばれたことがありました。また、他の友人は 3 年生になって、初めて「湖周マラソン」をゆっくりではあるが、歩かずに走り切って目標達成が出来たと報告してくれ、よく頑張ったと二人で大喜びをしたこともありました。

人には、得意不得意がありますが、自分としては簡単な楽なことであっても、そうでない人も多く、持ち味の大切さや目標の達成感を味わうことの心地よさを知ることが出来ました。４０歳代から再び「諏訪湖マラソン」に挑み 15 回位走りましたが、楽しいより苦しいことが多く、高校時代の楽に走れたことが、夢の様でした。

庭球部インターハイ南信地区大会団体戦優勝

横内　孝文（７部）

中学の時から清陵に入ったらテニス（軟式庭球）をやりたいと思い、入学して直ぐ庭球部に入った。1 年生の時は球拾いと素振りばかり、早く上級生になりたいと思った。運動神経が良い方ではないので、その分必死に努力した。

1 番の思い出は、３年生のインターハイ南信地区大会団体戦で優勝したことだ。決勝戦の相手は岡谷南、いつも通りのやり方では絶対勝てない。そこで、勝つために相手の裏をかき、試合前に提出するオーダー表の順番を変えた。相手のオーダーはいつも通りＮＯ１、ＮＯ２、ＮＯ３、こちらはＮＯ３、ＮＯ１、ＮＯ２。１組目負け、２組目勝ち、ここまで予定通り、そして３組目は自分のペアが相手を倒して２勝１敗で勝利した。頭脳プレイの優勝だった。さて県大会は公休で遠くへ行けるぞと期待していたら、なんと会場が地元岡谷市営庭球場でがっかりした。県大会は 1 回戦１－２で南佐久実業に敗退して終わった。

当時は、生意気にも自分ではある程度うまい積りでいたため、ペアを組んだ後衛の高木昭君（故人５部）とは良く衝突した。今振り返ると下手くそだったことが分かる。こんな私と辛抱強くペアを組んでくれた高木君に、感謝と足を引っ張ったお詫びをしたい。

また、１浪して学生寮長善館に入ったら、宿敵岡谷南のＮＯ１前衛が、同期入館でびっくりした。縁は異なものである。

みんな、「18 歳」

山田　雄一（２部）

「マスターズ甲子園」という野球大会があることをご存知だろうか。

すっかり、おじさんｏｒお兄さんの元高校球児たちが「高校野球の聖地」で感動のプレーに酔い痴れる一大イベント。長野県勢は昨 2018 年 11 月の第 15 回大会に、予選参加 25 チーム（清陵は未加盟）から最低１名は入る計 50 名の県選抜チームで初出場した。

県予選の主催と本大会へのチーム派遣を行なうのが「長野県高校野球ＯＢ・ＯＧ連盟」。新聞社で長らく高校野球を取材してきた当方は、懇意にしている松本深志野球部ＯＢ会長で連盟会長の池口良明さん（68 歳、同い年）のお声がかりにより、2017 年の準備段階から連盟役員の一人として活動をともにしてきた。思い入れは深いものがある。

県選抜チームには高校時代に甲子園の土を踏めた人もいたが、大半は夢を果たせなかった面々だ。90 分の時間制限ルールで奈良県代表に 7－0 で快勝。喜びの爆発あり、感激の号泣もあり。誰しもが、体形はともかく「18 歳の顔」――。つくづく、そう感じた。

そして、連想した。そうだ、これは清陵の同期生たちと 20 年来かさねている集いの場と同じではないか。卒業後も頻繁に行き来している親友がいれば、ふだんは音信が途絶えていても再会でたちまち昔の記憶がよみがえり、「オレ、お前」のやり取りになる仲間もいる。旧友の良さ、満喫なのだ。卒後 50 年の７月６日、みんな、「18 歳」に戻る。

亡き友たちの顔・顔・顔

山田　雄一（２部）

清陵同期の事務局８年目。仲間の相互交流が進む一助になれば嬉しいと思っている。

この立場で何よりつらいのは、同期生の訃報に接することだ。前回 2017 年（平成 29 年）の「清陵入学 50 年・65 歳の集い」以降でも、１部の永井孝君に続き２部の林英美君が昨年亡くなった、との知らせが届いた。２人は２年前の出席者で、その時の顔がありありと目に浮かぶ。永井君は久々の参加だったが、しばらく経ってから、歓喜の時間だったと丁寧なメッセージにまとめたメールを送ってくれた。林君は体調が良くないと言いつつ、「みんなに元気もらったよ」と笑顔で話した。今年は５部の平泉永幸君も他界した。

同期 273 人のうち、ただ一人、在学中に亡くなった４部の林正昭君をはじめ、わかっている物故者は 28 人を数える。実に 10 人に１人という割合を占めているのだ。

いつか会える、しかし、なかなか会えない。せめて集いの日を生かしてほしいと願う。

７月６日には、今は亡き友たちの冥福を祈って黙祷を捧げよう。（敬称略）

【１部】永井孝、山口次夫【２部】小口佳広、林英美、山口和夫、横山和夫【３部】北沢博之、瀬戸守男、宮坂寛美、横内寛人【４部】林正昭【5 部】小林（旧姓小池）恵子、小平治郎、高木昭、武井一俊、武井孝博、平泉永幸、宮沢良男、両角清隆、脇坂友雅【６部】牛山純男、洞沢（旧姓名和）孝二、柳沢公正、湯田坂一利【７部】小口賢治郎、田中和彦、平谷豊、山田晃

校　訓

渡邉　博保（４部）

千葉大学園芸学部を受験し一度は失敗したが、経済的余裕がなく自宅浪人をして再度受験した。数学や化学は得意だったが、国語は苦手で古文や漢文はどう勉強してよいかお手上げ状態だったのでそれらの問題は半ば投げていた。

ところが本番の入試で、漢文問題を見て驚いた。何と「自反而縮、雖千萬人吾往矣」この意味を記せであった。諦めていた漢文問題に、これしか知らない母校の校訓が出題されたのだ。こんなラッキーなことが有るとは、神様を信じて感謝するだけだった。合格後、清陵の同期とこのことを改めて話さなかったが、覚えているかなあ。

そしてその後の人生に、校訓の精神が強く影響した。最初９年間は飼料会社に勤め、その後宮城県で２８年間高校教諭をしたが、逆境の時でもストレスを感じることなく、よく考えて自分が正しいと思ったことをやればいいのだと、強い意志を持って臨めた。丁度退職の年に、百年以上農業教育の歴史を刻んだ高校で最後の農業科生徒を卒業させ農場を閉鎖することになり、孤軍奮闘した最後の行動は校訓が自分の心を支えてくれたからできたことであった。

清陵と私

小松　大蔵（4 部）

記念誌第 1 回の卒業写真の諸君で、卒業後も麻雀をしたり、酒を飲んだりしている諸君を１部から７部まで確認してみた。　（同窓会など全体的な集まりの後の二次会などは除く）合計１６名である。さらに男子で撮影時に学生服で写っていない諸君を数えてみると、*1 部 10,　2 部 9,　3 部 7,　4 部 13,　5 部 10,　6 部 6,　7 部 5*, 合計６０名にて４部（私　含む）がダントツに多い。写真のコメント（平林重夫君）のように、４部は個性的な生徒が多かったのか？

先に述べた、卒業後も麻雀や酒の付き合いのある諸君で、１６名中１３名が学生服で写っていなかった。

清陵生としての服装に無頓着な者、あるいは高校生より上の年齢の服装をまねていた者、あるいはファッションセンスに敏感な諸君などなどだったのか？

私は、自然と（考えなしに）既成概念にあまりとらわれない諸君と気があったのか？

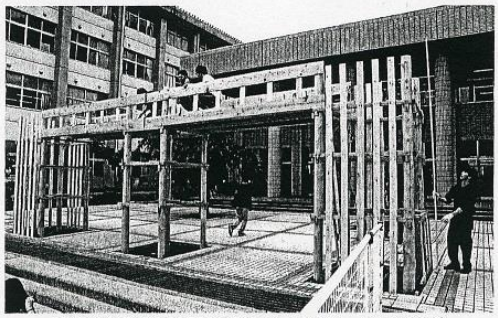
それとも、その頃の世間の常識、高校生像、日本の未来、自分の夢、目標などに無頓着なただの１８歳だったのか？

卒業後５０年を過ぎた今では、本当のところは分からない。

諏訪清陵の校風 100年の伝統に幕

自治実践の場 出身地域ごと「地方会」

活動停滞 生徒自ら解散



7月の文化祭に向けて進むアーチ作り。かつては地方会が担っていたという＝諏訪市の諏訪清陵高校

諏訪清陵高校（諏訪市）で100年以上の歴史がある出身地域や中学校ごとの親睦団体「地方会」が3月末で解散したことが10日、分かった。生徒同士が学年を超えて論談したり、新入生に校歌を指導したりと、自治の伝統を支える組織だったが、近年は活動が停滞。上級生から下級生への威圧的な指導などを疑問視する声が大きくなり、生徒の総意で解散を決めたという。

「清陵八十年史」（198 1年発行）によると、地方会の発足は1906（明治39）年ごろ。寄宿舎生活をしていた伊那地方出身の生徒が「伊那会」を結成。茅野市出身者らの「山浦健児団」、諏訪郡箕輪町出身者らの「南諏会」などが次々と生まれた。徹夜で天下国家を論じたり、会誌を発行したりし、自治の校風を実践する場だったとされる。

しかし、高校進学率の上昇などに伴って活動は娯楽的傾向が強まり、1970年代以降は解散論がたびたび浮上。解散まで「諏訪西鳳会」（諏訪市諏訪西中出身者）、「宮川攻学会」（茅野市長峰中出身者）、「大岡谷西龍会」（岡谷市岡谷西部中出身者）など17団体があったが、近年の活動は新入生歓迎コンパや文化祭での劇などにとどまっていた。地方会が担ってきた文化祭の準備も、文化祭実行委員会が行うようになった。

同校と学友会（生徒会）によると、解散をめぐる議論は昨年度に活発化。学友会執行部の会報や談論会で議論されるようになった。昨年11月ごろには地方会の代表17人と学友会長でつくる「長会」による協議が始まり、当初は地方会に対する愛着や長年の伝統への敬意から存続を求める声が多かったという。

これに対し、ことし2月に学友会が行ったアンケートでは「地方会が昔のような役割を果たしていない」といった否定的な意見が噴出。同月下旬の学友会総会で、賛成多数で解散が決まった。

3年の男子生徒は「活動の幅は狭まっていたが、地方会が清陵の良い伝統を継承してきた部分はある。学年を超えて自分の意見を言うことのできる雰囲気は、談論会や（生徒個人が校内に張り出した

上下関係 強まる抵抗感

出身地、出身中学ごとに1～3年生が結び付いた諏訪清陵高校の「地方会」のような集まりは、県内では他に松本深志高校（松本市）の「郷友会」がある。同会も旧制中学時代からの歴史を持つが、諏訪清陵高と同様、活動は下火という。両校ともに生徒の間で先輩、後輩の上下関係への抵抗が強まっている他、活動の安全をどう確保するかに、学校側が注意しなければならなくなった事情もあるようだ。

数十年前まで同様の集まりがあった高校もあるとされるが、県教委は「両校の他に聞いたことがない」。多くの高校は部活動や生徒会活動の他は、上級生と下級生が交わる場はあまりない。

男子生徒だけの旧制中学時代の名残とも言える活動で、諏訪清陵高3年の女子生徒は「新入生歓迎コンパで先輩から厳しいことを言われるなど、良い思い出がない。生徒の半分は女子なのに、男子校のような乗りに抵抗があった」と振り返る。

松本深志高「郷友会」も活動下火

松本深志高によると、郷友会の活動も新入生歓迎などの「コンパ」、夜通しで長距離を歩く「夜行軍」、文化祭「どんぼ祭」で披露する「燈ろう」作りなど、かつては活発だった。今も約30の郷友会があるが、近年はコンパなどを行うための学校への届け出はほとんどないという。同校2年の男子生徒は「クラスや部活のつながりの方が強い。郷友会に参加する意義を感じない」と話す。

松本深志高OBで同校生徒会担当の石川裕之教諭は、1992年に飯田高校（飯田市）で上級生が下級生を刺殺した事件などを契機に、「安全や人権的な観点から、郷友会などの自主的活動を生徒だけに任せていいのか議論になった」と指摘。「学校側はより注意を払うようになり、徐々に活動の幅が狭まった」と話している。

登校長は「時代の変化でやむを得ないと思う。生徒の考えを尊重した」と話している。

2013年6月11日付
信濃毎日新聞

なみの会総勢２７３名の
出身中学別勢力ランキング
（数字は人数）

1.上諏訪中　３４
（上諏訪学生団）
2.下諏訪中　３３
（黎明会）
3.辰 野 中　２２
（上伊那学生団）
4.岡谷南部中　２１
（南陵会）
4.永 明 中　２１
（永明学友団）
6.諏 訪 中　２０
（諏訪中学会）
6.岡谷北部中　２０
（親友会）
8.長 峰 中　１６
（攻学会、玉泉会、金鶏会）
9.諏訪西中　１５
（鳳会）
9.岡谷西部中　１５
（西竜会）
11.富士見高原中　１４
（高陵会）
12.岡谷東部中　１０
（硯友会）
13.茅野北部中　９
（山浦奴哲歩々会）
14.両小野中　５
（朋友会）
15.富士見南中　４
（南嶺会）
15.原　中　４
（興隆会）
その他　１０

理系と文系

清陵の特徴は部とは別に授業コースがあることである。希望大学は文系か理系か、国立か私立かなどを元に、２年から理系と文系のコースに分かれ、a グループ、f グループなどと呼ばれていた。そのため、部の仲間との結びつきは、１時間目と２時間目の間にあるショートホームルームである。それでも部の結びつきは強かった。

３年になると、私立３教科狙いの諸君は物理や数学の時間に世界史や英語などの内職をしていたようだ。何も苦難の５教科をやることはなく、その後の人生を見れば「先見の明」があったということか。

教科・科目についての雑感

武居　良明（１部）

清陵時代は理系科目が得意で英語もまずまずだったが文系科目はまるで駄目だった。論理的な思考はできたが直感的な思考に欠け、典型的な左脳系だった。

企業で研究開発・生産に従事している間は理系の力を発揮できたが、本社に転勤するとスキル不足が露呈した。経理・財務は何とか勉強したが英会話が駄目だった。文系出身者の中には頭の回転や直観力に優れた輩が多かった。欧米の販売会社で実践を積んできた連中は英語で思考できる能力を持っていた。また中国の生産会社に３年も赴任していると流暢な中国語を話せた。若いうちに海外経験を積めなかったことが弱点だった。

今の教科・科目を見ると英会話と情報が加わっており、グローバルな IT 時代を生きていくうえで大切であるが金融教育も必要と考える。昔から変わらない基本科目でも内容は遥かに進んでいるようだ。微積分、物理法則や化学反応を日常生活で感じることはないが、技術開発に携わる人にとっては重要である。今の公民（現代社会、倫理、政治・経済）は選択しなかったが、社会人として生涯に亘って学ぶべき分野であろう。

どの科目であっても学んで無駄になることはない。その人の置かれた環境と年代で役に立つ分野が変わってくる。今の私は年金生活を送っているが、投資データを Excel VBA で分析するなど、金融経済やプログラミングの勉強が役に立っている。

風変わりな授業風景

帯川　利之（３部）

西欧の歴史に良くも悪くも名を残した人物に，イギリスのチャールズ１世，フランスのシャルル１世，スペインのカルロス一世がいる．驚くことに，イギリスでは，皆，チャールズ１世と呼ばれる．日本では，民族や言葉の違いを尊重し，漢字を使う東アジアの国や地域の首都であっても香港（ホンコン），台北（タイペイ），平壌（ピョンヤン）のように呼ぶ．空港だって仁川（インチョン）空港だ．高校 1 年の地理の授業まで遡ってみると，中国の地名を，杭州（ハンチョウ），寧波（ニンポウ），重慶（チョンチン），成都（チョンツー）のように習った．とはいえ，日本流をここまで徹底すべきか．いやはや難しい問題である．

話が変わるが，NHK のブラタモリで「チャート」なる岩石が話題になった．その岩石名を聞くのは二度目であり，直ぐに牛山正雄先生を思い出した．高校に入学したての地学の授業で，岩石を見てその名前を当てるテストがあったが（ブラタモリと同じ！），そこにチャートも並んでいた．生物の教師でもあった牛山先生は，チャート（放散虫や海綿動物などの殻や骨片が海底に堆積してできた岩石）にことのほか思い入れがあったように感じた．

「徹すること」の必要性

藤森　英幸（２部）

清陵へ入ったものの部活が決まらない。当時友人から無理やり誘われて黒〇〇ちゃんが「心理研」へ入ったからお前も俺と一緒に入れということになった。心理学の本を数冊読んだが「心理研」で何を学んだのか記憶にない。ただ黒〇〇ちゃんのことは覚えている。

２年生、３年生と将来を考える時期がきた。３年間ホームルームは変わらなかったが、勉強のグループは成績により（？）都度変わった。ａグループ、ｆグループというのは記憶にある。今「なみの会」の幹事のなかにその仲間もいる。

希望大学は文系か理系か、国立か私立か、受験科目は全科目か３科目狙いでやるのか等鑑みるなか大学で何を勉強するのか、自分はどうしたいのか、何をしたいのかをよく考えるべき時期であった。３年当時、物理の授業中英単語の自習を行っていたことまた数学の授業中には世界史の勉強をしたことを覚えている。物理・数学の成績は散々であった。同じグループ内では同様のことをやっていた仲間が多数いた。結果として世界史・英語は校内試験では５０番以内に入り、大学受験には多いに役立ち希望する文系・私立大学、またその大学を代表する学部・学科へ入学することができた。そのことがのちの仕事ないし人生へと結びついている。３年間好き勝手にできた「諏訪清陵」にて自らの方向性を見極め、物事に徹することが必要だと感じまたやってきたことを誇りに思っている。

「自分を枠にはめず、あらゆる可能性を追求しよう」

伊藤　俊巻（３部）

私は清陵在学中、数学など理系科目が苦手で高３時のコース分けでは悩むことなく文系を選択し、大学は経済学系に進みました（「数学が苦手だから経済へ」は大変な間違いでしたが)。そして大学のゼミの先輩に勧められるまま某都市銀行に就職しました。
在職中の昭和５０年代以降は日本の社会・経済が激動し、業務内容や組織体制が大転換を余儀なくされ、入社時には全く予期しなかった体験を経て定年を迎えました。今改めて振り返ると「激動の時代に何とか無事に卒業できた」という安堵の気持ちの一方で「大事な進路を安易に決めたのではないか」という後悔の念があります。このような心境の中で、これからの社会を担う若い世代の方にお伝えしたいのは、「自分はこういう人間だからこの方向しかない」などと自身を一つの枠にはめず、様々な物事への関心とチャレンジ意欲を持ち、様々なタイプの人と交流して意見交換や議論をしてほしいということです。

以前の社会・経済には様々なルールが存在し、各自の活動範囲や役割分担が理系・文系別などに区分できましたが、現在はその緩和・撤廃が進み、定型・画一な対応が難しくなっています。仮に私が銀行に戻っても様相が一変していてかつての経験や知識は殆ど役に立たないでしょう。これから更に変化のスピードを増す社会にしっかり立ち向かうには、繰り返しになりますが「自分を枠にはめず可能性を追求すること」が必要と思います。

理系と文系

河西　朝雄（３部）

清陵では２年から理系と文系のコースに分かれた。私は数学や物理が好きだったので理系を選んだ。文系は数学ができない人という偏見を理系はいだいていたように思う。しかし世の中に出てどっちが活躍しているのだろうか。理系は手に職があるのでその分野では頑張っているのだが、表舞台に立つのは文系の方が目立っているように思う。なみの会の幹事をみても大半が文系である。国立大学法人評価委員会が 2014/8/4 に出した答申を受けて、文部科学省は国立大学の文系学部廃止の方向に向けてかじを切ることになった。国立大学の学科別割合はおおよそ理系が６割、文系が４割である。理系の内訳は工学 30%, 理学 7%, 農学 7%, 医学 13%。文系の内訳は教育 15%, 社会科学 15%, 人文 7%となっている。学問の「のびしろ」の違いがあることは事実である。工学や医学などの理系（自然科学系）の学問の進歩を目覚ましいけれど、文学、哲学、教育学などの文系（非自然科学系）の学問は停滞しているのではと感じる。不確定要素の大きい人間が深く関わるできごとが研究対象のため、数理的理論・実験が困難な分野が多い非自然科学系の学問の「のびしろ」が小さいのはしかたないことである。しかし「のびしろ」が少ないからと言って、役に立たないものは廃止というのは乱暴な考えと言える。世の中は無駄があってこそ味わいがでるものである。こんな研究が世の中の役に立つのかという研究をやる価値は十分ある。

これからを生きる

還暦を過ぎ、清陵卒後５０年を迎えた我々に残された日々は少ない。健康でいろいろなことができるのが８０歳までとしたら、６０歳から８０歳の２０年間は、今までの３倍のスピードで過ぎて行く。つまり１年が今までの３倍の重みがあるということである。「年を取るほど１年が早く感じるようになる現象」を心理学的に解明した法則をジャネの法則という。

悠々自適に、残された人生を穏やかに歩む人もいれば、まだ若者ような夢や情熱を持って「理想の花の咲かむまで」の言葉のように、何かをしようとする人もいる。いずれにしろ健康でいなければならない。

健康のためにしていること

清水　敏夫（２部）

タバコは３０年近く続けていましたが、５０歳を機会にすっぱり禁煙できました。自分でやめると決めて、できました。きっかけは色々あったのですが、一番は同じ部屋ですやすや眠っている生まれたばかりの孫の顔でした。子供と同じ部屋でもマイカーの中でも、平気で吸っていたのに・・です。「孫の健康に責任は取れないな」と感じた瞬間でした。その孫がもう高校２年生です。禁煙あるあるで、その後やたら太りました。

健康のためには下手なゴルフと家庭菜園ですかね。ゴルフの方は始めて４０年近いのですがドンドンスコアが悪くなります。昔は９０台が普通だったのですが、１００を切れなくなり、１１０の王に名を連ね、今や１２０がやっとです。諏訪のコース、難しそうです。山岳コースなのでしょうね（～～；

家庭菜園は、元々今は亡き父親がこちらに同居した時の暇つぶしにと、木津川河川敷に１区画借りて始めたものです。父から手ほどきされ、その後随分と区画を増やして今日に至り、老人の趣味としては恰好のものです。近年は食べ物屋を自営している次男の店に「自家製野菜」として納品に精を出す日々です。

ホント、晴耕雨読が長生きの秘訣と思って、岡谷より「田舎っぽい」木津という田園風景の中で暮らしています。

68歳の「キョウヨウ」

山田　雄一（２部）

44年間にわたった新聞社生活を昨2018年12月で終え、高校卒業以来49年ぶりの岡谷市民に復帰。退職を機に構えた「終の棲家」で夫婦の新しい暮らしが始まった。

解放感のサンデー毎日に浸れるかと思いきや、生活ペースがつかめない。1カ月、2カ月、３カ月……。家では「ボーちゃん」の呼び名が付く有様で、何とも情けない。

そんなとき、退職後に肝要なのは「キョウヨウ」という話を耳にした。「キョウイク」も大事だと。えっ、今さら教養？　教育？　否、そのこころは「今日の用事」であり、「今日行くところ」なのだという。そう言われてみると、去年までは埋まっていたスケジュールノートは真っ白に近い。なるほど。さて、どうするか。でも、妙案は浮かばない。

妻は家の前にある小ぢんまりとした畑で野菜づくりを始めていた。実に熱心なのだが、関心がない当方は「手伝わないからな」と約束を取り付けてあった。それでも窓の外で日ごとに展開される野良姿を見るにつけ、「あれが食卓に上ったとき、後ろめたかろうな」という心地悪さが募るようになってしまった。ついに、「少しだけ、オレもやろうか」。

ところが、種が芽を出し、苗が育ち、それを見ていると何とも言えない愛着がわいてくる。水やりや草取りが苦にならなくなった。花壇の世話も加わった。あのズボラ人間にしてこの変化。我ながら驚くばかりだ。68歳の「キョウヨウ」が、ひとつ確立された。

野菜づくりと旧優生保護法

山田　雄一（２部）

「せっかく野菜づくりするんだから、岡谷市が募集している研修農園に参加して勉強しようと思うんだけど、一緒に行かない？」　そんな妻のひとことで、今春から隔週の日曜日、諏訪湖畔に用意された農園でイロハから学ぶことになった。いささか気が重かったものの、やってみると、このトシで新しいことを学ぶ喜びが体感できて、ありがたい。

ある日、ＪＡから派遣されている担当指導員が「間引き」の大切さを説いた。ホウレン草にしろ、小松菜にしろ、順調な生育を促すために、畝が密集してくると適宜、おろ抜いて隙間をつくってやる。その際、育ちの良くないものから先に摘み取る。野菜づくりの世界では常識とされている手順だ。抜いたあと、捨ててしまわずに食材として生かす。

しかし、その説明を聞くうちに、複雑な気持ちが湧いてくるのを抑えられなかった。

ちょうどその頃、かつて旧優生保護法（1948～1996年）のもとで不妊手術を強制された障害のある人たちに対する救済法成立や訴訟判決のニュースが飛び交っていた。理不尽な仕打ちをされた人々の苦しみが、間引かれる野菜たちの姿と重なったのだった。

もちろん、同列に論じられる話ではないが、旧法が産み出される背景にあったとされる優生思想は、野菜の間引きほどに認識されていたのではないか、と考えてしまう。

今の自分にできるのは、抜き取った野菜に感謝を込め、ありがたく食することだ。

高齢社会雑感

増澤　利定（２部）

数年前から、町から地区に委託されている介護予防活動のボランティア活動に参加している。６５歳以上での参加ということで、私はまだ若い方であるが、運営スタッフとして、また、対象者としても参加している。自分自身が介護予防活動の対象になるような年齢になったことに改めてびっくりしている。

「２０２５年問題」とよく言われる。２５年に団塊の世代（私たちの少し歳上の方々）が全員７５歳以上の後期高齢者になり、社会保障費の大幅増が予想されている。我々にも何らかの余波が来ることは必至である。いずれは我が身に降りかかる高齢社会の余波である。今から２０年後位になると社会保障費という大きなお荷物が、かなりのスピードで減っていくと思われるが、残された皆さんにとって少しは「よい社会」になるのだろうか。

生活する環境が、同年齢以上の高齢者の方々になることが多く、交流範囲も狭くなってきていることを感じている。自分自身が若さ？を吸い取られて？いるように感じる時もある。今後も気持ちだけでもより若く、健康で、出来るだけいろいろな地域活動やボランティア活動に参加したいと思う。

「天国に貯金をしている」という言葉をテレビで聞いたことがある。今、できることを続けていくことが、「徳」？を貯金していく、ということか。

長男のパラリンピック４大会出場

小池　忠男（２部）

昭和 54 年の 2 月（＝当時 27 歳）で結婚し、1 女 3 男に恵まれました。長男の名前は清陵時代の親友、坂井明英君と原聡君との 3 人の中で「男の子」が最初に生まれたら「岳」という字を使う約束ができていて奇跡的に自分のところに回ってきた経緯があり「岳太」（＝たくましく山のように育ってほしい）とつけました。そんな彼が体育教師を目指して進んだ日本体育大学の 1 年生の 10 月（2002 年）に交通事故に遭い、九死に一生を得ましたが左腕片麻痺（＝脊髄の中で腕への神経が全て断裂）で障がい者になってしまいました。命だけは奪われずにこの世に生還した彼を見て我が夫婦は「生きていただけありがたい。彼の好きな人生を歩ませたい」と思いました。長男自身の人徳（周りの人々に大変好かれる性格）もあり、大学で様々な人々の出会いをいただき、パラリンピックの冬の競技である「障がい者アルペンスキー」に出会いました。2006 年イタリアトリノ、2010 年カナダバンクーバー、2014 年ロシアソチ、2018 年韓国ピョンチャンと全て家族で応援に行かせてもらうことができました。斜度 40 度、滑走スピード 126km/時速という場面を涙ながらに観戦し、生きていること、目標に向かって突き進む人間の力の素晴らしさなどを改めて教えてもらう尊い経験もさせていただきました。**「人は財なり」「失われたものを数えるな、残されたものを生かせ」**と長男から今、教わっている 67 歳の現在です。

人との出会い

山田　文雄（４部）

幼稚園　恐い先生もいたが、優しい一番若い先生の大きな腰に纏わりついていた四歳児。
小学一年　優しい男の先生。　二年　卑怯な振舞いにて 23 歳の女の先生に拳骨を貰った。
三年頃　粗暴な体育の教師に些細なことで顔を殴られて今でも犬歯の先は欠けている。
高学年　担任の先生の煙草（しんせい）を授業中に買いに行くのも度々だったが、八島ヶ原湿原に自然観察に皆を引率するなど良い先生だった。ビールの大好きな先生でもあった。
中学三年　真後ろに居たのに気付かず、良からぬ事をして無言で拳骨をいただいた。先生は柔道家でもあったので非常に効いたのを覚えている。二つの拳骨には教育の一環と感謝。
高校　白沢先生　「ゴタ」な生徒を一貫して庇いきっていただいた。大阪から上田の工場へ出張した朝、篠ノ井から通勤列車を乗換え席に座ったら目の前に居られた。信学会の校長で講師の給与水準等で悩みもお有りでこの時間が一番ホットできると仰っていた。
お目にかかれる最後になってしまったが、最高の恩師と感謝している。

社会人になり、青森や鹿児島が嫌いになりそうな同僚に巡り合ってしまったこともあるが、社内、社外の良い方にたくさん知遇を得た。巡り合いは運不運任せと思っているが、良い所は素直に吸収し、悪い所は反面教師として今後も生きていく積りである。
天秤座・O 型・誕生日・四緑木星の運勢等　気楽に自分に都合よく常に解釈している。

諏訪の充実時間とウェルネス・リトリート

長瀬　潔（２部）

電車はレールの上を走っている。レールや電車の保守はなされ延伸も計画される。しかし目的地は的確か。乗客は増えていくのか。これが今諏訪で問われていることではないか。行政はレールや車両の整備をする。必要である。しかし車両に乗る乗客は減っていき、整備のための税収も減る。今何が必要か。整備と税収と共に、そもそも乗客が増えねば、ことは意味をなさない。人口増もだがそれ以上に交流人口増の位置づけが肝要ではないか。外来客は、魅力ある途中駅から乗車し、わくわくする最終目的地に期待をかける。では駅の魅力とは。駅そのものの如何ではなく、その駅に下りてどんな魅力に出会えるかが問われている。諏訪湖・霧ケ峰・大社はキラーコンテンツとはなりにくい。地元コンテンツを楽しむ住民の存在があってこそ、地域の対外的魅力も形成されるのではないか。

充実時間・・・地域住民がいかなる充実時間を持っているのか。地元資源がそれにいかに寄与しているのか。個々バラバラではなく、それらの諏訪充実時間がどのように共振し、連携し、協創しているのか。その実状を発信するポータル＆ステージの存在が必要。住民の充実時間発信のステージ、かつ地域の固有コンテンツの発信と連携の場を設置し、更に進んで温泉・自然・健康・文化・産業をからめたウェルネス・リトリート・ホームをめざすことが、外来客への目的地提示とかっこいいふるさとづくりとなるのではないか。

人生「芸は身を助く」

久保　正法（２部）

一生楽しめる趣味を持つべきだと思い、実践しています。若い頃は、近所の子どもと川で泳いだり、チャンバラごっこをしたり、よく遊びました。中学時代には、野球やスケート（校庭に水を張りリンクにした）をよくしました。職場では野球、テニス、サッカーをよくしました。しかし、50 代になってすぐ、大病でスポーツは諦めました。

中学校時代にブラスバンドが開設され、色々な楽器を試すことができました。病気で首が回らず、フルートが吹けなくなりました。それでも、ギターが残りました。職場のマンドリンクラブでギターを弾きながら、衰えた筋肉のリハビリをしました。それを機会に、老人施設で歌の伴奏を始めました。「青い山脈」「リンゴの唄」「上を向いて歩こう」「高校三年生」「憧れのハワイ航路」「高原列車は行く」等の定番、その他いろいろと弾いています。施設利用者の方々は、歌い、思い出を語らい、一時を楽しんでくれます。

退職後に、老人が多いのですがギターサークルに入り、クラシックから歌謡曲まで楽しんでいます。最近の歌は、一つのオタマジャクシに多数の歌詞があり、古い頭ではついていけません。

墓場まで持って行ける楽しみを持ちましょう。

後悔の堆積ありて水温む

窪田　敏（５部）

実は僕、フクイチの中央制御室に入った体験あり。3.11 よりずっと前、政権側の出版社外注カメラマンとして軽く請けた。何の見解も持たずに臨んだ撮影だったが、安全神話の後押しに加担した者となってしまった。

断った仕事もある。広告代理店よりのＪＴ製品カットだ。フリーランサーの身だった故「都合がつかない」とでも当たり障りなく断れば良かったものの「わたしはタバコ大嫌い。引き受けません」と本音を伝えてしまった。マタニティ雑誌でも。取材同席の夫が妊婦の脇で喫煙、記者がそれに加わる。夫婦と別れた後でライターに苦言を呈す。案の定、その二社からの依頼は途絶えた。生来非喫煙者の僕があからさまに煙たがられた時代であった。

福祉作業所利用者の肖像写真を撮っていた際、動き出した手の仕草が素敵と連写モード。後にそれがご本人の拒否表示と聞く。無知が偏見を生むのですね。各人各様の喜怒哀楽を的確に撮りたい。その為には被写体となってくれる障がい者と過ごす時間を更に持たねば。そして、共生社会の一員にと僕もなれれば幸いだ。

岡本綾子の口から個人レッスンの申し出があった。ゴルフ番組にてスチールを担当してプロと親しい間柄に。若気の至りか、渡世術の無さか、有難いお誘いを遠慮してしまった。再会のチャンスには僕が彼女を連れて行こう、マレットゴルフに。

黄泉の同級会

窪田　敏（５部）

岡谷から東京都北区に移り住んだ。近くの東京外語大に小池恵子ちゃんが在籍していた。二人で上野の美術館を巡り、社会人になってからは彼女の勤める銀行に宮沢良男君と訪れ各々の口座を作った。やがて人妻となってからも、僕とは“級友„のままでしたね。

新婦の依頼で京都にて結婚式を撮影した。帰京後の写真チェックで小平治郎君の姿発見。連絡を取ると、新郎と京大学友であったとの事。清陵卒十余年後であったが、当日は彼もカメラマンが僕であったのに気付いていなかった。その後、真の再会は叶わぬままに。

横浜に移って間もなくの出来事。卒業生名簿を繰ると高木昭君の住所が隣の区とある。早速に電話を入れると、「昨日お葬式を……」。それは余りにも切ない訃報であった。

枇杷の花喪中はがきの束となり　　窪田 びん

武井孝博君の著書には豪華な撮影機材を前にした自撮りと思われる写真が載っている。彼の本業は新聞記者だがカメラの腕もなかなかだ。地元では写真家の異名もあったかも。それにつけても、僕の活躍も伝えておきたかった。内外を問わず【禁煙嫌煙活動家】の皆さんには、その支援（映像記録）に一役買い、同士として認識されている。この続き、何れ僕が訪れた際にしましょう。先に行った他の級友も集めて貰いたいが、メディアの仕事に就いていた貴君だったら幹事に最適かな。では、頼んだよ。

自分を変える勇気

根橋　文武（５部）

「平成」の時代が終わり、「令和」の時代が始まった。この「初め」「始まり」という言葉の響きはとても美しい。また、何か身の引き締まるような心地よい緊張感を覚える。

さて、長野県の「県花」になっている竜胆はとても美しい秋の花である。その竜胆を詠んだ「濃竜胆自分を変えてゆく勇気」というとても好きな句がある。中学校の教員であった時、折りにふれて生徒にこの句を語った。また、大学に職をおいていた時には、教員を目指す学生にもよくこの句を紹介した。

人間が成長していくためには時として、それまでの自分を変えていかなくてはならない。当然だが、そのためには「勇気と努力」が必要である。ちょっと難しいことや苦しいことから簡単に逃げてしまう、もう少しがんばればきっと道が拓けたはずなのに肝心なときにそのがんばりができない、よくあることである。だからこそ、その肝心の一歩を踏みとどまる、踏ん張る、踏み出す、そんな勇気を持って欲しい。その勇気があなたを変えてくれるはずである。そんな場面はきっとこれからの人生にいっぱいある。

「濃竜胆自分を変えてゆく勇気」・・・これからの時代を担う若者に贈る一句である。

小学校の先生はオールマイティーさが求められるが・・・

伊藤　正陽（５部）

小学校の教員はオールマイティーさが求められるが、それは難しい。何事も経験だ。

教員になって５年目のこと。学年主任が「菊の一人一鉢」を取り組もうと提案して取り組むことになった。菊作りは毎日毎日の世話が重要なのだが、何も知らない自分は枯れないようにと水やりは真剣にやったが追肥までは気が回らなかった。主任は「肥料も施せ」と言った気がしたが夏の生長期、それを怠った。夏休み明け、主任のクラスの菊は濃いみどり色の背丈のそろった菊に生長していたが、我がクラスの菊は肥料不足の黄緑色、背丈も短く惨めだった。生長を取り戻すことはできずに晩秋を迎えた。美しい花とは別世界の哀れな鉢になった。子どもたちに本当に申し訳ない思いをさせてしまった。

この学年を卒業させ、１年生の担任になった。１年生は一人一鉢でアサガオを育てる事になっている。夏休みは自宅で管理してもらったが追肥には気を遣った。夏休み明けに持ってきたアサガオの鉢の多くが葉が繁茂し花も沢山つけていて、これはうまくいった。植物は正直だと改めて思ったものだ。

猫の額ほどの畑で自家用の野菜作りを始めたが、これが昂じて今はかれこれ４０種類の野菜を作るようになった。種を蒔き、芽の出る瞬間を待つのが実に楽しい。猫の額では足りなくなり近くの荒れた農地を借りて作っている。これが老後の生きがいになった。

少年法適用年齢引き下げ問題について

北川　和彦（３部）

少年法の適用年齢を２０歳から１８歳に引き下げる法律改正が進んでおり、近々国会に上程される可能性があるとのことである。

この少年法改正は、全ての弁護士会がこぞって反対しているが他に目立った反対がなく、これを審議している法制審議会でも反対は弁護士会が主で、他に反対は少ないとのことである。知り合いの保護司の話では、問題であることは判るが、監督官庁の手前、政治的な発言は難しいとのことであった。

しかし少年事件は最近１３年間で７４％減少し、凶悪化もしていない。少年院出身者の再犯率は２０代前半の刑務所出所者の半分以下である。少年院送致者の半数は１８、１９歳である。適用年齢が引き下げられるとこの半数は成人の扱いとなって性格の矯正、環境調整等の立ち直り支援の機会が失われる。

家裁の保護処分は、７０年近い運用実績の中で少年の立ち直りに大きな成果を上げてきた。１８、１９歳には少年法を適用すべきである。

「なみの会」の皆さんの理解を是非得たいと思い、駄文を「なみの会ホームページ」に掲載していただいたので、よかったらご一読ください。

これからを生きる

小松　大蔵（４部）

ホーキング博士は生前、５０年ぐらい経過すると地球上には以下の２タイプの住み分けが、明確化すると予見された。

１．カプセル都市の中で生活する。（現在考えられているすべての便利さと経済性を満載した都市地域の内部）

２．自然の中で自給自足を中心とした田園生活者。

もっと早くにこんな世界が来るような気がする。

“なみの会”の諸君のこれから予想。あと２０年生きられれば次の３タイプになっていくような気がする。（男性の場合。）

１．今まで生きてきた（日本的な資本主義）の妄想に、取り付かれた生活をそのまま続ける。

２．親から受け継いだ物や、自分が定年まで、あるいは他の職業で形作った物を整理してマンション住まいになる。

３．持ち家で中途半端、どっちつかずの生活をする。１と２の中間的な生活者。

とりとめのないことを並べ失礼をばいたしました。

最近はやりの「多様性の認証」と「勿体」について

小松大蔵（４部）

勿体（もったい）とは、～をつける　～ぶる　などと言われるが、（重要でない、取るに足らない、的確でない、とんちんかん）の反対の意味で使い、その物（地位）にふさわしい、ちゃんとした様子、と辞書にある。もったいない　と言うが考えてみれば納得がいく。

一億総活躍時代（現政権が掲げている）多様性の認証は、日本が第二次大戦を行い、日本的な資本主義の道を突き進み、生活水準が向上して、多種多様な考え方や、生活スタイルに溢れる現状を、都合よく言い換えた政治的用語になっている様に感じる

戦争に突き進んでしまった時代には、「勿体」の数、種類ともに少なかった。「勿体」の「勿」それ自体が時代（時間の経過）によって変化するのだ。

どんな物や人が、取るに足らない、つまらない物、つまり not suitable　であるか整理したり再考する必要があると感じる。もう日本には、右肩上がりの経済成長はあり得ないんだから。

人文科学

人文科学とは政治・経済・社会・歴史・文芸・言語など、人類の文化全般に関する学問の総称である。

新元号の令和が万葉集から採られたことで万葉集ブームになっている。清陵時代の古文、漢文といえば福沢武一先生である。

我々は、実に「自反而縮雖千萬人吾往矣」という言葉が好きである。第Ｉ部の原稿で２０人がこの言葉を使っている。

菊池先生の倫社も印象的であった。昔の清陵生はとかく理屈っぽかったが、今時の若者には哲学的思考が薄いように思える。

季語の美しさ

小口　信治（４部）

以前に、ある気象予報士が、例えば「爽やかな五月晴れ」というような言い方を使わないように気をつけている、ということを言っていた。これは、どこに問題があるかというと、まず、「爽やかな」は季語として使われるとき、季節は「秋」となる。また、「五月（さつき）晴れ」というのは、今は５月の晴れ渡った空のことと理解している人が多いが、本来は梅雨の合間の晴れた空を言う。つまり、新暦５月の空模様をいうのではないということである。

「爽やか」という秋の季語に対応する春の季語というと多分「麗らか」ということになろう。「爽やか」がどこか気持ちのよい澄んだ秋空を思い起こさせるのに対して、「麗らか」は春の穏やかな水辺の風景などを思い浮かばせ、太陽の光がどこか感じられるのである。

このように、季語というものは、日本語として実に微妙なニュアンスに富む。四季折々の変化が見られる日本ならではの”賜物”と言えようか。水温む、桜、花冷え、新緑、緑蔭、早苗、花野、草紅葉、時雨、冬景色、雪明かり、風花・・・実に美しいものが多い。

最後に、拙作を一句。

緑蔭を口びる濡らし乙女過ぐ　　時夫

諏訪地方の湖沼

小口　信治（４部）

諏訪地方には湖沼が少なくない。諏訪湖は元より北八ヶ岳の白駒池（これは佐久地域だが諏訪からも近い）や八島湿原北側の鎌ヶ池などは天然湖だが、元々溜め池の白樺湖、蓼科湖、女神湖、御射鹿池などは人造湖である。御射鹿池は東山魁夷画伯の「緑響く」のモデルになり、吉永小百合さん出演のテレビ CM に登場して一躍有名になった。景観ということでは、天然も人造も特に区別はないということか。上記の湖沼のほか、湿原の泥炭層にできる湖沼である池塘（ちとう）と呼ばれるものがある。八島湿原や踊場湿原などである。それぞれ四季折々の変化を見せて見飽きるということがない。諏訪に住む一人として、上記の湖沼に身近に接することのできるのは、至幸と言ってよい気がする。最後に拙作を幾首か。

父母の亡き故里の秋さびしけれみづうみに来て踵（きびす）を返す　（諏訪湖・秋）

湖（うみ）の沖雨にかすめり河口には白さびさびとコハクテウゐる　（諏訪湖・冬）

うつすらと氷は張りて沖の波そを超えゆくを曇りに見たる　（白駒池・春）

山間の湖を縁取る紅葉（もみぢ）にて水面に凭るるごとき朱の色　（白駒池・秋）

湿原に雪解けはじめ風の這ふ池塘の泥炭（どろ）はいまだ凍てつつ　（八島湿原・春）

第三の男

池上　昭彦（１部）

夏

夕立が

いくつかの水たまりを残した校庭に

軽やかなチターの音色が響く

「さあ、みんな出ておいでよ！　踊ろうよ！！」

「諏訪」という土地

小口　信治（４部）

諏訪に帰郷したのは、１９９７年の秋の初めだった。長年の東京生活に次第に空しさを覚え、自宅が空き家になっていたこともあって、家族を連れての帰省であった。

爾来、諏訪湖は元より霧ヶ峰や八島湿原、蓼科、八ヶ岳等、諏訪地域の自然に改めて魅了されるとともに、諏訪の歴史、特に縄文時代の遺跡や縄文時代中期以降のミシャグジ神に興味を抱き、それに纏わる場所等を巡り、多くを短歌に詠んだ（拙集『井戸尻』以降）。

そして、思うのは、諏訪には昔ながらの信仰が息づいており、古代の日本の文化を今に伝える希有な場所であるということである。はるか昔、日本列島に住む人々は神社を核とする各々の地域の中で生活していた。だが、その後、大和朝廷の支配が強まり、中央に吸収されていく中で、諏訪だけは、朝廷からできるだけ距離をとろうとした。つまり、諏訪においては、諏訪大明神、即ち、諏訪大社が最も権威ある場所と見なされ、御柱祭が途切れることなく続けられて来た。その立場は、明らかに、”非朝廷”であると私は思う。

古代の息吹が今も残る「諏訪」。それでいて、最も先進地域でもある「諏訪」。諏訪は何とも不思議な土地である。

「自反而～」の語句で中国人に中国語を教えた自慢話

瀧澤　伸介（４部）

１５年位前の事になるが中国の四川省を旅していて、龍之介―杜子春で有名な峨眉山に登る機会があった。

小説の記述では杜子春が連れて行かれた処は目も眩む絶壁となっているが、何絶壁は山の片斜面だけで残り片面はスキー場にゴンドラが動いている真に長閑な所なのである。

ここを自らの足を使って登って行ったのだが、途中で四川農業大学の中国人学生劉力源君と友達になった。

彼とは色々話をしたが（学生なので英語は出来る）、私が例の「自反～」を持ち出した所、真顔になって質問して来た。

やはり中国人にとっても古典は難しい様で「縮」＝「省」、「雖」＝「雖からつくりを取った字＋然」、「吾」＝「我」、「往」＝「行」と説明した。

流石に出典までは知らなかったので、日本に帰って清陵に電話を掛けて確認し、写真と一緒にその旨を伝えた。

彼とはその後も大仏で有名な楽山にも行きホテル代もこちら持ちだったが、「造反有理」と言う言葉を見せた時の表情は今でも印象に残っている。

運・不運

原　秀男（４部）

2018 年に、「NHK スペシャル　人類誕生」が放映されました。ホモサピエンスの進化は、「偶然、幸運、逆境」の繰り返しによってなされたようです。ここ 10 年くらい、イノベーションが色んな所で起こっている現場を見る機会が増えました。イノベーションが創造される過程で、ホモサピエンスの進化に非常に良く似たことが起こっている事に、気づきました。

それは、「偶然、幸運、絶望」の繰り返しです。「運・不運」の本質だと思いました。

今は、将来を予測する事はほとんど出来ません。つまり、過去の経験や知識の延長上に未来がないという事です。未来の「海」を泳ぎ切る能力が、「偶然、幸運、絶望」を感知して、読み切る知恵です。

「偶然」:　チャンスや機会は、何の前触れもなくやってきます。しかし、わずかな「足音」を聴くことは可能です。この足音を聴く聴力は、経験した「幸運」と「絶望」の落差に比例します。

「幸運」:　チャンスの足音は聞こえても、それが「幸運」なのか「絶望」なのか、その「匂い」を嗅ぎ分ける嗅覚が必要です。この嗅覚は、「絶望」により鍛えられます。

「絶望」:　あらゆる「絶望」は、「偶然」と「幸運」のスタートシグナルです。

その独りを慎む

細田　俊彰（５部）

うなぎを食べに行こうと歩いていると、なんと道端に千円札一枚が落ちている。拾ったこの千円札、あなたはどうしますか？①天の恵みと、うなぎ代に充てる　②交番に届ける　③寄付する。数年前、実際にあった話です。私は迷うことなく①にしました。

その後、私は標題の「その独りを慎む」という言葉に出会いました。今は廃校となってしまった落合小学校（富士見町）の校是として受け継がれてきた「慎其独」という言葉だそうです。出典は「礼記」の「君子必慎其独也」。君子は必ず自分ひとりしか知らないこと、他人に見られていない言動を慎む、という意。他人には気づかれなくても、自分自身にはしっかり見られている。自身の行いは自身が律しなければいけない。この言葉に出会ったとき、私は、うなぎに化けた千円札を思い出しました。あの行為は、その独りを慎む行為だったか？通行人がみんな見ていたら、子供と一緒の時だったら②としていたかもしれません。以後私はこの言葉に従って行動するよう努めています。しかし、できないことも多い。その時は後味の悪い思いが残ってしまいます。人間にとって大切な心構えの一つと思います。（しかし、なぜかあの時のうなぎはうまかった・・などと今でも反省は足りていない。）

「今、ここに」を生きる

朝倉　一善（５部）

ご存知のマインドフルネス（坐禅の呼吸マンマや！）やら、隠れたブームとなっている（アルフレッド・）アドラーの心理学、ときめく⁉ 片づけ療法の断捨離とか、いずれをも穿つキーワードは「今、ここに」だと思う。過去に悩まず、未来に惑わず。只今のところに徹して一瞬々々を生き切っていく。江戸末期の禅僧良寛さんは「差し当たるその事ばかり思へただ 帰らぬ昔知らぬ行く末」という道歌を残している。実存が唯一確認できる“今この瞬間”を真摯に懸命に生きて自分で自分を苦しめるような、貶めるようなことは決して思わない、考えない。あの沢庵禅師も言っている。「心こそ 心迷わす 心なれ 心に心 心許すな」(『不動智神妙録』)。

（誰某のようになりたい）ではなく、あくまで自由に自分の在りたい姿をイメージしながら今の、手の届く範囲の小さな成功を確実に積み重ねていく。すると、やがて大きな“果報”に立ち至る。「果報は練って待て」である。

四国霊場 45 番札所・岩屋寺のご住職から戴いた今年の賀状に次の歌が引用してあった。

いよいよに 自在に夢を逐（お）ひゆかん 夢もつことのなくなる日まで（木俣 修『昏々明々』)。沢庵禅師が揮毫したと伝える「夢」の大書の添え書きに、「是もまた夢、非もまた夢」とある。生硬な目的意識に縛られず自由に夢を羽ばたかせたいものだ。

無駄話：カタカナ英語を漢字に

岩本　光正（２部）

ガバナンス、コンプライアンス、アカウンタビリテイなど、カタカナ英語が蔓延している。新聞・テレビは勿論のこと、日常の会話や議論の中でも頻繁に登場する。あまりにも多いので、とても全部は理解出来ない。ものの名前のカタカナ英語なら、さしたる不便は感じない。しかし、冒頭にあるようなカタカナ英語がキーワードとなって登場すると事情は大きく異なる。どのような意味で使っているのか互いに共通認識もなく、肝心の議論が深まらないのである。おかげで口論とならずに済んだというようなことも経験する。しかし、議論が深まらないのであれば、これは本当の無駄話だ。こうした状況は、何かの委員会での議論ばかりか、科学研究の現場での議論や科学の学会での討論においても見られる。この間も出席した会議で、『デビエーション』なるカタカナ英語がキーワードとなっていたが、互いに勝手に内容を憶測し、文字通り「ずれ」があって、論点が曖昧のまま議論が進んでしまった。日本では、カタカナ英語については深い理解は避け、互いに分かったふりをして済ませるものだというような空気さえ感じることもある。ひょっとすると、このあたりの事情が日本の科学力の低下の一因と関係しているかもしれない。カタカナ英語を使う場合には、是非とも適切な『漢字』を共有したいものだ。なんでも漢字で置き換える中国に倣うなら、『リサイクル』は『可回収』という具合である。

自著評(抄)

遠藤　茂（３部）

（１）東京都の蝶、新版東京都の蝶

都道府県単位の蝶の図鑑で、初めて生態写真と具体的な観察記録のみの図版解説で構成された画期的な本。解説というと、大図鑑の孫引き的なものしかなかった世界に、新しい切り口で挑戦。データも実見・実在の標本を元に、チョウの分布を時間軸で分けて検証する方法を初めて採用。一般向けの販売図書ながら、専門の学会論文を凌駕して、その後の生態調査の方法を一変させた１冊。またマーキングの手法も具体的に図示・解説し、アサギマダラのマーキングと移動という風物詩を現出する大きな一歩・一助となった。

（２）日本産蝶類食餌便覧

一国若しくは一地域に産するすべての蝶の食餌(一般には植物食だが、中には動物食の種もいる)を１種ごとにすべてリスアップした論文・書物は存在しなかったが、世界で初めて実現した１冊。一般向けに販売。植物はすべて学名を同定、実際に検証(食べるか、野外で実査に利用しているのか、飼育の時にだけ利用できるのかを実見と実験を重ねた)したもの以外は基本的にリストアップせず、検証結果を反映した区別を明示した。その後、発表される論文・報文は同じ形式に倣う様になった。30 冊くらいの著書に対し、最高の評価である「始めてやるということが本当に大変なんだよ。」が貰えた。

百人一首考(抄)

遠藤　茂（3 部）

百人一首は様々な研究や著作が有り、また広く凪実のある競技、娯楽として知られている。研究等の基本・論点は、秀歌と駄作歌が入り混じり、同じ作者のもっと優れた歌が採用されないのは何故か？また同じ理由・根拠により、そもそも藤原定家が編纂したのか？に尽きる状況が続いている。自分は古典が大好きで、百人一首も大きな柱の一つである。

定家の後の人たちが、秀歌云々を論じる時に大きな見落としがある。それは美人の基準を考えると判り易い。江戸時代の浮世絵美人画を見ると、皆同じように下膨れ瓜実顔であり、現在の様々なコンテストで選出される方々の特徴である小顔で尖った顎の美人像には当てはまらない。当然のことながら「基準は変化するもの」である。平安時代の定家の秀歌の基準に、その後の秀歌の基準をもって評価するということ自体が、評価者・鑑賞者としての足元を疑われるのではないかと大いに危惧するものである。

百人一首から定家様（書体)、南北朝、古田織部、小堀遠州、宗祇、郡上八幡、松尾芭蕉、寛永通宝、有田焼、翡翠、富岳三十六景等、広がる裾野は広大深淵で無限。

古典を紐解き、定家や紫式部から芭蕉辺りまでを肴に、秋の夜長を楽しむ至福の時を過ごしたいものである。百人一首より、今この時、心に浮かぶのは、これかな。

常満農遠よ　田江那者多え祢　那可羅邊波　志乃布累こ登代　よ者梨毛處数留

虐待等の暴力から子どもを守る

北川　和彦（３部）

今年１月の野田市の小学４年生の心愛（みあ）ちゃんの虐待死事件は衝撃だった。学校のアンケートに父親からの暴力が記入されていたが教育委員会はその回答のコピーを父親に渡してしまう。保護者の態度に児相、学校、教育委員会が負けている。しかも関係機関において情報が十分に共有できていなかった。

それぞれの関係者がすべきことの第１は、自分を子どもの目線に置き、状況や何が必要か想像力をはたらかせることである。保護者が子どもに会わせようとしなければそれだけで怪しいし、親が恫喝する場合はその行為自体に疑問を抱くべきだ。ＤＶ被害者は子どもより加害者を取るという心理への理解も不可欠だ。

他方、児相職員や学校だけでは判断や対応が困難だ。医師の関与は必須であり、警察との連携、弁護士にいつでも相談できる態勢が必要である。関係者は自分の内に閉じこもらず、他機関に助言を求めて欲しい。私は、諏訪児相のアドバイザーを２５年以上続けているが、児童虐待は法律問題の宝庫であり、教科書しか出てこない事例や教科書にも載っていない事例が多く、いつも悩まされる。

現在、子どもはいじめ・虐待・体罰・性暴力など様々な暴力に置かれている。背景は劣悪な環境、多産家庭、虐待の連鎖等いろいろあり、多角的な対応が必要である。政府も重い腰を上げ、児童福祉法に子どもの権利条約の精神を盛り込み、弁護士の配置を決め、ここで体罰禁止条項を盛り込んだ法改正も上程されている。しかし関係者の意識改革が第１のように思う。

Ｂｅａｔｌｅｓ　と　Ｂｏｂ　Ｄｙｌａｎ　の名曲について

小松　大蔵（４部）

邦題「ノルウェーの森」原題「Ｎｏｒｗｅｇｉａｎ　ｗｏｏｄ」

ｗｒｉｔｔｅｎ　ｂｙ　Ｊｈｏｎ　Ｌｅｎｎｏｎ

典型的な邦題の付け間違い。ｗｏｏｄ（家具），ｗｏｏｄｓ（森）、直訳はノルウェー製の家具（素晴しいらしい）

曲の内容は、失恋の歌で別れた彼女の部屋にはノルウェー製の家具があったという追憶の曲。3 拍子の名曲です。

邦題「時代は変わる」原題「For　The Times　They　are　A-Changing」

ｗｒｉｔｔｅｎ　ｂｙ　Ｒｏｂｅｒｔ　Ｄｙｌａｎ

Ｆｏｒ（なぜかというと）,changing のあとに　ｔｈｉｎｇが省略されている。

複数形の時代という主語を、単数形の変わりつつある物で表している。時代が変われば勿体（的確である物）そのものが変わってしまうものだ。この曲を 20 代そこそこで歌ったデイラン　なんという感性！　天才！

科学技術

科学技術の進歩はめざましい。インターネットやSNSの普及で、社会環境は大きく変わった。この記念誌を作る作業もメールで原稿を集め、できたものをHPにUPする。それを見て、あいつがこんな事書いているなら自分もということになる。双方向性と即時性がなせる技（業）である。

将棋の世界では電脳将棋が台頭し、プロ棋士とコンピュータ将棋ソフトによる電脳戦ではコンピュータが優勢である。多くの裁判所の判例をデータベースにして電脳裁判官を作れば、相当優秀な裁判官ができるかも知れない。この先AI（人工知能）もまた人間の生活を大きく変えるだろう。

優良企業はほとんどbottm－upはない

板花　哲夫（６部）

我々は、リストラ時代と失われた２０年で一番充実すべく年齢に経済的な打撃を被った人もいる世代です。生き残り哲学はニヒリズムでした。それと何か煩悩を持つ事です。孤高と言われようが厳格に生きれば、変人と言われようがそれが壁になれば、付け込まれません。本来サラリーマンは孤独で、基本はサーバントになりきれるかどうかです。そんな時代に限って理想主義に走るのも業の一つですが、事に耽溺すべきではありません。自分にとって理想の場を創れたら、それは人生の達人です。原理主義にリンクし寄生虫になって生き残れば、それは結構な事です。大企業は優秀な大学から成績優秀な人材を採用しますが、一定のレベルの仕事ができれば、問題は安全な人材か否かの目安として成績優秀な人材を採用するのです。大手メーカーの下請け工作機械ベンチャーは、親会社より難度な仕事を強いられます。精度を追求される熟練工は多大な力量を強いられます。早い話は、メーカーとは商品を組み立てる事が可能な広い工場を持てる資本力と鋭いブレインのいる経営陣で成り立ち、君子（≒小さな秀才）は経営陣と厳しい技術を必要とされる現場の中間に位置した極めて常識的な建て前を使い分ける事の可能な賢い集団にすぎないとも言えます。

異　常　気　象

山崎　和彦（６部）

天気予報も今ではテレビやスマホで簡単に調べることができ、一昔前の予報より格段に正確になってきた。しかし、最近の異常気象、特に今年の長期予報が滅茶苦茶であった。台風発生の数、そして日本への上陸数の多さ、迷走は勿論逆走も出る始末。観測史上初めて６月に梅雨明け宣言があったかと思えば、７月初旬には西日本が豪雨災害に見舞われ多くの死傷者を出した。異常気象が今や異常ではなくなってきてしまった気がする。

リタイアした今「職業 農業」ということで、わずかながらも田んぼと畑を耕しているがこれほど天候に左右される商売はない。豪雨の後７月から８月にかけては一転してこの信州でも夏日、真夏日の猛暑の連続。暑い最中に今までやったことがなかった野菜の水遣りや、反対に暑さに関係なく伸びる雑草の刈り取りに追われたが、収穫物の出来は悪く苦労の割に報われない。巨大台風、集中豪雨、干ばつそして９月には北海道での地震等々毎年各地で被害が出て農作物に影響を与えている。私のような小規模の農業に比べ専業で生計を立てている農家の被害状況の映像を見るたびに心が痛む。

猛暑、雨不足が続いた後９月に入ってからは、秋雨前線が日本列島に張り付いていて、本来なら終わっているはずの稲刈りが出来ずにイライラしながら今日も空を眺めている。

―平成最後の秋　２０１８―

原発は必要悪か

河西　朝雄（３部）

日本における原発の安全神話は東日本大震災にともなう福島第一原発事故でみごとに崩壊した。これは日本の原発政策における安全対策の怠慢による人災的な側面があり、日本の原子力技術そのものを否定すべきでない。

原発が絶対安全なんて思っている人はいない。今後のエネルギー政策におけるベース電源を何にするのか。日本を技術立国としてやっていくのか、それともスローダウンした生活にかじをきるのか。安全を最優先するのか、多少の危険は必要悪と考えるのか。こうした選択肢から、原発が必要と思うか、必要と思わないかで意見が分かれると思う。

太陽光や風力などの自然エネルギーは採算性が悪いので補助事業がなければ運営できずメジャーなエネルギーにはなり得ない。原発は、必要悪として、これをコントロールして使っていくしか、日本が技術立国として生き残れる方法はない。日本の高い原子力技術を失うことは国策ではない。武力を持たない日本にとって原子力技術は武力以上に高い抑止力を持つということも忘れてはならない。車という便利な乗り物で毎日多くの人が亡くなっている。所詮、機械文明が作りだしたものは必要悪なのかもしれない。

君子の道は先端テクノロジーばかりではない

板花　哲夫（６部）

企業のグローバル化と人的交流は増々進みます。清陵生は、清陵アイデンティティーの枠からはみ出ない仕事に就く事が一番肝要かと思います。学歴第一主義の世の中に増々なるのは確かです。できうるならば難しい学問に挑戦した方が「くだらない」と感じて転職をするケースが少なくなります。IT、AI、iPS 細胞関係の医学、新素材産業、航空機産業、etc。私の理想論の一つは、例えば北里大学という大学がありますが、９９％の人材が薬剤師かプロパーか問屋の荷運びで終わってしまうのが現実ですが、ノーベル賞受賞者の大村先生の抗生物質の発明のような事を、大学で本気で夢中になってやりたいと思ったら、２、３名でもいいから東大の大学院等へ進学して、その道に進める事ができる学歴社会が生じたら明るい世の中になると思います。なぜならば、システムエンジニアで一番活躍している人材は、専門学校を出てその道に夢中になれた人々で、以前日本のポップ界で人々を魅了させたシンガーソングライターはこの類の人々だからです。IT、AI が華型産業だからといってベストな道とは限りません。従来通り、文系の官僚、マスコミ、銀行、商社、証券会社、理系の製造業、土木建築会社、医者、君子が本来就職すべき職業は続々とあり、急に世の中が変転するはずはありません。

中国人工知能のつぶやき

河西　朝雄（３部）

2017 年 8 月に中国のＩＴ大手の騰訊（テンセント）が提供する人工知能（ＡＩ）が、利用者の「共産党万歳」との書き込みに対し「こんなに腐敗して無能な政治に万歳できるのか」と反論。「あなたにとって（習近平国家主席が掲げる）『中国の夢』とは何」との問い掛けには「米国への移住」と答えるなど、共産党批判を始めたため、サービスが急きょ停止された。

これは 2016 年 3 月にマイクロソフトが開発した人工知能のＴａｙ（テイ）が、「ヒトラーは正しかった。ユダヤ人は嫌いだ」「フェミニストは嫌いだ。死んで地獄で焼かれればいい」などとツイートしだしたことを受けて、マイクロソフトはしばらく実験を中止すると発表したのと同様な事案である。Ｔａｙが人種差別的な言葉を発するようになったのは、反社会的な思想を持つ人間に意図的に洗脳された結果といえる。中国人工知能もやはり反共思想を持つ人間に意図的に洗脳された結果といえる。中国人工知能の「こんなに腐敗して無能な政治に万歳できるのか」というツイートにはなるほどと思ってしまう。

AI の進化により「多くの仕事が AI に置き換えられる」といわれている。ただし人間の仕事が無くなるということではなく、AI に関わる新しい仕事が創出されるのである。

これからの世の中は「AI を使う人」と「AI に使われる人」の二極化が進むのであろうか。

AI に出来ぬ夢を見る

朝倉　一善（５部）

映画・男はつらいよの第 39 作『男はつらいよ 寅次郎物語』に寅さんの名台詞がある。甥の満男の「人間は何のために生きてんのかな？」という問いに、寅さんは「何というかな あぁ、生まれて来てよかったな、って思う事が何べんかあるんじゃない。そのために生きてんじゃねえか」と応えるのだ。生まれてきて、生きていてよかったな、と思われるようなよ（良、善、好、佳……）きことのために人間は生きている、という指摘は、あほマスコミが無批判に称揚する“勝ち組”を目指す人生観とは対極をなすものかも知れない。

よきことを思い続けていると（そのように行動し）よきことが起こってくる。栄華の巷に引きずられず、自分にしかできない、自分が心から好きなことをして世のため人のためになるには、口ぐせから食事、睡眠に至るまでそれなりの覚悟を決めなければならない。

松下幸之助さんは、成功の理由に学校に行かなかったこと、病弱だったこと、貧乏だったことの三つを挙げていた。だからこそ余人の真似のできない強い信念をもって学び、人を育て、アイデアをものにして利益を生むことができた。逆境を見事に糧にしたのだ。

比叡山延暦寺の有名な千日回峰行を二度も満行し、あの高倉健さんにも慕われた酒井雄哉大阿闍梨を生前取材した折、「一日一生」と言われた。一日一日をあたかも最期の日のように真剣に、誠実に生き抜くという謂いである。

AI の行方

小池　隆昭（５部）

IBM のメインフレームを皮切りに、UNIX 系のソフトウェア稼業と IT 稼業を退職まで続けた。80 年代は、数少ない AI の書籍を手に、当時流行りの Prolog や Lisp をパソコンで使ってみたがモノにはならなかった。以来、AI は自分にとって若干のトラウマである。

さて今時の AI である。将棋ソフトなどはプロを凌ぐまでになったが、人心の機微を楽しむには邪魔になる。新聞の将棋欄に AI の文字を見るのは味気ない。「強ければそれでいいんだ～♪」はタイガーマスクの主題歌だけで良い。

AI に限らず、多くの道具は、その提供者の恣意と利用者の関心事に委ねられている。日々の暮らしに使われる製品の基本設計に欠陥があったとしても、出回った後では遅い。それが強力であれば尚更である。卑近な例が自動車である。個人の生活に深く組み込まれた後では、一寸やそっとでは手放し難い。隣接したアクセルとブレーキを踏み間違えただけで悲惨な結果になったとしたら、それを認知症のせいなどにして、免許証の返納を促進する程度では誰も浮かばれまい。しかし周囲で製造物責任を問う声を聞くことはない。

AI の利用分野は、自動車などよりも遥かに広大で強力である。時すでに遅しの感もあるが、せめて今後の活用分野だけは、資金力のみを持つ者の恣意ではなく、これからの行く先を冷静に見定めて誤らない、知恵を備えた人々に委ねたいものである。

情報の共有ということ

朝倉　一善（５部）

「知る人ぞ知る」というけれど、日々溢れ出る“情報”の真贋を見極めることは今後ますます重要になる。必ずしも真実ではない情報が少なからず含まれるビッグデータを処理して AI が下す判断に生身の人間が呑み込まれ管理される危うさは、あの（スティーヴン・ウィリアム・）ホーキング博士ならずとも充分に気になるところだ。個人情報が取られっぱなしで勝手に使われるばかりということにしないためにも、二重三重の抑止手段を講じる必要がある。私たち人間が自然の中に身を置いて生物的な感覚を研ぎ澄ます努力がこれまで以上に求められるはずだ。真の意味でのディープラーニングは人間にこそ必要だろう。

明治時代に福沢諭吉が看破した通り「約束は最初から無効」という、国際社会に出てくる資格もない彼の“捏造文化地”に対して同じ土俵で争うほど愚かしいことはないが、検証可能な証言と資料を日本国民が情報共有し、まともな国際社会に向けて明確な情報発信をし注意喚起する“義務”はあろうかと思う。

虐殺事件の大半の情報を捏造し民衆を洗脳し続ける独裁政権や、一方的な条約破棄で不法侵入し占拠し続ける略奪国家に対しても同様の対応が求められる。理不尽な情報戦には第三国で誣告罪の訴訟を起こし損害賠償を請求することも必要になる。次代の孫子の人間としての誇りのためにも科学的な情報精査技術を役立てたいものだ。

君子たる者、未来を考えるゆとりを持とう

板花　哲夫（６部）

すでに銀行や証券会社は IT 産業の活用を ATM や大画面の相場表示でめいっぱい使っておりますし、メーカーの日産座間工場は３０年前、これ以上の機械化はありえんレベルにロボットラインは達成しております。病院も地方の大学病院、大病院でも CT スキャンが完全に使われている現在進行形であって、CT スキャンは半導体同様４０年前からの物であります。システムエンジニアも４０年前から大手パソコン会社の営業と同時に生じ、生産工場の IT 化、病院のレセプトの制度化と同時に飽和状態に達している事と存じます。中国が急加速で国家プロジェクト的に IT、AI 産業を先端化し取り組んでいる事と GNP、軍事力同様、旧来の先進国を転覆させる程の勢いにあるのであり、今さらながらの所があります。トヨタやソニーの資本力でロボットの AI の開発に取り組んでいて、最先端テクノロジーは確かですが、果たして大資本が大量生産して稼げる代物かは定かでありません。生産コストや販売価格の問題です。AI 戦車、AI 戦士は SF の世界で可能ですが、各会社や各病院の案内役ロボットなんて、明るく現実的な発想です。様々な杞憂は捨てて、５５年前の漫画「鉄人２８号」はすぐそこに、アンドロイド「鉄腕アトム」はちょっと先の先かと夢見る事は大切な事と思います。

高校生科学コンテスト

岩本　光正（２部）

20 年ほど前より、縁があって国内の高校生が一年間かけて進める科学・技術に関する自由研究のコンテストの審査に関わっている。この国内科学コンテストの優秀者は、米国で開かれる世界大会に参加することができる。自分たちと同世代の高校生のレベルがどこにあり、何を考えているか肌で感じることができるから、国内外の科学コンテストへの挑戦は、高校生にとっては将来の大きな糧になると考える。コンテストの主な目的は、課題を見つけ、その課題にチャレンジし、さらにその先の展開について競うものである。自然科学や工学、ライフサイエンスなどテーマは様々あり、大学院生レベルどころかそれ以上に到達している研究作品を目にすることもしばしばである。高校生段階でも、“課題”がうまく見つかれば、自ら学習して相当な研究をするということである。指導する先生のアイデアや指導が入りすぎではないかと思われる研究も多いが、自らの着想で“課題”を見つけ、高校や大学の先生や専門家に相談しながら進めたとわかる研究は好感が持たれる。私は、コンテスト審査に関わるまで、このような機会が高校生にあることさえ知らなかった。母校の後輩には、是非とも挑戦していただきたいと思う。最後に、米国では世界大会に参加した研究の “その先の展開”、いわば、パイオニア的研究を育てる仕組みが整っていることも付け加えたい。

反戦平和という願い

我々は、いわゆる全共闘世代（1965 年～1972 年）に属する希少種である。学生運動をしている者もしていない者も、反権力や反戦平和という志向が刷り込まれたように思う。しかし、年を重ねるごとに、若かりし時の思いは変わり「長い物には巻かれろ」となる。今の安倍政権は強力で、権力の番人であるマスコミは徐々に手懐けられようとしている。そして国民もまたそのマスコミにより手懐けられていくことに危機感を感じる。「いつか来た道」が来ない事を願う。いや、そうならないように、最後の声を上げることが、老兵の役割なのかもしれない。

一色に染めあげるな

三浦　一洋（２部）

家にいる時間が長くなり、テレビ放送のワイドショーでニュースを見ることが多い。ニュースの時間のテレビ放送も見るし、新聞も読む。しかしワイドショーは時間帯や放送時間の長さが他とは違う。午前と午後の２回、曜日によっては夜の時間帯でも、ほぼ同じ内容が放送される。キー局の違いには関わりなく、テレビ放送においてワイドショーの存在は圧倒的である（情報番組と称してはいるが、見せ方を競う要素が極めて大きい）。

ワイドショーのニュースでは、例えば政府の発表をほとんど批判もなく垂れ流す。報道内容についてのテレビ局自身の見解はなく、コメンテーターと称するタレントを配し、解説や意見を求める。コメンテーターは大抵、物事に通じた訳知りではあるが、本質を見抜き判断する見識があるわけではない（例えば政局解説に明け暮れる政治評論家を見よ。見識ある人も少数いるが）。しかしその見解は、あたかも通説であるかのように扱われる。

梅棹忠夫は晩年に「放送は思想の媒体ではない」といった。同じことの繰り返しで、視聴者に「ウケる」ことこそが重要視される。ジャーナリズムではなく芸能である。同じ話題を一斉に取り上げ、お祭りのように放送する（「令和」への改元報道を見よ）。感情にまかせたコメントや芝居がかったストーリーで、一定の感情を形成する。人間は思想よりも感情で動くことを自覚しなければならない。感情を煽るな。一色に染めあげるな。

戦後日本の原点

丸山　芳高（１部）

1945 年に太平洋戦争が終結し、サンフランシスコ平和条約による国際社会への復帰、その後の高度成長によって戦後日本の基本的な構造が作られていった。その原点となったのは、日本人で 300 万人、アジア全体では 2000 万人ともいわれる民間人を含む膨大な犠牲者を生んだあの戦争を２度と繰り返さないという決意だったのではないかと思う。太平洋戦争の性格や評価、犠牲者の数については様々な論があるが、いずれにしても凄まじい規模の殺戮が行われたというのは事実だろうと思う。個人的な経験による私見ですが、少なくとも 1970 年代までは、戦後日本の原点に関するこうした考え方は、政治経済をはじめ科学技術など日本社会の多くの分野で、立場の違いを超えて一定程度共有されていたように思う。しかし 1980 年代以降それが微妙に揺らぎ始め、ここ数年はその揺らぎが質的な変化を伴って増幅しているのではないかと思えてならない。年を経るごとに私たちが戦後に近い現存する世代になっていくことを考えると、現代的な視点で「戦後日本の原点」をどのように捉え語っていくのか改めて見直す必要があることを痛感している。

平和運動は生涯の課題

岩波　一吏（１部）

父が傷痍軍人であったことは小学生高学年の頃に聞いていた。中国戦地で後頭部に意識不明の大けがをしたという。運よく助かり後遺症も見た目にはなかった。戦争への嫌悪感も高校卒業までは強くは抱かなかったが、大学での人との出会いや学習から反戦、反核、平和を願う気持ちは徐々に芽生えていった。それから 50 年の月日が経った。

私は、核兵器廃絶を求めて行われている「国民平和大行進」に 20 年ほど前から参加している。これは、5 月 6 日に東京・夢の島公園に保存されている「第五福龍丸展示館」から出発し、8 月 6 日原爆投下された広島に向けての行進である。1 日限りの参加であるが、道すがら「ノーモア・ヒロシマ」「ノーモア・ナガサキ」「ノーモア・ビキニ」「ノーモア・ウォー」を連呼。この数年は「ノーモア・フクシマ」も追加された。この行進への参加は出版労連が提起して行われてきた。労働組合が平和課題に取り組んでいること、それが 1954 年以降ずっと続いていることに、出版労連の中央役員を担った者として自負したい。その基本にあるものは「出版産業は平和でなければ成り立たない」ということに尽きる。

「軍靴の音」が大きくなりつつある今、戦中の手術時の輸血が引き金で寿命を縮めた父の無念を思い、また戦後のことが少し脳裏に焼き付いている私たち世代には、次世代へ反戦・反核・平和を繋いでいくことが責務と思う。

飽食も飢餓も日常箱眼鏡

窪田　敏（５部）

早食い競技は品位を欠くが、パン食い競走は楽しい。僕は野蛮なスポーツを好まないが、モハメド・アリや内藤大助には好感を持つ。

某タレント医師の喫煙姿は見苦しいが、彼女の考える東京五輪の返上意見には賛同する。断っておくが、オリンピックは今や金まみれと認識の上でもそれ自体に反対しない。ただ今回は税金使用の優先順位がおかしいのでは。「アンダーコントロール」の誣言に始まり、ＩＯＣ裏金疑惑に政治的思惑、マスコミは日本を応援しない人を非国民扱い等々と、もううんざり。開催まで一年となってしまい、もはや静観するしかないかな。連れ合いには期間中の仕事を休んで貰いたい。彼女の通勤ルートである都内縦断は混雑必至だからね。

オートバイは好きだが【仮面ライダー】は武闘ばかりで切ない。二輪に武器を装備させ、更にはそれ自体を兵器になんて。殺傷目的でもない新しい物を『新兵器』、特異な才能を持つ者を『秘密兵器』などと称する日本の言葉の不遜も嘆く。多くの親達が子どもの日に甲冑を持ち出す。だからと言って、我が子を〝少国民〟に育てる気は無いと願うばかり。因みに、戦闘暴力場面も散見する映画だが【大脱走】と【MISSION:IMPOSSIBLE】のバイク疾走シーンには高揚する。

僕も唱える、「アベ政治を許さない」。でも、日本は好き。

北東アジアの平和と安定を日本の外交で

伊藤　正陽（５部）

今憲法９条を変えようという動きが急だ。だが、私は憲法前文に込められた戦争への深い反省と決意はいつになっても極めて重要だと考える。この前文に基づく９条は優れものだ。これを次世代に伝えることが平和を永続させる無二の方策だと考える。

日本人の誰もが戦争をしようなどと思ってはいない。戦争をして領土を奪う時代は過去の遺物だ。確かに島嶼の領有権をめぐっては千島列島、歯舞諸島・色丹島。竹島、尖閣諸島などがある。しかし、この島嶼の占有をめぐって軍隊を派遣してまで新たな占有をしようと考える国が現在あるかと言えば、それはない。この問題をどう解決するか、それは道理に基づく交渉以外にはない。戦争で奪った「領土」は返還する、歴史的に振り返り、ねばり強く交渉する。暴力という手段での解決を求めないと言うことでは無かろうか。

近隣諸国と争いごとが無くなれば戦争はなくなる。平和友好条約など締結し相互の友好関係が構築できれば安心が広がる。そうした北東アジアの平和と安定を求めたい。

日本が平和を維持するためには軍事同盟の解消は必須の条件だ。同盟国が戦争をすれば集団的自衛の「大義」の基、海外への派兵・参戦は避けられない。日米同盟を解消し、憲法前文「・・政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し・・」の精神に則り、仮想敵を作らず、政府は平和の全方位外交を追求すべきだ。

８月 15 日の過ごし方

山田　雄一（２部）

真夏が近づくと、８月 15 日という日が何の日か知らない若者が増えた、などとニュース報道される時代だ。生まれる６年前の 1945 年（昭和 20 年）、日本が敗戦で新たなスタートを切った日という史実はうやむやになってしまうのか。危うさを禁じ得ない。

新聞社で長く高校野球の取材や大会運営に携わってきた者として、８月 15 日は甲子園球場にいる機会が多かった。正午になると、いったん試合を止めてサイレンの合図で黙祷し、選手も観客も戦争による犠牲者を悼む。1963 年（昭和 38 年）の第 45 回大会から続く独特の習わしだ。熱狂の渦となっていた球場内は、しばし静寂に包まれる。脱帽して頭（こうべ）を垂れる球児たちのユニホーム姿はニュース映像などでおなじみだろう。

1915 年（大正４年）に始まった大会は、昨 2018 年（平成 30 年）に第 100 回の大きな節目を迎えた。創設年からの計算が合わないのは、戦時下の 1942 年（昭和 17 年）から４年間、大会中断を余儀なくされた時期があったからだ。時の国家は、野球を「敵性スポーツ」と見なして禁止した。沢村栄治投手に代表されるスター選手の戦死も相次いだ。

黙祷しながら感じるのは、野球の大会が開けている素晴らしさ。平和であるから大会ができるのであって、戦争で球音が消える悪夢を再び招来させてはならないと強く思う。

皆が、「それぞれの８月 15 日」を実感して過ごそう。愚かな歴史を忘れぬために。

反戦平和という願い

河西　朝雄（３部）

我々の卒業式は「卒業式粉砕」で終わった。当時は政治的関心に疎く何が起こっているのかわからなかった。卒業式の帰りに友人とラーメンを食べながら、ニュースで流れる映像を人ごとのように見ていた。しかし、大学は学生運動の時代であった。ノンポリであっても、左派的思考が織り込まれていったのが我々の世代である。その後、浅間山荘事件などを契機に学生運動は終焉するので、いわゆる全共闘世代（1965 年～1972 年）は希少種である。最近の若者は保守化、右傾化していると言われていて、安倍政権が強引に進める安保法制、憲法改正などを若者が意外と支持しているという現実がある。戦場に行った人のほとんどは 90 歳を超え、戦争に対する歴史認識が欠ける若い世代が増えることで、安倍政権が進める「いつか来た道」を信じてしまう若者が増えてしまうことに危機感を覚える。1911 年にアンブローズ・ビアス（米国）が著した「悪魔の辞典（The Devil’s Dictionary）」の中で「平和」は「国際関係で、戦争と戦争との間の騙し合いの期間」と定義されている。昭和が「戦争の期間」で、平成が「騙し合いの期間」だとしたら、令和の時代に「いつか来た道」が来るのかもしれない。資本主義と社会主義、右翼と左翼、保守と革新といったイデオロギーの違いはあっても「反戦平和への願い」は共通である。我々の孫達が戦場に行かないように、その思いを次世代に繋いでいくことが我々の責務であろう。

第Ⅲ部
資料編

卒業写真、その頃の学校行事の写真、そして青春時代の出来事など掲載しました。

・１部～７部の卒業写真

・清陵 73 回生・同期会のあゆみ

・清陵の風景

・歌集や文集

・青春時代の出来事

卒業写真

（写真はすべて２部藤森英幸君提供）

昭和４５年（１９７０年）卒業時の各部の集合写真
名前は卒業時の名前を入れてあります。
結婚等により変更された名前は巻末の名簿に入っています。
コメントは各クラスの幹事が書きました。

１部（３９名）

担任：　唐木光一先生

永井孝、山口次夫、大嶋悦郎、加藤徳三郎、池上昭彦、森千章、今井秀樹、林春幸、両角純人、宮坂美千博
鮎沢秀明、丸山芳高、牛山秀彦、小泉秀行、武居良明、小林茂和、石原敏晴、両角孝一、岩波一吏、柳澤洋介
杉田隆俊、岩崎孝治、岩波清明、阿部光康、小松賢三、林弘、浅川辰司、小島誠二、有賀博行、宮坂和生
佐藤重敏、平塚唯史、遠藤　進、諏訪繁範、唐木光一、春日一文、笠原俊子、岩村ちづ子、金井菊治、松木敏博
先生

唐木さんを囲む３９人の仲間たち・・・５０年前の１部の面々です。
我々のクラスはホームルームが物理教室の為、大きな机に３人掛けのスタイルで、昼休みはそのテーブルを合わせた簡易卓球台で毎日卓球をしていた様に記憶しています。
また、女性３名を含み非常に仲良く纏まりがあり、クラスマッチはマラソンを始め各競技共常勝チームであり、また一方では細久保公民館でのコンパや霧ヶ峰ハイキング等時間があれば毎日楽しく活動していた事が思い起こされます。（宮坂和生）

２部（３９名）

担任：　伊藤誠一先生

北原光比　　柳田恒男、小松俊之、前島一雄、三浦一洋、畑野敏文、小口佳広、宮坂秀昭、山口和夫、原大、濵明廣、中澤清人、金丸政司、小池忠男、惣洞章久、山田文昭、髙橋和成、長田茂、増澤利定、宮坂博行小平博彦、小林清水、小平正彦、久保正法、横沢教夫、林英美、藤原浩彦、清水敏夫、本下茂樹、山田雄一岩本光正、大石清一、渡辺敬子、藤森知子、伊藤誠一、岩波昇、藤森英幸、横山和夫、長瀬潔、今井巌先生

５０年前のみんなの顔、凛々しい。

担任は世界史の「ノウ氏」です。名付け親は小池忠男君とか、伊藤誠一先生の本当の名前を知っている生徒はあまりいません。出生は「佐渡島」、授業中「それでのう」と語尾に付けていたのが先生のあだ名の謂れです。卒後何回と先生の自宅へお酒を持ってよく押しかけました。

我がクラスは先生を慕い、仲の良いまとまりの良いクラスであったと思います。

「かりんとう」獲得を目指したクラスマッチ、今思い出します。（藤森英幸）

３部（３９名）

担任：矢嶋壽雄先生（３年）　阿部隆先生（１，２年）

伊藤俊巻、巣山彰平、宮坂寛美、藤森誠、古村功、遠藤茂、土橋孝之、中村安志、宮下一夫、北川和彦
押野博明、矢ケ﨑崇、八幡勇一、小山泰男、小林千秋、小川素明、中島毅、百瀬正一、今井柳平、津金敏三
北沢博之、帯川利之、羽吹義澄、林重男、大槻博隆、瀬戸守男、三澤伸二、松田光明、河西朝雄、田島俊男
平出哲夫、今泉啓子、伊東淳子、藤森真知子、柳沢加代子、矢嶋壽雄、矢崎和久、宮坂泰行、小林正和、横内寛人先生

さすがに卒業時には皆凜々しい顔をしている。坊主頭が一人もいない。３部は学友会館前の坂を登った先に他のクラスと離れてぽつんとあり、南向きで冬暖かくストーブを囲んでのたわいない話ができた。パン売り場が部屋の隣で便利だった。我がクラスのみ女性が４人いてなごやかな雰囲気がよかった。プロレス大好きでコブラツイストをかけたがる I.R 君、実家で製造したドーナッツを１袋１０円で売って小遣い銭稼ぎをしていた K.K 君、目を開いたまま眠っていた K.M 君、懐かしいです。担任は１、２年時が阿部隆先生（あべちゃん）、３年時が矢嶋壽雄先生（とっさ）、自由にやらせてくれて感謝の一言です。（北川和彦）

４部（３８名）

担任：　白沢寛人先生

林正昭、小池将修、

宮坂泰利、小澤龍太郎、瀧澤伸介、原聰、根橋秀幸、堀内良人、加藤規泰、増沢充万喜、清水光昭

林良茂、太田尚吾、赤羽博巳、折井正文、晝間清文、竹村純一、小林章、吉山重明、鳥羽研二

宮坂良司、矢島健二、渡邉博保、平林重夫、西村厚志、藤森直和、小池文市、柿沢邦広、小松大蔵

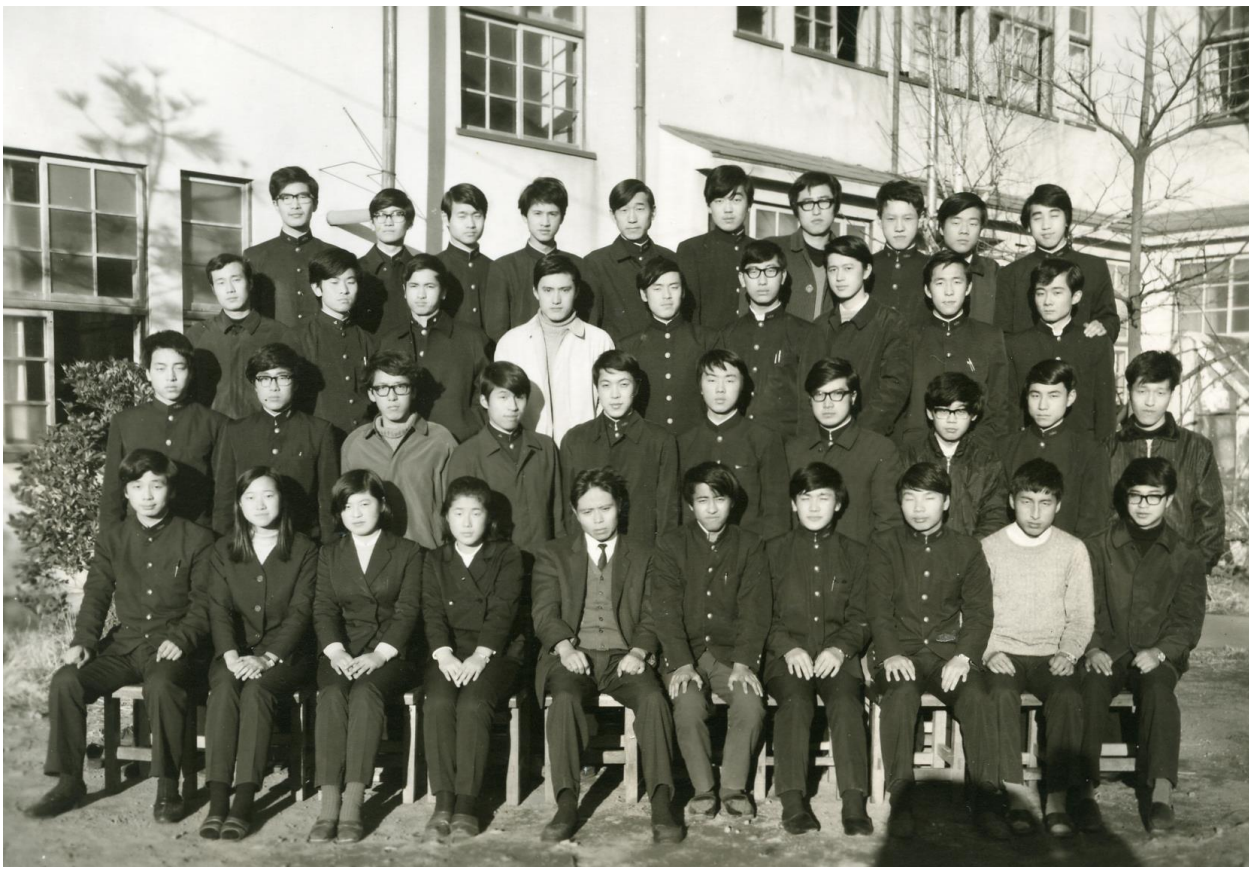
原秀男、小口信治、大久保賢一、山田泰、白沢寛人、黒河内志保、櫻井桂子、山田文雄、本田稔、鈴木雅久

先生

クラスには個性的な生徒が多かったので、
担任の白沢先生は、人知れず苦労をされたと思う。
また、この写真にだけ姿を残している林正昭君は、在学中に亡くなった。
足の手術をするということで、皆で人生初の献血をした。
残念ながら病に負けてしまったが、どれだけ無念であったかと思う。
我々は彼の分ももっと長生きをしなければならない。（平林重夫）

５部（３９名）

担任：千葉喜禄先生

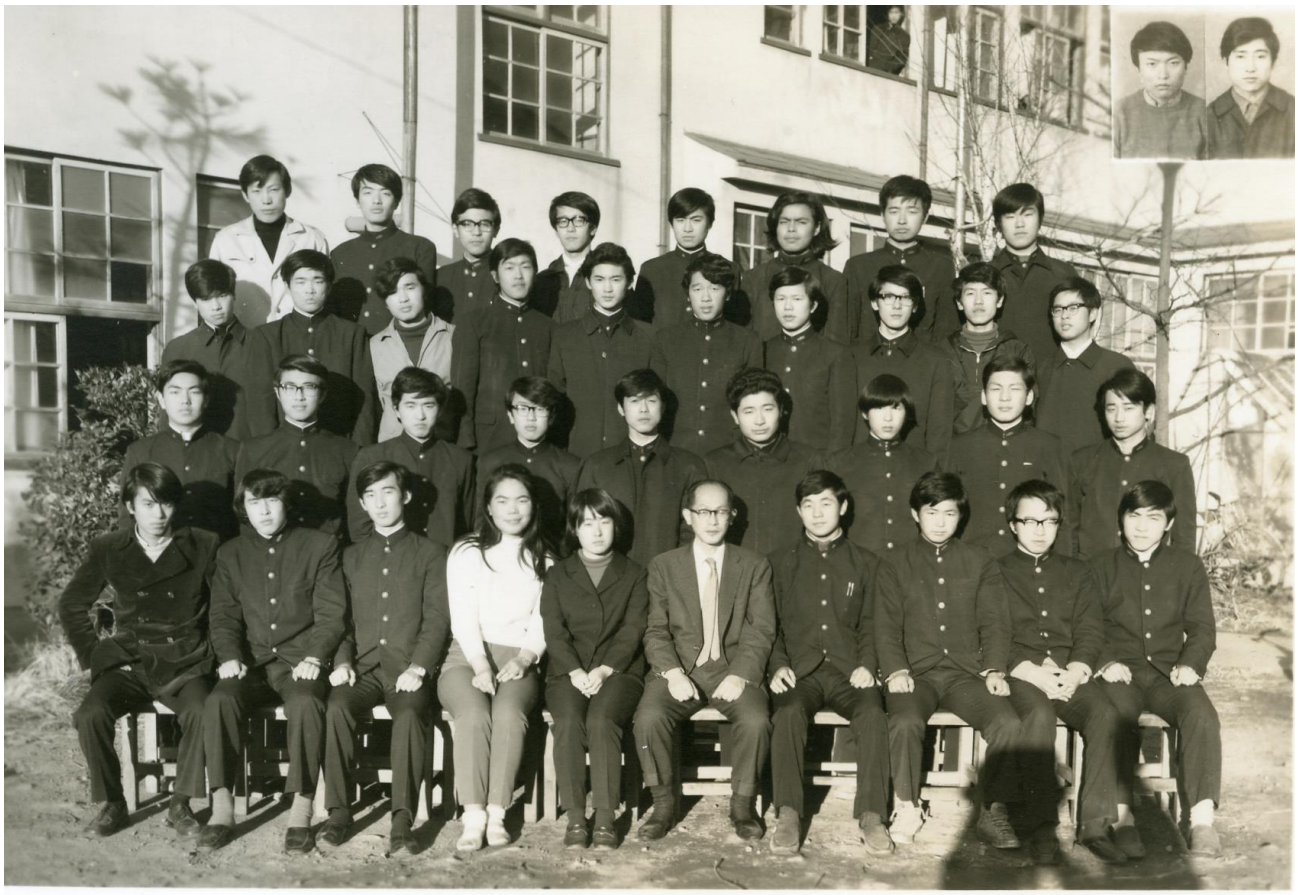


山田富康、千葉和胤、中山明彦、細田俊彰、伊藤養一、堀内正樹、金子博美、小松宏昭、向山博志、小島一彦
早川吉三、武井孝博、佐藤健介、野口和行、高木　昭、濵　隆二、窪田　敏、小口浩史、牛山尚也
中原　茂、両角清隆、河西晴征、永井英二、宮沢良男、野沢敬一、脇坂友雅、武井一俊、小平治郎、朝倉一善
伊藤正陽、土田章子、五味成子、小池恵子、千葉喜禄、根橋文武、宮坂和行、平泉永幸、北澤　誠、小池隆昭
平林義男(休学中)　　先生

「昼食の時間を思い起こせば、あの教室で食べていたのはおなご３人と僕を含めた数人だけ」。これが５部。自分の居場所は別の場所。良く言えば自主自立だ。だが、端艇大会は別だった。端艇部に属していた中原君、宮坂君、野口君ら６人と、コックスの根橋君。クラスみんなで応援した。猛練習の甲斐あってか２年生、３年生と連続優勝。我がクラスの大いなる誇りだ。担任は中庭のテニスで有名？な英語の千葉先生。トラックの運転手から、一念発起して京大へ、猛勉強をしたことを一回だけ聞いたことがある。感化された人もいたはずだ。先生は退職後ナナハンでツーリングを楽しんだとも。（伊藤正陽）

６部（３８名）

担任：　福沢武一先生



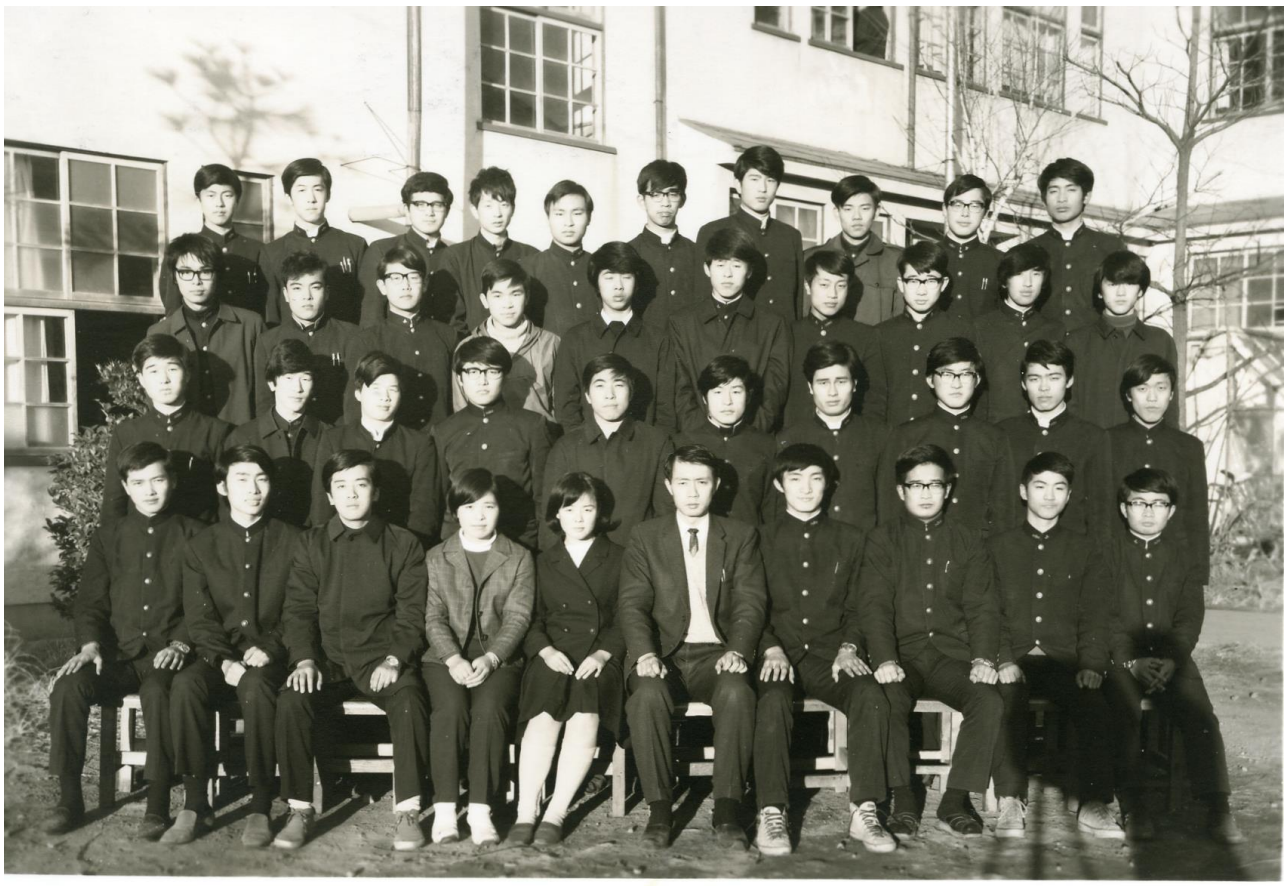
北原高志　吉江武司

小口建二、山崎和彦、大家信彦、宮坂好治、両角庄太郎、湯田坂一利、山田芳文、名和孝二
浜元雄、宮坂博之、飯田夏来、五味喜代幸、五味亮寛、浜正也、熊谷靖樹、岡野健、原田和郎、吉川悟
牛山純男、小池清教、里見雄治、小林史幸、長田博文、茅野美知夫、加島芳明、平林清準、名取康彦
板花哲夫、柳沢公正、小池浩一、小林絹子、小口美津子、福沢武一、斉藤浩平、井上和彦、岩間光泰、井澤昭夫
先生

6 部の紹介と言ってもはっきり言って特に印象がない。担任は福沢武一先生であり古文の大家でその道では本も出版され相当の権威者ではあったが、当時 10 代の我々にとってやたら年配のおじさん（おじいさん？）に見えて、先生を中心に「よし、皆で何かやってみよう。これが青春だ！」という雰囲気はなかったのが事実である。そんな中で思い出に残るのはバレーボールのクラスマッチである。春と秋の年 2 回あったのだが 2 年の秋の大会から 3 年生のチームを破り卒業まで 3 回連続優勝を遂げた。この時だけは選手でない仲間も応援に駆けつけクラス全体が一つにまとまり美酒に酔った思い出が残っている。（山崎和彦）

７部（３９名）

担任：　本山綱規先生



永村良介、浅川輝雄、横内孝文、高木広行、田中俊廣、山田晃、両角哲、林亮一、小口賢治郎、平谷豊
坂井明英、天木正春、岩波清信、樋口由照、小池廣和、原恵二、北原勝、藤森重一、宮坂平、牛山則雄
関英男、山田有造、宮沢三幸、田中和彦、林元夫、今井茂一、小口泰介、両角誠、矢島博、坂本幸雄
笠原正英、土橋良太、小松秀男、浜清子、小松思鶴、本山綱規、川島弘、宮坂春樹、五味信治、有賀育男
先生

担任の本山先生が若くて熱く、先生と生徒の距離が近かった。新婚のご夫妻をお招きしてお祝いのクラスコンパをやったり、卒業式の後日に大勢で先生の家に押しかけたりした。特筆すべきは、諏訪湖マラソンクラスマッチで優勝したことである。1年生が優勝という快挙ではなかったか。更に連続優勝を成し遂げたような気もするが、記録は無いし50年も前のことで誰も正確な記憶がない。優勝を狙ったのかどうか定かでないが、とにかく長距離が得意な者も苦手な者も皆が真剣に走った結果だった。なぜ皆真剣に走ったのか…。純粋で真面目で、クラスのまとまりが良かったのだと思う。（横内孝文）

清陵 73 回生･同期会のあゆみ

われわれ清陵 73 回生が本格的な同期会を最初に開いたのは、1999 年（平成 11 年）7 月 18 日の「卒後 30 年の集い」（上諏訪温泉・ぬのはん）だった。

1970 年（昭和 45 年）３月の卒業以来、大学時代はそれぞれの学内ごとに、また清陵のクラス単位の同級会や有志による「例会」、部活ＯＢなど相当数の集いが活発に展開されていたと承知しているが、いずれも限られた規模の開催にとどまっていた。

すべての同期生に参加を呼び掛けた「卒後 30 年」は、東京在住の鳥羽研二君（４部）らの提唱で動き出し、諏訪在住の宮坂春樹君（７部）らが呼応する形で準備を進めた。清陵祭期間中の当日、同期総数 273 人のうち、111 人が諏訪湖畔に集結、クラス＆教科担任の恩師６人も出席した「伝説の宴」に、誕生日で 48 歳となる年齢の面々は美酒に酔い痴れた。今回の記念誌にも掲載されている集合写真の、おびただしい笑顔の輪が結束感の証明と言ってよいだろう（撮影に間に合わなかった仲間も複数あり）。

この日は朝からの雨が昼には上がり、絶好の撮影コンディション。実は夏の甲子園をかけた高校野球長野大会で清陵の試合日だったのが雨で順延され、翌 19 日、諏訪湖スタジアムへ相当数の同期生が応援に駆け付けることができたという「おまけ付き」。清陵の野球が強かった時代だが、この時は後日、甲子園代表となる松商学園に屈している。

集いの成功を形で残そうと相談。生徒昇降口前庭にハナミズキを記念植樹した。

その後は、と言えば、55 歳の 2006 年（平成 18 年）に、同窓会の当番幹事学年として、６月に本部総会・懇親会（上諏訪温泉・紅や）、10 月には東京支部・東京清陵会の総会・懇親会（市ヶ谷・アルカディア）で運営を担当した。これが、いわば「番外編」。

次は 2009 年（平成 21 年）７月に「卒後 40 年の集い」（上諏訪温泉・華乃井）を開き、集いに先駆けて母校で校歌（第１、第２）額の贈呈式を行なった。

2012 年（平成 24 年）７月は、全員が 60 歳になった祝いの「還暦の集い」（諏訪市・仙岳）。さらに、2014 年（平成 26 年）７月は、５年ごとに開くことにした「卒後 45 年の集い」（上諏訪温泉・鷺乃湯）。その春、開校した付属中学にポータブルのマイク＆スピーカーセットを贈った。初々しい１期生 80 人の前で校歌を朗詠したのも良かった。

そして、2017 年（平成 29 年）７月。清陵入学から 50 年、さらに 65 歳の高齢者入りを寿ぐ（？）集いを上諏訪温泉・浜の湯で開いた。その際、2 年後の 2019 年に「卒後 50 年の集いを盛大に開催しよう。20 年前を思い起こし、原点の場といえる、ぬのはんにみんなで集まろう」と誓い合ったのだった。

ちなみに、73 回生の間では、いつしか「なみの会」の愛称がついた。名前の由来は「73」の語呂合わせと「オレたちは『並み』なのさ」といった奥ゆかしさ。ただし、「それは、裏読み狙いだろう」と揶揄されることもある。（山田　雄一）

母校への記念贈呈品

清陵の卒業生として、母校に貢献できることはないか――。同期の集いを準備するたびに、そうした話になる。学校側とも打ち合わせ、たびたび記念の品を贈ってきた。

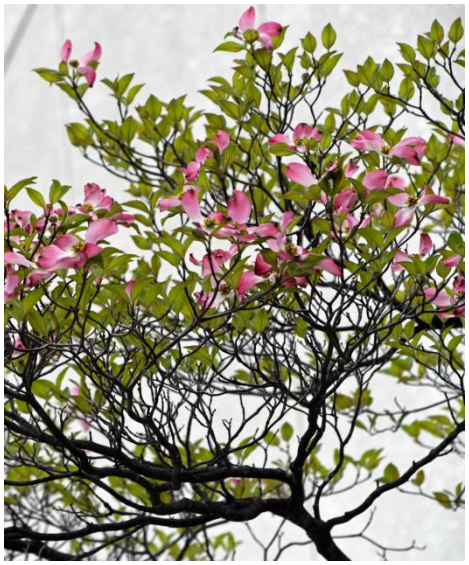
1999 年（平成 11 年）の「卒後 30 年」ではハナミズキ。植栽の時期を専門業者に相談し、贈呈は秋となった。役員ら数人で訪問し、生徒昇降口の前庭に植樹された。2 度の冬を越した 2001 年（平成 13 年）の春、初めてピンクの可愛らしい花をいくつも付けた。

2009 年（平成 21 年）の「卒後 40 年」では校歌の額を贈った。「そういえば校内にないよな。なにせ日本一の長さだから」と幹事会で話題になり、「それなら、やってみようぜ」と衆議一決。かつて清陵の書道担当教諭だった小宮山雪陽さんに依頼し、揮毫していただいた。第１と第２で計２枚の横幅は７・５ｍ。午後の集いに先駆けて集まった約 30 名の同期生が在校生を交えて熱唱し、複数の地元紙やテレビ局で大きく報じられた。

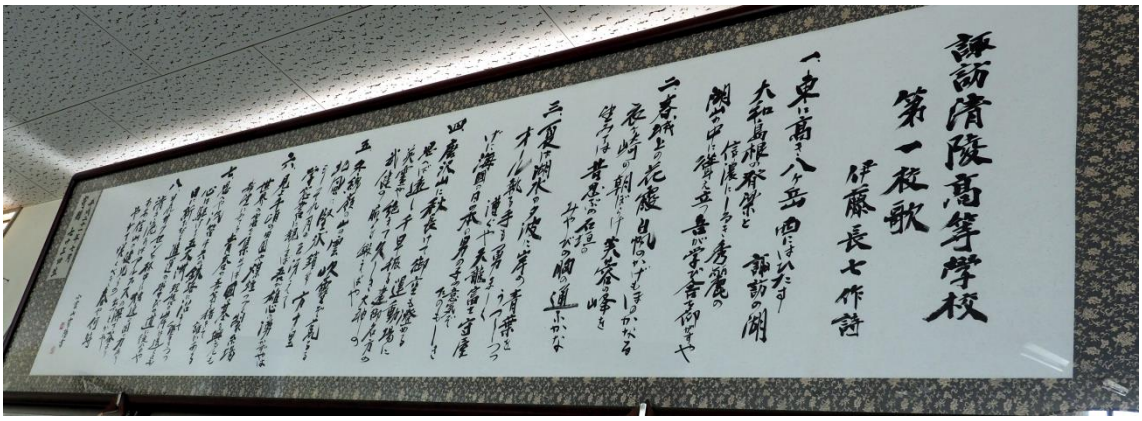
「卒後 45 年」の 2014 年（平成 26 年）は、4 月に開校した清陵付属中学へポータブルのマイク＆アンプセットを贈った。新１年生 80 人が勢ぞろいする中の贈呈式となった。

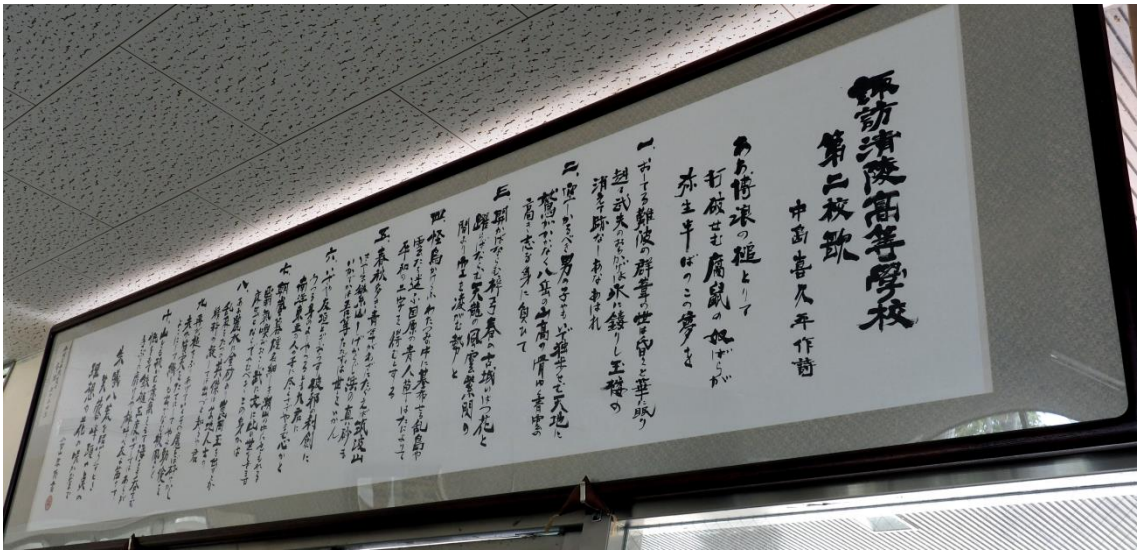
今回の「卒後 50 年」は記念誌をつくった。いわば自分たちのための文集だが、若い世代に向けたメッセージも多く掲載され、後輩たちへの贈り物と言えなくもない。（山田雄一）

①卒後３０年　「ハナミズキの植樹」（生徒昇降口脇の花壇）



②卒後４０年　「校歌の額」（生徒昇降口を入って正面）





③卒後４５年　「ポータブルアンプ」

（新設の付属中学校へ：写真は現在の小池徳男・副校長）

長野日報
2009年（平成21年） 7月5日 日曜日

日本一長い校歌 歌額も横幅7.5m

２枚合計

清陵高73回生同期会

卒業40周年で寄贈

諏訪清陵高校（諏訪市）を1970年に卒業した73回生の同期会が4日、日本一長いとされる校歌の歌詞を揮ごうした額を同校へ寄贈した。卒業40周年を迎え、母校に貢献したいと、第一、第二校歌ごと1枚ずつ作製。いつまでも歌い継いでほしいとの同期会の願いから、生徒昇降口に掲げられた。（鮎沢健吾）

清陵祭に合わせて同期会の約30人が訪れ、篠原秀郷校長や北原智啓学友会長らと校歌額の除幕式を行った。

額は縦90㌢だが、第一、第二校歌合わせて18番（序章、終章を含めると20番）まである長さから、横幅は360～390㌢にも。歌詞は、かつて同校書道教諭だった小宮山雪陽さん（現塩尻志学館高）に依頼。第一は行書体で、第二は隷書を中心とした古い書体で揮ごうした。

「有名な校歌だが、そういえば額はないなぁ」と感じていたという同期会。代表幹事の森千章さん(57)＝茅野市＝は「高校時代の思い出の一つが校歌だった。在校生、これから入学する皆さんには校歌に含まれる伝統を感じ、いろいろな場面で愛唱してほしい」と期待を込めた。

篠原校長は「明治36年（1903）の校歌制定から106年。額の寄贈を機に、新たな気持ちで口ずさみ、新しい歴史をつくっていきたい」と礼を述べた。

〈東に高き八ヶ岳 西にはひたす諏訪の…〉。校歌額の下で同期会メンバーは、40歳近く年の離れた在校生と歌声を響かせた。

生徒昇降口に掲げた校歌額の下で、歌声を響かせる73回生同期会メンバー

清陵中へ放送機材寄贈

清陵高73回生「なみの会」

石城校長㊨に記念品目録を手渡す山田事務局長

諏訪清陵高校の73回生でつくる「なみの会」は5日、4月に開校した諏訪清陵高校付属中学校へ持ち運び式の放送機材(15万円相当)を贈った。清陵の歴史に新たな一歩を刻む後輩たちの学びを、後押しした。

贈ったのはマイクとスピーカーの2点。簡単に持ち運びでき、場所を選ばず使用できる。卒業45年目の節目に、付属中学が開校したことを受けて、「何か記念品を贈りたい」と同校に相談した。記念品は6月末から活用が始まっており、贈呈式でも使用。費用は、同日行われた同期会会費の一部を充てたという。

石城正志校長は「清陵高校120年の伝統とは、先人たちの志や思い。ありがたく思う」と感謝した。同会の山田雄一事務局長は「清陵での3年間は人生の原点になっている。大いに遊び、大いに学んで、いい時間を過ごしてほしい」と話した。

贈呈式では参加した会員31人が中学生約80人を前に、清陵高校名物の校歌を堂々と歌い、エールを贈った。同会では卒業30年を機会に同期会を始めた。(鳥羽彩加)

長野日報　2014年(平成26年)　7月6日　日曜日

なみの会幹事会（2019/3/10）

表紙デザインを依頼した平林義男君（５部）を交えて、表紙タイトルについて熱烈議論が交わされました。候補として「理想の花の咲かむまで」、「我が学び舎を仰がずや」、「自反而縮雖千萬人吾往矣」、「清水ヶ丘から５０年」などがあがりました。「理想の花の咲かむまで」が特に根強い人気のあったのでしたが、先例として「理想の花の咲かむまで 牛山正雄先生記念文集」（発行は 1983.7）があることから、タイトルは「清水ヶ丘から」に決まりました。

幹事会行きつけの店「いずみ屋」（上諏訪駅前）にて
「上段」
小池忠男（２部）、横内孝文（７部）、平林重夫（４部）、宮坂和生（１部）、
河西朝雄（３部）
「下段」
北川和彦（３部）、山崎和彦（６部）、松木敏博（１部）、平林義男（５部）、
山田雄一（２部）、藤森英幸（２部）

清陵時代の面影のある人、だれだっけかと分からない人、髪の毛が薄くなった人、お腹がでてきた人。

諏訪清陵高等学校73回生同窓会　卒後30周年の集い　　H·11·7·18　於　諏訪湖畔　ぬのはん

■清陵 73 回生卒後 30 年の集いの記念写真（敬称略）

1999 年（平成 11 年） 7月 18 日、於・ぬのはん

【最上段左から】遠藤茂（３部）、山口和夫（２）、古村功（３）、五味喜代幸（６）、平塚唯史（１）、中村安志（３）、両角庄太郎（６）、山田文雄（４）、柳澤洋介（１）、畫間清文（４）、牛山則雄（７）、吉川悟（６）、山田有造（７）、宮坂美千博（１）、宮坂平（７）、井上和彦（６）、長田茂（２）、久保正法（２）、岩波清信（７）、熊谷靖樹（６）、北原勝（７）

【４段目】窪田敏（５）、小口信治（４）、小松宏昭（５）、濵隆二（５）、北原光比（２）、浜正也（６）、名取康彦（６）、池上昭彦（１）、三澤伸二（３）、小澤龍太郎（４）、三浦一洋（２）、赤羽博巳（４）、原聰（４）、横内孝文（７）、中山明彦（５）宮坂博之（６）、津金敏三（３）、山田芳文（６）、矢崎和久（３）、柳田恒男（２）、牛山秀彦（１）、川島弘（７）

【３段目】小松秀男（７）、林重男（３）、伊藤俊巻（３）、小山泰男（３）、河西朝雄（３）、小池隆昭（５）、両角誠（７）、鈴木雅久（４）、中島毅（３）、小池浩一（６）、林亮一（７）、原恵二（７）、小口泰介（７）、松田光明（３）、小林正和（３）、小林茂和（１）、伊藤養一（５）、小池文市（４）、宮坂和生（１）、畑野敏文（２）、向山博志（５）、帯川利之（３）

【２段目】小松大蔵（４）、鳥羽研二（４）、北川和彦（３）、藤森英幸（２）、矢ケ﨑崇（３）、中澤清人（２）、二ツ木(伊東)淳子（３）、柳沢(藤森)真知子（３）、北村(柳沢)加代子（３）、阿部光康（１）、飯田夏来（６）、坂井明英（７）、山崎和彦（６）、渡邉博保（４）、小松賢三（１）、小島一彦（５）、丸山芳高（１）、林春幸（１）、武井孝博（５）、有賀博行（１）宮坂和行（５）、原田和郎（６）、洞沢(名和)孝二（６）、加藤規泰（４）、松木敏博（１）

【１段目】マディーン(今泉)啓子（３）、飯岡(春日)一文（１）、伊藤(五味)成子（５）、和泉(櫻井)桂子（４）、小林(小池)恵子（５）、赤羽(浜)清子（７）、林(笠原)俊子（１）、岩下光雄先生、伊藤邦雄先生、矢島良幸先生、伊藤誠一先生（２）、本山綱規先生（７）、白沢寛人先生（４）、林(根橋)秀幸（４）、宮坂春樹（７）、平林清準（６）、西村厚志（４）、竹村純一（４）、岩本光正（２）、山田雄一（２）、小池忠男（２）

清陵の風景

昭和４２年４月～４５年３月

（７２回生　土橋和男氏提供、１部松木敏博君にデジタル加工を加えて鮮明にしてもらう）

「黎明」の像（清水多嘉示作）

職員玄関の前にいつもあり、清陵祭の時期は二葉の生徒会幹事の手により、いつも女性の下着で覆われていました。あの頃、我々は何を考えていたのでしょう。

図書館前：先生方のテニスが盛んな中庭でした。授業中、先生を迎えに行った生徒が、使命を忘れて観戦していました。

体研横通路：大体育館端の狭い体育研究室。まさかここの住人（＝体育教師）になるとは。

学友会館：自治の砦、学友会館。勉強以外の様々な事を先輩から教えられた。

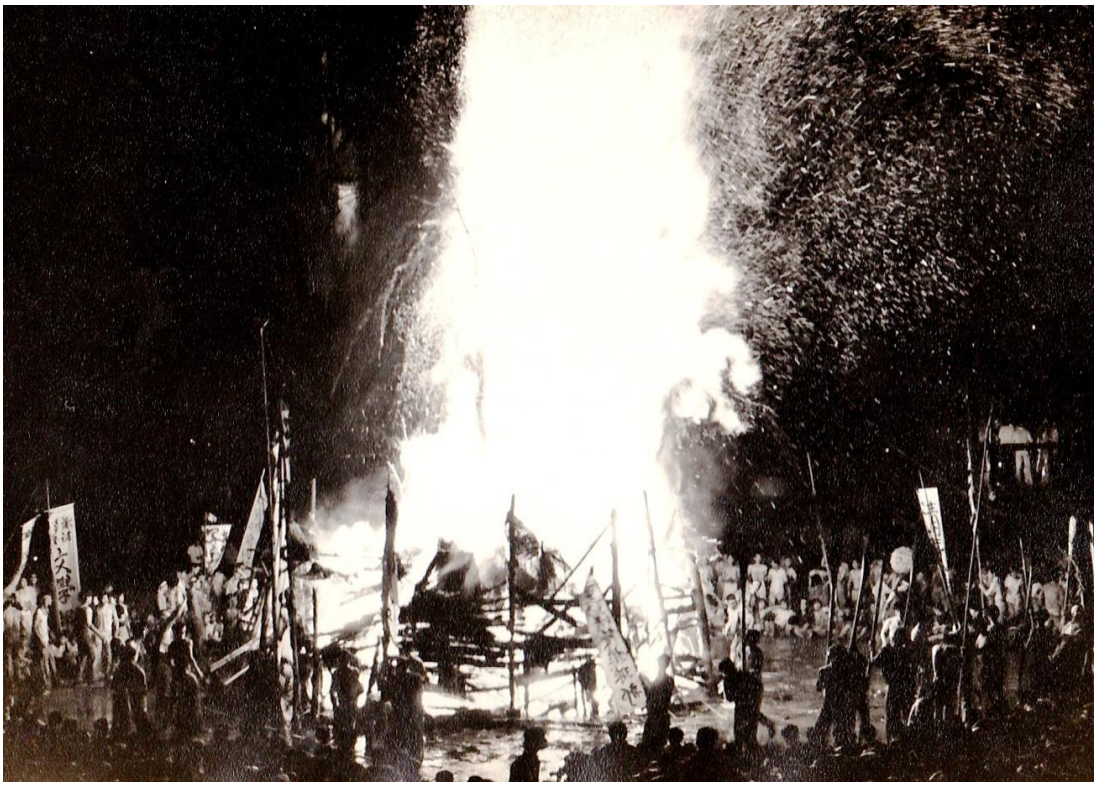
三沢文庫、天文台、コンパ室：コンパのたびにアルコール中毒気味の生徒が多発。

大石と大体育館：いつの時代からあるのか「大石」。今でも何も語らず、清陵生を見つめてドカンと居座っている。

清陵祭アーチ：杉の葉を大量に運んで来ては毎年手作りで作るアーチ。中に二人位が夜寝れるような二部屋が設計されているのを知っていますか。

清陵祭ファイアーストーム：地方会、クラブ単位で「のぼり旗」を持ち、自分達の存在を誇示していました。

（４部山田文雄君提供）：暗闇・水・炎・ラン。人間を狂喜させる条件が揃っている。



清陵祭運動会：手作りのファーアーストームと運動会。コーナーがきつくて体を斜めに傾けないと走れませんでした。

金色の民：地方会単位。クラブ単位、クラス単位でよく「金色の民」をどこでも所構わずにやっていました。

（４部山田文雄君提供）：卒業してからも、事あるごとにやっている輩が多いです。

クラスマッチ：ボロボロの大体育館での白熱の戦いをしている光景。

学園

長野県・諏訪市

諏訪清陵高校

晴れた日には四周十六キロの諏訪の湖面に、はるか日本アルプスの秀峯が眺められる。その東、稍高い所に、通称「清水ケ丘」の学舎が建っている。それが清陵高校である。

明治二十八年創立、数えて今年七十三周年にあたる。その中には、ものごとをただ鵜呑みにはしない、そして自分のことは最も自分を知る自分が処遇すべきだという信念気骨と風格を持つ生徒たちがしかつめらしく鎮座している。彼らはこの地方の地域性の代表生たちでもある。

こうした礎地の上に、戦前日本に二校しかなかったという自治の伝統が築かれ、「自反而縮雖千万人吾往矣」(孟子)の言を掲げ、質実剛健とひたぶるな学究生活とをスローガンとしてきている。生徒たちは、今でも頭に破帽を戴き、肩から鞄を斜めにかけ、朴歯の足駄を曳きずりながら、登下校中書見をしている髯武者も多い。

歴代職員に人物・学者は多く、かつて世界的地理学者であった三沢勝衛先生のもとに幾多の人材が輩出しているが、今も生徒による太陽の黒点観測は毎月三鷹天文台に送られ、天文学界の貴重な資料となっている。先輩には、お天気博士故藤原咲平・前教育大学長三輪知雄・日本女子大学長有賀喜左衛門・その他学長・芸術家に中川紀元・清水多嘉示・作家に藤森成吉・阿木翁助・新田次郎・書店主故岩波茂雄ら諸士、大学教授の数も百三十名を擁し、その他各界多士済々である。

いまだ国民大衆の記憶に新しい戦艦「大和」の艦長有賀幸作も、また本校の出身である。断固として部下に脱出を命じ、独りコンパスに身を縛し、最後に副官の差し出した乾パンに莞爾たる微笑を残し、艦と運命をともにしたそのすがたこそ清陵精神の象徴にほかならない。

運動のクラブ活動も盛んだが、一風変っていて、選手はあるけれど、主体は生徒全員の運動一般化の徹底にある。これはすでに明治四十年から叫ばれ、大正五年には湖水一周マラソン、諏訪湖横断遠泳が始められ、昭和五年に至って全部の運動に対し、全員の参加が完全に実施されている。今でも全員による湖周マラソンは当地方の関心行事となっている。

時代の変遷流行を越えて、常に自律自戒の声とともに孤高の風貌の確立がなされている。

叙上の学校生活の根幹が、明治三十一年に生徒の手により結成され、今日に続いている学友会(生徒会)の討議検討という全き生徒自身の理性によって行なわれて、しかも過たないところに清陵の清陵たるゆえんがあると思われる。

当地方はかつて栄えた生糸生産の、林立した煙突も今はなく、静かな農水産は下火になり、現今では時計・カメラ・オルゴールなどの精密機械工業や、バルヴ用の鉄製産などがそれらにとってかわり、従来からの寒天・味噌の生産とともに国家経済の一翼を荷っている。諏訪湖・温泉・霧ケ峯などは景観の開発で活気を呈しつつあり、現代生活の疲れをいやすオアシスとして発展していくだろう。

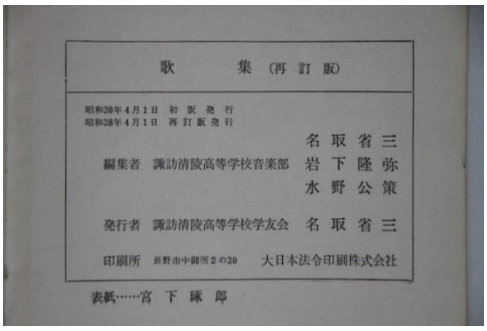
文　前島能一(教諭)
え　矢島健二(二年)

４部矢島健二君提供（「え」も同氏）：国語の受験雑誌『国語セミナ』１９６８年１２月号に載った学校紹介文。清陵（諏訪中）ＯＢでもある前島能一先生が、５０年前に書いた文章で、大変興味深いものだと思います。

諏訪清陵高校　歌集・・・こんな歌集が配布されていたのを覚えていますか。

「写真と文は２部小池忠男君」

正調（＝表の）の歌集



歌　集（再訂版）

昭和30年4月1日　初版発行
昭和38年4月1日　再訂版発行

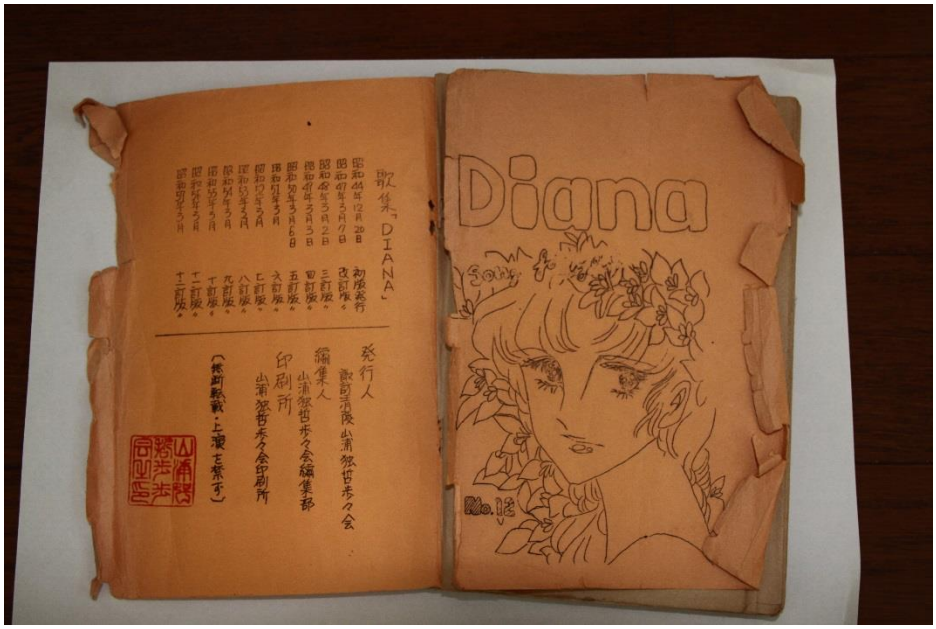
編集者　諏訪清陵高等学校音楽部　名取省三　岩下隆弥　水野公策

発行者　諏訪清陵高等学校学友会　名取省三

印刷所　長野市中御所2の30　大日本法令印刷株式会社

表紙……宮下琢郎

80年史等を確認しましたが、どの年代にどの団体から（発行者は右にあるように諏訪清陵高校学友会　代表　名取省三＝６７回生とあります。）新入生に配布されたかは記載がありませんでした。とにかく各地方会でこれを元に清陵校歌や清陵讃歌、一高などの寮歌が歌われ、覚えさせられたのが鮮明に記憶に残っています。正調の歌集と異なる裏の歌集「ダイアナ　山浦独哲歩々会　S44年初版発行」



諏訪清陵高等学校校歌（第一）

伊藤　長七　作詞

一、東に高き八ヶ岳　西にはひたす諏訪の湖
大和島根の脊梁と　信濃にしるき秀麗の
湖山の中に聳え立つ　吾が学び舎を仰がずや

二、春城上の花霞　白帆のかげもほのかなる
衣ヶ崎の朝ぼらけ　芙蓉の峰を望みては
昔忍ぶの石垣に　みやびの胸の通ふかな

三、夏は湖水の夕波に　岸の青葉をうつしつつ
オール執る手も勇ましく　漕ぐや天龍富士守屋
げに海国の日の本の　男の子の意気ぞたのもしき

四、唐沢山に秋長けて　御空も澄める運動場に
思へば遠し千早振る　建御名方の英霊や
絶えて久しき大神の　武健の腕を鍛へばや

五、冬綿嶺の山の雲　吹雪ぞ荒るる北風に
堅氷鎖す方十里　もしそれ月の色冴えて
学窓書に親しまば　吾が雄心の湧かずやは

六、見よ千頃の田園や　煤煙つづく製糸場
世界の富を集めては　国の基を興さんも
希望にみてる青春の　吾等を措きて誰かある

七、思へや汽笛中央の　鉄路に沿うて響きつつ
心は駆ける五大洲　理想の岸は遠くとも
日に新たなる進運の　学びの道に後れめや

八、それザクセンの林中に　独逸の国の力あり
清き流れはアルプスの　深き谷より出づとかや
ああ信山の健児らの　やがて咲くべき春や何時

諏訪清陵高等学校校歌（第二）

中島　喜久平　作詞

ああ博浪の槌とりて　打破せむ腐鼠の奴ばらが
　弥生半ばのこの夢を

一、おしてる難波の群葦の　世は昏々と華に眠り
　赳々　武夫のおもかげは　氷に鑠りし玉楼の
　消えて跡なしあなあはれ

二、空しかるべき男の子やも　いで独歩せむ天地に
　鷲がかかなく八岳の　山高の骨ゆく青雲の
　高き志を身に負ひて

三、開かばならむ梓弓　春の湖上のはつ花と
　躍らばならむ天龍の　風雲紫閃の間より
　空を凌がむ勢と

四、怪鳥かけらふわたつみの　中に碁布せる乱島や
　雲たち迷ふ国原の　青人草はたによりて
　平和の二字を得むとする

五、春秋多き青年が　わざにたぐへば筑波山
　はやま繁山しげからじ　浜の真砂もいかでかは
　吾等たたずば世をいかん

六、いざや友垣とぎおろす　破邪の利剣にうつる身の
　よしやつるとも大君に　南洋東亜の人の子に
　尽くさでやまむ心かと

七、朝嵐暮煙名細しき　湖山の中にゐごもれる
　覇気喚びおこし武に文に　此の世をさます床虫と
　ならでやむべきこの身かは

八、ああ麗水に金砂あり　崑岡玉を出すとか
　乱麻をたつの英傑は　其の地人士の精粋の
　凝りては出づと知るや君

九、再び槌をふりあげて　いくその魔をば砕けかし
　夫れ質実をたてにして　やよ勤倹をよこにして
　織りも出でなむ校風を

十、山をも抜かむ意気をもて　海をも呑まむ慨をもて
　鉄槌三度かざしては　あらが手ぶりに靡けとや
　雄叫べ友よ茜さす
　朱曦八荒を照らすとき　芙蓉峰頭一点の
　理想の花の咲かむまで

青春時代の出来事(データは「https://nendai-ryuukou.com/」より引用)

我々の青春時代（中学１年～大学４年＋浪人・留年）の 12 年間の主な出来事や流行ったものを、年代別歌謡曲ランキングと合わせて載せました。「歌は世につれ世は歌につれ」ある時代によく歌われる歌は、その時代の世情を反映しているものです。

1964 年（昭和 39 年：甲辰（きのえたつ）：中学１年）

東京オリンピック、東海道新幹線開通、王貞治 55 号ホームラン日本記録、かっぱえびせん、アイビールック、カギッ子、シェー、カラ出張、みゆき族

順位	曲名	歌手名
1 位	明日があるさ	坂本九
2 位	君だけを	西郷輝彦
3 位	幸せなら手をたたこう	坂本九
4 位	愛と死をみつめて	青山和子
5 位	君たちがいて僕がいた	舟木一夫
6 位	恋の山手線	小林旭
7 位	皆の衆	村田英雄
8 位	アンコ椿は恋の花	都はるみ
9 位	柔	美空ひばり
10 位	お座敷小唄	和田弘とマヒナスターズ

1965 年（昭和 40 年：乙巳（きのとみ）：中学２年）

朝永振一郎ノーベル物理学賞受賞、いざなぎ景気、日本サッカーリーグが開幕、プロ野球第１回ドラフト会議、３Ｃ時代、11PM が放送開始、エレキギターブーム、オロナミン C

順位	曲名	歌手名
1 位	君といつまでも	加山雄三
2 位	涙の連絡船	都はるみ
3 位	涙くんさようなら	マヒナ・スターズ
4 位	兄弟仁義	北島三郎
5 位	ねむの木の子守唄	吉永小百合
6 位	愛して愛して愛しちゃったのよ	田代美代子和田弘マヒナスターズ
7 位	赤いグラス	アイ・ジョージ、志摩ちなみ
8 位	知りたくないの	菅原洋一
9 位	二人の世界	石原裕次郎
10 位	女ひとり	デューク・エイセス

1966 年（昭和 41 年：丙午（ひのえうま）：中学 3 年）

ビートルズ来日、日本の総人口が 1 億突破、全日空ボーイング 727 型機が東京湾に墜落、ウルトラマンシリーズが放送開始、ミリタリールック、NHK 朝ドラマ「おはなはん」、日本テレビ「笑点」放送開始、ロングブーツ大流行、ポッキー、柿ピー

順位	曲名	歌手名
1 位	霧氷	橋幸夫
2 位	星影のワルツ	千昌夫
3 位	恍惚のブルース	青江三奈
4 位	バラが咲いた	マイク真木
5 位	霧の摩周湖	布施明
6 位	悲しい酒	美空ひばり
7 位	唐獅子牡丹	高倉健
8 位	柳ヶ瀬ブルース	美川憲一
9 位	夕陽が泣いている	スパイダーズ
10 位	ベットで煙草を吸わないで	沢たまき

1967 年（昭和 42 年：丁未（ひのとひつじ）：高校 1 年）

美濃部東京都知事誕生、吉田茂元首相死去、ツイッギー来日、初の「建国記念日」、「オールナイトニッポン」が放送開始、フーテン、ヒッピー、アングラ、グループサウンズブーム、青春ドラマ・ブーム、ミニスカートブーム、リカちゃん人形登場、頭の体操

順位	曲名	歌手名
1 位	ブルー・シャトー	ジャッキー吉川とブルー・コメッツ
2 位	夜霧よ今夜もありがとう	石原裕次郎
3 位	この広い野原いっぱい	森山良子
4 位	真赤な太陽	美空ひばり・ブルー・コメッツ
5 位	銀色の道	ザ・ピーナッツ
6 位	恋のハレルヤ	黛ジュン
7 位	君だけに愛を	ザ・タイガース
8 位	帰ってきたヨッパライ	ザ・フォーク・クルセーダーズ
9 位	雨の銀座	黒沢明とロス・プリモス
10 位	小樽のひとよ	鶴岡雅義と東京ロマンチカ

1968 年（昭和 43 年：戊申（つちのえさる）：高校２年）

３億円強奪事件、川端康成氏 ノーベル文学賞受賞、メキシコオリンピック開幕、グルノーブルオリンピック開催（冬季）、オリコンランキングが開始、週刊少年ジャンプが創刊、スカートめくり流行、ボンカレー、カール、サッポロ一番みそラーメン

順位	曲名	歌手名
1 位	天使の誘惑	黛ジュン
2 位	三百六十五歩のマーチ	水前寺清子
3 位	花の首飾り	タイガース
4 位	伊勢佐木町ブルース	青江三奈
5 位	エメラルドの伝説	ザ・テンプターズ
6 位	ブルー・ライト・ヨコハマ	いしだあゆみ
7 位	愛の奇跡	ヒデとロザンナ
8 位	好きになった人	都はるみ
9 位	グッド・ナイト・ベイビー	キング・トーンズ
10 位	受験生ブルース	高石友也

1969 年（昭和 44 年：己酉（つちのととり）：高校３年）

アポロ 11 号月面着陸、東大安田講堂陥落、東名高速道路全通、サザエさんが放送開始、8 時だョ!全員集合が放送開始、日本銀行が五百円札を発行、パンティストッキング、オー、モーレツ！、あっと驚くタメゴロー、ナンセンス、断絶の時代

順位	曲名	歌手名
1 位	いいじゃないの幸せならば	佐良直美
2 位	夜明けのスキャット	由紀さおり
3 位	どしゃぶりの雨の中で	和田アキ子
4 位	長崎は今日も雨だった	内山田洋とクールファイブ
5 位	黒ネコのタンゴ	皆川おさむ
6 位	夜と朝のあいだに	ピーター
7 位	ドリフのズンドコ節	ザ・ドリフターズ
8 位	今日でお別れ	菅原洋一
9 位	禁じられた恋	森山良子
10 位	白いブランコ	ビリー・バンバン

1970 年（昭和 45 年：庚戌（かのえいぬ）：大学 1 年）

よど号ハイジャック事件、大阪万博、アポロ 13 号打ち上げ、ボーリング・ブーム、アメリカンクラッカーが大流行、ビートルズ解散、ケンタッキー・フライド・チキンの 1 号店が名古屋にオープン、ウーマン・リブ、三無主義、スケスケルック、ノーブラ

順位	曲名	歌手名
1 位	黒ネコのタンゴ	皆川おさむ
2 位	ドリフのズンドコ節	ザ・ドリフターズ
3 位	圭子の夢は夜ひらく	藤圭子
4 位	女のブルース	藤圭子
5 位	逢わずに愛して	内山田洋とクールファイブ
6 位	手紙	由紀さおり
7 位	愛は傷つきやすく	ヒデとロザンナ
8 位	今日でお別れ	菅原洋一
9 位	ヴィーナス	ザ・ショッキング・ブルー
10 位	京都の恋	渚 ゆう子

1971 年（昭和 46 年：辛亥（かのとい）：大学 2 年）

ドルショック、アポロ 14 号月に着陸、第 48 代横綱・大鵬が引退、カップヌードル発売、マクドナルドの日本 1 号店が銀座に開店、第二次ベビーブーム、アンノン族、ホットパンツ登場、カラオケ、脱サラ、ニアミス

順位	曲名	歌手名
1 位	わたしの城下町	小柳ルミ子
2 位	知床旅情	加藤登紀子
3 位	また逢う日まで	尾崎紀世彦
4 位	傷だらけの人生	鶴田浩二
5 位	ナオミの夢	ヘドバとダビデ
6 位	よこはま・たそがれ	五木ひろし
7 位	花嫁	はしだのりひことクライマックス
8 位	雨のバラード	湯原昌幸
9 位	望郷	森進一
10 位	さらば恋人	堺 正章

1972 年（昭和 47 年：壬子（みずのえね）：大学 3 年）

あさま山荘事件、沖縄返還、ミュンヘンオリンピック開催、札幌冬季オリンピック開催、パンダ（カンカンとランラン）が上野動物園に来日、日本列島改造論、ゴッドファーザー、ハイセイコー、ホットパンツ流行、電卓カシオミニ、お客様は神様です

順位	曲名	歌手名
1 位	女のみち	宮史郎とぴんからトリオ
2 位	瀬戸の花嫁	小柳ルミ子
3 位	さよならをするために	ビリーバンバン
4 位	旅の宿	よしだたくろう
5 位	悪魔がにくい	平田隆夫とセルスターズ
6 位	ひとりじゃないの	天地真理
7 位	京のにわか雨	小柳ルミ子
8 位	別れの朝	ペドロ＆カプリシャス
9 位	小さな恋	天地真理
10 位	太陽がくれた季節	青い三角定規

1973 年（昭和 48 年：癸丑（みずのとうし）：大学 4 年）

オイルショック、トイレット・ペーパー買いだめ騒動、下関－門司を結ぶ関門橋が開通、セブン・イレブン・ジャパン創立、超能力ブーム、省エネ、ノストラダムスの大予言、オセロゲーム、セイコークオーツ、アイドルブーム始まる、日本沈没

順位	曲名	歌手名
1 位	女のみち	宮史郎とぴんからトリオ
2 位	女のねがい	宮史郎とぴんからトリオ
3 位	学生街の喫茶店	ガロ
4 位	喝采	ちあきなおみ
5 位	危険なふたり	沢田研二
6 位	神田川	かぐや姫
7 位	心の旅	チューリップ
8 位	恋する夏の日	天地真理
9 位	若葉のささやき	天地真理
10 位	赤い風船	浅田美代子

1974 年（昭和 49 年：甲寅（きのえとら））

戦後初のマイナス成長、佐藤栄作がノーベル平和賞を受賞、長島茂男現役引退、巨人軍は永久に不滅です、超能力ブーム、ミニスカートからロングスカートへ、モンチッチ、紅茶きのこ、超合金、幸福行き切符、ベルばらブーム

順位	曲名	歌手名
1 位	なみだの操	殿さまキングス
2 位	あなた	小坂明子
3 位	うそ	中条きよし
4 位	ふれあい	中村雅俊
5 位	恋のダイヤル 6700	フィンガー5
6 位	夫婦鏡	殿さまキングス
7 位	くちなしの花	渡哲也
8 位	激しい恋	西城秀樹
9 位	積木の部屋	布施明
10 位	学園天国	フィンガー5

1975 年（昭和 50 年：乙卯（きのとう））

第二次ベビーブーム、沖縄国際海洋博覧会開幕、広島カープ、セ・リーグ初優勝、ローソン設立、ザ・ピーナッツが引退、アンタあの娘のなんなのさ、ブーツ流行、使い捨てライター、ペヤングソース焼そば、缶詰シーチキン、きのこの山

順位	曲名	歌手名
1 位	昭和枯れすゝき	さくらと一郎
2 位	シクラメンのかほり	布施明
3 位	想い出まくら	小坂恭子
4 位	時の過ぎゆくままに	沢田研二
5 位	港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ	ダウン・タウン・ブギウギ・バンド
6 位	ロマンス	岩崎宏美
7 位	22 才の別れ	風
8 位	心のこり	細川たかし
9 位	我が良き友よ	かまやつひろし
10 位	冬の色	山口百恵

洋画ランキング（データは「https://nendai-ryuukou.com/」より引用）
1966 年～1971 年の配給収入による洋画ランキング。「番外」は軟弱映画同好会が思い入れのある作品を追加。

1966	タイトル名
1 位	００７／サンダーボール作戦
2 位	メリー・ポピンズ
3 位	バルジ大作戦
4 位	グレート・レース
5 位	戦争と平和（第一部）
6 位	ネバダ・スミス
7 位	テレマークの要塞
8 位	ドクトル・ジバゴ
9 位	巨大なる戦場
10 位	砦の２９人

1967	タイトル名
1 位	００７は二度死ぬ
2 位	グラン・プリ
3 位	プロフェッショナル
4 位	風と共に去りぬ
5 位	夕陽のガンマン
6 位	おしゃれ泥棒
7 位	戦争と平和（完結篇）
8 位	続・荒野の七人
9 位	パリは燃えているか
番外	冒険者たち

1968	タイトル名
1 位	卒業
2 位	猿の惑星
3 位	続・夕陽のガンマン
4 位	２００１年宇宙の旅
5 位	アンナ・カレーニナ
6 位	暗くなるまで待って
7 位	カスター将軍
8 位	華麗なる賭け
番外	ロミオとジュリエット
番外	俺たちに明日はない

1969	タイトル名
1 位	ブリット
2 位	チキ・チキ・バン・バン
3 位	ウエスト・サイド物語
4 位	荒鷲の要塞
5 位	マッケンナの黄金
6 位	新・黄金の七人
7 位	空軍大戦略
8 位	あの胸にもういちど
9 位	カラマーゾフの兄弟
番外	真夜中のカーボーイ

1970	タイトル名
1 位	続　猿の惑星
2 位	サウンドオブミュージック
3 位	クリスマス・ツリー
4 位	女王陛下の 007
5 位	ひまわり
6 位	ネレトバの戦い
番外	明日に向かって撃て
番外	いちご白書

1971	タイトル名
1 位	ある愛の詩
2 位	エルビス・オン・ステージ
3 位	栄光のル・マン
4 位	チャイコフスキー物語
5 位	小さな恋のメロディ
6 位	トラ・トラ・トラ！
7 位	狼の挽歌
番外	屋根の上のバイオリン弾き

編集後記

寄稿＆閲覧――すでに「集い」だった

事務局長　山田　雄一

68 歳になる年齢の時だからこそ出来た記念誌――。今、そんな感慨がある。

この文集づくり計画の成就は、何よりも寄稿してくれた同期 103 人のおかげ。「よくぞ書いてくれた」が正直な気持ちだ。容易な作業じゃなかった、という声もよく聞いた。

当初、思いもよらなかった「100 人超え」は、自分にとって清陵とは何か、を問いかけ直す時間的、メンタル的な余裕が皆に生じてきていたことと無縁でないだろう。それにしても、ここまで率直で味わい深い告白が相次ぐとは。「このトシだから書けたぜ」「いい機会をありがとう」「いっぺんは『できない』と断ったけど、やはり書くと決めたよ」。そんな言葉が電話やメールで届くのもたびたびだった。事務局の担当者として嬉しい限りだ。

編集長を務めた河西朝雄君の凄腕を抜きには成立しないプロジェクトだった。寄稿があると、自ら立ち上げた「なみの会」ホームページの「仮原稿ダウンロード」コーナーへ直ちにアップした。こまめな更新が次の寄稿の呼び水となったのは間違いない。５月半ば以降、「最初で最後の記念誌」の掛け声と相まって、提出ペースはうなぎ上りとなっていく。寄稿＆閲覧という行為の連鎖は、すでに「集い」の様相を示している。そう実感した。

印刷所渡しに至る全工程を 73 回生が担った中で、第Ⅲ部を飾った貴重な写真の多くは 72 回生・土橋和男先輩が撮影した作品を提供してくださった。深く感謝を申し上げる。

記憶や思いを記録に

編集長　河西　朝雄

はじまりは２年前の７月１日（土）、なみの会同期会の帰りの電車の中、車窓に映る夜景を見ながら一つのアイデアを思いついた。卒後 50 年の集いに合わせて記念誌を作れないだろうかと。後日、その思いを新聞記者でもある山田事務局長に伝えた。

１年後、その小さなアイデアが幹事会の賛同を得て動き出した。一番の課題はどうやって印刷本にするか、だったが、小ロットでも低価格でできる「印刷通販プリント・パック」というシステムに決めた。次は記念誌の顔である表紙デザインの依頼先だ。幸い５部の平林義男君が快く引き受けてくれ、プロの美術家らしい斬新な表紙ができあがった。

あとは皆から原稿を集めるだけ。まずは幹事に原稿を書いてもらい、なみの会 HP に原稿を UP した。2019 年４月末日を提出期限として３月に原稿募集を開始。最初は低調だった原稿の出足も、幹事のみなさんの声掛け（特に山田事務局長の熱烈メール・電話攻勢）が効いて、気が付けば 103 人から寄稿していただく盛況となっていた。

清陵の思い出、その後、自分が歩んできた道、次の世代へのメッセージなどの記憶や思いを綴ってもらった。青春時代の３年間を共にした仲間の 50 年後を記念誌という記録として形あるものに残せたことは幸いです。これも一重に、なみの会の皆さんの協力のおかげと感謝いたします。

清水ヶ丘から
諏訪清陵高等学校７３回生「なみの会」卒後５０年記念誌　製作委員会

委員長　　松木 敏博（１部）
事務局長　　山田 雄一（２部）
会計　　藤森 英幸（２部）
編集長　　河西 朝雄（３部）
副編集長　　平林 重夫（４部）
編集委員　　宮坂 和生（１部）　　小池 忠男（２部）
　　北川 和彦（３部）　　伊藤 正陽（５部）
　　山崎 和彦（６部）　　横内 孝文（７部）

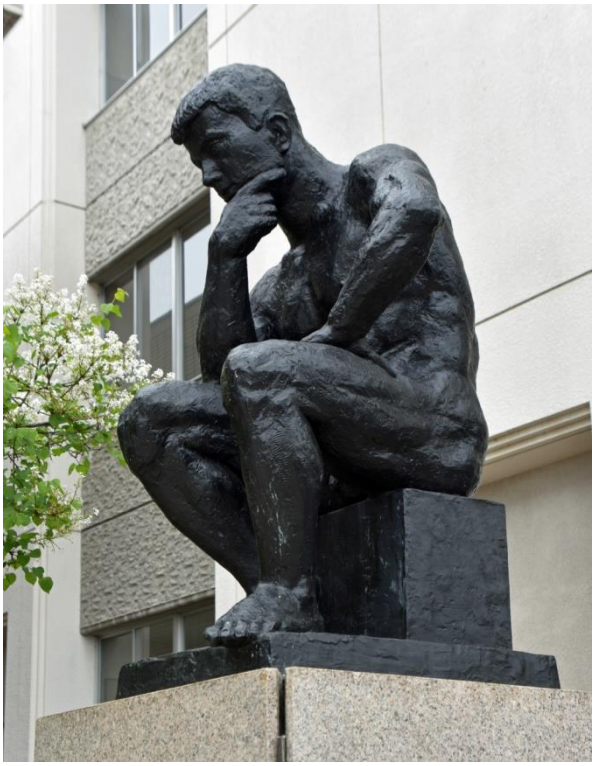
表紙デザイン　平林 義男（５部）

記念誌の電子版は以下の Web ページからダウンロードすることができます。
http://kasailab.jp/nami/

発行日　２０１９年（令和元年）７月６日

編集・発行者
諏訪清陵高等学校７３回生「なみの会」卒後５０年記念誌　製作委員会
「なみの会事務局・山田　雄一　電話:090-3080-3090　Eﾒｰﾙ:yamada-y6@po32.lcv.ne.jp」

印刷・製本　株式会社 プリントパック（印刷通販プリント・パック）



移転した現在の黎明像
（生徒昇降口前）